
へんじがない。ただの偽勇者のようだ。

空無 虚

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へんじがない。ただの偽勇者のようだ。

【Nコード】

N4685I

【作者名】

空無 虚

【あらすじ】

はあ？ 勇者？ そんなもん、光一にやらせろよ。俺には関係ないね。だから、とっとと元の世界に戻せ。……は？ お前も勇者をやれ？ 光一がいるなら、俺は必要ねえだろうが。 従者を付ける？ おいおい、筋肉と欠陥魔術師とツンデレを従者に、俺にどうしろと？ あゝ、はいはい。魔王を倒さないと元の世界には戻さないね。わかった。わかったよ。 魔王だろうが、何だろうが――、 正々堂々、幾重にも罠にかけて、背後から不意を打ってやるよ。

001―勇者はいせかいにしょうかんされた！

視界が白い光、一色に塗りつぶされる。

徐々に光が収まると、紫色に発光している魔法陣の上に、二人の少年が横たわっていた。

「「「おおおっ」「」」」

中央に魔法陣しかない簡素な部屋に、どよめきが沸き起こった。

＊

「「「おおおっ」「」」」

ッ！！ ……くそっ。ミスった。

低いどよめき声に、長身痩軀の少年は飛び起き、身構えた。

床から発光する紫の淡い光だけが照らす薄暗い部屋を、鋭い眼で見渡す。

少しずつ、眼が慣れていくにつれて、部屋の中に十数人の人影が見て取れた。

すぐさま動けるように膝を軽く曲げ、足を半歩開いた少年は、その時、初めて、足下にもう一人、寝ていることに気づいた。

黒目黒髪 of 長身痩軀の少年は周りに鋭い視線を向けながら、寝ている少年を片足で蹴り小突く。

「おい。起きろ。光一」

「うっ、……うぐぐぐ……」

呻きながら身を起こした茶髪の少年が、眼をぱちくりと瞬かせる。

「……どこだ？　ここは？」

「さあな」

「竜斗、どういことなんだ？」

「俺に聞くな」

竜斗と呼ばれた長身痩躯の少年は無然と答えた。

光一は起きあがって、遠巻きに見てる人間に声をかける。

「あの……すいません。ここはどこですか？」

俺たちは、黒い光に呑み込まれて……あつ、俺たち怪しいものじゃありません。

俺は、柳光一^{やなぎこういち}。で、こいつは上白竜斗^{かみしろりゅうと}。

二人とも高校2年で――」

光一の言葉を遮るように、正面に居た小さな人影が前に進み出た。

「ようこそ、いらっしゃいました。

勇者様」

「はっ？」

「勇者？」

＊

光一の前に進み出た少女は青い瞳に、青い髪をストレートに延ばし、

神官のような金糸に縁取られた白い服を着ていた。

「えっと……勇者って、どういうこと？」

「ここは、ファーレン王国と言います。

我が国では危機が起こる度に、この召喚魔法陣で『勇者』を召喚するのが習わしなのです。

通常ではファーレン王国、またはその周辺から召喚されるのが常なのですが、東方の方が召喚されるのは初めてです。

『仁』の国の方でしょうか？

それとも、さらに極東の『忍』の方でしょうか？」

「いや、……俺たちは日本人で……」

「ニホン……？」

そうそう。申し遅れました。

わたくしは水の神殿の巫女しております、シェラ・エステイン・ウインデネル・フェリアースと申します」

「あ、はい。こちらこそ、よろしく。

いや、そうじゃなくて、……その『勇者』って？」

「はい。このファーレン王国に、『魔王』が現れたのです。

精霊の儀を行ったところ、あなた様が勇者として召喚されたのです」

「勇者？」

「はい」

「俺はかまわないけど……」

光一は、ちらりと後ろを一瞥する。

腕を組んだ竜斗が口を噤んで、こちらを睨みつけるように会話を聞いている。

光一の視線に気づいたシェラは小首を傾げた。

「勇者様の従者の方が、どうかしましたか？」

「竜斗は従者じゃなくて――」

光一の説明を遮って、竜斗が口を開く。

「おい。チビ巫女」

「ち……チビ!?!」

髪が逆立つようなショックを受けるシェラを無視し、目つきの悪い竜斗がさらに眼を鋭くした。

「俺はコウの従者じゃない。」

それから、俺たちは異世界の人間だ」

「異世界? ……別の世界という意味ですか?」

「そうそう。シェラさん。」

俺も竜斗も、この世界の人間じゃないんだ。

俺の世界に、ファーレンなんて国はないし、仁も忍しのもない。

歴史上にも無かったはずだし」

「失礼ですが、それは勇者様たちが知らなかっただけでは……」

「残念だけど、それはないよ。」

俺たちの世界……いや、国では、地球全土のことぐらいわかる所に住んでいたから。

知らないなんて……少なくとも聞いたことすらない国名なんて、ないからね」

「そうですか……。」

勇者様の故郷のことは後で、ゆっくりとお聞きしたいと思います」

シェラは光一の前で片膝をつき、胸の前で手を組んだ。

「勇者様、わたくしたちの国をお救い下さい」

「わかった」

「断る」

二人の言葉が重なった。

全員の視線が拒否した竜斗に突き刺さる。

「勇者とやらは、コウがやれば十分だろ。」

俺は、元の世界に帰らせてもらう。

チビ巫女。俺を元の世界に戻せ」

「私はチビ巫女などという名前ではありません」

「お前の名前なんぞ、問題にしてねえんだよ。」

俺を元の世界に戻せるのか？ 戻せないのか？
どっちだ？」

シェラが細眉をひそめる。

「あなたのような無礼な方に、答える気はありません」
「この……ガキ……。」

ぶちのめされてえのか」

途端に、壁際の数人から強烈な殺気が発せられた。

「お、落ち着けよ。竜斗。」

シェラさん。竜斗も突然の出来事で、動揺してるんです」
手を振りながら、慌てて弁護する光一の後ろで、

「へえ」

竜斗は醒めた眼で殺気を放った数人を眺めていた。

どうやら、こいつらも一枚岩じゃないみたいだな。

チビ巫女を侮辱されて、殺気を放つ者、嘲笑う者、無関心を貫く者。

今、見る限り、3派……いや、4派の派閥か。

「お、おい、竜斗。お前も謝れよ」

光一を黙殺し、怒り心頭に発している演技を続ける竜斗は周りへ、声を張り上げる。

「お前らが元の世界に戻さないというのなら、俺は勝手にやらせてもらう」

踵を返し、出口へ向かう竜斗の前に、一人のメイドが立ちふさがった。

竜斗が眉を顰める。

「何の真似だ。」

勇者は光一がいれば、俺はいらんだろう」

濃紫の髪の子が口を開こうとした時――、

「二人とも、勇者と認定します」

背後から、女性の声が響いた。

「お母様!!」

それに対して、シェラが抗議の声を上げる。

「今まで、勇者が二人だったことはありません。

こちらのヤナギコウイチ様、一人で十分だと思います」

青い髪の女性が透き通るような落ち着いた声で諭す。

「シェラ。今までの召喚の儀で2人以上、召喚されたこともありません。

ならば、どちらも勇者の資格ありとするのが正しい見方でしょう」
「そうかもしれませんが……」

「おい。俺は承諾した覚えはねえぞ」

睨む竜斗に、先代巫女シエラの母親が、ひっそりと微笑んだ。

「『精霊の儀』に逆らうことは、誰にもできません」

「そりゃ、そっちの都合だろうが」

「勇者に選ばれるのは、名誉なことなのですよ」

「使い捨てマスコットの、どこが名誉なんだよ。」

「だいたい、あんたらの国にも軍隊ぐらいあるんだろ？」

「ええ、ありますが。それが何か？」

「自分たちの手で自分のたちの国を守れず、何が軍隊だ。」

たった一人で状況がひっくり返るって、どんだけ弱いんだよ。お前ら」

騎士の格好をした者たちから、叩きつけるような殺気が放たれた。
竜斗も殺気を放つ集団を睨み付ける。

「ま、待った待った。竜斗。」

さらに喧嘩を売ってどうすんだよ。

勇者ってのは、騎士の人たちとともに魔王を斃たおすもんだろ。

「だいたい、俺たちが斃すべきは魔王であって、内輪で争うことじゃない」

間に止めに入った光一が、両者を大声で諫める。

緊迫した雰囲気崩すように、シエラが大げさに溜息を吐いた。

「わかりました。」

カミシロリュウト……でしたっけ。

あなたが魔王を斃せたのなら、元の世界に帰しましょう。

これで、よろしいですか？」

「依頼が、魔王退治。
報酬が、元の世界に戻る。
期間は、無期限か。」

……………いいだろう。妥当な線だ」

＊

0021勇者は ひっとぽいんと か、かいふくした！

先程まで、窓も明かりもない神殿の一室だったのでわからなかったが、

外はすでに暗く、満天の星空が見えていた。

詳しい話や、二人のお披露目は明日に回し、今日は休んでも良いらしい。

逃げ出す機会でも作ってくれているのかと思ったが、竜斗はすぐに違うことに気づいた。

何人もの視線を感じる。

きつちりと監視されているのだ。

目の前を歩いてる光一は部屋まで案内してくれている濃紫の長髪ストレートのメイドに、幾つも質問している。

その問答を聞き流しながら、竜斗は城の中を観察していた。

重厚な石造りの西洋式の城。

中世の城のようだと言いたいところだが、灯りは蝋燭ではなくランプで、しかもランプにしては明るすぎる。

窓はガラスなど嵌まっておらず、吹きさらしなのだが、風は一切入り込まない。

石の上にカーペットが敷いてあるだけの廊下も、快適な温度に保たれている。

中世の城というよりは、ファンタジーの城と言った方がピッタリと当てはまった。

視覚と感覚にズレがあるため、どこことなく嘘っぽく感じられる。ゲームの中のヴァーチャル空間のようなと言えば、伝わりやすい

だろうか。

竜斗がそんなことを考えていると、メイドがピタリと足を止めた。

「こちらが、リュウト・カミシロ様の部屋です。

その隣が、コウイチ・ヤナギ様の部屋です」

案内したメイドは光一の話から、名前と苗字が自分たちとは逆になっていると気づいたようだった。

神殿の部屋を出ようとした竜斗の前に立ちふさがった、あの時の濃紫の髪のメイドである。

——このメイドも油断ならないんだよな。

ていうか、そもそもメイドが、あの重要そうな場にいたこと事態、冷静に考えればおかしいし。

「では、明日^{お休み}がさらに良い日になること^{なさいませ}を願って」

金の瞳のメイドが二人に向かって、完璧なお辞儀をして見せた。

＊

「ふう〜」

光一は溜息を吐きながら、ベッドに腰掛けた。

ベッドは見た目よりも、堅い感触を返してくる。

光一はもう一度、部屋の中を見回して吐息を吐いた。
「すごいなあ」

一目で高級とわかる家具。

キラキラと光を放つシャンデリア。

踝まで埋まる赤い絨毯。

宝石やら金銀が詰め込まれた墨色の椅子と机。

どこかの丘と草原が精密に描かれた油絵。

もう一度、大きく息を吐き出した光一は膝の上に肘をつき、手を組んで、顎に乗せた。

勇者か……、さっきは承諾してしまったけれど……。

でも、俺なんかに、勇者が務まるのだろうか。

剣道に自信はあるけど、実践とは違う。

俺だって、それぐらいはわかる。

だけど……俺は、助けを求めてきた人たちを助けたい。

勿論、全てを助けるなんて無理だ。

でも、助けを求めてきた人たちぐらいは助けたい。

助けを求めてきた人を助けることは、間違っていないのだから。

目の前で窮地に陥っている人がいると、助けたいと思ってしまうことは、俺の悪い癖だけれど、

俺の存在が、助けになるならば、

助けることが、勇者になることならば――、
俺は、勇者になろう。

それで、助けを求めている人たちが助かるなら――、
俺は、勇者になろう。

ちっぽけな俺の力が、誰かを助けられるのならば――、

――俺は、『勇者』になる。

ところで、部屋に入った時から、疑問だったんだけど……、
あのシャンデリアの光は、どうやって消すんだろう？

ぼうつと光一が天井を眺めていると、

「いよつと――!!」

掛け声とともに、窓から人が転がり込んできた。

ビクツと震える光一に、窓から乗り込んできた竜斗が片手を上げる。
「よっ。」

部屋の造りは同じようだな。無駄に高級なものな」

「お、お前、どっから入ってくるんだよ」

「窓」

「見れば、わかる。」

「なんで、ドアから入ってこない？」

「廊下には、見張りが立ってたんだな」

竜斗は椅子を引き寄せ、背を前にして座った。

「だからって、窓から入ってくる理由にはならないだろ」

「まあな。ちょっとばかし、知られたくなかったんだな。」

ところで、コウ。お前、本当に勇者になるのか？」

「ああ、決めた。」

俺は、『勇者』になろうと思う。

目の前で助けを求めている人がいたら助ける。

勇者とか関係なく、それが人間てものだろ」

「さあな。」

俺は、できた人間じゃないんでね」

「竜斗。お前はとうするんだ？」

「うーん。依頼を受けたからな。」

でも、魔王の首を取るだけなら、勇者じゃなくてもできるよなあ。報酬が支払われるかどうか、怪しいところだしな。

今後の方針を決めるためにも、俺はもう一度、あの魔法陣を調べてみようと思う。

コウも来るか？」

「それ、怒られないか？」

「ああ、バレたらヤバイかもしれないな。」

だから、無理には誘わないさ」

「俺は遠慮しとくよ」

「そうかい」

椅子から立ち上がり、窓へ向かった竜斗が、ふと振り返った。

「なあ、コウ。」

お前は、元の世界に戻ろうとしてねえな」

「うん、まあ。」

こちらの世界でやることが出来たしね。

帰るのは、それが終わってからでも良いかな、と思ってる」

「全てが終わった後、向こうが手放すとは思えねえけどな」

竜斗が窓枠に手をかけて、外に乗り出す。

「竜斗」

「あん？」

「やっぱ、不味くないか。」

あの魔法陣、重要そうだったし、

誰かに見つかったら、牢屋に放り込まれるかもしれないぞ」

「いいか？ 常識は疑うためにあるんだし、規則は不備の穴を突くためにあるんだ。」

守らなきゃならないもんは、約束ぐらいだよ」

そう言い捨てると、竜斗は窓から身を乗り出し、石壁に足を掛けた。

この城は、きっちりと石が積み重なっておらず、

足を引っかけるくぼみや、手を掛けるでっぱりが幾つもある。

窓から窓へ移動したときも、ロッククライミングよろしく、壁を渡ってきた。

2つの月明かりの中とはいえ、真夜中に4階の窓から地面まで降りる。

足を滑らせれば、あっという間に滑落死体の出来上がりだ。

竜斗は注意深く降りながら、ボヤク。

「……やれやれ……」

外壁に張り付いて移動など、元の世界でビルの8階に、2時間程張り付いていた時、以来である。

うん。あの時はヤバかった。つか、寒かった。

ビル風直撃で、足幅10センチなかったもんな。

それに比べりゃ、軽い軽い。

あゝ。そういや、あの後、所長に大笑いされたっけなあ。

バカ笑いしていた所長と同僚を思いだし、鬱に凹んだ竜斗は黙々と壁を降り続けた。

*

0031勇者は まほうし、ん を しらへ、た。

竜斗は小型ライトを点けた。

アルバイトに使う道具は、常時、身に付けている。^{仕事}

神殿の中の魔法陣のある部屋は、暗闇に閉ざされていた。

外は、二つの月で明るさが保たれているが、窓が一つもないこの部屋は闇の中に沈んでいた。

竜斗はライトで周囲を照らしてから、部屋の隅に移動し、床に光を当てる。

「埃はない。でも、手摺りは磨耗してない。

滅多に入らず、掃除だけされてるってことか」

天井を照らした竜斗は、眼を眇めた。

天井にも魔法陣が彫り込まれている。

地面の魔法陣と天井の魔法陣を見比べていた竜斗は、納得したように頷く。

天井の魔法陣も、床に彫り込まれた魔法陣とまったく同じ形をしていた。

次に、膝を突き、床の魔法陣を子細に調べ始める。

石に彫り込まれてると思ってたけど、違う。

金属？ でも、金属にしては光沢が鈍い。

竜斗は爪で引っ掻くが、魔法陣は傷付かない。

次に、10円玉を取り出し、魔法陣の外側の床を引っ掻くが、やはり、傷一つ付かなかった。

逆に、10円の方が、僅かに削れたぐらいである。

「未知の金属？」

まあ、魔法陣やら召喚魔法がある異世界だからな。
ファンタジー

驚くほどのことじゃないか。

竜斗は床の魔法陣の中心にある紫色の水晶球らしきものに、光を当てた。

「これは？」

竜斗は、思わず声を上げた。

あちこちから、光を当て、水晶の内部を調べてた竜斗だったが、ライトを消すと、地面に腰を下ろした。

「あゝ、ダメだ。

わっかんねえ。

同僚

アイツだったら、何か掴めたかもしれないが、電子機器に弱い俺じゃ、さっぱりわからん」

竜斗は胡座をかいて、頬杖を付いた。

まあ、水晶の中の模様が、電子回路と決まったわけじゃないか。
この世界なら、魔法回路にでもなるのか？

「気が済みましたら、お部屋へ戻って頂けませんでしょうか」

竜斗が反応するより早く、首筋に長柄が当てられ、光が部屋を満たした。

……気配の欠片も感じなかった。化け物かよ。

一つ、吐息を吐いた竜斗は、両手を上に上げた。

「振り向いて良い？」

「はい。どうぞ」

手を挙げたまま、振り向くと、目の前にモップの長柄を突き付けたメイドの姿があった。

メイドの右手には、宙に浮かぶ光の玉。

竜斗は初めて、明るい場所で、しかも正面からメイドを見た。

濃紫の髪のメイドは、恐ろしいほど秀麗な美貌だった。

黒に見紛う濃い紫のストレートの長髪に、金の瞳。

服装は、青系に近い紫のメイド服に、黒のストッキング。

その美貌と相まって、人間離れしているように見える。

なるほど。コウが、話しかけたがるはずだ。

竜斗は、頭を掻いてから、宙に浮かぶ光の球を指さした。

「それって、魔法？」

「はい。正確に言えば、魔術ですが。」

それで、リュウト様。このような所で何を？」

「道に迷っちゃってね。」

知ってる道を歩いてきたら、つい迷い込んだんだ」

メイドは右手で口元を隠し、コロコロと笑う。

「窓から出て、外壁を下りるとは、斬新な道の迷い方ですねえ」

「ああ。人間、挑戦心を忘れたら、そこまでだからな」

竜斗の首筋にモップを突きつけたまま、メイドは微笑んで小首を傾げる。

「随分と面白い人間ですね」

「そうか？」

人が窓から出て、一生懸命、外壁を下りてるところを眺めているメイドさんの方が面白いと思うぞ。

てか、あの視線は、あんたのものだったんだな」

「あら。気づいていたのですか」

「まあね。^{アルバイト}仕事がら、人の視線には敏感なんだ。

で、立ち上がって良い？」

メイドは、モップを引いた。

「どうぞ。」

お部屋まで、ご案内します」

「ああ、悪いね」

＊

「なんで、俺を衛兵に突き出さない？」

城の通路を歩きながら、竜斗はメイドに訊ねた。

「確かに、褒められた行為ではありませんが、私個人の意見としては、嫌いではありません。

人から言われることを、諾々と呑み込み、素直に信じる。

それは、それで美德かもしれませんが、私は自分の耳で聞いて、自分の口で話し、自分の眼で観察する方が、大事だと思っておりますので」

「ご希望に添えて、光栄の至り」

「もっとも、メイドの職務としては、お客様に怪我でもされたらことなので、勝手な出歩きは自重して頂きたいとも思っております」
「客でいる間は、心がける」

「ふふ。明日、正式にお披露目されたら、リュウト様も勇者ですね」
「勘弁してくれ」

「あら、私は、リュウト様は勇者らしいと思っておりますが」
「だから、あの時、部屋から出ようとした俺の前に、立ちふさがったのか」

「はい。」

皆様は、コウイチ様の方が勇者にふさわしいと感じていたようですが、私と数人の騎士の方は、リュウト様の方が勇者らしいと思っています」

「はあ？」

「なんでだよ？」

「リュウト様は召喚されて、目覚めると、すぐさま立ち上がって、周囲を警戒されたでしょう。」

それに、抗議しながらも、冷静に周りを観察しておりましたし」

「あゝ、演技もバレてたのか」

「それは、もう。」

ですから、リュウト様には勇者が合うと思います」

「止してくれ。人助けなんか、趣味じゃないね」

「あら、そうですか。」

リュウト様は、助けを求めている人がいたら、自ら困難に飛び込んで行きそうです」

「そんなわけないだろう。」

そんなのは、コウだけだ」

「そうですか？」

では、そういうことにおきましよう」

部屋の前に着いた竜斗は、ドアに手をかけてから、ふと振り返る。

「ところで、メイドさん」

「はい？」

「メイドさんの名前は、何ていうんだ？」

「メイドさんです」

「は？」

「気さくに、メイドさんとお声掛けください」

二人は無言を交わした。

「ふうん。なるほど、メイドさんね。

わかった。

じゃ、おやすみ。メイドさん」

大欠伸した竜斗は、部屋に入る。

「明日が、さらに良い日になることを願って。お休みリュウト様なさいませ」

後ろ手で扉を閉めた竜斗は右手で顔を覆い、大きな溜息を吐き出した。

「なんだよ、ありゃ。

なんで、所長クラス……いや、それ以上の『生き物』がいるんだよ。

なんで、そんなのが『メイド』なんかやってるんだよ」

ベッドに寝っころがった竜斗が天井を見上げた。

あのメイドはうん、アレだな。

触らぬ神に祟りなし。

*

0041 勇者は おうさま に あった。

翌日。

光一と竜斗は、鉄製の巨大な扉の前にいた。扉には、精巧な細工が施され、金と銀が細工を鮮やかに浮かび上がらせている。

2人とも、礼服に着替えさせられていた。

光一は白の礼服に、黒いブーツ。

イケメン 生来の整った顔に、光の当たり具合で、金色に見える明るい茶色の地毛と、黒の瞳。

端正な美男子の甘いマスクの中、目元がキツと引き締まり、自然と目を引き寄せられる。

まさに人が想像する、魔王に立ち向かう勇者の姿があった。

対する竜斗は、空色の礼服を着崩している。

背が高く、容姿は良くも悪くもない平凡の一言につきるが、いかんせん、目付きが悪すぎた。

その鋭い目付きと長身痩躯のため、盗賊が変装しているように見える。

さらに、靴がブーツではなく、運動靴なもの、その雰囲気に一役かっていた。

それを見、光一が竜斗に小声で話しかける。

「竜斗、なんでブーツじゃなくて、運動靴なんだ？」

「あんな動きづらい靴、何かあった時、とっさに動けんだろうが」

『勇者コウイチ・ヤナギ様。

勇者リュウト・カミシロ様』

その声とともに、鉄の扉が開く。

きらびやかな大広間が目の前に開けた。

着飾った男女が左右にずらりと並んでいる。

シェラと先代巫女も上座の方に立っていた。

正面には、椅子に座った男と女。

たぶん、国王と王妃だろう。

その背後に武装して立っている、年若い青い髪の騎士と赤い髪の女騎士は護衛だろうか？

光一は胸を張り、堂々と真っ直ぐ、歩き出す。

竜斗は溜息を吐いてから、その後を付いて歩いて行った。

好奇、憧れ、希望、嫉妬、軽蔑、嘲笑、呆れ、様々な視線が2人に集まる。

主に好意の視線が光一に、場違いな者を見る視線が竜斗に集まった。

あらかじめ教えられていた通り、光一と竜斗は片膝をついて、頭を下げた。

国王が、一つ頷く。

「そなたたちが、勇者か」

「はい。国王様」

「依頼の間だけだ」

竜斗の言葉に、大広間にざわめきが起こった。

国王も戸惑った表情を浮かべたが、光一が正規の受け答えをして
いたため、問題なしと続ける。

「そなたは勇者として、何をもたらす？」

「はい。国王様。」

私、柳光一は、正々堂々、魔王に立ち向かい、国家に安寧を、国民に安心と笑顔をお約束いたしましょう。

そのためならば、この命、惜しくはありません」

光一は僅かに顔を上げ、国王の眼を見つめた。

光一の真っ直ぐな眼に、国王は満足げに頷く。

「して、もう一人の方は？」

「魔王だろうが、何だろうが、正々堂々、幾重にも罨をかけて、背後から不意を打ち、首を叩き落としてやるよ」

周囲のざわめきが大きくなった。

竜斗の物言いは、到底、勇者のものではない。

「り、竜斗」

光一が小声で、竜斗を叱咤した。

その時、国王の後ろに控えていた紅の髪的女騎士が、先代巫女に問いかける。

アラリエル
「先代巫女よ。」

本当に、この男は勇者なのかや？」

「はい。ルキア姫。」

確かに、召喚魔法陣で召喚された勇者です。

確認のため、精霊にも聴いてみましたが、間違いなく魔王を討ち取る者だという答えが返ってきました」

騎士の格好をしている、火のような紅の髪に、青い瞳の姫は、面白そうに笑う。

「なるほどの。正統派勇者に、規格外勇者か。
実に、面白いものじゃな」

頭を下げたまま、竜斗は冷や汗を垂らした。
……また、厄介な奴に眼をつけられたか。
なんで、俺の周りには奇人変人ばかり集まってくんだよ。

ちなみに、『類は友を呼ぶ』という格言は、竜斗の辞書からはきれいに削除されている。

＊

珍獣の気持ちって、こんなのだろうか……。

光一は、そんなことを思いながら、次々に挨拶に来る貴族たちに笑みを見せている。

隣に座る竜斗のところには誰も挨拶に来ず、大広間後方に並べられている料理を、給仕に取って来て貰い、片っ端から食べていた。

ううう……俺も腹減った……。
なにせ、朝から何も食べてないのだ。

何かくれと、竜斗に目配せするものの、
竜斗は優越感に満ちた笑みを浮かべて、これ見よがしにチキンを美味そうに咀嚼し、至福の笑みを見せつけてくる。

……………いつか、殺す…………。

食べ物特有の根深い恨みを抱きながら、上から目線の貴族の挨拶に、

光一は笑みを浮かべ「こちらこそ、よろしくお願い致します」と頭を下げた。

貴族が立ち去り、顔を上げた光一は、眼を見張る。
次の人物は、貴族たちとは、明らかに一線違う雰囲気放っていた。

白く輝く簡易鎧に身を包んだ青年。

女性のように繊細な美貌に、輝くような金の髪に、明るい青い瞳。

へえ、本当に金髪碧眼にいるんだなあ。

光一が光を反射する金髪を見ると、金髪碧眼の青年が右手を差し出してくる。

「初めまして、ファールレン王国の勇者コウイチ。

僕は隣の国、ウインデルム王国の勇者、セドリック・ユニク・ラングリット。

同じ勇者として、世界を平和に導こう」

「へ……へ？」

勇者？ ……隣の国？」

「ああ。そうだよ」

そこへ、竜斗が突然、口を挟んでくる。

「すまない。一つ訊きたいんだが？」

「ん？ なんだい？」

竜斗は先程までの、悪戯な表情は消え、鋭い双眸を向けていた。

「勇者って、何人もいるのか？」

センドリックは大きく手を広げる。

「勿論、1国に1人は必ずいるよ。」

不満は、魔王は1国に1魔王といかないところかな。

僕の国には、魔王がいないから、僕の活躍の場が少ないんだよ」

「……なるほど。……いや、ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして。」

ところで、君は誰？」

「……俺のことは気にしないでくれ」

吐息を吐いて、竜斗は眼を伏せる。

「……そうか……すまない。失礼だったな」

「いいって。わかってくれればいいんだ」

「君は良い人だな」

「やめてくれ」

竜斗は、首を左右に振った。

セドリックは、光一に向き直り、

「では、僕はこれで失礼しよう。」

いずれ、また会おう。勇者コウイチ」

再び差し出した右手を、光一が握り返す。

「……あ、はい。」

また会いましょう。勇者セドリック」

セドリックの後ろ姿を眺めながら、光一は竜斗に問いかける。

「なあ、さっきのは何だったんだ？」

「なにが？」

「ほら、俺のことは気にすんなどか言ってた、あれ」

「ああ、アレか。」

俺もわからん」

「はあ？」

「物憂げな表情をして、それっぽいこと口にしたら、向こうが勝手に納得してくれた」

しれっと答える竜斗に、光一は呆れ顔になった。

と、その時――、

「皆の者、準備は整った。」

これより、2人の従者たちを発表する！！」

大広間に、国王の声が響き渡る。

光一は驚きに眼を丸くし、竜斗は眼を睥めた。

*

0051勇者に なかま か、 て、きた!

「皆の者。準備は整った」

何かを耳打ちされた国王が、立ち上がり、大広間に呼びかけた。
光一の前に並んでいた貴族や富豪たちが、ざあっと波が引くように、左右の壁際へ分かれる。

「勇者殿よ。立ちなされ」

2人が立ち上がったことを確認した国王は、厳かに告げる。

「これより、2人の従者となる者を発表する。

尚、これは先代巫女が『精霊の儀』に従い、精霊石66個を使用して精霊占術し、聖託したものである。

何人たりとも、異を唱えることは出来ない」

緊張した大広間の中、静寂を破る声の一つ。

「……あの……すいません。

普通、勇者の仲間って、その……酒場で見つけたり、冒険の途中で見つけるものじゃないんですか?」

光一の質問に、ルキア姫が鼻を鳴らした。

「酒場にタムロしてる兵士くずれよりも、この王宮の中の人材で選抜した方が、遙かに使えるし、確かであろう。

なにせ、王宮勤めは、全て一流ばかりじゃからの。

それに、冒険の途中と言うが、理想の人材に会わなかったらそれまでじゃ。

魔王と戦うのに、仲間探しなどしている悠長な暇などないわ」
姫に正論を吐かれ、押し黙る光一。

……でも、勇者物って言ったら、冒険の途中で仲間を集い、友情、努力、勝利が基本だと思うんだけどなあ。

黙った光一を、納得したものと解釈した国王が、羊皮紙を広げた。

「勇者コウイチ・ヤナギの従者を告げる。

第一従者、巫女 シェラ・エスティン・ウィンデネル・フェリアース」

「え？」

「どうした？」

「は、はい！」

光一と竜斗を召喚した水の神殿の巫女が、吃驚したように、返事をする。

「前へ」

「は……はい……」

大広間の明るい光の中、シェラの青い髪が自ら光るように輝き、可愛い顔を緊張に染めて、光一の前に立った。

「よろしく願いますわ。

勇者コウイチ様」

「うん。俺の方こそよろしく。

シェラさん」

「第二従者、聖騎士 アリア・オル・クインセル」

「はっ！」

金の髪を靡かせ、白い甲冑に身を包んだ女騎士が颯爽と歩いてくる。

秀麗な美貌に、エメラルドのような緑の瞳。

背筋を伸ばして歩く姿に、男女から感嘆の溜息が洩れ出た。

光一の前に立ったアリアが敬礼する。

「聖騎士アリア・オル・クインセル。」

ただ今を持って、勇者殿の指揮下に入らせて頂きます」

「あゝ、そんなに固くなくても良いよ」

「上司と部下の境は、はっきりとさせておくべきだと思います」

「第三従者、術師 マスター・フィー」

「「「おおおっ!!」」」

大広間に、どよめきが起こった。

「ど、どうしたんだ？」

光一が訊くと、シエラが小声で返す。

「この国一番の魔術師です。」

魔術だけでなく、精霊術から死霊術までなんでも使えるという噂です」

「噂ではありやせん。真実じゃ」

「ひゃうっ！」

真後ろから訂正がかかり、シエラが飛び上がった。

ストレートの銀髪を腰まで伸ばし、チャイナドレスのような服を着た、艶やかな美女がひらひらと扇子を振る。

紫の瞳のマスター・フィーが、片目をパチンと瞑った。

「ま、よろしくたのむぞよ。」

勇者コーイチ」

「……は……はい……」

妖艶な絶世の美女のウィンクに、光一は赤面した。

「第四従者、精霊騎士　アリエル・フューマ・シルフィ・フィンネル」

胸の前で手を組み、何かを一心に祈っていた15、6のピンクの髪の少女が、パアツと顔を明るくした。

「はいっ!!」

大きな声で返事をする、真っ直ぐ走ってきて、シェラに抱きつく。

「巫女姫様。私も選ばれました!!」

これで、これから、巫女姫様の護衛が続けられます!!

よかったです」

アリエルは、シェラに抱きついたまま、グスグスと泣き始めた。

「ちょ、……ちよつと、アリエル。」

勇者様の前ですよ。

ちよつとは自重しなさい」

「だ、だっ、でえ」

聖騎士のアリアがハンカチを差し出すと、涙を拭いてから、ズビ―ッと鼻をかむ。

「アリエル、コウイチ様にも一言」

「はい。このアリエル。」

命に代えましても、巫女姫様をお守りする所存でございます」

「わたくしを守ることを所信表明して、どうするといふのです」

「世界は巫女姫様を中心に回っておりますゆえ」

突然、目の前で始まった漫才に、コウイチは目を白黒させていた。

「勇者コウイチの従者は、以上の4名」

国王の言葉に、その場に居た者たちから歓声が上がる。

「最強の布陣じゃないか」

「これなら、魔王にも勝てるかもしれない」
「マスター・フィーが居れば、楽勝だろう」
「ドラゴンバスターの姫様は入らなかったようだな」
「これで、姫様が入ったら、勇者はいらないでしょう」
「なるほど」

会場のあちらこちらから、そんな声が聞こえてくる。

「コウ。どうやら最強のハーレムメンバーみたいだな」
茶化す竜斗に、光一は眉をしかめた。

「止めろよ。そういう言い方。」

ハーレムじゃなくて、これから、魔王を倒す仲間だ」
「仲間ねえ。」

なんつーか、すでにレベル99の仲間を揃えたって感じだな」

「低いレベルから、ともに成長していくというのが王道なんだけどなあ」

「ゲームと現実の違いだろ。」

まあ、現実も異世界ファンタジーだけだな」

＊

「次に、勇者リュウト・カミシロの従者を発表する」

国王が新たな羊皮紙を広げ、光一が竜斗に、こっそりと話しかける。

「強い人が来ると良いな」

「お前の従者みたいのが来たら、俺が困る」

「なんで……？」

竜斗が苦笑した。

「全員が、エースの4番じゃ、戦略も何もあつたもんじゃないんでね」

「第一従者、宮廷騎士 セラ・オル・ランセル」

「へ？」

大広間後部で自分には関係ないとばかり、料理を食べていた、赤に近い金髪の少女が、口から唐揚げを落とす。

「わ、私？」

自分を指さす、腕甲と肩甲と胸当てに鉄板入りブーツの簡易鎧を纏った16、7歳の女騎士に、国王が頷いた。

「前へ出よ。宮廷騎士ランセル嬢」

「は……はあ……」

料理を盛った皿を、軍属の女騎士に渡し、前に行くセラへ、騎士の一部から野次が飛ぶ。

「あら、成り上がり騎士様が、ご出陣よ。」

盗賊勇者の従者って、すっごく、お似合いだわ」

セラは、嘲笑を浮かべる金髪縦巻き毛ロールの女騎士と、その取り巻きを睨みつけた。

「……シャクティ」

両腰に1本ずつ、計2本の細身の剣を腰から吊るしているセラは、右腰の細剣の柄に手をかけた。

殺気立つセラに、国王の叱責が飛ぶ。

「とくと前へ出よ。騎士ランセル!!」

喉の奥で唸ったセラは、ぱっと振り返り、歩き出した。

赤に近い金髪を靡かせ、緑瞳の吊り目気味の少女が、颯爽と歩く。容貌は清華で、十人いれば十人が美人と言うだろう。

吊り目気味の美少女が、眦を決していると、何やら凄みがあった。

竜斗の前まで来たセラは、じろりと睨み、

「セラ・オル・ランセルよ」

それだけ言って、腕を組んで押し黙る。

言葉を叩きつけられた竜斗は、何やら面白そうな笑みを浮かべていた。

「第二従者、神官騎士見習い　アーサー・レイガスタ」
「ウム」

神官騎士たちから、はつきりとした笑い声が沸き立った。

甲冑姿の神官騎士たちの間から、メイスを腰から吊り下げ、革鎧のみを纏った偉丈夫の男が現れる。

金の短髪に、青い瞳。

英雄としてギリシャ神話に出てきそうな筋肉質^{マッチョ}な青年だった。

のっしのっしと効果音が鳴りそうな足取りで竜斗の前まで歩いてくると、二の腕を曲げて、力こぶを作る。

「ワシの名は、アーサー・レイガスタ。

筋肉ともどもよろしく頼む」

アーサーは、すかさず一右足を一步前に出し、鳩尾に手を回して、力を込める《サイドチェスト》。

白い歯がキラリと輝いた。

胸の革鎧がはちきれそうなほど、盛り上がる。

「なるほど、筋肉か」

「ウム。全ては筋肉の思し召しよ」

「そうかそうか、筋肉か」

「いかにも、筋肉だ」

「「ワハハハハハハハ！」」

竜斗とアーサーが笑い声を上げた。

その横で、セラが胡散くさそうな眼を二人に向ける。

「第三従者、宮廷魔術師　レイフォン・アルス・フェンリル」

今度は、会場中から笑い声が上がった。

フードを被った集団から、水色のフードを被った小さな人影が出てくる。

手には身丈程もある大きな杖を持っていた。

バランスの悪い木製の杖を持ち、よたよたと歩く小柄な人物に嘲笑の視線が向けられる。

その視線に気圧されるように、少女はよろめき転んだ。

大広間中に響く笑い声の中、慌てて立ち上がった少女のフードが落ち、顔が露わになる。

緑髪のボブカットに、金の瞳。
可憐で優艶な、優しげな美貌。

一身に笑い声を浴びた少女は俯いて、立ち止まってしまふ。

竜斗とセラが、同時に飛び出し、少女に駆け寄った。

「ほら、杖を貸せ」

「行くわよ。魔法使い」

セラが少女の手を引き、魔法杖を肩に担いだ竜斗が周りに睨みを利かせながら、壇上まで歩き出す。

「……ご、ごめんなさい」

か細い声でレイフォンが謝った。

「いいって、いいって」

「あんたも、オドオドしない。」

こんな奴らの視線なんて跳ね返しなさい」

「そうそう、ツンデレの言う通りだぞ」

「ツンデレ？ 何よ、ツンデレって」

「まあ、基本だな」

「基本？ まあ、褒めてるんなら、それでいいわ」

3人が壇上に上がった所で、国王が締める。

「勇者リュウトの従者は、以上3名とする」

会場中から、クスクスと嘲りの笑い声が洩れ出した。

「あれじゃ、勇者コウイチの引き立て役ね」

「各所の厄介者を体よく省いたんじゃないか」

「全員、そのまま、クビにするつもりだろう」

「なるほど、国王もよく考えましたな」

竜斗は、セラ、アーサー、レイフォンを見回した。

「俺が、上白竜斗だ。」

よろしうな。ツンデレ、筋肉、内気」

「だから、何よ？ ツンデレって」

「ウヌ。いかにも、筋肉である」

「内気……ですか……、いえ、確かに内気ですけど……」

＊

0061勇者は せいけん を てにいれた!

「わしが、軍部のトップ、大將軍 レッツ・サルドン・フラフ・ツ
ーイカ・ロドリゲルだ。

わしのことは大將軍閣下か、ロドリゲル伯爵と呼ぶが良いぞ」
禿で、焦茶色のナマズ髭の恰幅のよい男が、ガハハハハと笑い
声を上げた。

光一は眼を瞬かせ、竜斗は訝しげに眼を眇める。
お披露目が終わったあと、竜斗たちは従者たちと共に別室に案内
されていた。

「さて、新米勇者に来てもらったのは、他でもない。
今後の方針を伝えるためだ。
まず、君たちには、軍の訓練を受けて貰う。
君たちには、じっくりと実力を付けて貰って――」

「断る」

竜斗が拒絶する。

「な、何だと？」

「俺は、独自のやり方でやらせてもらう」

「ふざけるな!!」

「独自のやり方とは、どのような？」

レッツの怒声と、今まで黙って座っていた茶金色の癖毛に青い眼
の騎士の声が、重なった。

竜斗は、青い眼の癖毛の騎士に視線を向ける。

「正攻法じゃ、埒が開かなかったから、今、俺たちがここにいるんだろ」

クツと唇の片端を吊り上げた騎士が、両腕を広げる。

「……確かに」

「戦闘指揮官!!」

レッツが、茶金癖毛の戦闘指揮官に抗議の声を上げた。

「行くぞ! ツンデレ、筋肉、内気」

出て行く竜斗たちに、レッツの嘲笑の声が飛ぶ。

「フンッ! オチコボレなど初めからいらんわ!!」

ビクツと身を震わせるレイフォンの緑髪をポンポンと叩いたセラが、閉じた扉に中指を立てた。
あたま

ポケットに手をつ突っ込んでフラフラと歩き出す竜斗を、セラが呼び止める。

「ねえ、ちょっと、あんた。」

本当に、良いの?」

「なにが?」

「何がって……勝手に出ちゃったことよ」

「ああ」

「なんでよ?」

「直感」

「……直感で」

呆れるセラに、竜斗が振り向いた。

「ツンデレ。自分たちが一筋縄でいくと思ってるのか?」

俺たちが、軍の訓練を受けたところで、平凡な一般兵になるどころか、落ちこぼれるだけだろが」

「……うっ」

「見事に癖のある連中が集まったなあ。

俺も含めて」

苦笑を浮かべた竜斗は、4人しかいない通路で、呼びかける。

「メイドさん」

「「「?」」」

疑問を浮かべるセラ、アーサー、レイフオンを無視して、話しかける。

「どこか、話せる場所ないか？

人気の無いところが良い」

「中庭のテラスなどが、良いかと存じます」

さっきまで誰もいなかったはずの三人の真後ろから、濃紫の髪のマイドが返事をした。

「うわっ!!」

「ウヌッ!」

「!!」

サラが大きく飛び退さり、アーサーがメイスの柄を握り、レイフオンが眼を丸くした。

一人、竜斗は驚かず、片手を上げる。

「ありがとう。メイドさん」

「いえ、これもメイドの勤めですので」

メイドが、完璧なお辞儀をして見せた。

＊

「行くぞ！ ツンデレ、筋肉、内気」

出て行く竜斗たちに、レッツが嘲笑を飛ばす。

「フンッ！ オチコボレなど初めからいらんわ！！」

閉まった扉を見、レッツはやれやれと首を振った。

「まったく、困ったもんですな。」

勇者の自覚がないというのも。のう、勇者」

「いや、竜斗には、竜斗の考えがあるから……」

「それを、素人の浅知恵と言うのだ……おっと、勇者に言っても仕方ありませんな。」

では、姫様。聖剣は？」

「そうじゃな。」

二人に軍の訓練を受けさせて、適正のある方に渡そうと思っておったが……。

勇者リュウトは辞退と言うことじゃな」

奥の椅子に座るルキア姫が、大きく伸びをした。

軽くウェーブした、腰まである、炎色の紅の長髪。

深い海の色のような蒼い瞳。

瞼には、天然の薄紫のアイシャドウ。

透けるようなという形容詞がぴたり合う白い肌。

紅も塗ってないのに、濃い赤色の唇。

華やかで艶あでやかな、艶美な美貌。

そんな艶然とした姫が身に纏うのは、女性の体形フォルムに合わせて曲線スマートを多用した細身な、銀白色の甲冑。

その甲冑にも細かい模様が入り、金細工で彩られている。

まさに、美女騎士と言われ、思い浮かべる姿、そのものであった。

立ち上がったルキア姫が、横の宝箱から、一本の剣を取り出した。

「ほら、勇者コウイチ。立つがよい。」

まあ、略式とは言え、剣の授与じゃからな」

「は、はい」

ルキア姫は咳払いすると、口上を述べる。

「汝、勇者コウイチ・ヤナギ。」

ファーレン王国、第二後継者ルキア・エルドランド・オル・サリウス・ファーレンとして、聖剣を授ける。

この剣は神の加護を授かり、邪を打ち払い、魔を滅する――……

……うむ、面倒じゃから、以下、略じゃ」

「あの……ルキア様。それで、良いのですか？」

「シェラよ。略するからこそ、略式と言うのじゃよ」

「いえ、それは違うかと……」

「細かいことを気にするな。」

ん。勇者コウイチよ。どうした？

不可解な顔をしておってからに」

片手で聖剣を持ったまま、光一はこめかみを指で搔いた。

「こういうのって、普通、洞窟の奥底とか、山の頂上の岩なんかに突き立ってるものじゃないんですか？」

「それこそ、不可解よ。」

何故に、聖剣を外に放っておくのか。

誰かに盗られたり、敵国の手に渡ったりしたら、どうする。

価値のあるものなら、国家の手で管理するのは基本じゃろう」

「……は……はあ」

気の抜けた返事をする光一に、ルキアはポンと手を打つ。

「おおっ。そういえば、聖なる鎧もあったはずじゃ。」

番人には、話をしておく。

後で、城の武器庫まで取りに行くがよいぞ」

「そ、そんな軽く……」

「剣での戦い方は、軍と聖騎士アリアに任せるとして、魔術じゃが……これも、フィーがおれば十分じゃな」

「うむ。十分じゃ。」

ククク。異世界人か。

研究のしがいがあるのお」

「実に、楽しみだの」

「ああ、楽しみじゃ」

「「フッフッフッフッフッフ」」

ルキアとマスター・フィーが不気味に笑い合った。

低く笑いながら、教育計画を囁き合う二人を、見なかったことにした光一は、隣に立つ金髪緑眼のアリアに話しかける。

「アリアさん。大広間で聞けなかったことがあるんだけど……」

「何でしょう。勇者殿」

「アリアさんは、聖騎士だよな」

「はい」

「さっきの発表の時、聖騎士以外にも騎士が出てきたんだけど……」

えっと、精霊騎士に神官騎士に……宮廷騎士だっけ。

それって、何か違いでもあるの？」

「騎士の種類ですか。」

そうですね。一言で言えば、所属が違います。

まず、普通、騎士と言えば、軍属の騎馬兵を指します。

戦場で真っ先に戦うのが彼ら。

次に、神官騎士。これは、神殿所属の騎士たち。

聞くところによると、神官騎士は刃物を武装してはいけないなど、幾つか戒律があるそうです。

それから、アリエルさんら、精霊騎士。

精霊騎士は、精霊魔術を駆使し、精霊の巫女を専属で守護する騎士団です。

宮廷騎士。これは、王宮を護衛する騎士たち。

全て貴族階級の人員で構成されていますので、貴族騎士とも呼ばれますね。

それと、私の聖騎士。

私たちは王族直下の騎士団です。

魔術と聖光魔術を使いこなすことから、昔は聖魔騎士と呼ばれていたようですが、ゴロが悪いということで、いつの間にか聖騎士という名が定着したとか。

ファーレン王国は、この五つの騎士団ですが、他国には魔術騎士団や暗黒騎士団、近衛騎士団、獣人騎士団。変わったところでは、エルフだけで構成されている妖精騎士団などがあるそうです。それらに比べれば、我が国の騎士団の構成は、普通でしょうか」

「へえ。色々あるんだなあ」

「ええ、騎士団同士の諍いや確執、引き抜きなど、もう色々と……」
何を思い出したのか、アリアが二本指で額を押さえ、金の柳眉を
ひそめる。

「大変そうですね。アリアさん」

「ええ。本当に……」

右手を頬に添えたアリアが、ホウと吐息を洩らした。

＊

0071勇者は 偽勇者に し、よふ、ちえんし、した!

中庭は、メイドの言ったとおり、誰も居なかった。

白い円卓に座った竜斗は、3人に笑みを見せる。

「さて、もう一度、自己紹介しておこうか。

俺は、上白竜斗。

17歳。趣味は情報収集と分析。

光一に巻き込まれて、別の世界から召喚された不運な高校生だ」

「私は、セラ・オル・ランセル。

16歳。宮廷騎士団所属 第7騎士分隊員。

これでも、一応貴族よ。

剣の腕だけなら、万騎長クラスと互角にやりあえると自負してるわ。

趣味は乗馬。

あ、そうそう。多少、魔術も使えるわよ」

「ワシの名は、アーサー・レイガスタ。

18歳。神官騎士見習いだ。

趣味は筋肉。特技は筋肉。信仰も筋肉だ。

筋肉の尽きぬ限り、頑張らせてもらう」

「わたしの名前は、レイフォン・アルス・フェンリルです。

歳は14歳。3級宮廷魔術師です。

宮廷魔術師団 魔術開発部 魔術・魔法陣分析構築課の課員です。

趣味は魔法陣研究です。他にも魔法全般好きです。

よ、よろしくお願いします」

「さて、まずは一番はじめに、一つだけ聞きたい」

竜斗が円卓に肘を付き、彼らを見回した。

「正々堂々って言葉をどう思う？」

左隣のセラが、しばらく宙を眺めてから、口を開く。

「正直、どうでも良いわね。」

私は、私のやりたいようにやるわ。

相手に合わせてやる義理なんかない」

「ほう。筋肉。お前は？」

「正道だろうが、邪道だろうが、すべては筋肉に通じる。
見よ、この筋肉！！」

対面のアーサーが立ち上がり、すかさず一背中を見せ、二の腕を
上げ、力こぶを作る《ダブルバイセップス・バック》。

こちらに振り返り、白い歯のキラメキも忘れない。

「だから、いったいどういう意味なの！！」

「なるほど」

「あんたも、何を納得してるの！」

「内気、お前は？」

「わたしが魔術を使うと、みんなに、卑怯だ…って言われるんです
けど……………」

竜斗の右隣のレイフォンがショボンとへこみ、セラが頬を掻いた。

「まあ、あんたならそうよね」

「どういうこった？ ツンデレ」

「だから、ツンデレって何よ？」

答えない竜斗に、鼻を鳴らしたセラが説明する。

「んー、この魔法使いはね。」

大規模魔術しか使えないの。

しかも、魔術を放つと、マジック・トリップを起こして、魔力が無くなるまで、ひたすら撃ちまくるのよ。

そして、魔力が無くなると即気絶。

他にも、魔力消費の少ない魔術を放つと、必ず暴走。

前にも、光の魔術を暴走させて、直径100メートルの光球が、3日3晩、王都を照らし続けたのは有名な話よ。

魔力量は超一流。魔術展開力も一流。でも、制御は見習い以下。付いた名が『欠陥大魔術師』」

「ふーん」

竜斗の目線に、ビクッと身体を震わせるレイフォン。

「わ、わたし、……クビですか……？」

「しねえよ。」

一つ疑問なんだが、よく宮廷魔術師になれたな」

「は、はい。」

わたし、魔術解析や開発なんかも得意なんです。

そっちの方面で、試験に合格しました」

「な〜る。」

で、内気。この筋肉のことは知ってるか？」

「え……と、少し……」

「噂程度でいい」

「……そ、それは……」

「ワシのことは構わんど。」

噂なら、筋肉とともに聞いているのでな」

「筋肉、関係ないでしょ！」

「ウヌ!？」

「ま、そう言うこったから、ほら、話せ話せ」

「は、……はあ。」

えっと、レイガスタさんは、凄い人なんです。

レイガスタ家は代々、神官騎士を輩出している家なんです。

レイガスタ家の方々は、先天的に無意識魔術を持ってる方が多いんです。

あつ、無意識魔術と言うのは、呼吸のように無意識に自分の身体に魔術をかける体質のことです。防御の魔術や、肉体強化の魔術、回復の魔術、治癒の魔術、闇視の魔術、変わったところでは浮遊の魔術とか、巨大化の魔術もあるそうです。

……えっと、話がそれました。

それで、レイガスタ家は、防御魔術や治癒魔術、回復魔術の無意識魔術を宿すことが多いそうです。

普通は、一人一つなんです。が、アーサーさんは防御魔術と治癒魔術の2つを兼ね備えています。それもすごく強力な。

小さい頃は神童と呼ばれ、将来を期待されていたそうですが……
ちらりとアーサーを見るレイフォンに、竜斗は一つ頷く。

「なるほど、筋肉か」

アーサーが、鷹揚に頷いた。

「ウム。いかにも、筋肉よ。」

健康な体に、神の加護は宿るという。

ある時、ワシは気づいたのだ。

ならば、その加護の宿るところは、筋肉に他ならないと！！

ワシは気づいた日から、筋肉を鍛え始めたのだ!!

筋肉よ、満ちて増えよ!!

筋肉に、栄光あれ!!!

筋肉に敬意を表して、スクワット500回――」

「あー、筋肉。それは、後にしてくれ。

あんたにも聞きたいことがあるんだ」

スクワットを止めたアーサーが、振り返る。

「ヌ。なんだ？」

「筋肉。このツンデレのことは何か知ってるか？」

「うゝむ。噂程度で良ければな」

「それで、構わん」

「ちょっと!!」

「お前も、内気のことを話しただろ。

それに、そんなことじゃ、評価を定めたりしねえよ。

噂が、どんだけ当てにならないものかは、嫌ってほど知ってるからな」

「……………んゝ、なら……………でも、やっぱりイヤ……………」

「筋肉、話せ」

セラは翡翠色の眼を上目遣いに、竜斗を睨む。

「ウム。セラ嬢のことで聞いていることは、『成り上がり騎士』という言葉だな。

両親のどちらかが、商人らしくてな。

金で貴族の地位を買ったとか言われておる。

本当かどうかは知らんが。

それで、貴族騎士たちから、爪弾きにされており、軍属の騎士たちと一緒に行動しているとか。

他には、従姉妹に聖騎士がいて、その聖騎士とよく比べられてるらしい。

ヌウ。確か、……もう一人の勇者の従者になった者だ。
ワシが知ってるのは、それぐらいだ」

「へえ、ツンデレって、あの聖騎士の従姉妹だったのか。
道理で顔が似てると思った」

「ふうんだ。

どうせ、アリアの方が可愛いわよ。

性格も目つきも能力も向こうの方が上ですよ」

ふくれっ面で、顔を背けて拗ねるセラに、竜斗は笑いかける。

「そうか？」

俺は、お前の性格と吊り目、好きだぞ」

「……な……なな……」

突然の告白に、セラは顔を赤くして、口をパクパクと開け閉めした。

「ムウ。勇者殿は、強気の女子が好きか」

「めっちゃ好きだ！ ストライクゾーンさ！」

「じゃあ、……ランセルさんは、ぴったりですね」

セラが立ち上がって、話を振り払うようにバツと腕を振る。

「そ、そんな話はどうでもいいのよ！

そんなことより、あんたのことも話さないよ」

「ん？ 俺」

「そう。異世界から召喚されたのは知ってるけど、向こうでは何をやっていたのよ？」

「学生」

「何、あんた。その歳で学生って、学者の卵だったの？」

「アン？」

「だって、14歳過ぎても学校行ってるなんて」

「ああ、元の世界じゃ、だいたい18歳まで学生だ。」

さらに2年・4年・6年と、進学する奴が大半かな」

「何をそんなに勉強するものがあるのよ？」

「ま、いろいろとな。」

あとは副業でトラブルシューター……いや、違うな。仲介屋とか
仲裁屋みたいなのはしてたけどな」

「戦闘系技能は？」

「全く無し!!」

竜斗は爽やかな笑みを浮かべて、親指を立てた。

セラが頭痛を堪えるように、二本指で額を押さえる。

「そういえば……あの……」

レイフォンが怖ず怖ずと話しかけた。

「勇者さんは、正々堂々って、どう思ってるんですか？」

竜斗は、唇の片端を吊り上げる。

「大広間でも言ったが――、

俺は誰であろうと、正々堂々、罫を仕掛け、背後から不意を打つ
てやるさ」

「それ、どう考えても、勇者の言葉じゃないわよ。

よくて、偽勇者だわ」

呆れ混じりの溜息を吐くセラに、竜斗は弾けるように笑い声を上

げた。

「あははははははははは。
偽勇者か。」

うん。良いな、それ。

俺のことは、偽勇者と呼んでくれ」

「ヌ？」

「そ、……そんな……」

「わざわざ、自分から偽勇者なんて名乗る必要ないんじゃないの？」

「いいんだよ。」

表舞台で注目浴びて、正々堂々ってのは、コウがやるから。

それに、正直、俺は勇者なんてやりたかない。

偽勇者なら………まあ、妥当な線だな」

竜斗は立ち上がり、大仰に一礼する。

「てなわけで、

勇者 上白竜斗、改め、

偽勇者 上白竜斗だ。

これから、よろしくな」

*

008 偽勇者は ふ、きを てにいれた!

「次は武器だな」

竜斗の言葉に、セラが小首を傾げる。

「武器?」

「そ、武器。」

俺は、殺されそうになったことはあるけど、殺し合いなんかしたことないし、人を殺したこともない。

コウのように、剣道を習ってることもない。

ようは、素人だ。

そんな俺が、どんな武器を持てばいいと思う」

「あの……なら、魔術など……」

レイフォンに、竜斗が頷いた。

「それも、覚えるつもりだ。俺に使えるならな。

だが、実戦で使えるようになるには、時間がかかるだろう。

だから、武器だ」

「ロングソードなんかが、一般的だけど……そうね。槍なんかどう? 間合いは広いし、威力もあるわよ」

「槍……か。」

3倍段なんて言葉もあるしな。

それにするか。

お前、槍は使える?」

「武器なら、一通りね」

「そうか。」

なら、頼む。教えてくれ」

この通りと、頭を下げる竜斗に、セラは眼を丸くする。

「いいけど。随分と、素直ね」

「生死がかかってれば、頭ぐらい幾らでも下げてやるさ。
まだ、死にたくないんでね」

「よく言うわよ。」

水の巫女に、あんな暴言吐いというて」

「あん。召喚の場に、居たのか？」

「あゝ、うん。……まあね……」

歯切れ悪く答えたセラは、話題を変えるように言葉を紡ぐ。

「それで、この後どうするの？」

竜斗は腕を組んだ。

「うゝん。そうだな。」

武器と防具を調達してから、俺も含めて、各人の能力を見てみた
い」

＊

すぐ右隣には、高い城壁がそびえ立つ。

今、竜斗たちは、王都を取り囲む城壁の外側にいた。

左側には平原が広がっている。

セラの話では、王都の北側にあるこの平原は、騎馬戦などの軍事
演習場になっているとのことだった。

手甲肩甲足甲と胸当て、兜の変わりに精霊石の嵌ったサークレッ
ト。

礼服から、一般兵と同じ簡易鎧に着替えた竜斗は、木製の槍を見
よう見まねで構えていた。

腰には木製の大型ナイフ。

目の前には、二本の細身の木刀を2刀流に構えたセラ。

この世界には、回復魔術や治癒魔術が存在し、骨折程度ならば、瞬時に回復できる。

故に、この世界の稽古や試合は、木刀を使うのが普通だった。

———ヤベエ……。

竜斗の背中を、冷や汗が湿らせる。

目の前のセラに、隙がない。……なんて余裕かました思いすら出てこなかった。

怖い。ただ、ひたすらに怖い。

セラの眼は、人を殺したことがある眼だ。

しかも、人を殺しても、なんとも思わなくなってる眼だ。

こんな境地に至っている人間の眼など、竜斗でも数人しか見たことがない。

ヤクザやマフィアで数人。連続殺人犯。それに、所長。

「どうしたの？ かかってこないの？」

セラの声に、竜斗が喉の奥で呻いた。

畜生。何をしたって、勝てないのはわかってるよ。
なら、僅かでも驚かせてやる。

竜斗は息を吸い――
足下の小石を蹴飛ばした。

真っ直ぐ顔面に飛んでくる小石を、セラは驚きもせず、木刀を僅かに動かして弾く。

同時に竜斗は、あらかじめ握っておいた土をセラへかけた。
セラは右手の木刀を横に一薙ぎしながら、3歩下がる。

竜斗は前に飛び込み、倒れ込むように体全体を倒しながら、セラの臍を狙って木槍を振る。

――これで、ツンデレからは、消えたように見えるはずだ！

コオオン！

木刀同士を打ち合わせた音が響き、竜斗の木槍は、セラの木刀に防がれていた。

片膝を付いた竜斗の目前には、木刀の切っ先。

「あゝ、参った」

竜斗は木槍から手を離し、両手を上げた。

表情を和らげたセラが、片眉を上げる。

「まったく、ダメね」

「素人なもんで」

「奇襲も奇襲になってなかったし」

「なってませんでしたか？」

「ええ、全て予想の範囲内。」

ま、一からやっていきましょう」
「だな」

＊

「じゃ、次はツンデレと筋肉な」
竜斗は城壁際に座り込み、水筒から水を飲んだ。

「セラ嬢。ワシには木刀じゃなくて、その真剣でよいぞ」
セラは、アーサーに胡乱げな眼を向ける。

「何よ、それ。」

私の攻撃は全て防げるっていう自信？」

「いや、そうではない。」

ワシの筋肉と能力を見るには、それが一番なんぞな」

「ふーん。なら、私もそのメイスで良いわよ。」

私の剣技を見せてあげる」

アーサーとセラは、互いに一步、飛び退さった。

セラは両腰から抜刀し、両手に細身の両刃剣を2刀流に構え、アーサーはメイスを前方に構える。

始めに動いたのは、アーサーだった。

空気を震わすようなメイスの一撃。

だが、セラは難なく躲し、袈裟・逆袈裟斬りに切りつける。

ギギギギギギギギィー！！

鉄の刃が擦れる異音が鳴り響いた。

距離を取ったセラが、訝しげに眼を眇める。

革鎧に包まれていない、アーサーの肉体には、刀傷ができていた。しかし、その傷は僅かに血の滲む、薄皮一枚切ったような浅い傷で、それも見る間に塞がり治っていく。

「……な、な……なんなのよ。それ……」

眼を丸くするセラに、アーサーは渋い笑みを見せた。

「言っただろう。筋肉を見せると。」

見よ！！ 鉄板より強いワシの筋肉！！」

「それ絶対、筋肉のせいじゃない」

「ヌウ！？」

「でも、口先だけじゃなかったようね。」

なら、遠慮はいらないか」

その場で2度、ステップしたセラは、先の倍の速さで突進した。身体は霞むような速度で動き、双剣は眼に止まらぬスピードで、アーサーを縦横無尽に切りつけていく。

アーサーがメイスを振って反撃するが、セラには当たらない。

「遅い。遅い。遅すぎるわ」

セラの剣が更に、早くなる。

アーサーの体中に何十もの傷ができる――
しかし、見る間に塞がっていった。

「くっ！ このっ！！」

セラは両剣を振り上げる。

「喰らいなさい！！」 《リュケン流重撃斬》

左手の剣を振り下ろし、右手の剣をその上に叩きつけた。

「ヌンッ！！」

そんな奥義らしき一撃を、アーサーは気合を発して、筋肉で弾く。

バンッ！！

「キャア！」

弾かれたセラが、悲鳴を上げて尻餅を付いた。

「ふっふっふっ。この筋肉に防げぬものはない。

見よ！！ このキ・ン・ニ・クウゝッ！！」

アーサーは一右足を一步前に出し、拳を鳩尾で打ち合わせ、体を少し前かがみにし、全身に力を込める《モスト・マスキュラー》。

白い歯のキラメキも忘れない。

尻を叩きながら立ち上がったセラのこめかみに、青筋が浮かんだ。

「あ、……アツタマ来た！」

セラは双剣を握り直すと――

《リュケン流十字斬》

アーサーの胴体をX字に切りつけ――

《リュケン流転連斬》

身体を回転させながら、二本の剣を水平に構え、振り切る。

アーサーがメイスを下から上へ振り上げた

セラは後方にジャンプして躲し、空中で身を捻り、

「レイボウッ！」

光の矢が肩に突き刺さったアーサーが、たたらを踏む。

「ファイアーボール！！」

ボンッ！！

「ヌオッ！！」

火の玉がアーサーに直撃し、爆音を響かせて爆発した。

「おい、ツンデレ！！」

地面にふわりと着地したセラが、竜斗を見る。

「なに？」

「こいつは訓練だぞ。」

マジになってどうする！！」

「え……あっ！」

何を目的に戦っていたのか思い出したセラの顔が、サーツと青ざめる。

「ちょ……ちょっと、……神官、大丈夫？」

すぐに、治癒魔術を――」

セラの言葉が止まった。

アーサーの火傷が光を発しながら、凄まじい早さで治っていく。

アーサーが、ペチペチと自分の頭を叩いた。

「いやいや、驚いた」

「あ、あんた、驚いたって……。」

ファイアーボール食らって、驚いただけって、いったいどんだけ丈夫なのよ!!」

セラが叫ぶように抗議した。

「ムウ。筋肉の思し召しよ」

「それ、絶対に筋肉と違う」

「ヌッ!？」

竜斗が苦笑いを浮かべ、二人を制する。

「オーケー。」

筋肉の防御も、ツンデレの速さも見れた。

それが強みか」

「ウム。この鍛えし筋肉のとおり」

「まあね。」

私はその速さと、それを活かしきる双剣の剣術よ」

「なるほどな。………あとは、内気だが……」

竜斗、セラ、アーサーは城壁際を見下ろした。

「体力無さすぎだろ」

「まあ、魔法使いだしね」

「ヌウ。筋肉が嘆いておる」

城内から、王都の城壁の外まで1時間ほど歩いてきただけで、疲れ果て、疲労困憊したレイフォンが湿らせたハンカチを額に乗せ、城壁に凭れて座り込んでいた。

＊

草原が吹っ飛んだ。

まさに、その言葉がぴたりと当てはまった。

地面は根こそぎ抉れ、緑一面だった地は、火と雷で焦げた黒色と、凍り付いて太陽の光を反射している白色と、穴が空き抉れて地肌を晒した茶色の景色に一面、様変わりしていた。

「あゝ、……凄いな」

「ヌウ！ 筋肉が震える」

「これで、加減が利けば、世界一の魔法使いなんだけどね。
欠陥大魔術師。

何で、そう言われているか、実感したわ」

足下には、魔力が空になり、目を回して気絶しているレイフォン。

「本当に、使えるの？ この娘」

セラがレイフォンを抱き起こす。

「使い方次第だろうな。

上手くハマれば、大戦力だろ」

セラは草原の成れの果てを見回した。

「ええ、そうね」

＊

0091偽勇者は れへゝる か、あかゝった!

「これで決まったな」

中庭のテラスに戻ってきた竜斗は開口一番に告げた。

「俺は、槍とナイフ。それと魔術の訓練。

ツンデレは、攻撃系魔術の訓練と、俺の槍とナイフの講師。

筋肉は、防御・回復系魔術の訓練と、内気の体力づくり。

ツンデレと筋肉は、武器系が自己鍛錬になっちまうが、大丈夫か？」

「当たり前よ。

今までだって、フレイム騎士団に混ざって稽古してきたんだから」

「ウム。ワシも神官騎士たちと筋肉がたぎるような実践練習ができるのでな」

竜斗は、アーサーに背負われて、帰路の途中で眼を覚ましたレイフォンを見る。

「内気。お前は、俺たちの魔術の講師と、あとは体力づくり。

都市から出るだけで、息を切らしてるようじゃ、ダメだろう」

「でも……わたし……魔術師だし……」

「関係あるか。魔術師だろうが、何だろうが、内気。お前は、体力無さすぎ」

「そうよ。それじゃあ、馬車がなければ何処にも行けないじゃない」

「ムウ。筋肉が嘆いているぞ」

「てなわけで、内気は、柔軟体操とマラソンからな」

「ひゅん」

3人から言われたレイフォンは泣き声を上げた。

＊

人気がない中庭のテラスの円卓で、一人、竜斗が突っ伏していた。

「お疲れのようですね。リュウト様」

竜斗がのろのろと顔を上げると、濃紫の髪のメイドがティーセットを持って佇んでいた。

「お茶など、いかがでしょうか？」

「ああ、頼む」

「かしこまりました」

メイドが紅茶を煎れながら、頬杖を付いている竜斗に尋ねる。

「リュウト様が稽古を始めて、1週間ですか。」

セラ様は、そんなに厳しいのですか？」

「スパルタだよ。スパルタ。」

ひたすら槍で的を突いてる。

毎日、ノルマ3000回。

それは、いいんだが、的に円が描いてあって、中心付近は＋1、その外周は－5、さらに外周は－10。

外周部分を突くと、その数字分だけ突いた数を減らされるんだ。

300回くらいまでなら余裕なんだが、500を越えると……しかも、休憩したら秒数分だけノルマが増えてくし。

大型ナイフの方は、基本を一通りやってから、あとはひたすら組み手。

投げられるわ、蹴られるわ。

もう、さんざんだ」

「最近、セラ様が楽しそうなお様子でしたが、そういう理由ですか」「絶対に、いじめっこ体質だ。あいつ」

くすりと微笑むメイド。

「紅茶に砂糖とミルクは、お入れますか？」

「いや、そのままで」

メイドは、竜斗と自分の前に紅茶を置く。

紅茶を啜った竜斗は、中空に吐息を吐き出した。

「そういや、メイドさんに聞きたいことがあったんだ」

「はい、なんでしょう？」

「確か、一国に一人、勇者がいるんだよね」

「はい」

「なんで、そんなことに？」

質問の意味がわからず、小首を傾げるメイド。

「えーと、俺の常識じゃ、勇者ってのは世界に1人か2人ぐらいのはずなんでね」

「人間たちの、遙か昔からの風習と言うしかありません。建国したら、勇者を選出すると」

「はあ」

「これは、私の予想なのですが、他国に魔王が現れたとしますよね。リュウト様が、勇者のいる国の国王だとして、他国に派遣しますか？」

「利に見合うものがあればな」

「そうです。利に見合わなければ、派遣しません。そういうことが積み重なって、自国で勇者を擁立するようになったのだと思います。」

なにより、自国に勇者がいると、民衆を動かしやすいですから」

「確かに、カリスマが一人いりゃ、大抵の人間は靡く。」

俺の世界でもそうだったよ」

眠そうな眼で何かを考えていた竜斗が、紅茶を啜る。

「て、ことは、魔王も複数いるのか？」

「ええ、おります。」

よく御存知でしたね」

「前に、隣の国の勇者が言ってたからな。『魔王は、1国に1魔王といかない』ってな。」

あの口調から複数いると予想してた。

まったく、どっから沸いて出てくるんだよ」

「西の魔大陸からです」

「アン？」

「境界を抜け、魔物を引き連れて、海を越えてやってくるのです。そして、住みやすそうな土地に自分たちの根城を築きます。」

そこを拠点に、さらに魔大陸から魔族や魔物を呼び込みます。

そして、その先頭に立った、まとめ役が魔王と呼ばれています」

「それ、入植者って言わねえか？」

「我々にとっては、侵略者ですね」

「はあ。それが勇者と魔王が複数いる理由か」

「今は、この国の魔王だけを考えれば良いと思います。」

過去、魔王同士が同盟を結んだことはありませんので」

「さいでっか」

竜斗はだらりと円卓に潰れた。

「そーいや、メイドさんて、何派？」

「なんのことでしょう？」

「姫さんを中心にする王族派。」

宰相を中心とする宰相派。

戦闘指揮官を中心とする軍閥派。

先代巫女を中心とした神殿派。

貴族が集まっている貴族派。

あとは、まだ不明なのが3、4派。

メイドさんは、どこの派閥に当たる？」

「僅か1週間で、そこまで把握しておりましたか」

「情報収集は、何もない俺の命綱だからな」

「私は姫様の護衛も兼ねてますので、おのずと王族派となります」

「あゝ、姫さんとメイドさんとマスター・フィーって、……王族

派、最強じゃねえか」

「でも、人数が一番少ないんですよ。

ですから、発言力は今一なんです。

リュウト様も入りますか？」

「ありがたい申し出だが、お断りしよう」

「残念です」

大欠伸をする竜斗。

「眠そうでございますね」

「2時間したら、起こしてもらえる？」

メイドは右手の中に、小さい風の渦を作る。

「時間になったら、音とともに消滅します」

「目覚まし代わりね。」

じゃ、一眠りさせてもらうわ」

すぐさま、眠りに落ちた竜斗だったが、「的がく、的がく」と、寝言を呟きながら、魘^{うな}され出した。

クスクスと笑いながら立ち上がったメイドが、虚空を見つめた。金の瞳の瞳孔が縦に窄まると同時に、パキッ　と空間が爆ぜ割れる。

メイドは割れた空間に手を差し込むと、中からマントを取り出した。

メイドは、魘されながら寝ている竜斗の背にマントを掛ける。
「では、リュウト様。一明日が、さらに良い日になることを願って
《おやすみなさいませ》」

＊

聖騎士たちの訓練場に、素振りの風切り音が響く。

「……998……999……1000!!」

聖剣を1000回振り終わった光一は、剣先を地面に突いた。

「終わったくく!!」

「勇者殿。

その剣は相手を斬るのではなく、相手を重さで叩き割る剣です。
おのずと振り方も変わるので、注意してください」

指導していたアリアの忠告に、光一は聖剣を回す。

「うん。やっと、重さに慣れてきた感じだよ」

「勇者殿が努力をしたからです」

「まあ、勇者になって、もう2週間目だからね。そろそろ慣れないと」

「コウイチ様〜!!」

青髪青瞳のシェラがタオルを持って歩いて来た。

「お昼にしましょう。」

サンドイッチをたくさん作ってきたんです」

光一が見ると、すでにアリエルがサンドイッチを取り出し、フューが横から摘んでいる。

「フューさん。みんなが揃ってからです」

「エルちゃんよ。固いこと言いなさるな」

「巫女姫様〜。早くしないと無くなってしまうす〜」

「我は、そんなに大食らいではありませんわ!」

「はいはい。二人とも喧嘩はみっともないですわよ」

シェラが腰に手を当てて、二人の方へ向かって行った。

「では、私たちも行きましょう。勇者殿」

「あっ、アリアさん」

「はい?」

「その勇者殿って止めてくれませんかね。」

「どうも、壁があるような感じがして、イヤなんですよ」

「では、どのようにお呼びすれば?」

「コウイチと。もしくは、コウでも良いですよ」

「え……っと……では、……コ……コウイチ殿……。」

「こ、これで宜しいですか?」

「とりあえずは、それで」

光一はアリアに、にっこりと笑みを浮かべる。

「コーイチ、早く来んか!!」
「食えんじやろうが!!」

「はいはい、今行くよ。フィー。
さっ、アリアさんも行こう」

アリアは両手で胸を押さえ、赤い顔で、深呼吸を繰り返していた。

「な、なんです。この胸の動悸は。
静まれ。静まれ。静りなさい」

「アリアさん？」

「な、なななな、なんです？」

「どうしたの？ 早く行こう」

「そ、そうですねっ!!」

「アリアさん？」

「右手と右足が同時に出てるよ」

「……き、気にしないでください」

「でも……」

「……こつちを見ないで」

「いや……でも……」

「前を向きなさい！」

「は、はい!!」

*

0101 偽勇者は まじゅつ を おぼえた！

アシンロック
「解錠！！！」

竜斗の前にある南京錠が、音を立てて外れた。

「うしっ！！ これで、7つ目の魔術、成功」

「3週間で7つですか……初めてにしては、良いペースです」
レイフォンの賞賛に、竜斗は笑みを見せる。

「ははは。任せろ。っていうか、魔術って面白いな。
前の世界でも、魔術があれば色々楽だったのに」

頬杖について、魔術の本をめくっているセラが、呆れた眼を向けた。

「なに言ってるのよ。」

偽勇者が使える魔術のうち、攻撃魔術は3つだけでしょ。

しかも、その攻撃魔術も、ファイアーは火を灯すだけだし、コー
ルドは冷やすだけだから、実質的には光の矢^{レイボウ}だけじゃない」

「いいんだよ。」

攻撃魔術はツンデレ。お前が使えるし、最大攻撃魔術は内気が使えるからな。

俺はその分、補助を充実させる方がバランスが取れるだろうが」

レイフォンは手元の50センチ定規を取ると、居眠りしているアーサーの頭をペシッと叩く。

「ヌッ！」

「魔術は覚えたいものを覚えていくのが、一番上達が早いです。
覚えたい魔術とは、使いたい魔術ですから、一生懸命、覚えるでしょう。」

ですから、偽勇者さんの好きなものを選択すればいいと思います」
「ほーら、内気もそう言ってるじゃねえか」
「……うっ」

レイフォンは再び50センチ定規を取ると、うつらうつらと船を漕ぎ始めたアーサーの額をピシッと叩く。

「ウヌッ！」

「偽勇者さん。次は何を覚えますか？」

初級魔術書のページをめくっていた竜斗の手が止まった。

「ツンデレ。この文字って、なんて読むんだ？」

セラが耳元の髪を掻き上げて、本を覗き込む。

「これね。耳よ。耳。」

「わかった」

「よく、わかった。」

お前の髪って良い匂いがするんだな」

「な……ななな……」

赤面したセラが、赤に近い金髪を押さえて、仰け反った。

「セ、セクハラ禁止よ！！」

「誉めただけだぞ。」

ツンデレの匂いは安心できるから好きだな」

「あ、安心して……好きって……、

そ、そりゃ、結構、香水とか香りには気を付けてるし……でも、好きって……そりゃ……私も……」

セラは指をこねくり合わせて、赤い顔で何かを呟いている。

恥かしがるセラを十分に眺めて堪能した竜斗が、呆れ目を向けているレイフォンに尋ねる。

「なあ、内気。この聞き耳って魔術は？」

「それですか？」

聞き耳、要は小さい音まで聞き取る魔術で、
魔術自体は簡単なんです、その後、使いこなすのが難しい魔術
なんです。

全ての音が聞こえてしまいますので、そこから必要な音を聞き分
けるのが難しいんです」

「でかい音は？」

「大きな音が、さらに大きく聞こえることはありません。

小さい音が、より鮮明に聞こえるようになる魔術です」

「なるほど、……使えるかも。

内気。これに決めた」

「わかりました。

わたしは使うことが出来ない、いつも通り、偽勇者さんの魔
法陣と呪文を添削していきます」

「オッケー」

レイフォンは、またまた50センチ定規を取ると、上を向いて大
口を開けて寝始めたアーサーの鼻をパシッと叩く。

「ヌガッ！」

「ねえさん。どう？」

短く問いかけてきたのは、冷たい感じのする無表情の綺麗な美少
女だった。

緑の髪を背中まで延ばした美少女の銀の瞳が、じっとレイフォン
を見つめる。

「うん。いい調子だよ。

ありがとう。レンちゃん。

偽勇者さんに通してくれた体内魔力回路も安定してるし、さすが
シャント

はレンちゃん」

「そう」

レンと呼ばれた少女は、レイフォンの隣に腰を下ろした。

二人の雰囲気はまったく違うが、瞳の金と銀の違いはあるものの、
こうして並ぶと同じような容姿から、姉妹だとよくわかる。

「おお。レンフェィ嬢ではないか。

久しぶりで、筋肉も喜びうち震えておるぞ」

「レイガスタさんは、早くそのページの治癒魔術を覚えてください」
「ムウ。覚えようとしているうちに、どうしても睡魔が襲ってきて
なあ」

レイフォンは4度、50センチ定規を――

「ヌツ！ わかった、わかったから、叩くでない」

「よっ。無口っ娘。」

仕事はいいのか？

筆頭宮廷魔術師なんだろ」

「無口っ娘じゃなく、レン。」

これも仕事」

「どうしたの？ レンちゃん」

「調査中。」

『夜の魔術書』、知ってる？」

「ううん。知らない」

「今、裏ルートで出回ってる魔術書。

実体を確認中」

「そういえば、魔術書の管理も、あんたたち魔術師の管轄だっけ」
「そう」

レイフオンは50センチ定規を取ると、魔術書を枕に寝始めたア
ーサーの後頭部をピシャと叩く。

「ヌギッ！」

「でも、レンちゃん。

それって、宮廷魔術師団で取り締まるような物なの？
市販で出回ってる魔術書なんか、いっぱいあるでしょう」

「噂では、禁止魔術が掲載」

「へえ、なんなんだ？」

「サキュバス召喚。

悪魔召喚は法律違反」

彼らの間を、微妙な空気が漂った。

「なるほど……何が『夜の』魔術書か、だいたいわかった気がする」

「バカよね。男って。

サキュバスを召喚したら、そりゃ、……ア、アレはできるかもし
れないけど、確実に死んじゃうじゃない」

頬を赤く染めて、喋るセラ。

「まあ、男として、気持ちはわからんでもない」

「知ってたら、教えて」

「了解」

「速攻で、燃やしてあげるわ」

「あの、サキュバス召喚で、何で『夜の』なんですか？」

3人がレイフオンを見る。

「？」

「うんうん。まだ、魔法使いには、早かったわね」
「妹が知ってて、姉が知らないのもどうかと思うけどな」
「ねえさんは、知らなくていい」
それだけ言々と魔術図書室から出て行くレンフェイの後ろ姿を、セラが見つめた。

「筆頭魔術師は筆頭魔術師で、過保護だし」

「おい。筋肉」

竜斗の呼びかけに、アーサーがビクツと震える。

「ウム。ま、まだ寝てないぞ」

「そんなに眠かったら、スクワットしながら、覚えたらどうだ？
それなら、眠くならないぞ」

「おおっ！！ それはよい考えだ！！！」

本を持って、スクワットを始めるアーサー。

「おおっ、眠くならん。

覚えられる、覚えられるぞ。

筋肉が、文字を吸収していくぞお！！」

「頭の中まで、筋肉でできてる人間ているのね」

「ああ、たまにな」

「覚えてくれるなら、細かいことは言いません」

＊

日が落ち、王都に夜が舞い降りた。
夜空を、二つの月が煌々と照らす。

世の中には、日が暮れてから本格的に始動する店もあった。酒場も、その内の一つである。

酒場のマスターは壁時計を見上げた。

最近、通い始めた常連がそろそろやって来る時間帯である。

おかしい少年だった。

武装から軍の人間だと思うが、軍の雰囲気放ってない。

そんなことを考えていると、その少年が入ってきた。

黒目黒髪の長身痩躯の少年である。

少年はまっすぐ、カウンターの真ん中に座り、エールを頼んだ。

後は、エールをゆっくりと飲みながら、ただ、酒場の喧噪を聞いているだけなのである。

マスターは少年の前にエールを置いた。

何かを小声で呟いた少年が片手を上げる。

竜斗が《聞き耳》の呪文を唱え終えた直後にエールがきた。

片手を上げてマスターに礼をすると同時に、酒場の会話が全て頭に入ってくる。

竜斗は顔をしかめた。

ここ数日通いつめ、なんとか多人数の会話を聞き取れるようになっていた。

色々な酒場を回ってみたが、ここが一番、冒険者が多く、また偶に情報屋も出入りしている。

判明した情報屋は3名。

ただし、1名は経験アルバイトから、除外。

危険なことにも迂闊に手を出しそうな人間に見えた。

もう一人は良さそうだが、バックに大きな組織の影が見える。

こういうところは、必ず組織に引き込もうとするし、個人で組織に対抗するのは骨が折れる。

これも接触しない方が良さだろう。

残りは、一人。

だが、今は急ぐ時じゃない。

すぐに接触する必要はないし、俺にはまだ情報が足りなすぎる。

竜斗はエールを嘗めながら、酒場の会話を聞き続けた。

＊

011 偽勇者は きくと、に とうろくした。

竜斗の身体が宙を舞う。

地面をバウンドして、3回、転がり止まった。
木刀を叩き込まれた鳩尾から激痛が走る。

「あゝ、また、負けた!!」

竜斗は訓練場で、仰向けに倒れたまま、青空に叫んだ。

「マダマダねえ」

セラが屈み込んで、竜斗に治癒魔術をかける。

「私、この一ヶ月で治癒魔術ヒーリングが随分と上達しちゃったわ」

「その分、俺が叩きのめされたってことだけだな」

無然と答えた竜斗が足音に気づき、倒れたまま、そちらの方を向いた。

「おう、どうだ？」

「ウム。とりあえず、1キロは歩かずに、走れるようになった」

アーサーの後ろについて走ってきたレイフオンが、倒れ込むように、地面に転がる。

「ゼ〜〜、ゼ〜〜」

「筋肉も内気も、お疲れ」

「ワシは、まだまだ走り足りないがな」

「ゼ〜〜、ゼ〜〜、ゼ〜〜」

「もう、しょうがないわね。」

濡れタオルと、水筒持ってきて上げるわよ」

セラが立ち上がったとき――

「あらあら、偽勇者ご一行様、まだ、城に居らしたの？」

「シャクティ！！！」

金髪縦巻き毛ロールの女騎士と、その取り巻きたちが、嘲りの笑みを浮かべながら、眺めていた。

「カスどもがいくら集まっても、所詮、カスよね」

金髪縦巻き毛のシャクティが鼻で嗤い、取り巻きたちが追隨する。

「正統な勇者様を見てみなさいよ。」

1ヶ月で百騎長クラスと互角に戦ってるのよ」

「聖剣を扱えば、千騎長とも戦えるそうよ」

「それが、こっちはこんな成り上がり騎士にやられてる。」

話にならないわね」

「私は、魔法なしの剣技のみなら、万騎長ともやりあえるわ」

言い返したセラへ、彼女たちの笑い声が響いた。

「せいぜい、吠えてなさい。左遷された成り上がり騎士様」

「あなたの成り上がりも、そこまでのようね。」

御愁傷様」

「このっ！！」

「では、ごきげんよう」

「あ、あいつら〜。」

実力じゃ、私に勝てないからって、口先ばかり、吠えやがって」

「なあ、ツンデレ」

「何よっ！！」

反射的に鋭く問い返したセラが、ばつが悪そうな顔になって、

「……………何よ？」

再度、問い返す。

「冒険者だと、俺のレベルはどれくらいだ？」

「？ ……そうね。」

冒険者レベルを持ってる騎士たちと比較すると……Dレベルぐらいじゃないかしら」

「そうか……。じゃ、そろそろ、実践といくか」

「はっ!？」

＊

「と、言うわけで、よろしくお願いします」

「……はあ」

竜斗、レイフォン、アーサーは、濃紫の髪のマイドに頭を下げた。

一人、セラは頭を下げずに、そっぽを向いている。

メイドが頬に手を当てた。

「何が、と言うわけ、なのでしょうか？」

「いえいえ、冒険者ギルドに登録して仕事を受けようと思うんですけど、

登録の仕方や、装備や、依頼の選び方を教えてもらおうと思いついて」

「何故、私に？」

「元冒険者でしょ？ マイドさん」

メイドの金の眼が細まる。

「どこで、それを？」

「風の噂です。」

怖いですね。噂って」

「なるほど、同僚たちですか。」

油断も隙ありませんね」

「それは、もう。」

情報収集と分析が、俺の得意とするところでして」

「……………わかりました。」

基本事項と注意点をお教え致しましょう」

＊

竜斗たちは、しっかりした煉瓦作りの建物を見上げる。

武器を背負った冒険者が、出入りしていた。

「へえ。ここが、冒険者ギルドか」

「私も来たの、初めてよ」

「思ったより、大きいですね」

「ムウ。強い筋肉たちが、沢山いるぞ」

冒険者ギルドの中は、軽食が取れる食堂も兼ねており、テーブルで洋々な冒険者たちが話し合っている。

ちなみに、アルコールは御法度のようにだ。

酔って、喧嘩になるからだろう。

竜斗が窓口で訊ねる。

「登録って、どこでするんだ？」

「ここで、大丈夫です。」

この用紙に、必要事項を書き込んでください」

横から申請用紙を覗き込んでいたセラが、指をさした。

「パーティ名って何にするの？」

「決まってるだろう。」

『偽勇者』だ」

「……マジ？」

「大マジ」

パーティ名と各自の名前・年齢・性別・種族を記入した紙を、窓口に渡す。

「はい、確かに。」

あら、パーティ名が、偽……勇者……ですか？」

「別に、勇者を名乗ってないから、良いだろ」

「は、……はあ。まあ、構いませんが。」

では、偽勇者ご一行様。

ギルドカードを発行いたします。

今のパーティレベルはEランクです。

各自のレベルもEランクから始まります。

パーティレベルは、各自のレベルの平均値になりますので、ご了承ください。

ランクは、任務達成とともにポイント加算され、ポイントが規定数に達すれば、ランクが上がります。

尚、任務を失敗すればポイントが下がり、規定以下となれば、ランクも下がります」

「了解」

ギルドカードを受け取った竜斗たちは、依頼書が張ってある掲示板に向かう。

「なんか、嬉しそうね。偽勇者」

「まあね。」

なんか、ファンタジーしててさ。

いいな。こういうの」

「よくわかんないわ」

竜斗たちは、メイドの忠告を思い出しながら、掲示板を見ていた。

掲示板に張ってある依頼書には、仕事内容や、場所、ギルドが格付けしたレベル、報酬や期間が記載されている。

「たしか、各レベルの平均価格に沿った依頼を受けろ……だったな」

「自分のレベルに合った依頼で、なおかつ、ギルドを通しているものを、とか話してたわね」

掲示板の中には、ギルドを通さず、勝手に依頼書を張っている依頼人も多い。

しかし、ギルドが精査してないため、報酬が極端に低かったり、ランクが不当に下げられてたり、そもそも違法な物すら含まれていた。

そういうものは排斥されるかというと、そうでもなく、博打気分で危ない仕事を受けたがる冒険者もいるから、始末に負えない。

冒険者という業種自体、一種の博打であるが。

「あと、……なるべく王都から、離れないものを……ということでしたね」

「ムウ。護衛系よりも、筋肉が唸るような、退治系か採取系を選べと言っておったな」

「と、なると……これね」

セラは、レベルEの依頼書一枚を壁から剥がした。

「ヌッ？ チスイソウを取って来いか」

「チスイソウって？」

細眉をひそめるセラに、竜斗が説明する。

「ん？ ああ、血吸草ね。」

血だけじゃなくて、肉も食うけど」

「知ってるの？」

「本で読んだ。」

お前も、ちっとは本読め」

「イヤよ。眠くなるんだもの」

「こ……こいつ。」

ま、いい。受けるぞ」

「そうね」

「はい」

「ヌウ。筋肉がピクつくぞ」

*

0121 偽勇者のまえに ちすいそう か、あらわれた。

「はい。と、いうわけで、血吸草のある森までやってきました」

「途中経過は？」

「ひたすら、歩いてきました。」

「金ねえし」

「ウム。節約のために筋肉を使う。」

「筋肉が喜び打ち震えているぞ」

「ひふふ、ひふふ」

「すでに、一人、脱落気味なんだけど」

「よろめきながら歩いているレイフォンへ眼を向けるセラに、竜斗が肩を竦めた。」

「かまわん。内気が魔術をぶっ放したら、このあたり一面、焦土だ」

「あふふ、うん。」

「まだ、死にたくないわね」

「ウム。筋肉も同意しておる」

セラがちらちらと、レイフォンのバックパックを見る。

「うふん。魔法使いの荷物、持ってあげた方がいいのかな？」

「よしっ。じゃあ、俺が杖を持ってやろう」

「倒れちゃうわよ！！」

今でも杖にすがってなんとか、歩いてるぐらいなんだから。

「鬼か、あんたは！！」

「失礼な。偽勇者だよ」

「うわっ。言い返せないわ」

竜斗と漫才を繰り広げていたセラの緑の眼がスッと細まり、双剣を抜刀した。

「内気、離れてろ!!
筋肉!!」

アーサーが、途中で買ってきた鶏を掲げ、竜斗がナイフで切り裂いた。

鶏から、血が滴り落ちる。

ザザザザザザッ!!

葉鳴りがしたかと思うと、2本の長い弁を持つ、全高2メートルほどの草が現れた。

根っこが地表に出ており、自走している。

2本の長い触手のような弁を振りかざし、アーサーの持つ鶏へ向かって、長い弁が伸び出した。

触手が鶏に絡みつくと同時に、

「筋肉!! 触手を押さえろ!!」

「ウム!!」

アーサーが触手を掴むと、血吸草、本体が暴れ出す。

「ヌオオオオオオッ!!」

ワシの筋肉にかなうものは、なああああしい!!」

「ツンデレ。今だ!!」

根っこは傷つけるなよ!

また、取りにくるからな」

「了解」

セラは、細剣で血吸草の根元を切りつけた。

竜斗が、血吸草の弁に向かって、魔術を唱える。

「束縛^{バインド}!!」

太い光の綱が、血吸草の二本の弁に絡み付いた。

「……………偽勇者よ。」

触手と一緒に、ワシも縛られてるんだが」

「気にするな!!」

ちっと制御をミスっただけだ!!」

「ヌウッ!？」

「ツンデレ。まだか？」

「もうちょい!!」

このっ! 草のくせして、生意気なのよ」

セラが刃を振るごとに、緑の汁が飛び散った。

竜斗はバックパックから、麻紐を取り出し、アーサーが押さえてつけている触手のような二本の弁を縛り付ける。

「ツンデレ。」

手はいるか？」

「いらないわ!

これで、ラスト!!」

《リュケン流加槌》

セラは、血吸草に刺し込んだ剣の柄に、柄を叩きつけた。

繊維が切れる音がして、草から根に変わる中間部が切断される。

セラの见ている前で、根っこの部分だけが逃げて行つた。

竜斗は逃げていく根に呼びかける。

「また、取りにくるからな〜。」
それまでに、大きく育つとけよ〜！」

「……終わった……………」

セラが地面にへたりこみ、竜斗が《束縛》の魔術を解いた。

「筋肉、根っこが切れても、草はまだ生きてるからな。
注意しろよ」

「ヌウ。それはわかったが、一緒に束縛とは、酷いではないか」

「それが、一番確実だったんだよ」

「偽勇者。」

おぬし、ミスった。とか言ってなかったか？」

竜斗はアーサーの胸板を拳で小突く。

「だが、久しぶりに全力を出せただろう」

「ウヌ！！ 筋肉が心地よい疲労を」

「なら、いいじゃん」

「ムウ。……………確かに」

「うわっ。口八丁で丸めこんだわ、こいつ」

呆れ混じりの声でツツコンだセラが立ち上がり、後ろを振り返った。

「さあ、帰るわよ。魔法使……………い……………っ！！」

森の出入口の方を向き、後ろ姿のレイフォンの目の前に、一匹の
グリスリー
巨大な熊。

「「「！！？」」「」」

涙目のレイフォンが、ふるふると震えながら、魔法杖を目の前に掲げる。

「ま、待て!! 内気、魔術は——」

「……い……イヤ~~~~っ!!」

レイフオンの前に、光で描かれた3メートル級の魔法陣が幾重にも多重展開した。

一瞬後、全ての魔法陣から同時に魔術が放たれる。

ズ
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
！
！

轟音が森全体に響き渡った。

色とりどりの閃光が、発しては消えていく。

野鳥が、怯えて一斉に飛び立った。

魔法陣は、魔術を放てば消えるが、一瞬後には、また新しい魔法陣が展開している。

一瞬の途切れもなく、魔術が発射された。

「……あ……あは……あははははははははははは」

マジック・トリップを起こしたレイフオンが、高らかに囃い始める。

[illegible]

雷が、炎が、光が、氷が、闇が、風が、衝撃波が、高速石礫が、森を根こそぎ吹き飛ばしていった。

たとえ、木に火が点いたとしても、次の瞬間、別の魔法の衝撃波

で、吹き消される。

「くそっ！」

「ちよっと、偽勇者。危ないわよ！」

伏せていた竜斗は、後ろからレイフォンに駆け寄ると、背後から両肩を強く叩いた。

「そこまでだ。内気!!」

魔術は止まらないまでも、レイフォンが、ぼんやりと上を見上げる。

「ははははは……はは……は……偽……勇者……さん……？」

それだけ呟いたレイフォンの目の前から、魔法陣が掻き消え、突然、力が抜けたように崩れ落ちた。

「おっと」

魔力が空になり、崩れ落ちたレイフォンを支えた竜斗は、放射状に前方の森が吹き飛び、大きな道が開けた光景を見ながら、溜息を吐いた。

「……………ミスった」

＊

血吸草は、長い弁の部分を入念に紐で何重にも巻き縛り、ズタ袋に放り込んでアーサーが肩に担いでいる。

気絶したレイフォンは竜斗が背負い、レイフォンの荷物はセラが持ち運んでいた。

「何というか……帰り易くなったわね」

「ああ。魔術をぶっ放した方向に、村が無かったのが、せめてもの幸いだ」

「魔法使いが、欠陥大魔術師って言われてるの、わかるわ」

「あゝ。今回は、俺の失策」

「え？」

「そうだよな。」

前にしか、敵がいらないとは限らないよな。
筋肉の真後ろに配置しておくべきだった」

「でも、それだと、血吸草との戦闘に巻き込まれない？」

「筋肉の巨体に、内気の身体なんかスッポリ隠れるだろ。
筋肉なら多少、血を吸われたって、平気だろうし、ミスったなあ」

頭を掻く竜斗に、セラが笑う。

「まだまだねえ。偽勇者様」

「はいはい。精進しますよ」

＊

013 偽勇者は ちすいそう を たおした!

「ごめんなさい。……ごめんなさい……」

竜斗の背中で、目を覚ましたレイフォンが泣きながら、謝り出した。

「まあ、気にするな」

「そうそう。今回は、こいつのミス」

人差指で竜斗を指さすセラに、レイフォンは涙で赤くなった眼を向ける。

「でも……でも……」

「内気。俺は、お前の暴走癖を知っていた。

知っていて、お前の暴走を許した。

そりゃ、お前のミスじゃない。

暴走させる配置をした俺のミスだ」

「……でも……」

「それに、お前。

いつも魔術を放ちたい欲求を押さえ込んでるだろう。

だから、ことあるごとに、反射的に魔術を撃ちまうんだろ」

眼を丸くするレイフォン。

「し、知ってたんですか？」

「なんとなく」

「そうなの？ 魔法使い？」

セラの問いに、レイフォンは首を竦めて、竜斗の背中に顔を埋めた。

「内気が全力で魔術を放てる仕事を取ってこなきゃなあ。それに、試してみたいこともあるし」

「そんな仕事、あるの？」

「冒険者の仕事じゃあ、無いな。」

だが、なにも仕事は、冒険者だけじゃない」

「？」

小首を傾げるセラとレイフォンに、竜斗が笑いかける。

「それは、さておき……今回の任務報告に行くぞ」

「はあ、失敗かあ……」

うなだれて溜息を吐いたセラに、竜斗が眼を瞬かせた。

「え？ 成功だろ？」

「はあ？」

森の一部を消滅させちゃったのよ!!」

「だから？」

「だからって……」

「依頼は何だ？」

「チスイソウを取ってくること」

「取ってきたよな」

竜斗は、前を歩くアーサーが担いでいるズタ袋を指さす。

「森は？」

「別に、森を焦土に変えちゃいけないなんて、依頼の条件の中に入ってたぞ」

「そりゃ、普通、入ってないわよ」

「なら、成功じゃん」

「そ、それは……」

「あの……わたしが言うものなんですけど……屁理屈じゃ……」

「知らんな。」

「ま、実際に換金してみりゃわかるだろ」

「……借金を、被せられなきゃいいけど……」

「はっ！ 俺の口八丁を舐めるな。」

「口先だけで幾つ、命の危険を潜り抜けてきたと思ってる」

＊

「初仕事、成功を祝ってかんぱーい！！」

「ムウ。何時でも何処でも、筋肉に乾杯！！」

「……」

「……」

酒場の一角で、竜斗とアーサーが、ジョッキを掲げる。

「どうした？ 二人とも」

竜斗は、黙ったままのセラとレイフォンに問いかけた。

「本当に依頼料、貰えたの？」

「勿論」

「……………森のことは？」

「初めから、そうだったって、言いくるめた」

「……マジで？」

「大マジ」

「でも…………どうやって？」

「俺らはレベルEの冒険者だ。」

そんな、大魔法を使えたら、今頃、レベルAの仕事をしてる……いや、宮廷魔術師やってるってな」

「……ああ」

「……ギルドで、わたしたちが勇者一行だって、知ってる方はいないんですね」

「そういうこと。」

もう片方の勇者が悪目立ちしてる分、

まさか、勇者が二人、召喚されていたとは誰も思うまい。

さらに、ツンデレ、内気、筋肉は、その筋には悪名高いが、基本的に無名の存在だからな」

「「……………確かに」」

「てなわけで、呑むぞ。食べるぞ!!」

「ヌウ。エールをジョッキで、お代わりだ!!」

「「「早っ!?!」」」

＊

「リュウト様。初依頼、達成。おめでとうございます」

「ありがとう。」

メイドさんの助言も助かった」

「いえ、たいしたことは」

中庭のテラスで、円卓を挟んで竜斗とメイドが座っていた。円卓の上には、紅茶を煎れた2つのカップ。

「それにしては、浮かない顔をなさってますね。」

森を吹き飛ばしたことを、気にされているのですか？」

「まさか。やっちゃまったことは、くよくよ気にしないタイプだよ、俺は」

「では、何を？」

「一言で、言えば攻撃力不足。」

今回の戦いでわかったんだかな。

俺はまだまだ、訓練不足で、足手まとい。

筋肉は威力はあるが、スピードが遅くて、当たりにくい。

ツンデレが総合的に一番攻撃力があるけど、軽量級なんで、その威力に上限がある。

内気は攻撃力がありすぎて、汎用性に欠ける。

植物程度で手間取ってるようじゃ、話にならん。

手っとり早く、攻撃力を底上げする方法を見つけないと」

メイドは、紅茶に口を付ける。

「一番、早いのは、強い方を引き抜くことでしょうか」

「強い奴ねえ。」

メイドさんが、俺のパーティーに入ってくれれば、万事解決なんだが」

「申し訳ございません。」

私には侍女と、^{メイド}姫様の護衛のお仕事がありますので」

「だよな」

竜斗は紅茶に口を付け、メイドがカップを円卓に置く。

「資金力さえあれば、魔法武器という選択肢もあります」

「魔法武器？」

「貿易が盛んな隣国のウィンドルムには、多様な魔法武器が売られています。」

鉄もチーズのように斬り裂く剣。

振動で対象を破壊するメイス。

シールドを張れる槍。

魔力を通して、ファイアーボールを放つ魔法杖。

これらの魔法付加武器なら、容易に攻撃力が上がると思います」

「ウィンドルムの通貨は？」

「換金が必要ですが、手数料以上に魅力的だと思います」

「で、肝心の値段は？」

「魔剣一本、10金貨（100万円）以上します。」

高いのはそれこそ、天井知らず。

魔法付加付き魔法杖は、安いものでも100金貨（1000万円）はすると思います」

竜斗は椅子の背に寄りかかった。

「そっか。……後は、元手か」

＊

抜けるような青空が広がっている。

雲一つない快晴の、軍の訓練場。

「さうて、今日も、ぶっ飛ばされるか」

「何よ。その後ろ向きな発言」

青空を見上げ、覚悟を完了し、さっぱりした笑顔で叫んだ竜斗に、

セラが半眼でツッコんだ。

「今日は、槍？ 大型ナイフ？」

「そうね。今日はナイフにしようかしら」

竜斗は、これから起こる悲劇を全て呑み込んだ笑顔で、大きく伸びをする。

「さして、今日も、蹴り飛ばされるか」

「だから、止めなさいって。」

その後ろ向き発言」

「あゝ、くそっ！！」

異世界に來たボーナス得点が欲しい」

「なによ、それ？」

「漫画やゲームだと、異世界に渡ってくると、強くなったり、特殊能力に目覚めたり、秘めたる力が目覚めるものなんだよ。」

それが、全くなし！！

そういう場合、元の世界では、暗殺者とか剣豪とかだったりするけど、それもなし。

おかげで、毎日毎日、ぶっ飛ばされながら、地道にレベルアップしなきゃならん」

「それが、普通でしようが」

「まあ、巻き込まれて召喚された偽勇者だからな」

「すいませ〜ん。

遅くなりました」

レイフォンが包みを持って、訓練場に到着した。

「あら、遅かったわね。魔法使い」

「はい。クッキーを焼いていたら、遅れちゃって。」

この前、皆さんに、ご迷惑をかけたお詫びです」

レイフォンが持ってきた包みを開けると、狐色に焼けたクッキーが、良い香りを漂わせる。

「又。美味そうだ」

竜斗たちが、クッキーをかじった。

「おっ、美味い」

「ウム、確かに」

「……………」

レイフォンが笑顔になった。

「わたし、これでも器用なんですよ。」

魔法陣作りは、手先の器用さも必要ですから」

「又ウ。もう一枚貰おう」

「俺は、後でいいや。」

これから、ツンデレにぶっ飛ばされて、胃の中のもの、全部吐くからな。

いつもの如く」

「いつも、そうなんですか？」

「いつも、そうなんだ」

ちらちらと、クッキーと竜斗に視線を行き来させていたセラが、意を決したように拳を握る。

「わ、私、ちょっと用を思い出したわ！！」

そう言うと、セラはどこかへ走っていった。

「おっ、いい、ツンデレ。」

俺の稽古はどうなるんだっ？」

セラの後ろ姿に呼びかけた竜斗が嘆息する。

「あゝあ、行っちゃまった。」

俺は、的でも突いてりゃいいのか？」

「うふふふ」

「なんだ？ 内気」

「すぐに、わかると思いますよ」

「ふん。あ、内気。」

お前も、食うのは後にした方が良いでしょう、筋肉」

「ウム。今日から3キロコースだからな」

「えっ！？ えゝゝえゝゝ！！」

快晴の蒼穹に、レイフォンの悲鳴が上がった。

「さあ、作ってきたわ。」

私に感謝感激して食べなさい！！」

セラは、ベンチの上に真っ黒なモノを置く。

「なんだ、これ？」

竜斗がタオルで汗を拭きながら、尋ねた。

足下には、3キロ走り、息も絶え絶えで倒れているレイフォンと、体力が有り余って、高速腕立て伏せをしているアーサー。

「何って、見てわからないの？」

「見て、わからないから、聞いている」

「クッキーよ」

「この黒いのが？」

「クッキーよ！」

「実は、イモリの黒焼きとかじゃないのか？」

「クッキーよっ！！」

竜斗の視線に、セラがつんと顎を上げた。

「み、見てくれは、悪いかもしれないけど、美味しいのよ」

「……………」

「何よ？ その眼」

「フム、美味しいのか。」

では、頂こう」

アーサーがひょいと1枚取り、口に放り込む。

そして————、アーサーは地響きを立てて、倒れた。

「き、筋肉！？」

「レイガスタさん！？」

寝ていたレイフォンが慌てて近寄り、完全に気絶しているアーサーに、恐れおののく。

「む、無意識治癒魔術があるレイガスタさんを、たった一枚で！？」

セラがおどおどと、首を振る。

「わ……態^{わざ}とじゃないのよ」

「態とであって、たまるか！！」

さっさと、毒消しの魔術を唱えてやれ！！」

「私、覚えてない」

「じゃ、人を呼んでこい！」

「う、うん」

フレイム騎士団の兵舎に向かって走っていくセラを見、大きく溜息を吐いた竜斗は頭を掻いた。

「ああ、もう。」

次の仕事は、決まったな」

＊

014 偽勇者は たいりよく か、あか った!

「ここは？」

「今日の仕事場」

「土木工事現場……で、ですか？」

上半身日焼けした、半裸の男たちが鶴橋を振っていた。
運河の工事のようで、幅10メートル、深さ4メートルの大きな
溝が、はるか彼方まで続いている。

「ムウ。筋肉が疼めく!!」

鶴嘴を振るえと、筋肉が叫んでいる!!」

「待ちなさいよ。」

神官。あんたはそれで満足でしょうが、まずは依頼を果たしてか
らよ。

その後だったら、土木工事でも何でも、いくらでもやりなさい」

「し、しかし……」

「ああ、行っているぞ」

「「いいの?」」

「勿論」

「うおおおおおおお!!」

アーサーは雄叫びを上げ、満面の笑みを浮かべて走って行った。

「だけど、依頼は？」

この地に現れるモンスターの討伐は？」

「モンスター?」

首を傾げる竜斗に、セラは眉をひそめる。

「いるんですよ?」

「いないぞ」

「じゃあ、何しに来たのよ？」

「仕事」

「仕事って、土木作業でもやれっての！！」

「そのとおり」

「なんですってえええ！！」

「どこの世界に、土木作業をする勇者がいるのよ！！」

「俺は勇者じゃなくて、偽勇者だからな。」

「必要なら、ドブさらいから強盗まで、何だってするぞ」

「冗談じゃないわ！！」

「私、帰る！！」

「待った！！」

「竜斗は、セラの手首を掴んで止めた。」

「な……何よ」

「てなわけで、飯炊き一人と、作業員3人だ。監督」

近づいてきた工事現場の監督に、竜斗はレイフォンとセラを差し出す。

「作業員が……3人……？」

セラとレイフォンを訝しげに見る現場監督。

「一人は、あそこで嬉嬉として、鶴嘴を振ってる」

指さした先のアーサーを見、現場監督も納得して頷いた。

「ああ、なるほど」

「で、こっちが飯炊き」

セラを前に押し出す。

「ちよっと！！」

「ツンデレ。理由は、後で話す」

真面目な表情になった竜斗は、セラに小声で囁きかけた。
セラも声をひそめて返事を返す。

「……何か、あるのね？」

「ああ、最重要事項がな」

「あゝゝ、わかったわよ！」

「飯炊きは、あそこだ」

幾人かの女性が集まってる場所を、顎でしゃくる監督に、セラは
赤に近い金髪を掻き上げた。

「はいはい。行けば良いんでしょ、行けば」

「すまんな」

「べ、別に、偽勇者のためじゃないわよ!!」

現場監督の眼が、残ったレイフォンに向けられる。

「その子は？」

「現場作業員」

「は？」

「しかも、一番のメイン」

「はあ？」

＊

「なんだ、そいつは？」

竜斗と、手を引かれるレイフォンに、奇異な視線が突き刺さった。

「すまん。10分ぐらい、その場から離れてくれないか？」

「なんだと？」

「いや、この内気……じゃなくて、この魔術師が大魔法を使って、穴掘っから」

「大魔法だあ？」

周りの作業員たちが、胡散臭そうな眼を向けてくる。

「そう、大魔法だ。見たくないか？」

酒場でちょっとした話の種になるぜ」

竜斗は人懐っこい笑みを見せる。

「どうだ？」

10分の休憩中、魔法を眺めながら休むのもオツだろうぜ。

なに、ダメだったら、それはそれで酒場の笑い話ぐらいにはなるさ」

「フン！ 10分だけだぞ。」

おゝゝい、お前ら10分休憩だ。

魔法使い様が大魔法を使うんだと」

周りの作業員たちから、笑い声が上がった。

「ありがとう。」

あ、そうそう、あと3キロぐらいは、確か、真っ直ぐに掘るんだよな？」

「ああ。そうだ。」

10分で3キロ、掘るってか？」

「いや、それはさすがに無理」

人が避難したのを確認してから、竜斗はレイフォンに話しかける。

「さて、内気」

「……………はい」

マジック・トリップ

「暴走中も意識はあるんだよね？」

「あ……………はい。」

をひたすら連射した。

鶴橋を振るつても、なかなか砕けない岩盤が砂の壁のように崩れていく。

そこへ、新たな光の矢が突き刺さり、深く深く抉っていった。

じつと、腕時計で時間を計っていた竜斗がレイフオンの肩を、ダ
ンッと叩くと同時に、

「そこまでだ!!」

岩がはぜ割れる音以上の大声を上げる。

すぐには、止まらないものの、目に見えて、光の量が減っていき

やがて魔法陣が消え失せ――

――魔術が止まった。

「はははははは……は……は……は……」

笑い声の消えたレイフオンが、トサツと竜斗に寄りかかる。

「よう。起きてるか？」

「……はい……」

「そいつは、重畳。」

「残りの魔力はどれくらいだ？」

「……え……つと……だいたい……」

「これを5割程度で押さえられるようになれば、合格だ」

竜斗はレイフオンの緑の髪をくしやくしやと撫でた。

「ま、今日はもう休め」

「……………は……………」

唾然とした視線が見守る中、竜斗は気絶したレイフォンを背負って、歩きだす。

「じゃ、監督。」

あとの土の掻き出しは、よろしく」

炊き出し班のいる木陰に連れて行き、レイフォンを木の根本に寝かせた。

「ふうん。なるほど、魔法使いの魔力を発散させるためだったのね」

水で濡らしたハンカチを持ってきたセラが、レイフォンの額に乗せる。

「それも、一つだ」

「他にあるの？」

「ああ」

竜斗の視線の先には、スコップで土を掻き出してるアーサー。

「あいつもストレスが溜まっていたようだしな」

「うちのパーティーは、肉体労働系か」

二本指で、眉間を押さえるセラ。

「あとは、俺の体力作り」

「確かに、体力は付きそうね」

「でもメインは別だ」

「あれ？ メインは、魔法使いの魔力発散じゃなかったの？」

「違う。ツンデレ。お前だ」

「は？」

「ここで、ちっとは料理を学んでけ！！」

「なによ、それっ!？」

「4日前、筋肉がお前のクッキーを食べて、ぶっ倒れたのを、忘れたと言わさんぞ!!」

「……………うっ」

「俺らの死活問題だからな。」

「拒否は認めん!!」

「あ、あんたこそ、どうなのよ？」

「俺か？ 俺は料理できるぞ。」

「今度、作ってきてやろうか？」

「…………ぐっ」

「てなわけで、こいつをいっちょ、揉んでやってください」

「さ、嬢ちゃん。始めようかね」

セラの両脇をがっしりと、おばちゃんが捕まえた。

「え？ ……いや……私は……………!!」

「大丈夫大丈夫、ちゃんと仕込んで上げるよ」

「いつ、お嫁に行っても大丈夫なまでにしてあげるさ」
おばちゃんに引きずられていくセラ。

「私、まだ、花嫁修業なんかする気ないわよ……………!!」

調理場に引きずられていくセラに、にこやかに手を振って見送っ

た竜斗は、袖を捲った。

「さゝゝて、俺も働くかね。

肉体系のアルバイトは久しぶりだ」

小さく笑う竜斗。

「……………まったく、久しぶりだ」

次の日。勿論、俺は全身筋肉痛だったさ。

*

0151 偽勇者は まし、ゆつしょ を てにいれた!

「へえ。なかなか、面白そうな店だな」

「ありがとうございます。にいさん」

今、竜斗は下町の裏通りのさらに、奥まった所にある雑貨屋にいた。

雑貨屋。まさに、そうとしか言いようがなかった。

店内に、ごちゃごちゃと積み重なっているものは、全く統一性がない。

魔術書、手斧、鍋、タペストリー、ズボン、ピカピカと発光するだけの置物、裸婦画。

ただ、自分の好きな物を並べているだけに見えた。
実際、そうなのかもしれない。

店主の、オレンジ色の髪に黄色のサングラスをかけた若い男が、ニカッと笑う。

「冷やかしても良いから、ゆっくりと見てってよ。」

「買ってくれたら、尚、嬉しいけどね」

「勿論、買わせてもらうさ」

竜斗はカウンターに銀貨を1枚置いた。

「魔王が現れたとき、一番はじめに寝返った辺境の領主がいる。」

「そいつの情報、銀貨1枚（1万円）分、頼む」

「なんだい。そっちのお客さんだったのか？」

「いや。こっちの雑貨もさっきから、いろいろ目移りして、困って

るんだけどな。

なに、この手のひらサイズのミニチュア狐。
すごい癒されるんだけど」

「その狐は、忍しのぶで作られた職人芸の一品さ。

その毛は本物の狐の毛を使ってるし、
眼の部分に精霊石の欠片を使っていて、暗い所だと全体が淡く光
るんだよ。

特別価格、銅貨5枚（500円）！」

「買った！」

「買ったちゃうんだ」

銅貨も追加して置いた竜斗に、店主は笑顔を向けた。
売れたのが、心底嬉しいらしい。

「毎度あり。

さて、寝返った領主というと、ハンベルトかな？」

「そいつだ。欲しい情報は性格から、趣味、生い立ちまで全てだ」
「了解、了解。

あんな小物だしね。

銀貨1枚（1万円）でもお釣りがくるさ」

店主は、竜斗を見上げる。

「ところで、にいさん。魔術は使えるかい？」

「一応な」

「そう。なら、お近づきの印に、銀貨3枚（3万円）で、これはど
うだい？」

店主は、一冊の魔術書を、カウンターの下から取り出した。

「今、噂の『夜の魔術書』。

服の中を見通す《透視》や、相手を酒に酔わせる《スピリッツ》、服を一瞬で脱がす《武装解除》。

人の目線を集める《魅惑》や、自分に好意を持たせる《魅了》。勿論、《体力維持》なんかも載ってる、男の夢と希望が詰まった魔術書さ」

「買った!!」

「毎度あり」

夜の魔術書を受け取った竜斗は、銀貨3枚をカウンターに置いてから、右手を差し出す。

「あんたは、良い情報屋だ」

「いやいや、お客の望む物を売る。」

「商売の基本さ」

二人は、がっしりと手を握りあった。

「そうそう。その本は発禁本だから、お役人に見つからないようにね」

「わかってら」

……そういや、無口っ娘が探してたっけ。

まっ、それはそれ。これはこれ。

ふっ。おじい漢の哀しい生きざまさ。

虚空に、ニヒルな笑みを浮かべる竜斗。

「にいさん。何をニヤついてるんだい？」

もう、女の子とのエッチイことを想像してるのかな？

あ、そうそう。その本使っても、どうしても女の子をものにできない時は、サキュバス召喚も最後に載ってるから」

「それやったら、死んじゃうだろ」

竜斗はいそいそと、バックパックに夜の魔術書と、狐の置物を仕舞った。

「でも、よかったのか？」

この魔術書、銀貨3枚じゃ、原価割れだろ？」

「かまわないさ。」

王宮関係者にパイプが欲しいなあと思ってたんだ。
先行投資と思えば、割安だよ。

ねえ、『偽勇者』君」

店主が唇の端を吊り上げ、ニツと笑った。

眼を見張った竜斗が、頭を掻く。

「ちえ。気づいてやがったか」

「勿論だよ。偽勇者君。」

よく、酒場『旅の止まり木』に来てるだろ」

「あそこから、辿られたわけか」

「王宮の面白い情報があったら教えてね」

「俺に不利にならない情報で、相応の対価を貰えるならな」

「いいよ」

「オーケー。商談成立だ」

竜斗と店主は、再び握手をした。

＊

城に帰ってきた竜斗を、待ちかまえていたセラが捕まえる。

「偽勇者、どこ行ってたのよ？」

「アン？ ツンデレ、何かあったのか？」

「もう。今日は、みんなに話をつけてあったのに。

ほら、1時間の遅刻よ」

「だから、何があるんだよ？」

「うん。私が合同練習しているフレイム騎士団に話をつけてね、偽勇者の相手をしてもらおうと思って。

いつまでも、私相手だけじゃ、偽勇者も飽きるでしょ」

「おいっ！ 俺が本職の騎士連中になかうわけないだろ！！」

「大丈夫よ。

骨折程度なら、魔術ですぐに治るから」

偽勇者は にげだした！！

しかし あっさり つかまって けいこを つけさせられた！

偽勇者は 10かいほど きぜつした……………。

＊

「お疲れですね」

メイドの目の前で竜斗が突っ伏していた。

「……騎士団の連中と、槍の稽古をやらされてるからな……」

竜斗は、中庭の円卓に潰れながら、ダルそうに答える。

メイドは、紅茶に口を付けた。

「それだけ、セラ様はリュウト様のことを買っているということでしょう」

「善意でやってくれてるのは、わかるんだけどな……」

「ふふ」

「そういや、メイドさんは知ってるか？」

「何をでしょう？」

「魔王軍に、反撃に出るらしいな」

「もう、掴んでおりましたか。」

さすがはリュウト様です」

「軍閥派が、積極的に動いているな。」

仲の悪い貴族派と宰相派も賛同してるし、

反対してるのは、金庫番の財務大臣ぐらいか」

「姫様も国民を安心させるために、軍閥派の行動を容認しているようです。」

ただ、どこを攻めるかで、意見の相違があるようですな。

貴族派は、魔王軍の幹部がいる城へ城攻めをしたがっておりますが、

軍と宰相は寝返った領主の討伐を主張しております」

「勇者一人現れたぐらいで、城攻めはできんだろ」

「ええ。ですから、ハンベルト卿の討伐になるでしょう」

「その寝返った領主の城の規模は？」

「城という規模ではありません。」

「せいぜい、館の周りに壁と堀を巡らした小さな砦というぐらいで
しょうか？」

「苦もなく落とせそうだな」

「ただ、向こうには魔物が付いておりますから、

油断すると、手痛いダメージを負うかもしれません」

「かもな」

「ふむ。なんじゃ、二人とも、ここにおったか」

火のように赤い、紅の長髪の女性が、二人に声をかけた。

「姫様」

「姫さんか」

ルキア姫は、寂れた中庭を見回す。

「ほう。良い隠れ場所じゃな。」

逢い引きには、持って来いの場所じゃ」

「メイドさん相手に、逢い引きする度胸なんて、俺にはねえ」

「その言い方は酷いと思います。リュウト様」

椅子に座ったルキアは、竜斗に眼を向ける。

「おぬしは、魔術を使えるかの？」

「アン？ 簡単な魔術ならな」

ライト・ボール
竜斗は、光球を作った。

「ふうむ。勇者コウイチは、魔術が苦手だな。」

異世界人だからじゃと思っておったが、どうやら、違うようじゃな」

「あいつ、結構、不器用だからなあ」

「ふむ。ところで、勇者リュウトよ」

「あゝ、その勇者って、止めてくれねえかな」

「しかし、おぬしも勇者であろう」

「姫さん。俺がなんて呼ばれてるか知ってるだろう」

「偽勇者……じゃったな」

「その通り。」

「姫さんも、そう呼んでくれ」

「……そうか。」

まあ、おぬしが望むんじやったらな。

さて、偽勇者。今日は、お主に礼を言いに来たんじゃ」

「あん？」

「運河工事じゃよ。」

そなたらの……魔術師フェンリル嬢のおかげで、計画よりも3日ほど上回ったのでな」

「あん？ あんだけやって、たった3日ぼっちか？」

「それまで、予定よりも大幅に遅れておったのよ」

「ああ、なる。」

帰り際、また来てくれって、あの現場監督が熱心に頼むわけだ」

「ほう。」

勤労熱心じゃな。良いことじゃ。

何か、褒美はあるか？」

「別に。賃金は貰ってるんで。」

あつ。でも、くれると言うなら、貰いたいものがある」
「なんじゃ？」

「今度の攻める砦の周りの詳細な地図が欲しい。何処に行けば、誰に言えば、貰える？」

「ふむ。地図かや？」

考え込むルキアに代わり、メイドが答える。

「図書館塔に行けば、あるかと存じます」

「んじゃ、そいつを持ち出す許可を貰いたい」

「残念ながら、それは無理じゃ。」

詳細な地図は国家機密じゃからな。

替わりに、その地図を見る許可証を発行しよう

「んゝ。まあ、それでいいか」

メイドが何処からか、紙とペンを取りだし、ルキアがサラサラとペンを走らせる。

「これを見せれば、許可が下りるはずじゃ」

「すまん」

「これくらいで済めば、安いものじゃ。」

もし、暇ならまた、手伝ってくれると有り難い。

あそこは、何かある度に、計画が遅れるのでな」

「ああ、わかった」

「では、わたしはこれで行くでしょうかの。」

逢い引きの邪魔をする気もないしの。

ふむ。勇者コウイチの魔術の不得手が、個人によるものじゃとしたら……、

もう一度、フィーと指導方法じっけんを考えなくてはならんな」

「だから、逢い引きじゃねえって」

言い返す竜斗に、カカと笑いながら、ルキアは去って行った。

「なあ。メイドさん」

「はい？」

「メイドさん。あの姫さんの護衛なんだろ。」

「ついて行かなくて良いのか？」

「王都内の距離ならば、どこでも私の護衛範囲です」

「……………半端ねえな、おい」

「それより、リュウト様たちがあの運河工事を手伝っていたとは、初耳でした」

「ああ。あれは手伝いと言うよりも、発散に近い。」

「でないと、ツンデレ含めて、暴走する輩が揃ってるんでね」

メイドが口元を押さえて、微笑む。

「ふふ。コウイチ様よりも、リュウト様の方が勇者みたいですネ」

「……………勘弁してくれ」

竜斗はゲンナリと呟いた。

*

016 偽勇者は へいし になしかけた。

「ラウル地方の死霊王アンデッドの城を落とし、かの地を奪還すべきだ!!」
閣僚が集まる会議室で、大將軍のレッツは肥満腹を揺らして、力説した。

対するのは、冷ややかな視線。

「大將軍閣下、我々には城を落としたとしても、それを維持できる力はありませんが」

宰相の指摘に、レッツがテーブルを叩く。

「勇者がおる!!」

彼ならば一騎当千。そのための聖剣も渡してある!!」

冷ややかな眼が、冷笑に変わった。

「聖剣は魔族や魔物には利くが、モンスターや人間には利かん。

それに、剣一本で、どうにかできるものではない」

「城攻めも、後方が確保できないと補給路を塞がれる」

「金銭的にも、厳しいものがありますな」

「そんなもの、勇者がどうにかするわい!!」

レッツの強弁を、ルキアが否定する。

「無理じゃな」

「な、何をおっしゃいます。姫様」

「勇者コウイチは、未だ聖騎士アリアにも勝てんしの。
一騎当千とはいくまいて」

「そんなものは、勇者の責任だ!!」

「なら、辺境の地を魔王軍に取られた、おぬしの責任はどう取ろうかの。」

「のう? 大將軍」

「……グ、ググ……それは……」

「さて、まず我らの攻撃目標は、寝返ったレキアラの元貴族、ハンベルトで良いかの？」

「異議なし」

「了承した」

「承りました」

「異存はございません」

「……で、では、奪還したら、誰がレキアラを統治するか決めたい
！！」

レッツに、ルキアが溜息を吐いた。

「王族直下に決まっておろう」

「お待ちください！！」

かの地は、代々、ハンベルト家が治めていた地。

我ら貴族が治めるのが、最良と存じます」

「その貴族が、裏切ってくれたのじゃがな」

「ですから、代わりにわしの親族の者を派遣いたしますぞ。

我が、ロドリゲル家は決して裏切りませぬ！！」

「かまわぬが、そういうことなら、今回の遠征費と補給費、人件費、
武器防具費。

そして、奪還してからの防衛費は全て、おぬしの家から出すこと
じゃ。

勿論、魔王軍に奪い返されたら、おぬしの家に補填費も請求する
がな」

「そ、そんな……」

「レッツよ。できぬのなら、黙っておれ。

以上、会議は終わりじゃ」

＊

「すまん。

ちよつと、聞きたいことがあるんだが？」

「ん。俺か？」

灰色の髪にオレンジの瞳の兵士に、黒目黒髪の長身痩躯の少年が尋ねる。

「あんた、確か、レキアラ地方出身だったよな？」

「よく知ってるな」

「偶然にね。」

「あんた。今度、攻める領主の館って見たことあるか？」

「ああ、あるよ。」

「昔、あの近くに住んでたから」

「おおっ。そうだったのか。」

「なんでもいいから、教えてくれ」

「なんでだ？」

「不安なんだよ。」

「兵士になって、俺は初めての実戦なんだ！」

その兵士は、自分と同じ簡易鎧姿の少年を見、納得したように頷いた。

「ああ、そうだよな。」

「俺も初めての戦いはチビリそうだったしな。」

「んー。昔は、牧歌的な地方だったよ。」

「領主はバカだけど、まあ、滅多に姿を見せなかったしな。」

「屋敷のすぐ隣に林があって、そこで狐狩りをする時に姿を見るぐらいか。」

俺も、よくその林で遊んだでたよ。

その林の中に、小屋があつてね。

友達と隠れ家ごっこかしてたなあ。

あつ、……全然、関係なかったか」

「いや、それを聞かせてくれ」

黒髪の少年の意外なほど真剣な表情に、兵士は気圧される。

「あ、ああ」

「その小屋って、綺麗だったか？」

「あゝ、うん。ちよつと埃ばかったけど、定期的に掃除はされてたみたいだったな。

狐狩りの時、使ってたみたいだし」

「その小屋は石造りの石畳だったか？」

「そうだけど……」

「その小屋の中にあつたものは？」

「んゝゝ、ロープとか、馬の轡や鞍、後は鍵のかかった備え付けの箱が幾つか。

そんなところだったかな」

「箱の鍵は開かなかったのか？」

「いや、試してない。

男爵の持ち物だつてことはわかっていたから、下手にいじって処刑なんてイヤだったから」

「……なるほど。

ありがとう！

すごい、参考になった！」

兵士に礼を言つて、黒目黒髪の少年は去つていった。

館や領主の話を全然しなかったけど、良かったのだろうか？

去っていく簡易鎧の長身瘦躯の少年を見ながら、兵士は首を傾げた。

「よし、よしっ」

竜斗は両拳を握りしめる。

情報屋から買ったレキアラ出身の兵士の名簿を総当たりで尋ね回り、

やっと18人目にして、特に欲しかった情報を持っていた人物に当たった。

ハンベルトについて、聞き込みをしてわかったことは、
兎に角、小心者の保身第一に考える男だということだった。

情報屋からの調査結果でも、かなり評判が悪い。

小心者。すぐ保身に入る。都合が悪くなると逃げ出す。嫌いな相手には会わない。強い方へあっさりと寝返る等々。

だとしたら、存在そんざいすると思っていた。

そう思って聞き込みを続けていて、やっと、それらしき小屋に当たった。

竜斗の経験が告げている。間違いないと。

竜斗は、低く笑いを洩らした。

「こいつで9割。

残りの1割は、運次第ってとこだな」

＊

「マズイ、マズイ、マズイ……」

大將軍のレッツは、肥満の腹をプヨプヨと揺らしながら、部屋を行ったり来たりしていた。

貴族派だけでは、領地の奪還はできない。

このままでは、魔王軍から奪い返した土地は、全て王族が管理することになってしまう。

よしんば、王族以外の者が管理するとしても、そこには軍閥派や宰相派が出て来る。

無条件に、貴族派が統治できるとは、思えない。

争うことになっても、政治では宰相派にかなわず、武力では軍閥派に遠く及ばない。

それに、貴族派は、結束が、いまいち悪い。

誰かに命令されることに慣れてない者ばかりなので、個々がバラバラに動く。

手を打たなければ、栄誉ある貴族派が衰退してしまう。

「くそっ。それもこれも、あのジャジャ馬姫のせいだ！

誰だ？ 姫の教育係をマスター・フィーなどに決めた馬鹿は！！」

姫というのは、深窓で歌やら詩やらを唄ってればいいのだ。
なのに、あの姫は、武の世界や政の世界に、平然と口を突っ込んでくる。

しかも、武力は個人でドラゴンを倒す強さを誇り、
『ドラゴンバスター』の威名を持つほどで、軍としてもその力は
無視できない。

「いや、姫の悪口など、どうでもいいのだ。
それよりも、起死回生の手を打たなければ……」

うろろうと歩き回っていたレッツは、はたと足を止める。

——そうだ！！

レッツは何かを思いつくと、部屋を取り出し、バタバタと駆けて
いった。

「おおっ、勇者。ここに、いたか」
バタバタと走ってくるレッツに、光一、シエラ、アリエルが足を
止めた。

「どうかしたんですか？
大將軍閣下」

「お久しぶりです。
ロドリゲル卿」

息を静めながら、レッツは話す。

「水の巫女殿も、お久しぶりですな。」

さっそくだが、勇者。

魔王軍への反撃戦のことは、聞きましたかな？」

「いや。なんですか？ それ」

「聞いてない？」

「ええ。恥ずかしい話ですが、今、俺は毎日、訓練漬けで、そういう事情には疎いんです」

「いやいや。勇者にとって、今は実力を付ける大事な時期。訓練を惑わす情報は、確かに有害だな」

「それで、魔王軍に反撃というのは？」

「うむ、ここだけの話だが……、

実は、レキアラ地方の砦の奪還が決まったのだ」

「本当ですか！！」

「うむ。それで、勇者には、我らの前に立って頂きたい。

我らの先頭に立てば、騎士も気力を増すでしょうからな」

「わかりました。

俺も勇者です。

全軍の前に立つことを、お約束します」

「そうか。立ってくれるか。

これで、魔王軍など、簡単に蹴散らせる」

「任せてください！！」

「約束しましたからな。

任せましたぞ。

勇者コウイチ」

「はい！！」

「では、わしはこれで」

レッツは、去りながら含み笑いを洩らした。

くくく。馬鹿な小僧だ。

ちよつと、おだてれば、すぐに転がってくれる。

これで、わしら『貴族騎士』の先頭に立てば、勇者は貴族派と見なされる。

そうすれば、これからの勇者の手柄は、全て貴族派の手柄となる。わしらは何もなくても、勇者が役に立てば立つほど、貴族派の権力と発言権は増していく。

勇者がヘマをしたら、その時は勇者を切れば良いだけのこと。

くくくく。笑いが止まらんわ。

「わくはははははははははは」

誰もいない廊下に、一人、レッツの笑い声が響いた。

＊

0171勇者のまえに おーか、か、あらわれた。

抜けるような蒼天が広がっていた。
爽やかな風が流れている。

その穏やかな日常を打ち崩す、地鳴りのような蹄音が響き、土煙が舞い上がる。

騎馬の軍勢が、一糸乱れぬ隊列で街道を駆け抜けて行った。

千騎の騎馬隊は、砦まで1キロの距離を残して、停止する。
場所は、レキアラ地方。

目の前の砦は、寝返った元貴族ハンベルトの館。

館の周りには高さ3メートルの土壁が三重に取り囲み、その外側には幅1メートルの堀が巡らされていた。

そして、館の前には、肌が緑色の生物が待ちかまえ、
空には、灰色の羽の生えた生物が舞っている。

地面にいるのは魔物料の鬼。オーガ

魔王軍が先兵として使う魔物である。

身長2メートル半前後。

皮鎧を着込み、手にはメイスやロングソード。

知能は言葉を解する程度だが、力は人間の数倍あり、
厚い皮膚は、なまくらナイフ程度では傷つけられないほど堅く、
生命力も桁外れ。

そんなオーガが数百匹、館の護衛についていた。

空に舞うのは門番の悪魔像。ガーゴイル

石の身体を持ち、通常は彫刻に擬態しているが、戦闘時には自由

に空を飛び回る羽の生えた悪魔像である。

石の身体は、容易に刃物を通さず、魔術に耐性を持ち、その爪は鉄よりも固い。

空から襲いかかり、初級冒険者パーティーなど、1匹で全滅させるほど、強敵だった。

そんな灰色の珪素系魔物が十数匹、飛んでいる。

1キロの距離を残し、両軍は睨み合った。

騎馬隊は千騎の規模だ。隊列が整うまで少々時間がかかる。

「さあ、勇者よ。」

そこに、馬を寄せてくだされ」

大將軍のレッツは、貴族騎士の隊列の前に、光一たちを導いた。

光一は砦を見通し、首を横に振る。

「いや、ここじゃ、ダメだ。」

前線まで遠い。

俺は前線に行きます」

「な、何を言う！！」

わしらの前に立つと約束したではないか！！」

思わぬ拒否を受けて、レッツは怒鳴り返した。

「違う。俺は全軍の前に立つと言ったんだ。」

たとえ、危険でも怖くても、俺は先頭に立たなきゃいけない。

——俺は勇者だから」

光一は馬の腹を蹴る。

「アリアさん、シエラ、アリエル、フュー、行くぞ！！」

「「はい!!」」

一度も後ろを振り返らず、光一は軍の先頭の部隊に馬を走らせて行った。

続いて、アリアと、シエラを前に乗せたアリエルが続く。

「ロドリゲル卿よ。

コーイチを、操れるとは思わんことじゃ。

あやつは、馬鹿がつくほど、愚直な男じゃよ」

呆然としているレッツに、言葉を投げたフューは馬に声をかけ、光一たちを追いかけた。

最前線で突撃命令を待っている騎兵の真横に、純白の鎧の騎士が並んだ。

隣を見た騎兵は目を丸くする。

「勇者殿。ここは最前線ですよ」

「知ってる」

光一は、ニッと笑った。

「俺も及ばずながら、力を貸すよ。

聖剣があるからね。魔物は任せろ」

その時、号令がかかる。

「拔刀!!」

騎士たちが一斉に、刃物を抜いた。

緊張と緊迫が、両軍を渦巻く。

そんな中、光一が悪戯っぽくフューに笑いかけた。

「フュー。

この際だ。

俺らで口火を切ってやろう」

ククツと、フューが喉の奥で笑う。

「よかろう。」

勇者の初陣じゃ、ド派手に行こうかの」

「《ホーミング・レイボウ》」

呪文を唱えたフューの前に、50センチの光の球ができた。

「いつでも、良いぞ。コイイチ」

「行くぞ!!!」

「「「はい!!!」」」

フューの前の白光球から、幾重もの光の矢が解き放たれる。
レイ・ボウ

それに続くように、光一とアリアが突っ込み、その後ろをアリエルが続いた。

「イヤアアアアアアアア!!!」

敵陣に突進した光一は、目の前のオーガを一刀で斬り伏せた。

紫の血飛沫が吹き上がる。

アリアがバスタードソードに魔力を乗せ、数匹まとめて吹き飛ばした。

シェラが召喚魔術を唱え、3匹の炎蛇を呼び出す。

アリエルはシェラを狙ってくるガーゴイルを、風を纏った銀剣で
ミスリルソード
ズタズタに切り裂いた。

フューの魔術が全員のサポートと、護衛をする。

光一たちは、敵陣深くまで切り込んでいった。

茶金色の癖毛の戦闘指揮官が、眼を眇める。

突撃命令を出してないのに、一部の部隊が勝手に突っ込んだよう
だ。

自分の隊に、そんな勝手なマネをする騎士はいないし、

自分の指令系統ではない貴族騎士かと思ったが、貴族騎士にして
は、戦闘力がありすぎる。

貴族騎士があれだけ戦えれば、自分は苦勞してない。

「フレイム」

「はっ！」

万騎長のフレイムが馬を寄せた。

「あれは、なんだ？」

「どうやら、噂の勇者一行のようです」

「ああ、あいつらか。」

確かに、素材としては一級品が揃ってたな」

「そのようですね」

一つに纏めてる赤い髪を振って、光一たちが戦っている前線を見
つめる女騎士^{フレイム}。

「勝手な行動をとる兵士など邪魔なだけだが、……ただ殺させるに
は少々もったいない。

突撃することには、かわりないしな」

「了解しました」

フレイムは、髪と同じ色の赤い刃の長刀を一振りし、全軍に号令
する。

「全軍突撃!!」

「オオオオオオオオオオオオ!!」

鬨の聲が上がり、土煙が舞い上がった。

＊

「もうちょい、右だ。」

行き過ぎ、ちょい左!」

竜斗は座った姿勢で、アーサーとセラに声をかけた。

「そこだ。その位置で鏡を固定してくれ」

セラとアーサーが麻縄で、木の枝に鏡を固定する。

今、竜斗たちは、砦の隣にある林の中にいた。

手入れをされてる林で、奥深くまで来ても歩き易く、また木々の幅も馬が通れるぐらいの間隔があった。

鏡を固定したセラとアーサーが駆け寄って来る。

竜斗の前方には、寂れた石造りの小屋があった。

遠くの方で鬨の聲が上がり、地響きが地面を伝わって響いてくる。

「砦の進攻が始まったか」

「ねえ。私たち、軍の作戦に参加しなくて良いの?」

「俺たちが行ったところで、兵士が増える程度だろ。」

しかも、俺と内気じゃ、逆に足手まといだし」

「でも、フレイム騎士団が戦ってるのよ」

「そんなこと言ったって、ツンデレ。お前、フレイム騎士団じゃないじゃん。」

「隊列に加わっても、一緒に戦えるわけじゃないんだろ？」

「そうだけど……」

「《鷹目》」

竜斗は腕時計を見てから、自分に魔術をかけた。

今、竜斗の使った《鷹目》は、眼を良くする魔術である。

常に双眼鏡で覗いている状態になると云えば、想像しやすいだろう。

「ねえ。その魔術、どれくらい保つの？」

「今のところ、1時間ぐらいだな」

「でも、本当に来るのかしら？」

「十中八九な。」

この辺りには、それらしきものは他にないし、使われてない井戸なんかは、砦の内側だしな。

たぶん、ここで正解だ」

「そうじゃなくて。」

逃げ出すかってこと」

「魔王軍に寝返って、性格が変わってなければな……って、噂をすれば何とやらだ。」

来たぞ！」

竜斗はチラリと腕時計を確認した。

「おいおい、まだ戦闘を開始してから、15分だぞ。ただ、逃げ足が早えんだよ」

呆れたように首筋を掻きながら、竜斗が立ち上がる。

今、竜斗は、セウたちに固定させた鏡に写る、小屋の床の石畳を見ていた。

竜斗は、情報屋の情報と聞き込みから、保身に走る小心者のハンベルトは、必ず 抜け道 を用意していると、予想していた。

そして、この地方出身の兵士たちから聞き込みをしてみると、あきらかに怪しい小屋があった。

使ってなさそうなのに、掃除がしてあり、同時に子供が入り込めるほど無警戒で、

しかし、中には馬に乗るための轡や鞍が保管してある。

この地に来て、小屋の窓に雨風を避ける魔術が張られていることから、竜斗は確信した。

この小屋の床に、館に繋がる抜け道があると。

床を調べ、抜け道から辿って、ハンベルトを奇襲して、捕まえないのは、

察知されて別の通路から逃げられても厄介だったし、ハンベルトの護衛に多数の魔物がいる危険性もあった。

逃げ出す時も、魔物の護衛がつくかもしれないが、竜斗はその可能性は低いと思っていた。

何故なら、魔物に護衛をさせていたら、我先に逃げ出したことを魔王に知られるからだ。

よって、逃げる時は一人で、誰にも知らせず、真っ先に逃げ出すだろうと竜斗は予想していた。

以上の推理から、逃げ出した先で、待ち構えることにしたのであ

る。

そして、今、鏡には、床の石畳の一部が動き始める様子が写っていた。

「いいな。筋肉、ツンデレ。
打ち合わせ通りだ」

「了解」

「ウヌ、この筋肉に任せよ」

「内気。奴が逃げようとしたら、魔術をぶっ放せ」

「は、はい」

「てなわけだ。」

内気の魔術に巻き込まれなくなかったら、死ぬ気で捕らえろ」

「本当に、死んじゃうわよ」

床が持ち上がり、貧相な男が顔を出して、周りを見回してから、ゴソゴソと床から這い出し始めた。

「行くぞ!!」

アーサー、セラ、竜斗が小屋へ一直線に走る。

バンッ!!

アーサーが扉に体当たりをして、木製の扉を吹き飛ばした。

セラが、慌てて魔法杖を構えるハンベルトの杖を一刀両断する。

「束縛」
バインド

竜斗が束縛の魔術で、ハンベルトを拘束した。

「大人しく、寝てなさい!!」

セラが細剣の柄で、ハンベルトの首筋を一撃。

気絶したハンベルトを、竜斗が手早く縛り上げ、アーサーが担いだ。

「さっ。とつとと、王宮に戻るぞ」

「領主を捕まえたこと、軍に伝えなくて良いの？」

「途中で魔物に見つかって、魔物たちが領主を取り返しに来たら、今の俺たちじゃ、お陀仏だ。」

俺は、お前たちの命のためなら、その他大勢の方は諦める」

「ううゝ。なんか、納得いかない」

唇を尖らすセラに、竜斗は苦笑する。

「俺たちが、もう少し強ければな」

「魔物が抜け道を辿ってくる前に、逃げるぞ。ツンデレ」

「……そうね。」

今は、逃げるしかない……か」

＊

018 偽勇者は つうこうしょう を てにいれた!

「おおっ。人参がちゃんと切れてる。
前みたいに、繋がってないな」

「前回のことは、言わないでよ!!」
スープから人参の具を取り出した竜斗に、セラが赤い顔で抗議した。

「まだまだ、手は遅いけどね。
ねえ、セラちゃん」

「バラさないでよ。オバサン!!」
配膳をしているおばちゃんに言い返すセラに、オレンジの瞳の巨漢が自分を指さす。

「どうだ、嬢ちゃん。
俺のところに嫁に来ないか？」

「イヤよ」

「ギャハハハハ。振られやがった」
周りの現場作業員の男たちから、笑い声があがった。

竜斗たちは、再び運河の土木工事のアルバイトに来ていた。
レイフォンとアーサーの活躍もあり、良い金額を稼げる。

今は、昼下がり。昼休憩中だった。
竜斗たちは、半裸の男たちとともに、昼食を取っている。

「偽勇者さん。……わたしも、お腹減りました……」

「おう。内気、もう大丈夫か？」

「はい。急激な魔力低下で、まだ少しクラクラしますけど……」

「ウヌ。レイフォン嬢。今回は、気絶しなかったな」
「はい。慣れてきたのかもしれませんが。」
人間、やればできるものですね」

セラがご飯を盛った皿を、レイフォンに渡した。

「魔法使い。あんたの分、取っておいたわよ」

「ありがとうございます。ランセルさん」

ハグハグと食べ始めたレイフォンに、竜斗が訊く。

「内気。残存魔力は、どれくらいだ？」

「2割程度です」

「午後に、もう一回、できるか？」

「3割から4割程度の規模でよければ……」

それを聞き、作業員の男たちが、レイフォンに視線を向けた。

「おお、またお嬢ちゃんの大魔法が見れるのか」

「すげえよなあ。あれ」

「でも、俺の知り合いの魔術師に聞いたら、そんなの絶対無理だつて、断言されちゃった」

「無理だって……実際に目の前でやってみせたじゃねえか」

「だよなあ」

さっきの巨漢の男がレイフォンに近寄り、自分を指さす。

「どうだ？ 俺のところに嫁に来ないか？」

お嬢ちゃん」

「イヤです」

「ぎやははははは。また、振られやがった」

男たちから、笑い声が沸き上がった。

「おばちゃん。おかわり！！」

やけ飯じゃ〜!!」

「はいはい。大盛りにしとくよ」

オレンジの瞳の巨漢は、オロロロロ〜ンと男泣きに泣きながら、山盛りのご飯をかき込む。

周りの笑い声が、さらに大きくなった。

「ねえ。偽勇者」

「アン？」

「私たち、この前、寝返った領主を捕らえたわよね」

「捕まえたな」

「報奨金は？」

「無い」

「なんで!？」

どうして、領主を捕らえた報奨金が、1銅貨(100円)も貰えないのよ!!」

領主を生け捕りにしたら、10金貨(100万円)貰えるはずでしょ!？」

「それな、あのチビ巫女がごねてな。」

俺らはズルしたとかで、1金貨(10万円)しか貰えない」

「ズル？」

「なんでも、自分らはちゃんと戦って、オーガも30匹以上、たお斃したのに、

領主だけ搔っ攫っていった俺たちはズルなんだと。

何故だが知らんが、9割はコウのところに行った」

「何よ、それ!!」

ズルなんかしてないじゃない!!」

偽勇者が、情報集めて推理した結果じゃない」

「だよな。」

何も考えず、真正面からぶつかることしか考えねえ奴らからは、
そう見えるらしい。

前の世界でもズルやら卑怯やら、よく言われたよ。
こっちは、情報をかき集めるにも、労力と金を使ってるのにな」

「じゃあ、その残りの1金貨（10万円）は？」

「財務大臣のスリカバってやつが、ネコババした」

「あ、あんた。それを黙って、泣き寝入りするわけ！？」

「はっ！ まさか！！」

「今、報復のための資金集めだ」

「？」

「筋肉。内気。お前らにも動いてもらうぞ」

竜斗は、シィツと嗤う。

「俺に喧嘩を売ったこと、心底、後悔してもらおう」

＊

「いよおーっす」

「やあ。偽勇者君、3日ぶり」

竜斗は下町の裏通りの雑貨屋に、ふらりと立ち入った。
オレンジの髪の店主が、ひらひらと手を振り返す。

「面白いもん、何か入った？」

「これなんかどうだい？」

魔力を通すと、クネクネと動く蛇の玩具」

「うーくん、いまいち」

「そっかあ。」

「じゃ、これ」

店主は、3枚の15センチ角の精密画を並べた。

3枚にはそれぞれ、貴婦人、男装の女貴族、女騎士が描かれている。

「どれが、好み？」

「これだな」

竜斗は迷わず気の強そうな女騎士を選んだ。

金髪の吊り目の美女が鎧を着込み、地面に剣を突き立て、柄頭に両手を重ねて、威風堂々と立っている。

「ふふふ。なんと、この絵に魔力を通すと——……」

「おおっ！ 鎧と服が消えた——！」

絵の中の剣と鎧と服が消え、グラマラスな全裸の美女が余すところなく晒して立っている精密画に変わっていた。
わずかに頬を染めているところが、芸が細かい。

「どうだい？ 銅貨18枚（1800円）」

「買ったッ——！！」

竜斗は銅貨をカウンターに叩きつけた。

「買っちゃうんだ」

いそいそとバックパックに絵画をしまった竜斗は、咳払いする。

「さて、本題に入ろう」

「今のも、本題じゃなかったの？」

「……………二つ目の本題に入ろうか。」

屋敷の間取りと通行証。手に入ったか？」

「なんとかね。」

ただ、通行証は偽造だよ。

もし使うなら、国境警備隊に心付けを渡しておく方が、確実だね」
「了解。相場は1割だったな」

「その偽造通行許可証、出来が良いからね。
それぐらいで良いんじゃないかな」

「間取りの方は？」

「最新版」

「よく、手に入ったな」

「金庫を新設してみたいでね。
その時のものだから」

「……………そっか」

「どうしたの？」

「いや、たぶん大丈夫だ」

「ふーん。」

あ、そうそう。話はつけておいたよ」

「助かる。」

あとは、俺が交渉するさ」

間取り図と通行証を見、竜斗は声無く嗤った。

＊

0191 偽勇者は きんか を てにいれた!

一つの月が新月、もう一つの月はすでに沈み、いつもより圧倒的に暗い夜半。

竜斗は、豪華な屋敷の前にいた。

暗がりから、人影が走り出てくる。

「いよっ。旦那。」

薬、混ぜてきたぜ。

みんな、おネンネさ」

「働かせすぎは良くないな」

「まったくだ」

男と笑い合った竜斗は懷から、銀貨を数枚取り出し、手渡した。

「約束の残りの5銀貨（5万円）だ。」

今日のことは口を噤んでろよ」

「そりゃ、もう」

男が去ってから、角からセウたちが出てきて、問いかける。

「今のは？」

「ネコババ大臣の屋敷の警備兵になりすましてた男。」

名前は知らんし、知る必要もない」

竜斗が渡りをつけた侵入専門の人間だった。

「じゃ、ちよっくら、身ぐるみ剥いでくるぞ」

「それじゃ、強盗じゃない」

「だから？」

「ちよっと!」

「大臣は、俺らの金を盗んだんだ。
当然、やり返されるのは想定内だろうよ」

竜斗は首を、コキリと鳴らす。

「間取りは頭に入ってるな？」

「一応、覚えてきたけど」

「じゃ、行くぞ」

「……で、でも」

「なんだ？」

ツンデレは、泣き寝入りしたいのか？

「まさか！！」

「手を出してきたのは、向こうからだぜ。
やられたら、やりかえす。」

それが、俺の主義だ」

「そ、……そうよね。」

やられたら、やりかえす。

うん。当然よね」

何かを納得できたセラは、大きく頷いた。

「異存はないな？」

筋肉、内気」

「ウヌ。ない！！」

「あんた、本当に神官騎士見習い？」

「セラ嬢よ。神殿は、金と筋肉に関しては強欲だぞ」

「筋肉はウソでしょ」

「ヌッ！？ 何故、わかった？」

「わ……わたしは……悪いことは……」

「文句は、終わってから聞いてやる」

「お、終わってからだと……遅いと思いますけど……」

「行くぞ!! 内気!!」

「はい!」

「うわっ。押し切っちゃったわ。こいつ」

「……ううう……流されるわたしは、ダメダメです」

竜斗を先頭に、セラたちは塀を乗り越えて、大臣の屋敷に侵入した。

「おっ、警備兵は全員眠ってるな。

いい仕事してやがるぜ」

「どうやって、眠らせたのかしら?」

「食事に、遅効性の眠り薬でも混ぜたんだろ。

元の世界で、俺もそうやってたし」

「あんた、元の世界で何をやってたのよ?」

「だから、仲介屋と仲裁屋」

と、その時、竜斗とセラが武器に手をかけ、暗闇を見通す。

闇の中から吠え声が響いた。

「犬か?」

スリープ
「睡眠!!」

微かな月明かりに照らされた数匹の犬たちに、セラが眠りの魔術を放つ。

抵抗もなくバタバタと倒れる犬たち。

「知能の低い動物相手には、これが一番ね」

「へえ、便利だなあ。

俺も覚えよ」

屋敷の中の使用人たちも見限る限り、全員眠っていた。

竜斗たちは、迷わず一室に向かう。

「おっ。金庫。」

さすが、情報屋の間取り通り」

「まさに、盗賊ね」

「失礼な。偽勇者だよ。」

それに、勝手に他人の家のタンスをあさるのは、勇者の特権だぞ」
「何よ、それ？」

「《魔術関知》」

大きなダイヤル式金庫の前で、竜斗は魔術を唱えた。

竜斗の眼には、魔力の流れと、その力を発している精霊石が発光して見える。

「内気。この魔法陣は、何の効果がある？」

竜斗は魔力が発光して見える魔法陣を指でなぞった。

「え……っと……あ、はい。対アンロック魔法陣ですね」

「やっぱりな。」

内気。この精霊石に思いっきり魔力を流し込め」

竜斗が指さした1センチほどの小さい精霊石に、

レイフォンが両手を当て、全力で魔力を流し込む。

パキッ！！

数秒後、精霊石がレイフォンの魔力に耐えきれず、ひび割れ、砕け散った。

「砕けた？」

「ええっ!？」

「はは。予想通り。」

内気の魔力に耐えきれなかったんだ。
精霊石をケチったツケだな。

そんじゃ、遠慮なく——解錠アンロック!!」

竜斗の魔術アンロックで、あっさりと金庫の鍵が外れ、扉が開く。
金庫の中には、金貨の山が築かれていた。

「おおっ!!」

「すごい」

「ムウ」

「こんな大金……生まれて初めて見ました」

「筋肉。金貨を全部、この革袋に詰め込め」

「ウヌ。任せろ」

「ツンデレ。内気。大臣の部屋に行くぞ!!」

「了解」

「は、はい」

＊

「睡眠スリープ!!」

セラは、寝ている大臣とその妻に、眠りの魔術をかけた。
麻酔と同じ効果があり、何しても目覚めなくなる。

竜斗が二人を縄で縛り、目隠しと猿ぐつわをした。

「あれ？ 内気は？」

「後から来ると思うわ。」

私たちの足についてこれなかったのよ」

「ま、屋敷の間取りは教えたし、大丈夫だろう。
俺は書斎に行く。」

ツンデレ。小物で価値のある物をつかさえ。
大きすぎる物は手を出すなよ」

「了解」

躊躇いなく廊下を走って行く竜斗を見送り、セラは頬を掻く。

「あいつ。生き生きとしてるわねえ。」

いやに手慣れてるし、ほんと、元の世界で何をしてたのかしら」

セラが振り向こうとした時、背中に衝撃を受け、押し倒された。

俯せに倒れたセラの背中に、太った男が跳び乗る。

「はは。夕飯食いそびれて、腹減って起きてきたら、みんな寝てるんだもんな。」

絶対に、何かあると思ったぜ」

セラは無言で、じっと反撃のチャンスを伺う。

「さあ、ゆっくりとこっちを向け。」

警備兵に突き出されなくなったら、ぼくの言うことを聞いた方が良いぞ、女。

牢屋は辛いぞ。

ぼくにたっぷりと奉仕するなら、警備兵に突き出さないでおいでやるよ。

美人だったら、ずっとぼくの物にしてやる」

セラの眼から感情が抜け落ち、コキッと指を鳴らした。

「ぼくは大臣の息子だぞ！

ちゃんと奉仕できたら、ご褒美もやるさ。

さあ、こっちを向け！！」

大臣の息子が、セラの頭に手を伸ばし——
ゴン——！！

鈍い音が響き、大臣の息子が前のめりに倒れ——、
ゴキッ——！！

セラが首筋に肘打ちを打ち込んだ。

セラが気絶した肥満の男を、床に転がすと、後ろには魔法杖を握ったレイフォン。

初めの鈍い音は、後ろから来たレイフォンが、大臣の息子の後頭部を杖で殴った音だった。

「スリープ
睡眠！」

一応、大臣の息子に眠りの呪文をかけたセラは手早く縄で縛り、目隠しと猿ぐつわを咬ませる。

一息吐いたセラは、顔を上げた。

「ありがとう。魔法つ……レイフォン。」

あなたのおかげで、顔を見られずに済んだわ。

じゃなきゃ、このバカを殺さなきゃいけないところだった」

「無事で良かったです。ランセルさん」

立ち上がったセラは、唇に指を当てる。

「ん。レイフォン。」

私、家名って嫌いな。

セラって呼んで」

「じゃあ、わたしのことも、レイって呼んで下さい。

セラさん」

「了解。」

じゃ、レイ、行くわよ！」

「何処にですか？」

「クローゼット」

「はい？」

首を傾げながらレイフォンは、セラについて行った。

「ふふふ。あるある」

化粧台の引き出しを開けたセラは、手当たり次第、宝石を引っ張りだして、床に積み上げる。

「身に付つける宝石のたぐいは、化粧台にあると思ってたわ。うちも母様もそうだし」

「て、手慣れてますね。セラさん」

「失礼ね。手慣れてなんかいいわよ。」

「偽勇者と一緒にしないで」

「……は、はあ」

「さ。とつとと革袋に詰めるわよ。」

「レイ、手伝って」

「うう、良いのかなあ……」

＊

書齋に入った竜斗は、デスクの椅子に座った。

竜斗は、この書齋に金銭のたぐいがあるとは思ってない。

今回、大臣の家に襲撃をかけたのは、強盗が主目的ではない。盗みはついでだ。

竜斗の目的は別にある。

本来の目的は、この大臣を完膚無きまでに叩きつぶすこと。

竜斗は唇を歪めた。

俺に喧嘩を売ってきたこと、心底、後悔してもらおう。

聞き込みや印象、そして今回のピンハネから、この財務大臣は相当な額を横領している。

そして、几帳面な性格から、必ず裏帳簿やそれに類似するものを残しているはずだった。

金が増えていくことが好きな人間は、総じて財産管理をしているものである。

それでなければ、どれくらい増えたかわからないし、数字の増加が、他の何より金が増えていくことを実感できるからだ。

なら、どこかにその帳簿があるはずである。

竜斗は元の世界で、そんな隠し物の搜索を数多く経験していた。

アルバイト

竜斗は椅子に座りながら、周りを子細に観察する。

後ろめたい重要書類を隠す時、不安な心理から、いつも仕事をしてるこの位置から、眼の届く範囲にあるはず。しかし、他人に知られてはならない。

机の引き出しのような不用心な場所じゃない。

机の上には、書きかけの書類、インクにペン立て。小型の精霊石式ランプ。

真正面には、どこかの風景の絵画。

左手には窓ガラス。すぐ外には木が茂り、遠くまで見通せない。

床は、茶色を基色とした複雑な模様絨毯。

天井にはシャンデリア。

右手には、裸婦像。すぐ隣には、家族の肖像画。

………裸婦像？

それだけが、周りから浮いていた。

椅子から立ち上がった竜斗は裸婦像をじつくりと眺めてから、おもむろに台座を調べる。

案の定、台座の裏が開閉できるようになっており、そこに書類の束があった。

書類を、ざっとめくった竜斗は、鼻で笑う。

「ハッ！　ちよろい」

＊

「筋肉。金は全て馬車に積み込んだか？」

「ウヌ！　この筋肉の通り」

「内気。ちゃんと、乗ってるな？」

「はい。乗ってます」

「ツンデレ。お前は？」

「宝石。全部、かつさらってきたわよ。

それで、あんたの方は？」

「ばっちりだ。

これで、大臣は終わりだな」

竜斗は書類の入った封筒を見せた。

「よし、筋肉。

そのまま、隣の国に行くぞ！！」

「ちょっと待って。偽勇者。

他国に入るには、通行許可証が必要なのよ？」

「大丈夫だ。ここにある」

「そんなの、いつの間に、申請してたのよ？」

「ん。まあな」

返答を濁した竜斗は、偽造通行証をハタハタと振る。

「てなわけだ。筋肉、遠慮はいらねえ。

ウィンデルム王国までぶっ飛ばせ!!」

「ウム！」

＊

0201 偽勇者は まほうのふきを てにいれた!

ウィンデルム王国、地方貿易都市バラキア。

ウィンデルム王国の地方都市だが、3国の公道が交わる箇所で、交易の場となっていた。

さらに、ウィンデルムが貿易に力を入れ、税を安くしているため、商売が盛んな都市でもある。

今、竜斗たちは、その地方都市バラキアにいた。

ウィンデルムの王都まで行くには遠すぎるし、買い物ならバラキアで十分だからである。

「セラさん。

どれくらいになったんですか？」

「凄いわよ。レイ。

宝石を換金して、ファーレンの通貨をウィンデルムの通貨に変えたら、

全部で金貨1000枚（1億円）にもなったわ」

「すごい。遊んで暮らせますね」

両手を握り合って跳ねるセラとレイフォンに、竜斗が頭を掻いた。

「俺たちが偽勇者なんてやってなければ、それでも良かったんだがな。

残念ながら、俺たちは魔王とやりあわなきゃならないんだよ」

「偽勇者。この金貨はどう使うの？」

山分け？」

「いんや。魔法武器を買おうと思ってる」

「魔法武器？」

「ああ。俺たちは、コウたちと違って、強くないからな。

手っとり早く強くするために、武器を強化する」

「そう。魔法付加が付けば、軽量級の私でも威力が増すってことね」
「その通り」

「魔法武器店の場所は？」

「すでに調査済み。」

メイドさんに聞いた

「あの元冒険者のメイドね」

「元が冒険者だけとは限らんけどな」

「え？」

「あ、筋肉。そこを曲がったところで、馬車を止めてくれ」
「ウヌ」

アーサーが金貨が詰まった10袋の革袋を担ぎ、竜斗たちは魔法武器店に入った。

「いらっしやいませ」

「まずは内気の魔法杖だ。」

店主。威力を弱くする魔法杖はないか？」

「……………それは、呪われた品と言いませんか？」

「……………だよな」

「……………呪われた杖は……………イヤです……………」
ふるふるとレイフォンが震える。

「魔法付加の魔法杖はあるか？」

「ありますが……お高価かいですよ？」

「筋肉」

アーサーが、革袋の中身を見せると、途端に店主の態度が変わった。

「魔法付加付き魔法杖ですね。お客様。

基本的なものは、魔力を込めると光の矢や、レイ・ボウ氷の矢を放つ杖ですね。
アイス・ボルト

もう少し、良いものは爆炎球を放つものもございます」

「んん、攻撃魔術か……」

「ねえ。偽勇者。

レイに、わざわざ攻撃させる必要がある？

どっちかと言うと、身を守らせる方が良いと思うけど」

「そうだな。内気が自分の身を守れば、筋肉が攻撃にシフトできるもんな」

「でしたら、シールド楯を展開できる魔法杖がございます」

「それ、良いな。見せてくれ」

「はいはい、ただいま」

「どうだ？

内気」

シールド付加の魔法杖を構えたレイフォンが、杖に魔力を通すと、目の前にシールドが出現する。

「大丈夫です。暴走せずに、使えます」

「シールドを複数展開できるか？」

「お客様。それをするには大量の魔力が必要で――」

「出来ました」

「ええっ!？」

レイフォンの前に、5枚のシールドが展開していた。

「自由に動かせるか？」

「少し、制御が難しいですけど、大丈夫そうです」

5枚のシールドがランダムに動き出す。

「お客様、凄いですねえ」

「いえ、偶々です。」

このシールド付加魔法杖の魔法回路の基本設計は、わたしが組んだものですので、

基本さえわかっていれば、魔力の通し方で、色々操れるんです」

「なんだ、内気。」

「お前、魔法武器も作ってたのか？」

「いえ。わたしは理論と魔法回路だけです。」

わたしのいる魔術・魔法陣分析構築課は、魔法具の魔法回路も作成していますので」

「ほう。だったら、無口っ娘に魔法武器を融通してもらった方が早かったかな？」

「止めた方がいいですよ。」

「うちで作るのはあくまでも試作品ですから。」

「実用には強度が足りなかったり、暴走したり、爆発することが日常茶飯事なので、お勧めできません」

「そりゃ残念。」

「でも、面白い試作品があったら、回してくれ」

「上の許可を取らないとダメなので、難しいかと……」

「そっか」

「お客様。300金貨（3000万円）となります」

「筋肉。払ってくれ。」

そしたら、お前も武器を選べよ」

「ワシの武器は、この筋肉で――」

「いいから、選べ」

「ヌウ!？」

「私は、この2本の細剣にしたわ。

対となる炎の魔剣と、氷の魔剣よ。

魔法武器屋。2本対で買うから、1本、10金貨(100万円)
まけなさい!!」

「お、お客様。それは、あんまりでございます」

「別に、そのまま買えばいいじゃねえか」

「ダメよ。」

定価で買うなんてバカらしいわ。

私に流れる商人の血が許さないのよ」

「しかし、お客様。」

それは、かの有名なグリット魔法工房が作った一品物でして」
「だからって、1本、80金貨(800万円)って、高価すぎるで
しょうが」

「いえいえ、しかし……」

「大剣ならともかく、細剣に、この値段は……」

「しかし、強度が……」

セラと店主が、喧々囂々の値段交渉を繰り返す。

「セラさん。眼が、生き生きとしますねえ」

「あいつ、あんな趣味があったんだな」

「偽勇者さんは、どうするんですか？」

「うーん。魔法槍だけど、どれが良いかな。

ウィンド・カッター

炎、氷、雷、風斬、シールド、魔術解除、回復、光の矢に、
……ん？ フライ魔術って、空飛ぶ槍か？ 使えねえだろ」

「でも、投擲用の短槍ですから、けっこう、使えそうですよ。」

あ、この斬り裂く能力の魔術付加は、どうですが」

「ダメだな。」

斬り裂く前に、俺の腕じゃ、まず敵に当たらない」

「あらら」

「他は、碌なのが無いな。」

鍵開けに、罨関知、光、壁走り、閃光、跳躍、鷹目、暗視。
ライト

て、……おいおい。なんだよ、この《絶頂》の効果って。
ヘブン

なんで槍が、蛍光ピンク色なんだよ。

何に使うつもりだよ!?

くそっ! メツチャ引かれるじゃねえか!!

「ええっ!? 引かれるんですか?」

「こういうバカな物、大好き!!」

まあ、買わないけど」

「か、買わないでくださいね」

「さすがに命、賭けてまで、ギャグに走る趣味はねえよ。」

となると、常識的に考えて、中距離から攻撃できる物か」

「炎、氷、雷、風斬、ウインド・カッター光の矢」

「炎と氷はツンデレが魔剣として買うから外して、雷、カマイタチ、
光の矢か……」

しばらく腕組みして考え込んでいた竜斗は、雷の魔槍を取った。

「こいつが、一番、応用が利きそうだ」

「あら、決まったの。偽勇者」

「ああ」

「私の方は、1本、5金貨(50万円)まけさせたわ。
2本で10金貨(100万円)分。」

まあ、それでも、2本で150金貨(1500万円)もしたけど
ね」

「そうかい。」

店主。俺はこれを貰おう」

「100金貨（1000万円）になります」

「わかった。払う」

「あ、……ありがとうございます。ありがとうございます……うう……」

「おい、ツンデレ。店主、泣いてるぞ。

お前、どんな値引き方したんだよ」

そっぽを向いたセラは、口笛を吹き、誤魔かそうとしている。

「ウム。ワシも決めたぞ」

「そいつは？」

「霊体を攻撃できるメイスだ。

値段は50金貨（500万円）」

「そんなんの良いのか？」

「ウヌ。ワシは浄化の魔術が苦手だな。

常々、思っておったのだ。

幽霊など、筋肉のおもむくまま、ぶん殴った方が早い！——とな」

「あんた本当に、神官騎士見習い？」

「いかにも。

見よ、この筋肉！！」

「いや。筋肉、関係ないでしょ」

「ヌウッ！？」

「全部で、600金貨（6000万円）か。

次は、防具でも見に行くか」

*

021 偽勇者の なかま か、ふえた！

街中を、馬車を引く馬が闊歩する。

「次は、防具屋でも行くか？」

「でも、私たちが着ている鎧って、一応、魔法防具なのよね。

鎧には、強化の精霊石が埋め込んであるし、

兜の代わりに、精霊石が填まったサークレットだし、結構、高級品なのよねえ、これ」

「ああ。重くて、視界の狭まる兜を被らなくて良いのは、ありがたいよな」

「ヌウ。鎧など不要。

筋肉で十分だ」

「お前はな」

「ヌッ!？」

「鎧着たら、重くて動けません」

「レイの場合はね」

「……クسن」

「まあ、順当に行ったら、防具か装飾品だよな。

回復の腕輪とか、防御の指輪とか」

「でしたら、魔術書という選択肢も……」

「でも、私たちじゃ、使いこなせないわよ。

レイは、使えないし……」

「……………そうでした……」

「ウム。ここは、筋トレ用ギプスという案も――」

「「却下!!」」

「ヌウッ!？」

「ストップ!!」

突然、竜斗が声を張り上げた。

「どうしたのよ? 偽勇者」

「ドラゴン!!」

「は?」

「ドラゴンだ!!」

竜斗は馬車を飛び降りる。

「ちょ、ちょっと——」

セラが馬車から降りると、竜斗が幻獣商のドラゴンを熱心に見つめていた。

「ギャウ?」

竜斗の目の前にいるドラゴンが、不思議そうな眼で鳴く。

「すつつつげええええ!!」

本当に、ドラゴンだ。

本物のドラゴンだ。
ファンタジー
異世界、最高ッ!!」

「偽勇者の世界には、ドラゴンいなかったの?」

「ああ、想像上にしかな。

こいつらって、売ってんのか?」

セラが慣れた手つきでドラゴンの羽を触る。

「ええ。馬の代わりに馬車を引いたり、

ヒポグリフの代わりに空を飛んで荷物を運んだりね。

このドラゴンは、大きな羽を持つから、ワイバーン科の亜種、クオランスね。

走って良し、飛んで良しの万能ドラゴンよ。

その分、値段も張るけど」

竜斗も恐々とドラゴンの頭を撫でた。

「グキュ、グキュ」

ドラゴンが喉を鳴らすと、竜斗の眼が子供のように輝き、ドラゴンを撫で回す。

「うわっ、可愛え〜〜〜！！ 怖え〜〜〜！！」

怖カワエ〜〜〜！！

ドラゴン、メツチャ怖カワエ〜〜〜！！」

「なんか、竜斗さんが子供っぽいですね〜」

馬車から降りてきたレイフォンとアーサーが、呆れているセラの隣に並んだ。

「ほんと、あんな一面もあるのねえ」

「ウム。男にとって、ドラゴンとは憧れの一種だからな」

「レイガスタさんも、ドラゴンに憧れたりしたんですか？」

「ウヌ。ドラゴン・ライダーには、男は誰しも一度は憧れるものよ」

「そういや、近所の子供が、ドラゴン・ライダーごっことか、よくやってたわね」

「おっちゃん〜ん」

竜斗は幻獣商人に手を振る。

「はい。何でしょう？」

「このドラ。」

いくら？」

「ドラ？」

「そう。ドラゴンの『ドラ』」

「この子は優秀でして、かなりのお値段になっておりまして――」

「だから、いくら？」

「……金貨400枚（4000万円）となりますが」

「買った！！」

「「え〜〜〜〜っ！！」」

セラ、アーサー、レイフォンが声を上げた。

「良いだろう。足は必要だったんだしさ。」

何時までも、貸し馬じゃ、格好つかないだろう」

「そうだけど。」

「防具は良いの？」

「頑張って、避ける！！」

「私は、それで良いけど……。」

神官も、防具は要らないだろうし、

レイも後方で、しかも今回、魔法杖で防御も出来るようになったけど……、

あんたはどうなのよ？」

「俺？」

「偽勇者。あんたが、一番、防具が必要なんじゃないの？」

「うっ！ ……………ド、ドラに、守ってもらうさ！！」

「ギャウー！！」

竜斗は、ひしとドラゴンに抱きつく。

「無茶、言わないの！！」

立ち上がった竜斗は、一つ、咳払いをした。

「まあ、真面目な話。空の移動手段って、かなり便利だぞ。

それに、色々裏技も利くしな」

「それは、そうだけど……」

「おっちゃん。

このドラゴン。俺ら全員、運んで飛ぶことできる？」

「今はまだ、無理だと思います。」

現時点では、お客様とそちらのお嬢さん方2人が限界かと……」

「でも、成長すれば、全員乗せて飛べるよな？」

「それは、もう。」

地上なら今でも、その馬車程度、軽々引っ張ります」

「そっか。

俺は、買いだと思う。

お前らは？」

「そうですね。」

ドラゴン目ワイバーン科天地属のクオランスは、ほとんど出回ってないんです。

クオランスは、人に懐きやすく、また頑張り屋さんも多いと聞いてます。

丁度、元手もありますし、わたしも買った方が良いと思います」

「ウヌ。ワシは一度、空を飛んでみたいと思っておったのだ。

それに、ワシも昔はドラゴン・ライダーに憧れた口だしな。

もっとも、今は、筋肉が一番だな！！

見よ。ドラゴンにも負けぬ、この筋肉！！」

「ギャオ！！」

笑顔のアーサーが一手を鳩尾に回し、背中 of 筋肉を広げて《ラツトスプレッド・フロント》見せつけるのに対抗して、

ドラゴンが大きく息を吸い込んで、胸を膨らませて、羽根を大き

く広げた。

それを見て、竜斗とレイフォンが笑い出す。

「ツンデレ。お前は？」

セラは腕を組んだまま、他の幻獣たちを眺めた。

「ドラゴン商。あっちの天馬は、ベガサスいくら？」

「はい。天馬は稀少種でして、500金貨（5000万円）となっております」

「さすがに高いわね。」

そっちの鳥馬は？
ヒボクリフ

「7金貨（70万円）から10金貨（100万円）と、お買い得です。」

ですが、戦いとなると……」

「使えないってわけね。」

確か、臆病なのよね？

ワイバーンは、地上を走れないし……」

しばらく腕組みして、宙を見つめていたセラは、竜斗を見据える。

「偽勇者」

「おう」

「特訓、覚悟しときなさいよ」

「了解です。師匠！！」

てなわけで、おっちゃん。

この子、買うわ！！」

*

貸し馬を返し、ドラゴンクオランズに馬車を繋ぎ、王都ファーレンへ、帰途に就いていた。

クオランズは、幻獣商が太鼓判を押したとおり、楽々と4人乗り

の馬車を引いている。

ちなみに、クオランズの名前は紆余曲折はあったものの、竜斗の主張通り、『ドラ』に決まった。

今、竜斗はドラの背に跨って、幻獣商からドラの好物だと聞いた黒パンを与えている。

ドラの背に乗ってることが楽しくて、仕様がないらしい。

「よっぽど、気に入ったのねえ」

鼻唄を歌っている竜斗を、セラが呆れた眼で眺めた。

「ウヌ。しかし、これで、今回の金貨は全て無くなったな」

「元は、1000金貨（1億円）でしたっけ……」

「普通の奴なら、それで遊んで暮らすものなのね……」

レイフォンがギュッと、新しい魔法杖を握る。

「でも、わたしたち、これで、かなりレベルアップしたと思いますよ」

「ウム。偽勇者も、攻撃力不足で悩んでおったようだしな」

「あいつって、必要な部分には、本当に惜しみなく金と労力を注ぎ込むのよね。」

人間って、そんな簡単に割り切れるものじゃないでしょ。

本当、こういう生き方をしてきたのかしら？」

＊

王都に近づいた時、ドラに跨る竜斗は、
ベガサス

天馬に跨りながら、片手で白馬を引いている光一に気づいた。

「よう、コウ!!」

「竜斗!!」

「その天馬は、どうしたんだ？」

「密猟者から助けたら、懐かれた」

「はは。そりゃ、また、勇者してんなあ」

光一は、竜斗の跨っているドラゴンを指さす。

「そっちこそ、そのドラゴンは何？」

「勿論。懐かれたから、連れてきたのさ」

竜斗はしれっと答えた。

「そういや。」

「お前、動物に好かれやすかったっけ」

「んゝ。まあな」

二人の会話を聞いていたセラが、ボソツと呟いた。

「……………嘘つけ」

*

0221 勇者の なかま かゝ そろった! (前書き)

今回、人が死ぬ描写が出てきます。

今回から『残酷な描写あり』を付けます。

0221勇者の なかま か、そろった!

今、光一は、独り、森の中にいた。

ここは、精霊騎士のアリエルから、教えてもらった場所である。この森は王都から離れておらず、モンスターもほとんど出ない。一人で考えごとをするには、丁度良い環境だった。

光一は白馬を進めながら、深く思い悩んでいた。

——この手で、人を殺してしまった……。

寝返った領主の討伐での事である。

門の所はオーガが守っていたが、館の中には武装した人間の警備兵がいたのだ。

彼らは説得に耳を貸さず、襲いかかってきたのである。

殺さなければ、殺されていた。

光一は溜息を吐く。

でも、悩んでるのって、俺だけなんだよなあ。

他のみんなは……、シェラも含めて、人を殺したことを何とも思っ
てなさそうだったし……。

ヒヒイイイン!!

馬の鳴き声が響き、光一の横へ、網が掛かった白馬が飛び出して
くる。

「なんだ!?!」

脅えきった白馬の背中には、白い羽根が生えていた。
そこに、網が絡まっている。

光一は馬を降り、天馬ベガサスに近寄った。

とっさに逃げ出そうとする天馬に、光一は呼びかける。
「待ってくれ。」

その網を外そうと思っただけなんだ。

逃げて、それは外れないだろう。

俺を信じてくれ」

逃げ出そうとしていた天馬が足を止める。

しかし、いつでも逃げられる体勢をしていた。

光一は横から、ゆっくりと近づく。

「そうか、お前。俺の言葉がわかるのか」

天馬が頷いた。

光一は天馬の羽根に絡まった網を、丁寧に外し始める。

「おい。こら、坊主。」

人の獲物に何、手え出してんだ」

光一が振り返ると、4人の男が投網や武器を手に、こちらを睨んでいた。

「獲物？」

「そうよ。それは、俺らのところから逃げ出したもんだ。
返してくれよ」

無言の光一の後ろで、天馬が身を縮こめる。

「ほら、返せよ。坊主」

「それとも、盗むつもりか？ 騎士様よ」

「……………嘘だな」

「何だと!!」

「アリエルから、聞いたことがある。

この森に密猟者が出るってな。

お前たちのことか？」

密猟者たちが一斉に刃物を抜いた。

聖剣の柄に手をかけた光一は、グッと歯軋りする。

……また……また、人を殺すことになってしまう……。

「チッ、逃げるぞ!!」

後ろを振り向こうとした光一の真横の木に、弓矢が突き刺さった。

「!!」

クロスボウ

弩を構えた密猟者が、唇を吊り上げて嗤う。

「見られたからには、逃がしやしねえよ。

ここで、死んでもらう」

「くそっ!」

聖剣を抜いた光一に、投網が投げつけられた。

「なっ!？」

「はっ! 騎士相手に、まともに戦うかよ。

そのまま、射殺してやる」

「へえ。良い剣、持ってたな。

死んだ後は、俺が使ってやるよ」

「後ろの馬もな」

網に絡まった光一へ、密猟者たちが笑い声を上げる。

同じだ……。

殺さなければ、殺される。

俺は、——何のために、剣を振る？

何のために————殺す？

その時、光一の真後ろから、天馬の鳴き声が聞こえた。

ッ！！ ——そうだ。俺がここで死んだら、天馬は捕らえられる。

俺がここで死んだら、

魔王は、誰が斃^{たお}すんだ！！

魔王は、勇者である俺の他には、誰にも斃せない。

俺が死んだら、みんな、魔王に殺される。

シエラも、アリエルも、フィーも、ルキア姫も、アレス王子も、
竜斗も……、

——そして、アリアさんも。

ダメだ！ 俺は死ねない！！

守りたい人がいるから、俺は死ねない！！
死んでやるわけにはいかない！！

俺は、大切な人を、この手で守るために剣を振るんだ！！

——俺は、勇者なのだから。

光一は網が絡まったまま聖剣を振り上げ、魔力を流し込んだ。

聖剣が強烈な白い光を発する。

そのまま、クロスボウ弩を構えている密猟者に向けて、振り下ろした。

「うおおおおおおおおおお！！」

光を発した聖剣から、光の奔流が解き放たれ、クロスボウ弩を構えた密猟者を飲み込み、森ごと破壊する。

光が収まった後には、抉れた地面と密猟者の片腕。

他の密猟者たちは、ポカンと口を開けていた。

光一は大きく、聖剣を振る。

ボロボロと、投網の糸屑が身体から落ちた。

「そういや、名乗ってなかったな。」

俺の名は、コウイチ・ヤナギ。

勇者をやっている」

「「なっ!？」」

「さっき、俺に逃がさないと言ったな。
安心しろ。」

俺も、お前たちを絶対に逃がしはしない」

後退る密猟者たちに、聖剣に向けた光一は、凄絶な笑みを見せる。

「ここで、——死んでもらう」

＊

「よう、コウ！！」

天馬に跨りながら、片手で白馬を引いて王都に戻っていた光一は、後ろから呼びかけられた。

振り向くと、馬車を引いているドラゴンと、そのドラゴンに跨る竜斗が片手を振っている。

「竜斗！！」

「その天馬は、どうしたんだ？」

「密猟者から助けたら、懐かれた」

「はは。そりゃ、また、勇者してんなあ」

光一は、竜斗の跨っているドラゴンを指さした。

「そっちこそ、そのドラゴンは？」

「勿論、懐かれたから、連れてきたのさ」

「そういや。」

「お前、動物に好かれやすかったっけ」

「んゝ。まあな」

連れだって王都に戻りながら、光一は、竜斗の跨るドラゴンを見る。

いいなあ、ドラゴン。

俺の天馬と白馬を付けて、トレードして貰えないかなあ。
ペガサス

まあ、やらないけどさ。

「あん？」

「どうかしたか？ コウ」

「え？ いや、楽しそうだなんて思ってたさ」

「楽しそう……か。」

『――苦労もトラブルも恐怖も暴力も悲しみも悲劇も喜劇も道化も、その惨めな人生も、全て楽しんどけ。

てめえ、一人が、辛気くせえ顔してたって事態は好転しねえんだ。
なら、楽しめ！！』

「なに、それ？」

「聞いたときには、暴論だと思ったけど……今、思い出しても、やっぱり暴論だよなあ」

竜斗が何かを見通すように、天空を眺めた。

＊

「リュウト様」

「ん？」

「新しい槍を手に入れられたのですね」

「ん。まあな」

中庭の円卓で、竜斗とお茶をしていたメイドが、立てかけてある魔槍に眼を向けた。

「高価かったでしょう」

「そうでもないさ」

濃紫の髪のマイドは、紅茶に口を付ける。

「ところで、リュウト様」

「あん？」

「何故か、私のところに財務大臣の横領の証拠書類と裏帳簿が送られてきたのですが……、

何か、知っておられますか？」

「いや、さっぱりだ。」

そんな配送間違いってのもあるんだな。

『偶然』ってやつも、良い仕事するじゃないか」

「ええ。世の中、捨てたものではありませんね」

「まったくだ」

竜斗は、紅茶を飲み干した。

「ところで、メイドさん」

「はい？」

「興味本位で訊くが、

その横領の書類は、どうしたんだ？」

「しかるべきところに、提出しておきました」

「しかるべきところ？」

「ええ、宰相と国王と姫様が『偶然』、揃っていらっしゃったところに」

「ああ。それなら、宰相も動かざるえないな」

「そうですね。『偶然』ですが」

「そうだな。『偶然』で、怖いな」

「まったくです」

微笑みを浮かべ、紅茶を飲むメイドと、
笑みを浮かべながら、双眸を細める竜斗。

メイドが紅茶を飲み干し、吐息を吐いた。

「ところで、リュウト様」

「あん？」

「その横領をした財務大臣のところに強盗が入ったこと、ご存知ですか？」

「いや、知らんな。」

「時世には疎いんでね」

「まあ、ご冗談を」

「本当だとしたら、その大臣は踏んだり蹴ったりだな」

「本当に。」

「怖いですね。『偶然』というのは」

「ああ。」

「怖いよな。『偶然』ってやつは」

金の瞳から感情を消したメイドの微笑みに、
黒の瞳から感情を隠した竜斗が笑みを返す。

「ところで、リュウト様」

「あん？」

「もう一杯、紅茶は、いかがですか？」

「ああ、頼もう」

「かしこまりました」

竜斗とメイドは口許に、にこやかな笑みを浮かべて、
二人きりのお茶会を続けた。

＊

0231 勇者は きんか を てにいれた！

「勇者殿」

「えっ……と……？」

王宮で呼び止められ、首を傾げる光一に、隣の青髪青瞳のシェラが囁きかける。

「宰相ですわ。」

コウイチ様」

「え？ 宰相？

す、すいません」

慌てて、頭を下げた光一に、

黒髪をオールバックにし、長身の年若い男性は、片眼鏡モノクルを押し上げて、微笑みかける。

「いえいえ。」

私は影が薄いので。

それに、謝るのは、こちらの方です」

「は？」

宰相は、光一に金貨2枚と銀貨4枚（24万円）を手渡した。

「これは？」

「お恥ずかしいことなのですが、元財務大臣が、勇者殿に払うはずの賃金の上前を跳ねていたのです」

「それって……」

「はい。横領です。」

元財務大臣は、すでに捕縛し、取り調べております」

銀の瞳を細めた宰相は、ちらりとシェラを見、微笑む。

「それで、どなたかにプレゼントでも買ってあげてはいかがでしょう」

「プ、プレゼント!？」

光一よりもシェラが、取り乱したように、慌てふためいた。

光一が顔を上げて、宰相を見つめる。

「でも、宰相さん。

こんなことをしてて、良いんですか？

俺は、すぐにでも魔王軍に反撃をするべきだと思います」

「フム。実は、私もアンデッド城に攻め込むべきだと思っているのですが、

軍が了承をしないのです。

確かに、敵には飛竜部隊もおりますし、

後方を押さえられると、孤立してしまいます。

そこを解決できないかぎり、進軍すべきではないと……」

「そうですか……」

「勇者殿が、焦るのはわかります。

しかし、今は、今の生活を楽しんでおくべきです。

戦争が本格化すれば、軍の先頭に立って、戦うのは勇者殿なので
すから」

「はい。

じゃ、俺たちは、これで失礼します。

そうですね。

プレゼントも、買わなきゃならないし」

そわそわしているシェラを見、光一が悪戯っぽく笑った。

黒髪銀瞳の宰相がモノクルを中指で押さえ、微笑む。

「では。楽しんで来てください」

「はい。ありがとうございます。」

さ、行こう。シェラ」

「は、……はい！」

光一とシェラを見送った宰相へ、空々しい口調の声が投げられる。

「へえ。宰相が、アンデッド城に攻め込むべきだ、と思ってる……
ねえ」

太い柱に背を預けた竜斗と、左腰の剣の鞘口を握っているセラが立っていた。

「これは、勇者殿」

「それじゃ、コウと被るだろうが。」

俺は偽勇者でかまわんよ」

「しかし……」

「さっき、面白いことコウに言ってたな。」

魔王軍への強襲を、軍が反対してる？

軍閥派は積極的とは言いがたいが、反対はしてないはずだぜ」

「……………」

宰相の表情が消える。

「強固に反対してるのは、宰相、あんただろ。」

自分たちの土地を奪い返すため、強攻な進軍を主張している貴族派。

王都を守護しつつ、前線を拡大していく戦略の軍閥派と王族派。
そして、飛竜から王都を守る算段が立つまで進軍を強固に反対している、あんたら宰相派。

違うか？」

宰相の銀の瞳に冷たい光が宿り、モノクルを押し上げた。

「だから、なんです？」

「なんで、あそこまで強固に反対してる？」

たしかに、飛竜は脅威だが、王都も簡単には落とされないだろう。なにせ、占領するには、飛竜の数が圧倒的に足りない」

「私は、それについて、君と話す必要性を感じていないが」

モノクルを冷たく反射させる宰相に、

竜斗は構わず、質問する。

「あんたは、何をそんなに恐れている？」

アンデッド軍か？」

「……まさか」

その返答に、竜斗は天井を見上げ、考える。

「飛竜部隊は、数ゆえに恐れる必要はない。

アンデッド軍も恐れてない。

神殿があるし、神官騎士もいるから、アンデッド死霊王に対しての守り

は盤石。

残るのは、………陸戦王の軍勢か」

「……………」

仮面のような無表情の宰相の顔を、竜斗は見据えた。

「そっか、あんた。王都の防御が固まるまで、時間稼ぎをしてるの

か。

その防御とは…………『運河』だろ」

ピクリと頬を動かす宰相に、竜斗が嗤う。

「戦争やってるこの時期に、あんな運河の工事なんて、おかしいと思ってたんだ。」

あんた、あそこに川を通して、陸上の防御壁にするつもりなんだな」

「え？ 私たちがアルバイトしてた、あの水路って、そんな意味があったの？」

私、てっきり、農業用だと思ってた」

「ツンデレ。思い出してみる。」

それにしては、川幅が広がったし、深かっただろ。

貨物船の運搬用にしては、王都から離れ過ぎてる。

王都を防御するように真横に掘ってたしな。

だから、姫さんも気にかけてて、褒美がどうのこうのと言い出すわけだ」

「勇者……いや、偽勇者……リュウトだったな。」

何が、目的だね？」

「あんたの目的をはっきりしときたかったのさ。」

これで、俺もこの後が予測しやすい」

「どういう意味だ？」

「すぐに大規模な戦いがないとわかれば、

心おきなく自分たちのレベルアップに時間をかけられるってことだよ」

竜斗は大きく伸びをした。

「ツンデレ。明日からは、また冒険者稼業だ。
覚悟しとけよ」

「偽勇者リュウト」

「あん？」

「君は、城攻めを進言しないのだな」

「運河で防御を固めてからにするんだろ？」

別に、意味なく進攻を延ばしてるわけじゃねえから良いと思うぜ。
まあ、状況は刻一刻と変わるから、今後これが最善、とは言えないけどな」

「フム。」

君は、話すのかね？」

「誰にだよ。」

王族派は、すでに知ってんだろ」

「君へ接触し、交渉を始めている商工派に、だよ」

竜斗の鋭い目つきが、凶悪に染まる。

「あんた、今、備蓄を買い貯めてるんだったっけか。」

それは、黙っとくさ。

その他は、知らないがね」

「国家の機密を流すのは、国家反逆罪に問われることを知ってるかね？」

「知ってるさ。」

だが、あんたは何も教えてくれなかった。

俺が自分の予想を、独りで喋っていただけさ。

それとも何か？

あんたの口から、はっきりと教えてくれるのかい？」

飢えた狼のような笑みを見せる竜斗に、
宰相は指で片眼鏡^{モノクル}を押し上げた。

「私の名は、カリウス・キトラ・トルエス・ザウルクス。
偽勇者、リュウト・カミシロ。
君の名を、覚えておこう」

「そりゃ、光栄だ。
カリウス宰相」

＊

0241 偽勇者のまえに　さんそぐか、あらわれた。

「手に入れた武器の性能も見たいしな。

それには、実践に勝るものはない。

てなわけで、冒険者の仕事だ」

「いちいち、説明しなくてもわかってるわよ。偽勇者」

「そうか？」

筋肉、わかってたか？」

「又？　筋力トレーニングのためではなかったのか？」

「ツンデレ。わかってないのがいたようだぞ」

「……ぐっ」

「まあ、説明ってのは相互の認識をすり合わせるためにするもんだからな」

今、竜斗たちは冒険者ギルドの食堂にいた。

テーブルには、ライ麦パンとチーズを盛った皿が置かれている。

「今回はどの依頼を受けるの？」

「これにしようかと思ってるんだが」

竜斗が見せた依頼書は、国が依頼主の、山賊討伐だった。

セラが依頼書を取り上げる。

「ふっふん、山賊討伐か。

あ、救出もなしだから、皆殺しにしているのね」

「ああ。生かしたまま捕らえる依頼は、俺たちの腕じゃ、キツイだろ。

うちのメンバー、全員加減が利かんし」

「まあね。

それに、殺す方が安全だし」

＊

山越えの道を、頭から裾まである、ゆったりとした服を着た商人風の4人が歩いていていた。

フードをかぶった4人が、各々、荷物を担いでいる。

と、その時、先頭を歩いていた人物の足下に弓矢が突き刺さった。

4人が足を止めた瞬間、

周りから山賊たちが飛び出し、取り囲む。

「護衛もつけないで、山越えとは、素人商人か？」

山賊たちから笑い声が上がった。

「授業料だ。荷物を全て置いていきな。
授業料を、命で払いたくなければな」

「ふーん。人は、見たいと思うものしか見ないって、本当ね」
先頭の女がフードを外し、素顔を見せる。

赤近い金色の長髪。

エメラルドよりも尚、明るい緑の瞳。

吊り目で、気の強そうな秀麗な美貌。

山賊たちが、口笛を吹いた。

「訂正だ。その女も置いてけ」

「断る。」

こいつは、俺のだ」

「誰が、あんたのよ!!」

セラの拳を、竜斗が避ける。

「ヌウ。山賊の前で漫才とは余裕があるのう」
「本当に」

セラのぶかぶかの服が宙に舞った。

弓を構えてる山賊に、セラは身を低くして、突進する。

宙へ舞った服に山賊が眼を奪われた一瞬の死角を突き、
懐に入り込んだセラは、炎の魔剣を一閃。

弓を構えている山賊の首を跳ね飛ばし、
周りの山賊を、炎で薙ぎ払った。

「「「ぐあ!!」」」

山賊がセラに気を取られている隙に、
竜斗とレイフォンが担いでいた大袋から魔槍と魔法杖を取り出し、
偽装のための服を脱ぎ捨てた。

4人とも、服の下には、いつもの鎧を身につけている。
「て、てめえら、冒険者か!?!」

「お前らに恨みはないが、これも依頼なんぞな。
大人しく、刀の錆となれ」

「それ、勇者の発言じゃないと思います」

「偽勇者なんぞな」

「死ね！！」

森の中から飛んできた6本の弓矢を、
レイフォンが魔法杖に魔力を流し、シールドを展開して、全て防いだ。

「偽勇者、私は飛び道具を持ってる奴を片づけてくるわ」
「任せた」

セラが森の中へ走って行く。

「内気、自分の身は守れるな」

「はい！」

「筋肉。内気のサポートは、俺がやる。
攻撃は任せる」

「ウヌ！！」

その時、山賊の一人が呼び笛を鳴らした。
山全体に、笛の音が響く。

「どうします。」

仲間を呼ばれてしまいましたよ」

「好都合だ。」

探す手間が省ける。

どっちみち、皆殺しだったからな」

「は、……はあ」

「死ねやあああ！！」

鉦を振り上げて襲ってきた山賊へ、
竜斗は魔槍に魔力を流し込み、雷を放った。

轟音と閃光が炸裂し――、
止んだ後には、煙を上げている黒焦げの死体。

後退る山賊たちを見、竜斗は唇の端で笑んだ。

「人間なら、一撃必殺か。
良い買い物したぜ」

ゴキヤー!!

アーサーの一撃に、山賊が吹き飛び、樹に叩きつけられた。
首が変な方向に曲がっており、即死だろう。

「あああああああ!!」

山賊の一人が、ロングソードでアーサーを背中から切りつけた。
異音が鳴り、革鎧に傷が付くが、それだけである。
肉体に付いた僅かな掠り傷は、すぐに塞がった。

「な……なんだよ!? こいつ!!」

「ウム。筋肉の思し召しだ」

「」「絶対に嘘だ!!」」「」

「又ウッ!？」

森の奥からやってきた増援を、セラは片っ端から斬っていく。

左手の氷の魔剣が、凍り付かせて足止めし、右手の炎の魔剣が山賊を斬り裂いた。

たとえば、刃を避けられたとしても、剣をまとう炎が相手を焼き払う。

苦痛に呻いた山賊に、白刃が振り下ろされた。

山賊たちは、凍り付き、焼かれ、斬られて、屠られる。

竜斗が放った雷が木に当たり、樹皮が弾け跳んだ。

痺れ薬でも買っておくべきだったぜ。

鈍遅の魔術が当たった山賊の動きが、途端に遅くなる。

血飛沫が舞い上がり、山賊が事切れる。

「クツ！」

「はっ！ 良く受けた！」

押し返して、距離を取った竜斗が魔槍を掲げる。

「え？……うおわっ！！」

「偽勇者さん。」

「内気。そうだったとしても、口に出して言って欲しくなかったかな」

「あっ!! ……ご、ごめんなさい」

「ハッ! やっと、魔力切れかよ」

山賊が振り下ろしたブロードソードを、

槍で逸らした竜斗は槍の石突を跳ね上げる。

石突が頬を掠るのも構わず、山賊がブロードソードを突き出した。

竜斗はとっさに後ろに飛び退さるが、一瞬遅く、鎧を強打される。

「がっ!」

前かがみの竜斗へ、一步踏み込んだ山賊が、ブロードソードを一閃。

キンッ!!

竜斗の首が飛ぶ寸前で、レイフォンの魔法杖のシールドが刃を防いだ。

竜斗が大きく後ろに飛び退さり、距離を取った。

「……ケホッ」

鉄の胸鎧を貫通はしなかったものの、痛みが走る。

——ヤベエ。向こうの方が場慣れしてやがる。

「運が良いな。小僧。」

そっちの小娘に感謝しとけよ。

生き延びる時間が、1分延びたってな」

「勿論、感謝するさ。」

おかげで、お前をぶち殺せたってな」

——長引かせると、こっちが不利だ。
ならば——、

竜斗は、槍を横薙ぎに一閃。

避けた山賊へ、槍を下から斬り上げる。

ブロードソードで防がれた瞬間に、槍を回して、石突で打突。

革鎧に当たり、たたらを踏む山賊に、

竜斗は、腰のナイフを投げつけた。

「ちっ!!」

顔面に飛んできた大型ナイフをギリギリで躲し、体勢が崩れた山賊へ、竜斗が叫ぶ。

「今だ!! 筋肉!!」

「なにいつ!?!」

山賊が後ろを振り向いたところを、竜斗は背中から、槍を突き刺した。

「グフッ……て……てめえ……」

「おいおい、こんな単純な罠に引っかかるなよ」

向こうで戦うアーサーは、数人の山賊たち相手に手一杯である。

槍を引き抜いた竜斗は、槍を横薙ぎ、一刀。

山賊の首を跳ね飛ばした。

首元から血を吹き上げ、倒れた山賊を一瞥した竜斗は、周りの山賊に眼を向ける。

「次、来やがれ！」

「お、お頭が殺られた!!」

「え？　今の、そうだったの？」

「逃げろ!!」

「撤退だ!!」

「洞窟に、立てこもれ!!」

山賊たちは一斉に逃げ出した。

後を追おうとするセラを、竜斗が止める。

「ツンデレ。深追いするな。」

戻ってこい!!」

「何でよ!!」

逃げられちゃうでしょ」

「逃がすつもりはねえよ。」

言っただろ。皆殺しだって」

「?　……ああ、なるほど」

竜斗の考えを理解したセラは、素直に引き返した。
セラも、まだ死にたくない。

「ツンデレ。山賊たちは、どっちの方向に逃げた？」

「一番多いのは、あの斜面を登っていった連中よ」

「了解。」

ちよっと、静かにしてくれ。

《聞き耳》」

竜斗は、小さな音を拾う魔術をかけ、耳を澄ます。

3分程、音を聞いていた竜斗は、眼を開けた。

「内気、あの山の中腹を狙って、魔術をぶっ放せ。できる限り、炎系と衝撃系を多用しろ」

「はい」

レイフォンが魔法杖を構えて、幾つもの魔法陣を展開する。そこから、後は、ただひたすら破壊だった。

レイフォンの哄笑とともに、

木々が宙を飛び、土が抉れ、炎が舞い上がり、衝撃波が何もかも吹っ飛ばす。

時間を計っていた竜斗が、レイフォンの肩を叩いて止めさせた時には、

山の中腹の木々は全て吹っ飛び、地肌を晒し、直径20メートルの大穴が幾つも穿たれていた。

仮に、隠れ家の洞窟があったとしても、間違いなく潰れ、中の者は生き埋めだろう。

「内気。残存魔力は？」

「3割程度です」

「だいぶ、慣れてきたな」

「はい！！」

「さてと……これだけやっとけば、任務成功でいいんじゃない？」

こいつの首を持ってけば、証拠になるし」

「ちよっと、やりすぎのような気もするけどね」

「ウヌ、相変わらず筋肉がピクつく威力であるな」

「それじゃあ、帰りましょう」

「ウヌ」

「そうですね」

「偽勇者？」

木々が吹っ飛び、地肌を晒してる山の斜面を眺めている竜斗に、セラが気づいた。

「どうしたの？」

「ん？ ああ。」

人の死や、死体はイヤになるほど見てきたけど……、
この手で、人を殺したのは……初めてでさ」
「で？」

竜斗は頭を掻く。

「いや。それがさ、何とも思わないんだよな。うん。

罪悪感とか、人殺しちまったとか、苦悩するかと思ったんだが……。

自分が死ななくて良かった……ぐらいしか思わん」

セラが赤に近い金髪を揺らして、小首を傾げた。

「？　それが、なに？」

「普通でしょ？」

「あー、うん。そうだよな。

こっちの世界じゃ、それが『普通』だったな」

＊

0251 偽勇者のまえに こ、ぶ、りん か、あらわれた。

「見えるだけで、50匹は居そうだな」

竜斗たちの眼下には、50匹以上のゴブリンたちがいる。

山賊討伐を達成した次の日、竜斗たちは新たな依頼を受けていた。山賊討伐で、パーティーレベルがEからDランクに上がったため、勢いで今日も冒険者の仕事を受けたのである。

今回も、国が依頼主の妖魔^{モンスター}属のゴブリン駆除だった。

国内での定期的なモンスター討伐は、軍の重要な仕事であり、訓練でもあるのだが、

魔王軍と戦争をしている今、そこまでの人的余裕はない。

さらに、冒険者ギルドに委託した方が安上がりという話もあり、国内のモンスター討伐は、冒険者たちに丸投げ状態だった。

その中でも、ゴブリンやコボルトは、放っておくと幾らでも増えていき、

食料を得るために、近隣の村を襲うので、定期的な駆除がかかせない。

「……モンスター愛護協会もないしな」

「何か言った？ 偽勇者」

「いんや、ただの独り言」

「それにしても、さすが、ランクDの仕事ね。数が半端ないわ」

「洞窟の中には、あとどれくらい、いるんでしょうか？」

「ウヌ。ゴブリンは、見かけた数の3倍はいる、と言う話だからな」
「最低、150匹でしようか？」

「それぐらいで、考えておいた方が良くないじゃない。」
「いや、レイは、後方で待機ね」

「いや、内気も一緒だ。
これから先の戦闘で、内気を安全な場所に配置できない可能性が高い。」

「シールドの魔法杖も手に入れたことだし、陣形に組み込む。
て言うか、遊ばせておける程、俺らに余裕はない」

「あの……わたしの魔術で全滅させてはいけませんか？」

「それじゃ、俺らの訓練にならないし、今回の依頼は限定駆除だからな。」

「魔王軍の魔物料のゴブリンなら、全滅させるけど」

「は……はあ……」

「俺が真ん中で、左をツンデレ。右を筋肉。」

「内気は後方で、シールドによるサポート」

「ウヌ！」

「はい」

「了解。」

「偽勇者。今日は、昨日みたいに魔槍に頼りすぎて、魔力を切らさないことね」

「努力する」

＊

竜斗は槍を振り下ろし、ゴブリンを斬り殺す。

ゴブリンが赤い血を吹き出しながら、悲鳴を上げた。

死んだゴブリンの悲鳴に気づき、洞窟前にいたゴブリンが一斉にこちらを見て、

「「ギイイイイイイイイイ！！」」

同時に、警戒音を吼えた。

雌と子供のゴブリンは、洞窟の中に逃げ込み、洞窟から屈強な雄ゴブリンが湧き出てくる。

身長は1メートル前後。手にはナイフや木製の棍棒で武装し、ロボロの厚手の布を着ていた。

緑色の皮膚はオーガほどではないが、厚い皮膚を持っている。

武器を持っていれば、一般人でも戦えるが、問題は、その数だった。

ゴブリンは必ず集団で行動し、まさに見かけた数の3倍以上いると思った方がよい。

初級冒険者も取り囲まれて、磨り潰されるように殺されることが多かった。

多数の雄ゴブリンが、陣を組む竜斗たちを半円状に取り囲む。

「お前らに恨みはないが、これも依頼だ。

諦めて、死んでくれ」

「それ、勇者の言葉じゃないわよ」

「偽勇者なんでね」

ゴブリンたちが吼え、一斉に襲いかかってきた。

アーサーがメイスで、ゴブリンを数匹まとめて薙ぎ払う。

セラが2本の細剣で、炎と氷を舞い散らせながら、次々と葬っていった。

ナイフを下から突き上げて来たゴブリンの胸を、竜斗が槍の石突で打突し、蹠跟めいたところを斬り裂く。

振り下ろされた棍棒を躲し、槍を斬り上げて、ゴブリンの首を跳ね飛ばした。

「ギイイイイイイ！！」

槍を大きく振りすぎ、体勢を崩した竜斗へ、ゴブリンが腰溜めにナイフを構えて、突進して来る。

「チッ！」

舌打ちした竜斗が魔槍に魔力を通すより早く、セラの双剣が、突撃するゴブリンの首と足を斬り裂いた。

「すまん。助かった」

礼を言う竜斗に、セラがフフン、と笑う。

「まだまだね、偽勇者」

「善処する」

「ま、……まあ、初めの頃に比べたら、格段に上達してるわよ」

「そうか？」

「師匠が良いからよ。」

「感謝しなさいよね」

「勿論、感謝してるぞ。ツンデレ。」

抱き締めて、キスしたいぐらいだ！！」

竜斗の言葉に、セラの顔がボツ！と赤くなり、狼狽え始めた。

「な、ななな何、言ってるによよ。」

キ、キスにゃんて……キ、キス……キス……キス……キス……キス……

…」

「セラさん、戦ってくださいーい！！
戦闘中に、手を止めちゃダメーい！！」

レイフォンが、セラに襲いかかった3匹のゴブリンの前に、魔法杖のシールドを張って、妨害する。

レイフォンのシールドにぶつかった3匹のゴブリンを、

竜斗が魔槍の雷で焼き払った。

「おい。ツンデレ、戻ってこい！」

「ふえ？」

目の前の爆音と閃光に、

キョトンとした表情で、眼を瞬かせていたセラの顔が徐々に赤くなり、

「あ、あんたが変なこと言うからでしょ！！」

竜斗に怒鳴り返した。

「ギイイイイイ！！」

隙ありと襲ってくるゴブリンを見、

セラは唇を尖らせながらも、数匹まとめて、氷の細剣で凍り付け、

次の瞬間、炎の細剣で焼き払う。

竜斗は、ゴブリンの胸を槍で突き刺し、刺殺したゴブリンを蹴って、槍を引き抜いた。

それを見、セラが呆れたように笑う。

「戦い方が、荒いわねえ」

「悪かったな。お前のように、流れるようになって戦えねえよ。こっちは生き残るだけで、精一杯だ」

「sonだけ、口が回れば十分に余裕の範囲よ」

セラは右手の剣でゴブリンの首を跳ね、左手の剣で隣のゴブリンの右腕を斬り裂いた。

「偽勇者」

「ん？」

「さっき、私を助けたなんて、思わないことね。元は、あなたのせいなんだからね！」

「へいへい」

セラが頬染め、竜斗の顔を見ずに、口を開く。

「で、……でも、お礼は言っとくわ。

……その……あ、ありがとう……」

セラの感謝に、竜斗はニツと笑った。

「ツンデレ。お礼は、キスで良いぞ!!」

「キ、キキキスって……ダメ……で、でもお礼なら……だって……でも……そんなに……」

再び、セラが赤い顔で、挙動不審に陥る。

「だから、セラさん!!」

固まっちゃ、ダメです……!!

偽勇者さんも、戦闘中にセラさんで遊ばないでくださ……い!!」

「ヌウ。二人とも、そういうのは、戦いが終わってからにするべきだぞ。」

ワシの筋肉を見て、今は戦闘に集中せい!!」

左腕で力こぶを作ったアーサーが、右手でメイスをぶん回し、4匹まとめてゴブリンを叩き潰した。

「……………私、悪くないもん」

「遊びじゃなくて、本気^{マジ}なんだがなあ」

竜斗がゴブリンの棍棒を槍で受け止め、

セラが横から首を斬り落とした。

セラが氷の魔剣で、ゴブリンの足を凍らせ、

竜斗が動けないゴブリンの腹に槍を突き刺す。

槍を抜きざま、柄でゴブリンを殴打、

たたらを踏んだゴブリンをセラが炎の魔剣で焼き払った。

セラと竜斗は文句を言いながらも、見事な連携で、ゴブリンを屠っていく。

日頃から、互いに訓練しているため、ぴたりと呼吸が合っていた。

「ヌウ。戦いの最中にようやるわい」

「でも、ちょっと羨ましいです……」

アーサーが呆れ、レイフォンが羨望の眼差しで二人を眺める。

竜斗とセラが痴話喧嘩をしているうちに、

アーサーとレイフォンの活躍で、ゴブリンの数はかなり減っていた。

勝てないと悟ったのか、一匹のゴブリンが洞窟に逃げ出す。途端に、全てのゴブリンが洞窟へ、我先に逃げ始めた。

「あゝあ、洞窟内に立て簞もっちゃったわよ。
どうするの？ 偽勇者。」

また、レイの魔術で洞窟ごとぶっ潰す？」

「いや。ここで終わり。」

初めにも言ったけど、依頼の内容は限定駆除であって、全滅じゃない」

「なんで？」

「全滅させちまったら、ここいらの生態系が狂っちゃうからな。
だから、適当な数だけ減らしたら、それで終了。」

また増えすぎたら、別の冒険者か、軍が駆除を行うだろうさ」

竜斗が洞窟を眺め、眼を眇める。

「増えれば増えた分だけ減らされるって、ちと、惨いけどな」

「なんで？ モンスターを狩って、何が惨いの？」

「ウム。モンスターは斃すべきものである」

「そうですよ。」

放っとけば、近隣の村に被害がおよぶんですから」

3人の返答を聞いて、竜斗は頭を掻いた。

「そこらへん、この世界は徹底してるよな。」

元の世界で言やあ、ゴキブリやドブネズミなんかを助けるのと同じような感覚か」

竜斗は腰元から、ナイフを抜刀する。

「ま、答えの出ない問いは置いといて、依頼を完遂させますか。
確か、ゴブリンの討伐証明は右耳だったよな。」

ツンデレは、俺と右耳切り。

筋肉と内気は、俺たちの護衛。

洞窟からの奇襲に気をつけろよ」

「ムウ」

「はい」

「手早く終わらせて、さっさと帰りましょ。」

私、今日は疲れたわ」

双剣を鞘に納めたセラは、溜息を吐きながらナイフを抜いた。

＊

0261勇者は れへ、る か、あか、った！

訓練所に、木刀の打ち合う音が響く。

光一と刀を合わせるのは、深海の色のような蒼い髪に、炎のような紅の瞳の青年騎士だった。

名前は、アレス・エルドストック・オル・サリウス・フアーレン。この国の王子である。

光一が振り下ろした木刀を、アレス王子が紙一重で躲し、木剣を切り上げた。バックステップで避けた光一が喉元に、突きを放つ。木剣で打ち落としたアレス王子は一步踏み込み、袈裟斬り。

光一は木刀で受けると、身体をずらして木剣を外に弾き、面を打ち込んだ。

アレス王子が木剣で防ぐのを見た光一は、素早く手首を返して、胴を薙ぐ。

鈍い音がして、アレス王子が膝をついた。

「勝負あり！！」

審判をしていた聖騎士のエリアが片手を上げた。

残心を解いた光一が、アレスに近寄る。

「大丈夫ですか？ 王子」

「はは。なんとか」

自分で治癒の魔術をかけながら、アレスが立ち上がった。

「強くなったね。コウイチ」

「師匠が良いもので」

審判役のエリアを見、アレスが笑う。

「確かに。」

それにしても、コウイチには本当に感謝してるよ」

「何がですか？」

「兵士や騎士は僕の身分に遠慮して本気を出してくれないし、手加減無しのルキアや、ルキアの護衛のメイドは強すぎて、訓練相手にならない。」

コウイチが来てくれて本当に助かってるよ」

「いえ、俺も助かってます。」

やっぱり、互いに努力するライバルがいると練習にも気合いが入りますからね」

「ははは。君には、かなわないなあ」

「私から見れば、お二人ともまだまだです。」

アレス王子は足を止めて、正面から打ち合うことに拘りすぎです。打ち合うだけが、剣術ではありません。

コウイチ殿は敵の攻撃を刃を寝かせて受けてはならない、と何度も言っているはずです。

木刀なら受けられますが、相手が重い鉄剣だった場合、今の受け方をしたら確実に手首を壊します。

必ず刃を立て、全身で攻撃を受けてください。

勿論、避けられるならば避けること。

いいですか？」

「「はい」」

右手の人差し指を立て、左手を腰に当てて注意点を述べるエリア

に、

アレスと光一は返事をしてから、顔を見合わせて、苦笑した。

「……何を笑っているのですか、お二人とも」

「「すいません」」

二人は息をぴったりと合わせて謝る。

「さて、アリアさん。アレス王子。

訓練も終わったことだし、食事でも行きますか？」

アレスはちらりとアリアを見てから、片手を振った。

「いやいや、僕は二人の邪魔をする気はないよ。

コウイチとアリア君のお二人でどうぞ」

「え？ ……ふ……二人で……二人で食事……二人きりで……」

途端に、オロオロと戸惑い始めるアリア。

「コウイチ様……！！」

大きく手を振りながら、駆け寄って来る青い髪のアリエラと、その後ろに付いてくるピンクの髪のアリエル。

「コウイチ様。

午前中の訓練も終わりましたでしょう。

お昼にしませんか？」

光一の袖を引くシエラに、アリエルも赤い瞳を輝かせる。

「今日は、フィーさんが仁の国の料理を作ってくれたんですよ。

初めて見る料理ばかりです。

私、感激しました！！」

「あ……ああ。

アリアさん、行こうか」

「……で、でも私は……」

「ほら、早く!!」

アリアの手首を掴んだ光一は、シェラたちと歩き始めた。

手首を握られているアリアを見、ムツとした顔になったシェラは、光一の反対側の手を握る。

「シェラ？」

「さっ、早く行きましょう。コウイチ様」

シェラに手を引かれ、アリアの手首を引きながら庭園に向かう光一たちを見送り、

アレスが蒼い髪を掻き上げた。

「やれやれ。コウイチも大変だなあ。」

もしかしたら、魔王を斃すよりも大変かも」

＊

「冒険者になりたいじゃと？」

王宮の庭園を見渡せる、いつもの集合場所の東屋で、仁の国の料理に舌包みを打ったあと、

食後の緑茶を飲みながら、光一は、かねてから考えていたことを皆に提案した。

「やっぱり強くなるためには、冒険者が一番だと思うんだ」

「コウイチ殿。私は反対です。」

冒険者になる意味がありません」

アリアがフィーから煎れてもらったジャスミン茶を飲みながら、反対する。

「え？　なんで？」

強くなるには……」

「コウイチ殿。私たちは冒険者などにならなくても、十分に強いですよ」

「そうじゃな。アリアを筆頭に、皆、各部門のトップクラスじゃからの。」

この中で一番弱いのがコーイチじゃ」

「そのコウイチ殿も今は、基礎をしつかりと身につける時期です。冒険者などしている暇はありません」

「そうですわ。」

冒険者なんて、社会不適合者の集まりです。

そんな野蛮なものにならなくても、コウイチ様は十分に強くなれますわ」

「……でも、連携攻撃とかは？」

「大丈夫ですよ。コウイチさん。」

私たちは各騎士団や魔術師と連携して魔王軍と戦ってましたから、互いの戦い方や癖は知ってます」

シェラに紅茶を煎れたアリエルが椅子に座った。

「それにな、コーイチ。」

我らが冒険者になったら、間違いなくランクAかSになれるじゃろう。

だが、それはランクAやSの報酬の高い仕事を奪ってしまうことになるじゃろうが。

我らは、国から俸禄ほうりょくを貰っておるが、冒険者たちはそれで生活しておるのじゃ」

焙じ茶を飲みながら反論するフィーに、

コーヒーを飲みながらアリエルも首肯する。

「私たち、お金、いっぱい貰ってますもんねえ」

皆の反論に、肩を落とす光一。

「そうかあ……。」

でも、せっかく異世界に来たんだ。

モンスターとも戦ってみたいんだよなあ」

「ふむ。なら、ルキアに話して、軍のモンスター討伐の仕事を回してもらおうかの。」

何か希望はあるかや？」

「そうだなあ。」

できたら、ドラゴンと戦ってみたい」

「ふふ、やはり男子おのこじゃのう。」

ルキアとメイドには伝えておこう」

「ありがとう。フィー」

＊

「宰相」

「これは戦闘指揮官殿」

茶金色の癖毛の戦闘指揮官と、

黒髪をオールバックにし、片眼鏡モノクルをかけた宰相が、城の廊下で行き合った。

「相変わらず、忙しそうだな。」

宰相」

「ええ。問題が山積みでして」

「こちらは、暇を持て余してるよ」

「羨ましい限りです」

「どなたかが背中を押してくれれば、こちらも忙しくなれるんだが

ね。

我々も自らの仕事をしたいものだ」

「国防の際には、それはもう」

「私は守るよりも攻める方が得意なのだがね」

「それは時期尚早だと思いますが」

「いったい、何の時期が尚早なんだね。」

飛竜では王都を占領できまい」

「ですが、被害は出ます。」

その被害を最少に押さえるためにも、

私は宰相という、身に余る役目を仰せつかっておりますので」

二人の間に無言が張り詰め、

戦闘指令官の青い眼と、宰相の銀の眼が睨み合う。

「おや。そろそろ、時間ですな。」

戦闘指揮官殿。

もう少し、話していたかったです、私はこれで」

「ああ、忙しいところを引き留めて悪かったな。宰相」

「いいえ」

立ち去る宰相を見送った戦闘指揮官が、クシャッと癖毛をかき乱した。

「どうでしたか？ ロバート」

宰相の姿が消えてから、廊下の角から姿を現した赤い髪の女騎士^{フレイム}に、

戦闘指揮官は首を振る。

「ダメだ。フレイム。」

いくら、押そうが引こうが本音を開かそうとしない。

だが、一つだけ聞けたことがある」

「それは？」

「時期尚早と言っていた。

何かを待ってるようだ」

「他国からの援軍でしようか？」

「それはない。

他国に隙を見せるほど、甘い男じゃない」

「他に考えられるのは……季節……」

「しかし、冬になれば、雪に閉ざされて苦勞するのは我々の方だ」

「他には思いつきません。

調べてみますか？」

「そうだな」

「戦闘指揮官!!」

廊下に反響するほどの大声が響いた。

「大將軍閣下」

頭を下げるロバートとフレイムに、

大將軍のレッツが小鼻を膨らませ、叱咤する。

「あの宰相めは、まだ反撃すると言わんのか!!」

「言いません」

「何をしている？」

あんな若造、さっさと言うことを聞かせれば良からう!!」

「では、今、別れたばかりなので、追いかければ、すぐに追いつけますよ。

どうぞ、閣下ご自身で言い聞かせてください」

右掌で廊下を奥を指し示すロバートに、レッツが狼狽える。

「な、何を言う!？」

交渉は部下のお前の仕事だろう」

「私では無理ですね。

権限がありませんので。

せめて、軍事トップぐらいの地位でないと。

なんなら、宰相と閣下の会議の場を設定いたしましょうか？」

「や、やめろ！！」

絶対にするな！！」

レッツが取り乱したように、大声を張り上げた。

「御意」

頭を下げるロバートに、

レッツが取り繕うように鼻を鳴らす。

「フ、フン。お前たちが勝手に反撃をすればいいのだ。

戦いが始まってしまえば、あの若造も何も言えんだろう」

ロバートとフレイムの眼光が、飢えた狼のように底光りした。

「それは、ご命令ですか？」

「なに？」

「勝手に動いても良いという、命令ですか？」

猛獣が鎖を引き千切るような殺気を放ち始める戦闘指揮官とフレ

イム騎士団長に、

レッツが慌てて否定する。

「な、ななな、何を言う！

バカなことを言うな。

そんなわけないだろう！！」

言い捨てて、逃げ去るレッツを見、フレイムが溜息を吐く。

「まだ、あのボンクラ貴族どもを、上に仰がなければならぬのですか？」

「仰ぐ必要はない。

だが、煽っておけ。

戦場で、奴らは重要な『囚』と『壁』役だ。

あいつら貴族騎士の尊い犠^{いけにえ}牲のおかげで、俺たちは生き延びられるのだからな」

「了解しました」

＊

027 偽勇者は ふきを てにいれた!

「いよう。店主」

「やあ。偽勇者君」

晴れた日の昼下がり、竜斗は情報屋兼雑貨屋に顔を出していた。

「何か、面白い物は入った？」

「エロ系でも、癒し系でも良いぞ」

「あ、今日はそっちの客なんだ」

「俺もそう毎日、暗躍なんてしてらんねえよ」

「君なら、やってそうだけどね」

「焦っても、魔王は斃^{たお}せないしな。

で、何かある？」

「うーん、そうだね。」

「クオランスを仲間にしたって、言ってたよね？」

「おう。」

「うちのドラは世界一、可愛いぞ」

「じゃ、これなんかどう？」

オレンジの髪の店主が、掌サイズのクオラン^{ドラゴン}ス人形を見せる。

「おおうつ！ ド、ドラそっくり！？」

「前に買っていったキツネと同じシリーズだよ。」

忍^{しのぶ}の職人が作っただけあって、

眼には精霊石の欠片を使い、

魔力を通すと羽根を動かす高性能ぶり」

「おおおっ！！」

手のひらに乗せたミニチュア・ドラが羽根を動かすのを見て、緩んだ顔の竜斗が歓声を上げた。

「只今、セール中で銅貨13枚（1300円）のところを、銅貨10枚（1000円）ぽっきり!!」

「勿論、買った!!」

「勿論なんだ」

銅貨をカウンターに置いた竜斗は、手のひらのミニ・ドラに頬擦りする。

「いやゝ。もうっ、可愛い!!」

時代は、一家に一匹……いや、一人に一匹のドラだな!」

「それは、どうかと思うけど……」

竜斗はミニ・ドラが傷付かないように、そっとバックパックの奥に仕舞った。

「他に、面白いもんはないか?」

「そうだねえ。少し、値段が張るけど……」

そう言って、店主がケースから取り出したのは、バカでっかい『フォーク』。

「……なに、これ?」

「槍」

「……………は?」

「だから、フォーク型の槍。

んゝ。四つ又……いや、やっぱりフォーク型の槍だね」

長さ2メートル。柄の部分は途中から円柱になり、掴みやすくな

っていた。

フォークの先端は鋭く研がれ、左右の刃は両側に刃筋を立てている。

その他はフォークの形そのものだった。

「おまけで、ミニチュアのフォーク型槍もつくよ。

こっちは、刃が潰してあるけどね」

「つまり、普通のフォークじゃねえか」

「お買い得特価、銀貨1枚（1万円）」

「買った!!」

「買ったちゃうんだ!」

銀貨を置く竜斗に、心底驚く店主。

「いや、だってなあ。

この見事な曲線、もうフォークにしか見えない。

それでいて、刃先はしっかりと研いであって、素材も良いし、強度もしっかりしてる。職人技だぞ。

こんな馬鹿なものを、本気で作る奴。惚れそうだぜ」

眼を輝かせて、フォーク槍を検分する竜斗。

竜斗はフォーク槍を掲げて、店の中心で叫ぶ。

「面白いもんが、ダイツスキダー!!」

フォーク槍に太陽の光を反射させた竜斗を見、店主が吹き出した。

「はははは。

魔王の前で、聖剣を構えてる勇者の隣で、

偽勇者君が、そのフォーク槍を掲げている姿を想像しちゃったよ」

「くっくくく。止めてくれよ。」

フォーク槍を突き上げてる俺の後ろで、

ツンデレがスプーンの剣、

筋肉がレンゲのハンマー、

内気がトングの魔法杖を掲げてる姿を想像しちまっただろうが」

「ものすつごく、食べる気満々です。って絵面だね」

「魔王も困るだろうなあ。

お前を斃す！　って気合い満々なコウたちの隣で、満面の笑みを浮かべた俺たちが、フォーク槍とスプーン剣とレンゲハンマーとトング杖を掲げてたら」

「食われる！？」

「美味しく、いただきます」

「そして、魔王は食材に――」

「魔王よ。永遠なれ……俺らの栄養として」

竜斗と店主は、二人して弾けるように笑い出した。

「そんなに気に入ったのなら、それを作った人の他の武器もあるんだけど」

「おっ、見せろ見せろ」

店主は、カウンターの後ろから棒状の物を取り出す。

「はい。これ」

「ッ！？」

「魔力の固まりを撃ち出す筒型弩。^{いしゆみ}」

作った鍛冶屋は『ライフル』とか呼んでたけどね」

竜斗は魔力弾射出式筒型弩ライフルを手にとった。

ロングバレルがあり、引き金があり、銃座がある。

少し形が変わっているが、それは元の世界の『ショットガン』の形に良く似ていた。

店長は、驚愕している竜斗に気づかず、魔力弾射出式筒型弩ライフルの説明をする。

「実はそれ、失敗作なんだよねえ。

魔力も溜められるし、魔力弾も前に飛ぶんけど、狙いが安定しなくてねえ。

武器としては使えないけど、良質の精霊石を使ってるから、金貨1枚（10万円）かな」

「買った」

「え！？ ……本当に買うの？」

金貨をカウンターに置いた竜斗は、身を乗り出した。

「ああ。

その代わり、サービスでこいつを作った奴の名前と工房を教えろ」

＊

「ウィズって人、いる？」

竜斗はラグリット魔法工房に来ていた。

場所は王都から20キロ程度離れた小さな町。

竜斗、一人が背に乗ったドラが飛んで20分程度である。

「ああ、ちょっと待ってな。

おい！ 下っ端、お呼びだぜ！！」

ゴツい男が奥へ呼びかけると、一人の少年が出てきた。

明るい茶色の髪に、灰色の瞳。

背はセラよりも低く、

顔は少女に間違えそうな童顔である。

——なんか、小さい犬のような奴だな。

竜斗がそんな第一印象を思い浮かべると、少年は、竜斗の魔槍に吸い寄せられていた。

「す……すごい。

ラザイット魔法工房のザンツ作製の魔槍じゃないですか！？
う、うわゝゝ、見せてもらってもいいですか？」

「その前に、お前がウィズか？」

「え？ ああ！

し、失礼しました。

はい。僕が、ウィズ・クリフトです。

あなたは？」

「上白竜斗だ。

お前に聞きたいことがあって、王都から来た」

「な、なんでしょうか？」

「これ、作ったのお前か？」

「竜斗は魔力弾射出式筒型弩をウィズに見せる。」

「は、はい。」

僕が作ったものです。

ちゃんと使われてたんだ!!

あの、どうでしたか？」

「まったく、使えん」

「ええっ!？」

「魔力弾がUの字に曲がって、後ろに飛んで行った」

「新機能付いてる!？」

「嘘だけど」

「嘘!？」

竜斗が手刀を切って謝った。

「いや、すまん。すまん。」

俺もわざわざ嘘をつくために、ここまで来るほど暇じゃない」
「そ、そうですよね……」

「本当は、からかいに来たんだ」

「同じだー!？」

竜斗が片手で目頭を覆う。

「クッ。お前のツツコミが的確すぎて、話が全く進まねえよ」

「悪いの僕ですか？　僕が悪いんですか!？」

「まあ。そろそろ、本題に入らせろや。」

ツツコミ」

「変なアダ名キターー!?」

「で、ツツコミ。このライフルなんだけどな」

「そのアダ名は、確定なんですか？」

「何発か撃ってみたんだが、やっぱり弾道が安定しないんだわ」

「スルーですか……」。

あ、いえ。ライフルですよ。

実は、その改良バージョンがあるんです」

「へえ。見せてくれ」

「はい」

ウィズが竜斗の持つてるライフルよりも、銃身が1.5倍長くな
った魔力弾射出式筒型弩を持ってきた。

「これが改良型の『ライフル』です」

「さらに銃身を長くしたのか」

「はい」

「精度は？」

「その……多少ましになった程度で、実践では使えないと思います
……」

「見せてもらってもいいか？」

「あ、はい」

竜斗は魔力弾射出式筒型弩を取り上げると一旦、構えてから、
次に『ライフル』の銃口の中を覗く。

「ライフリングは無いのか？」

「ライフリング？」

「ライフルの語源となった物さ。」

弾丸を回転させて、弾道を安定させるために、銃身内に刻む螺旋状の溝のことだ。

今、言ったのは鉄の弾丸の場合だがな」

「あの……リュウトさんて、南の大陸の出身なんですか？」

「あん？」

「いえ、この『ライフル』って、南の大陸の本から取った名前なんです。」

その本には、ライフルは鉄の弾を飛ばすと書いてあったので、それから取って、

僕は魔力弾を飛ばすこの魔力弾式弩を、『ライフル』と名付けたんです」

「南の大陸の本？」

「はい。その大陸からは、不思議な話が色々伝わってるんです。たとえば――」

「いや。その話は、別の機会にゆっくりと聞きたい」

「あ、そうですね。」

今はライフルですね」

「ああ。だが、魔力弾でも回転させれば、弾道は安定するのかな？」

「さあ、それはやってみないことには……」

「その前に、魔力式のライフリングは刻めるのか？」

「それは大丈夫だと思います。」

僕が前に作った、刃の周りに魔力が渦を巻く剣の機構を応用すれば出来ると思います。」

そっちの魔剣は、まったく役に立たない失敗作でしたが」
「オーケー。」

何日ぐらいで出来る？」

「これを改良すれば……そうですね。
3日ぐらいでしょうか」

「わかった。3日後にまた来る」

「はい」

「それから、銃身の後ろにシヨルダーストックも付けておいてくれ」
「シヨルダーストック？」

「銃尻を肩に当てて、銃身を固定するもんだ。

肩に当たる部分は反動を吸収するために、ショックを吸収する素材やバネを仕込むんだが……反動が小さいこれは、必要ないな」

竜斗が紙に描いたシヨルダーストックの形を、ウィズが真剣な眼で見つめていた。

「じゃあな。ツツコミ。

また、3日後な」

「そのアダ名、本気だったんですか!？」

「次は、内気とツンデレと筋肉も連れてくる」

「さらに、変なアダ名が出てきたー!？」

＊

028 偽勇者の なかま か、そろった！

「あゝ、もう。時間かかった。

お尻、痛くなっちゃった」

馬車から降りたセラが大きく伸びをした。

ラグリット魔法工房まで、馬車に揺られて約1時間半。
道が舗装されてないため、スピードが出せず、揺れも酷かった。

もっとも、一番大変だったのは、4人乗りの馬車を引っ張ってき
たドラである。

そのドラは、竜斗から褒美のライ麦パンを貰って、ご満悦だっ
た。

腰を押さえながら、レイフォンが竜斗に尋ねる。

「魔法工房なんて、どこで知ったんですか？」

「遠距離用武器を探してたら偶然、ここにたどり着いた」

「ムウ。しかし、全員連れてくる必要はあったのか？」

アーサーが身体のコリをほぐしてるのか、次々と各種ポージング
を決めていた。

勿論、ポージングごとに白い歯のキラメキも忘れない。

「誰が、ライフルを使うことになるかわからん。

そいつに合わせたカスタマイズが必要になるのさ」

「ヌウ」

＊

魔法工房の戸口に立った竜斗は、大声で工房内に呼びかける。

「おっ、いい、ツツコミ。」

いるか？

約束通り来たぞ！！！」

工房中に響き渡った声に、工房の鍛冶職人たちがキョトンとした顔をしたが、

次の瞬間、誰のことを言ってるか、すぐに思い当たり、笑い声が響いた。

魔法工房の奥から、ウィズが赤い顔をして走ってくる。

「本当の本当に、そのアダ名、マジものだったんですか！？」

「おう」

胸を張る竜斗に、ウィズが肩を落とした。

「……はあ、もういいです」

「ライフルは？」

「はい。完成してます」

「じゃ、他のメンバーも紹介したいから、場所を変えるか」

「わかりました」

＊

「セラ・オル・ランセルよ」

赤に近い金髪を風に靡かせ、緑瞳のセラが腕組みをして、名を名乗った。

「通称、ツンデレ」

横から口を出した竜斗の頭に、セラが上段蹴^{ハイキック}りを叩き込む。

「よっ」

紙一重で避けた竜斗に、セラが拳を震わせた。

「日に日に避けるのだけは、上手くなってきてるわねえ」

「師匠が良いもんで」

「アーサー・レイガスタだ」

「通称、筋肉」

「いかにも！ 筋肉である！！」

金の短髪で、青い瞳のアーサーがすかさず、一頭の後ろで手を組み、腹筋と脚に力を込めた《アブドミナル・アンド・サイ》。

勿論、白い歯のキラメキも忘れない。

「歯が、白く輝いてる！？」

ボブカットの緑の髪に、金の瞳のレイフォンが、ぺこりと頭を下げる。

「レイフォン・アルス・フェンリルと言います」

「通称、内——」

「僕は、ウィズって言います！

よろしく、レイフォンさん！！」

竜斗が横から言い終える前に、ウィズは思わずレイフォンの両手を握った。

「あ……あの……」

戸惑うレイフォンに、

両手を握っていたことに気づいたウィズが、慌てて手を離す。

「す、すいません!! レイフォンさん」

レイフォンが、ふわりと微笑む。

「レイで良いですよ。ウィズさん」

「は、はい。レイさん」

赤い顔をしたウィズが、わたわたと竜斗の傍に寄った。

「リ、リュウトさん。」

レイさんも仲間なんですか?」

「もちろん」

「あんな綺麗な人、初めて見ました」

「そうか?」

「レイさんの魅力がわからないなんて。」

……まあ、そっちの方が、僕的には良いか……」

「このメンバーで冒険者とかやってる」

「へえ」

竜斗がセラたちに、ウィズを紹介する。

「で、こいつが、ウィズ・クリフト。」

通称、ツツコミだ」

「そんな通称、いりません!!」

「なっ」

爽やかな笑みを浮かべた竜斗は、皆に親指を立てた。

「それで、ツツコミ。」

ライフルは?」

「あ、はい」

ウィズがケースから魔力弾射出式筒型弩を取り出す。

その改良型ライフルは元の世界のスナイプ・ライフルと、ほぼ同じ形だった。

見た目の大きな違いは、薬莖を排出する箇所^{ライフル}に精霊石がはまっているのと、

スコープが付いて無いことぐらいだろうか。

「リュウトさんの助言通り、ライフリングを施し、ショルダーストックを取り付けて、

左手で銃身を固定するための握りを付けました。

それから、リュウトさんが置いていったライフルの精霊石を取り外して、精霊石を2つにしました」

「ロングバレルが前より短いな」

竜斗の言葉に、ウィズがパアツと顔を明るくして勢い込んで説明を始める。

「はい。そうなんですよ。」

ライフリングがばっちり上手くいきましてね。

精度が格段に上がったので、あんなに長い銃身は必要なくなったんです。

これで、持ち運びも楽になりますよ」

「試し撃ちをしてもいいか？」

「はい。的はあっちにあります」

ウィズが指さす先、遠くに4重の円が描かれた木の板が立っていた。

「距離は？」

「200メートルです」

照準^{サイト}の前にある精霊石に手を当てて、魔力を溜めると、竜斗はラ

イフルを構えた。

引き金を引くと、軽い反動とともに魔力弾が発射される。
魔力弾は、木の板の端を撃ち抜いた。

「うーん。こりゃ、相当な練習が必要だぞ」
眉をしかめる竜斗に、ウィズが首を傾げる。

「え？ でも、僕がやったら百発百中でしたよ」

「ほう。見せてくれ」

ライフルを構えたウィズが、五発目を撃った。
板の穴は一つだけである。

外れているのではない。

全弾、中心から1センチもズレてないのだ。

「よく、あんな遠くの的に当たるわねえ」

感心半分、呆れ半分のセラと、

何やら真剣な表情で考え込んでいる竜斗。

「おい。ツツコミ。《鷹眼》は使えるか？」

「はい」

「あと、300メートル離れるぞ」

＊

「すごい。すごい」。

全部命中です。それも全部、真ん中。
すごいです。ウィズさん」

「え……いやあ、まあ……それほどでも……」

レイフォンに褒められたウィズは照れて、茶髪を掻く。

さらに300メートル離れ、計500メートルの距離から10発、狙撃し、ウィズは全て命中させた。

竜斗が撃っても、掠りもしなかった距離である。

腕組みをしていた竜斗が、スツと眼を開いた。

「おい、ツツコミ。」

お前。正々堂々って言葉、どう思う？」

「正々堂々ですか？」

正々堂々戦ってたら、僕の出番がなくなります。

僕、戦闘じゃ、『ライフ』クロスボウか弩での遠距離攻撃専門ですから」

気楽に返答したウィズに、

竜斗が笑い声を上げる。

「ははは、最高だ。」

ツツコミ。俺らのパーティーに入らないか？」

「へ？」

「俺らのパーティー、遠距離からのサポートが不足しててな。」

お前なら十二分にこなせる。

勿論、報酬もきっちり払う。

一緒にやらないか？」

「でも、僕は工房の人間で……、
いつか画期的な武器を作って、たくさんお金儲けて、毎日ウハウ

ハで過ごしたいかな〜って」

ウィズの首に腕を回し、レイフォンから離れる竜斗。

「ツツコミ。」

俺ら冒険者とかやってるから、たまに野宿とかするんだよ」

「は、はあ」

「もしかしたらだ。」

朝、川まで顔を洗いに行ったら、内気が全裸で水浴びしていると
ころに、ばったりとか——」

「仲間になりましたよう！」

リュウトさん。僕も、世のため人のために、自分の技術を役立て
たいと思っていたところなんです!!」

前言をあっさりと翻し、力説するウィズ。

「お前なら、そう言ってくれると思ってたぞ」

「僕。親方に承諾もらってきます」

「頑張って説得してこい！」

「はい!!」

二人の内緒話が聞こえていたセラは、つつつと竜斗の傍に寄った。

「この、詐欺師ッ」

「失礼な。偽勇者だよ」

「でも、いいの？」

「ああ。遠距離から攻撃できる奴を捜してたのは事実だし、
なにより、ツツコミ要員が増える!!」

「それは、重要ね」

拳を握りしめる竜斗と、深く頷くセラに、

レイフォンが小首を傾げる。

「それって重要なんですか？」

「勿論」

「ええ。レイ。とても大切よ。」

主に、神官に対して」

「ヌウッ!？」

5分後、ウィズが竜斗たちの所に、戻ってきた。

「やっぱ、ダメだったか？」

「親方に聞いたら、好きにしろって言われました……」

「実はお前、親方から嫌われてないか？」

「昔ながらの正当派の親方の前で、変てこな物ばかり作ってましたから、問題児だったのは認めます」

そこで表情を改めたウィズは、魔力弾射出式筒型弩^{ライフル}を握りしめる。

「剣とか槍とか変わらない武器は、それはそれでいいんです。」

でも、変わっていかなきやならない武器もあるはずなんです。

僕は、弩^{クロスボウ}は、その最たるものだと思ってます。

それで、作ったのが、この『ライフル』だったんですが……。親方も同僚も認めてくれなくて……」

「ツツコミ。俺が、断言してやるよ。」

そいつは、必ず世界に認められる。

本当に、命が危険な極限状態で、人は魔術構成やらなんやら考えてる余裕なんかない。

生死を分ける一瞬で、反射的に攻撃できる武器。

それは、命のやり取りをしてる奴らにとっっちゃ、命綱と同等の価値があるだろうよ。

だから、信じる。

お前の作ったそいつは、世界の戦争すら一変させる可能性がある」

「……あ、ありがとうございます」

思いがけない竜斗の励ましに、
ウィズは唇を震わせながら、ライフルを抱え込んで頭を下げた。

＊

レイフォンとウィズが向き合って挨拶してる背後で、
アーサーがウィズの私物を馬車の屋根に括り付けていた。

「ウィズさん。これで、わたしたち仲間ですね」

「は、はい。レイさん。
これから、よろしく」

「はい。こちらこそ。
ツツコミさん」

「あなたも、その名で呼びますかーッ!？」

「冗談です。ウィズさん」

ツッコむウィズに、レイフォンはクスクスと笑う。

「あつ、リュウトさん。」

これから、お世話になります」

「おう。」

それから、俺のことは『偽勇者』で良いぞ」

「最後に、一番、変なアダ名がキターーッ!？」

＊

029 偽勇者は こうぼ う を てにいれた!

晴れ渡った青空。

麗らかな午後の昼下がりに、竜斗とメイドは中庭でお茶をしていた。

竜斗が紅茶を飲み干す。

「メイドさん」

「はい？」

「魔王って、西の魔大陸から来るんだよな」

「はい」

「魔大陸じゃ、魔王同士が覇権でも争ってるのかね」

メイドが濃紫の長髪を揺らして、小首を傾げた。

「あら。リュウト様には言っておりませんでしたか？」

西の魔大陸には、次元の穴が開いているのです」

「は？」

「簡単に言えば、異世界への通り道ですね」

「異世界って……」

「異世界は、別にリュウト様たちが居た世界だけではありませんよ」

「その穴ってのは？」

「まさに、穴ですね。」

神話時代の話になりますが、神獣でも神竜でも神鳳でも、どうにもできなかったそうです。

空間そのものを破壊しても、異世界への穴は消えなかったとか。

そのため、次善策として大陸そのものに結界を張ったのです」

「てことは、魔王は異世界からの侵略者ってことか」

カップを置いたメイドが溜息を吐く。

「だからこそ、厄介なのです。」

神話時代、何度か魔族と交渉の場が設けられたそうです。

しかし、こちらの言葉は通じるのに、思想が通じませんでした。

私たちとは全く別の進化を遂げてきた彼らは、

姿形は似ているものの、脳の仕組みそのものが違うようなのです。

故に、彼らには『平和』という概念がありません。

そして、闘争をしてるという意識さえありません。

何故なら、息をするように、闘争を生存本能に組み込んでいるからです」

「なる。全く違う生物と交渉したところで、思想は通じないってか。^{エイリアン}

血の色も紫だしな」

竜斗は背もたれに体重を預け、空を眺めた。

メイドが竜斗のカップに、紅茶のお代わりを煎れる。

「さらに言うならば、彼らがどうやって仲間を増やしているか、今もって不明なのです。」

魔物が生殖行為をしていたという報告は聞きませんし、卵を産むという報告も聞きません。

しかも、全て成体ばかりで幼体の姿を見たことはありません。

世の魔術師たちは単体分裂とか、単体生殖とか、女王蟻のような存在がいます、主張してる者もいるほどです」

「まあ、雄と雌がいて生殖するのが、奇妙に見える異世界も存在するかもな」

竜斗はクッキーを口に放り込み、紅茶を口に含んだ。

「確か、今の魔王は4人だったよな」

「はい。それぞれ、各国の勇者が対応しています」

「勇者と言えば、コウの周りが随分、きな臭くなってきたな。

各派閥の思想が絡んでドロドロのグールグル。

ま。あいつは、まったく気づいてないようだけど」

苦笑する竜斗に、メイドが尋ねる。

「手助けなさらないのですか？」

「なんで俺が。」

依頼されてるわけでもないのに。

それにコウなら、いつもの如く主人公属性を発揮して、何も気づかないうちに全て終わった状態になってるさ。

しかも、コウにとって一番良い状態で」

「そんなことが？」

眼を丸くするメイドに、竜斗が鼻を鳴らした。

「あるんだよ。」

あれは一種の特殊能力だな」

紅茶を一口啜ったメイドが、ふと顔を上げる。

「派閥と言えば、先日、リュウト様の紹介で商人の方が来ました。ちょうど、ネズミ捕り用の罠が欲しかったので注文しましたが」

「あん？ ああ、商人ギルドの関連だよ。

情報を探ってるうちに行き当たってな。

王宮にツテを作りがってたから、メイドさんを紹介しといた。メイドさんなら何よりも王宮のツテだろ」

「はあ。」

商工派の方々でしたか」

「魔王軍と本格的に事を構えるとなると、商人を——『物流』を味方に付けた方が心強いからな。」

コウなら兎も角、凡人の俺は利用できるもんは全て利用するさ」

円卓に肘をつく竜斗に、メイドが金の眼を細めた。

「リュウト様が派閥に関わるとは思いませんでした」

「コウのように、気づいたら最良の状態で終わってることなんてないからな。」

俺の場合、気づいたら最悪の状態の渦中なんてことはザラだよ。なら、前もって手を打つのは当然のことだ」

「ですが、彼らは金の切れ目が縁の切れ目ですよ」

「それで良いんだよ。」

必要無い時には、いないってことだから」

「しかし、必要な時、必要以上に群がる存在でもあります」

竜斗は唇の端を吊り上げ、笑みを見せる。

「確かにな。」

奴らを利用しきるか、俺が使い捨てられるか。

力押しの魔王相手なんかより、

狡猾な人間相手の方がはるかに面白いぜ」

「リュウト様は宰相向きでもございますね」

「だから言ってるだろ。」

俺に勇者は合わねえって」

竜斗は、椅子から立ち上がった。

「じゃ、俺、そろそろ行くわ。」

紅茶。ごちそうさま」

「はい。それでは、また」

槍を持って立ち去る竜斗を見送ったメイドは紅茶を飲み干し、金の双眸を細める。

「……そろそろ、状勢が動き始めそうですね」

＊

「偽勇者さん！」

竜斗を見つけたウィズが駆け寄ってきた。

「騙しましたね!!」

「何がだ？」

「勇者だなんて聞いてませんよ」

「勇者じゃない。偽勇者だぞ」

「同じです!!」

「本物と偽物を同じと言い切るのか。」

むっ、……——深いな」

顎に手を当てる竜斗に、ウィズがツツコム。

「そんな哲学的な話はしてません!!」

単純に騙されたって言ってんです!!」

「何を？」

「冒険者だって言ったじゃないですか!!」

「冒険者とかやってるとは言ったが、冒険者だとは断言してないぞ」

「でも、勇者だとも言われてません!!」

口をへの字に曲げるウィズに、

竜斗が拳を握って、空の彼方を見つめた。

「ツツコミ。」

お前は俺に、世のため人のため役に立ちたいと言ったろ。

あの時、俺は感動した。

こいつは、冒険者とか偽勇者とか小さいことにこだわらず、多くの人を助ける男だと」

「小さくありません!!」

感動で誤魔化す竜斗を、

ウィズはぼつさりと切り捨てる。

「それに……ほれ」

竜斗が指さす先には、レイフォンとセラの二人連れがいた。

レイフォンが上目使いでウィズを覗き込む。

「ウィズさん……やめちゃうんですか……」

「うっ! ……………うう」

上目使いのレイフォンに、ウィズが後退さる。

レイフォンの金の眼がウルウルとし始めた。

「……行っちゃうんですか……」

「ま、まさかあ!

僕は小さい頃から勇者に憧れてたんです。

さあ、頑張って魔王を斃すぞ!!」

「そうですか」

拳を振り上げるウィズと、ほわっと安堵するレイフォンに、
竜斗とセラはニヤニヤと笑う。

そんな二人の様子に、じわっと涙目になったウィズは、
「ひ、卑怯だ……!!」

両眼に腕を当てて、明日に向かって駆けだした。

「ウィズさん。……走って行っちゃいました……」

突然、駆け出したウィズに、眼をパチクリさせるレイフォンへ、竜斗が重苦しく告げる。

「走りたい年頃なのさ。」

さらなる青春の疾走のために、内気が追いかければ、もっと走るぞ。

さあ、お前の日頃の努力の成果を見せてやれ！」

「あの……いいんでしょうか？」

「勿論だとも！」

走ることはストレスを発散させる効果もあるんだ」

「はい！」

レイフォンが緑の髪を跳ねさせて、追いかけ始めた。

「な、なんで、追いかけてくるんですかー？」

「ウィズさん。走りましょう！」

「なぜー！ーっ！？」

遠くから、レイフォンの声とウィズの悲鳴が聞こえてくる。

「ツツコミと内気のトレーニングには最適だな。」

ああやって、定期的に運動させるかな」

満足げに頷く竜斗に、セラが呆れた眼を向けた。

「鬼」

「偽勇者だよ」

「偽勇者」

竜斗とセラが振り向くと、
背中まである緑の髪を風に靡かせたレンフェイが立っていた。

「あら、筆頭魔術師じゃない」

「おう、無口っ娘」

「レンです。」

工房の用意、できた」

「そっか。ありがとな」

「……別に」

セラが小首を傾げる。

「工房って？」

「ツツコミの工房だよ。」

「ライフル改良のためには必要だろ」

「ああ、なるほどね」

つつつと竜斗の隣にすり寄るレンフェイ。

「ん？」

「……………別に」

何かに気づいたように仰け反ったセラが無言で、竜斗の反対側の腕を取る。

「なんだ？」

「……………何でもないわよ」

ウィズとレイフォンの追い駆けっこを笑いながら眺めてる竜斗の背後で、

セラとレンフェイが視線の火花を散らしていた。

＊

0301偽勇者は れへゝる か、あかゝった!

「イヤアアアアアアア!」

気合いを発した光一が木刀で、聖騎士のアリアに切りかかった。

アリアは危なげなく避ける。

光一が袈裟切りに振り下ろす木刀を、

アリアは上体を斜めに傾けて、数センチ単位で躲した。

光一が一步踏みだし、切り上げた木刀を、

アリアは半歩下がるだけで避ける。

「くっ。このっ!」

光一は木刀を横薙ぎに一閃した。

素早く下がって躲したアリアは、

「剣を大きく振りすぎです!!」

隙の出来た光一の左肩へ、木剣を叩き込む。

「ぐっ!!」

鎧を着ているとはいえ、木剣の一撃は骨まで響いた。

「では、こちらから行きます」

アリアが攻撃に転じる。

アリアの異常なくらい重い一撃一撃を、光一はギリギリで防いでいった。

防ぐことに手一杯で、反撃する余裕など一切無い。

アリアが下段から切り上げた木剣を受け損ねて、光一の木刀が上に跳ね上げられた。

空気を斬り裂く風切音とともに、高速で振り下ろされた木剣が、ピタリと光一の頭上1センチ手前で寸止めされる。

「ま……参った」

アリアが木剣を下ろし、光一が片膝を付いた。
大きく呼吸を乱し、肩で息をしている光一に比べ、
アリアはまったく呼吸を乱していない。

……かなわないな。
さすが、聖騎士最強と言われるだけあるよ。
それでも、剣道で県大会出場レベルぐらいはあったんだけどなあ。
自信なくすよ……。

実際、光一は訓練を始めてから今まで、アリアから一本も取れてなかった。

「では、そろそろ、休憩にしましょう」
「待ってくれ!!」
「もう少し——」

アリアの美しい緑瞳が光一を見つめる。
「コウイチ殿。
無理を重ねても得る物はありません」
「しかし……」

「焦って訓練しても、1＋1は2となりません。せいぜい、1・2となるぐらいです。」

1日、訓練をしなければ、その1日分は後で取り戻すことはできません。

だからこそ、日々の積み重ねが大事なのです」

アリアは微笑んで、右手を差し出した。

「わかったよ」

苦笑した光一はアリアの右手を取り、立ち上がる。

「コウイチ様!!」

水の巫女である青い髪に青い瞳のシェラと、

その護衛の精霊騎士であるピンクの髪に赤い瞳のアリエルが、二人の側に歩いてきた。

「はは。見られてたのか」

「コウイチ様。凄いですわ。」

アリアと打ち合えるなんて、王国の騎士でも滅多にいないんですよ」

「そうです。」

私、感激しました!!」

「いや、アリアさんが目一杯、手加減してくれてるからだよ」

「ええ……まあ……」

世辞を言えず言葉を濁すアリアに構わず、シェラが胸の前で手を組む。

「でも、すごいですわ。」

これなら、武術大会でも良い成績を残せますよ」

「武術大会？」

「はい。ウィンドルム王国で開催する武術大会ですわ」

「へえ」

気の抜けた返事を返す光一に、

シェラが両腰に手を当てた。

「何を他人事のように言ってるのですか！！」

コウイチ様が出るんですわ」

「は？」

「優勝すれば全国に名前が知れ渡りますわ」

「別に、名声に興味はないけどなあ」

「甘いですわ。コウイチ様！！」

コウイチ様の名前が知れ渡れば、民衆が安心しますわ。

コウイチ様は勇者なんです。

勇者の仕事は、民に安心を与えることでしょう」

真摯な眼のシェラに、光一はハッと気づかされる。

「そうだった。」

シェラ。気づかせてくれて、ありがとう。

俺は勇者だったんだよな。

名前を売るのは興味ないけど、

それで、みんなが笑って生活できるようになるなら、出る意義がある」

光一はアリアへ振り返った。

「俺、勝てますかね？」

「優勝は無理かもしれませんが、そこそこ良いところまで行くと思います」

光り輝く金髪をさらりと揺らすアリアに、

シェラが頬を膨らませる。

「コウイチ様が優勝するに決まってるじゃありませんか！」

「……しかし……」

嘘が付けないアリアに、シェラが半眼を向けた。

「あゝ、もう。どうして、アリアはいつも水を差すんですか」
「うっ、……そんなつもりはないのですが……」

ピンクの髪のアリエルが、場をまとめるように手を叩く。

「そうと決まったら早速、登録しないと」

「アレス王子の所に行きましょう。」

アレス王子も武術大会を観戦しに行くはずですわ」

「あっ、そうですね。さすがは、巫女姫様です。」

私、感激しました!!」

王宮へ走っていく二人を見送りながら、アリアが光一に話しかけた。

「肩は大丈夫ですか？」

「はい」

「一応、治癒魔術ヒーリングをかけておきましょう」

「すいません」

治癒魔術で、肩の痛みが徐々に引いていく。

——あと少しで、アリアさんに攻撃が届きそうだった。

稽古を初めた頃は試合にもならなかったのに。

それが、曲がりなりにも聖騎士最強と打ち合いが出来るようになった。
アリアさん

幸いなことに、俺には剣の才能が有ったみたいだ。

大丈夫だ。俺は強くなってる。
そして、いつかはアリアさんを、皆を、守れるぐらい強くなる！
なって、みせる！！

アリアに治癒魔術をかけてもらいながら、光一は木刀を握りしめた。

＊

「グフウツハア！」
竜斗は胃液を吐いた。

唾を吐いた竜斗は口元を拭って、立ち上がる。
もう、剣撃を食らって胃液を吐くことも慣れた。
慣れすぎて、胃の中の物が無くならないと、身体が重い気がする
までになった。

……………うん。俺、重傷だ。

立ち上がった竜斗へ、セラが地を滑るように懷へ飛び込んでくる。

——ヤバイ！！

《リュケン流十字斬》

セラが振る2本の木刀の袈裟・逆袈裟斬りを寸前で躲した。
眼を見開くセラへ、竜斗は木槍の石突を打突。

身体を捻って躲したセラへ、竜斗は木槍を振り下ろした。

ガッッ!!

木刀を交差させて防いだセラと、竜斗が鏢迫り合う。

体重の軽いセラを吹き飛ばそうと、竜斗が力を込めた瞬間、セラに臍を蹴り飛ばされた。

しまっ――

竜斗が、つんのめって体勢を崩したところを、

《リュケン流二重撃》!!

セラは竜斗の右肩に打ち込んだ木刀へ、左の木刀を叩き付ける。

「ガッ!!」

袈裟斬りに肩を激打された竜斗は地面に叩き伏せられた。

地面に這い蹲った竜斗の顔面へ、鉄板入りブーツが迫る。

木槍を地面に突き立て、とっさにセラの蹴りを避けた竜斗は、勢いのまま立ち上がった。

不安定な体勢で木槍を横薙ぎに振るが、セラに紙一重で躲される。赤に近い金髪が数本、宙に舞った。

木槍を掻い潜ったセラは木刀で、竜斗の顔面へ渾身の一撃。

ゴッ!!

精霊石のサークレットで魔術的に守られているため、直接当たる

ことはないが、

衝撃が伝わり、竜斗は後ろへよろめいた。

痛みと衝撃で目の前がちかちかと瞬き、吐き気がこみ上げる。

《リュケン流加槌》！

鳩尾に打ち込まれた木刀の柄に、もう一本の木刀の柄を叩き込んだセラの強烈な一撃を食らい、

竜斗は4メートルも吹っ飛んだ。

「ガッ！！……はっ……はっ……」

鳩尾への強打で呼吸もできない。

竜斗は鎧の上から腹を押さえて、のたうち回った。

だが、木槍は決して手放さない。

「治癒」
ヒーリング

セラの声とともに、痛みが水を引くように消えていく。

セラの呆れを含んだ声が、頭上から降ってきた。

「ダメねえ。痛み程度で集中を乱してるようじゃ。」

戦場じゃ、痛いと呼びかけた瞬間、首を切り落とされてるわよ」

眼を開けた竜斗は屈み込んだセラを見上げる。

「……はあ。俺は強くなってるのかね？」

「なってるわよ。」

私の《十字斬》を避けたじゃない」

「ははは。最近、殴られすぎてヤバイって感覚がわかってきたんだな」

顔を近づけたセラの緑瞳が、竜斗の黒瞳を見つめた。

「偽勇者。」

そのヤバイという感覚。

そして、その恐怖心を覚えておきなさい。

戦場で生き残るヤツは名声でも、剣の腕でも、日頃の努力でもないわ。

何が何でも生き残るという執念と、危ないと本能が発する恐怖心という名の危険信号。

「それこそが、生き残る術^{すべ}よ」

治癒を終わらせたセラが立ち上がる。

「これは、私の師匠の言葉よ。」

『いいか。どんなに優れた剣技を持つ奴でも、どんなに有名な奴でも、戦場で死ぬ奴はあっさりと死ぬ。』

逆に、最前線で戦う名も無き一般兵が生き残る。

なぜだか、わかるか？

それはな。最終的に、生き残るのが上手い奴が生き残るということだ。

それを努々忘れるな』

と、いうわけよ。

「わかった？」

「了解。師匠」

赤に近い金髪を靡かせたセラは2本の木刀を構えた。

「さ、立ちなさい！」

「……休憩は？」

「休憩？ 寝ぼけないで。」

弱い奴に発言権なんかない！！

「さあ、立ちなさい！　槍を構えなさい！　斬りかかって来なさい！」

セラの緑の双眸が生き生きと輝いている。

「時間は、あんたの味方だけど、敵でもあるのよ！！」

竜斗は膝を震わせ、木槍を杖に立ち上がった。

——ははは。最高だよ。この女^{アマ}！！

いつか、絶対、組み敷いて喘がせてやるぜ。

木槍を一振りした竜斗は右足を大きく前に出し、身体を沈み込ませて、木槍を構えた。

＊

0311勇者のまえに きそぐ か、あらわれた。

ウィンデルム王国。

ファーレン王国の東に存在し、陸と海の貿易行路として栄えている国である。

この国の、もう一つの特徴は武術大会と、それに伴う賭博だった。年に2回、王都ウィンデルムで大規模な武術大会が開かれ、地方でも各貴族が武術大会を開催するほど、武術大会と賭け事の好きな国でもある。

光一たちは武術大会に出場するために、5日かけて王都ウィンデルムまで来ていた。

「ファーレンよりも、活気があるなあ」

光一たちは王都の市場を歩いていた。

「この国は貿易に力を入れていて、自由商業都市同盟バズエルに次ぐ、貿易国家なんです」

「へえ」

金髪緑瞳のアリアの説明に、光一が感心したように相槌を打つ。

王都は明日の武術大会の話題で一色だった。

出場者のタブロイド紙が飛ぶように売れ、街の壁には、出場者の似姿が描かれた紙が貼られている。

「巫女姫様くく！！ コウイチさくん！ アリアさくん！ フィー

さ〜ん!

この子、可愛いですよ〜!!」

魔法道具店の前で、桃髪赤瞳のアリエルがジャンプしながら、手を振った。

「アリエル。楽しいのはわかりますが、もう少し落ち着きなさい」
腰に手を当てたアリアが注意し、

紫瞳のフィーが銀髪を掻き上げて、魔法道具店を覗き込む。

「ふむ、何が可愛いのじゃ？」

「はい。この子です!!」

アリエルが指さすケースの中には、一匹の大きな虹色の『蛙』。

「ヒッ!!」

シェラが光一の腕に飛びつき、

フィーが、ほうと紫の眼を細める。

その蛙は子猫ほどの大きさで、虹色の鱗を持っていた。
大きな金の眼を、ぐりぐりと動かす。

「どうですか、巫女姫様!!」

この蛙、可愛いでしょう!!」

笑顔のアリエルに、青い顔のシェラは光一の腕にしがみついたまま、涙目でふるふると首を横に振った。

「ええ〜!!?」

「エルよ。残念ながら、こやつは蛙ではないわ」

「へっ?」

「こやつはドラゴン属リザード科のクレガウルスじゃ。
れっきとしたドラゴン種の一種じゃよ。」

その証拠に、こやつは300年ほど生きて、3メートルほどにもなるわ」

「3メートル！！ 私、感激しました！！」

「ヒュッ！」

3メートルの蛙を想像したシェラが呻き、
アリアが無言で3歩下がる。

「くくく。こやつを天干にして、搦り潰すと良質な魔法薬になるのじゃ。」

下等種でも、ドラゴンじゃからの」

「ダメ~~~~~！！」

八重歯を見せて嗤うフィーの視線から、
虹色蛙を庇うように、アリエルが立ち塞がった。

そこへ、腰にロングソードを吊した大男が、シェラに話しかける。

「その青い髪のお嬢さん」

「はい？」

「ヴィキラ地方の領主、ハイゼン様が貴女に興味を持ちました。
屋敷にご案内を——」

「興味ありませんので、お断りしますわ」
言い切る前に、さらりと断るシェラ。

顔を顰めた男が光一を睨む。

「おい、小僧。」

小僧が、このパーティーのリーダーか？」

「え？ ああ、そうだけど——」

男はロングソードを抜きざま、光一へ刺突した。

ギイン！

男の手から弾け飛んだロングソードが、後ろの地面に突き刺さる。

抜刀一閃したバスタードソードを大きく振ったアリアが、男を見据えた。

「……ぐっ」

男の後ろの剣を、アリアが一瞥する。

「良いですよ」

「……なに？」

「剣を、拾っても良いですよ」

一瞬、呆けた表情をした男はバックステップし、剣を拾って構えた。

「バカめ！！ 剣さえあれば——」

ガギン！！

アリアがバスタードソードを紫電一刀。

「剣があれば——……何でしょうか？」

根元から断ち斬られたロングソードを、ポカンと口を開けて眺める男。

「では、行きましょう」

納刀したアリアは皆を促した。

「はは。さすがはアリアさん」

「格好良かったです！」

私、感激しました！！」

「まったく、やることなすこと派手ですわね」

「別に派手にするつもりはないのですが……」

困惑顔のアリアに、フィーが含み笑いを洩らす。

「存在自体が派手じゃからのう」

「待てい！！」

十数人の警備兵たちが駆け寄ってきた。

「騒乱罪で、お前たちを逮捕する！」

「刃を抜いたのは向こうが先ですが？」

「うるさい！！」

大人しく捕縛につけ！！」

剣を両断された男は警備兵に肩を借り、呆然と歩いて行く。

それを見、フィーが紫の眼を細めた。

「ほう。つまり、お前たちは何たら貴族の子飼いというわけじゃな」

「何を言おうと、お前らは牢に入ってもらおう」

光の消えた赤い眼を見開いたアリエルが、カクンと首を傾ける。

「今、なんと言いました？」

巫女姫様を牢に入れると言いましたか？」

「そのとおりだ!!」

一晩、反省してもらおう!!

それがイヤなら――」

「私、……………激怒しました」

「ま、待つじゃ。エル」

「落ち着いてください!!」

「アリエル。落ち着け!!」

一切を無視して、アリエルは銀剣ミスリルソードを抜き、天高く掲げた。

アリエルの周囲の空間から色取り取りの淡い光が現れ、銀剣に集まる。

と、アリエルの前に、竜巻が忽然と出現した。

アリエルの銀剣に合わせて竜巻が大きくなり、逃げ出そうした警備兵を呑み込み、吹き上げる。

数秒後、竜巻が消えると同時に、警備兵が空から落ちてきた。

地面に打った腰を押さえる警備兵隊長の前に、シエラが仁王立ちになる。

「この方はファーレン王国の勇者、コウイチ・ヤナギ様ですわ。その勇者を牢に入れると？」

「」「ファールンの勇者!?!」「」

「貴国が、我が国と戦争をしたいというのなら、受けて立ちますわ」

逃げて行く警備兵の後ろ姿に鼻を鳴らしたシェラが、
身を竦ませるアリエルへ振り返った。

「アリエル」

「……………はい」

「良くやりました」

「は、はい!!」

巫女姫様のために頑張りました!!」

二本指で額を押さえるアリア。

「シェラ。誉めてどうするのです。誉めて」

と、光一たちの前へ歩いてきた執事姿の老人が腰を折った。

「勇者とは存じませんで、失礼いたしました。

お詫びをしたく、皆様を屋敷に招きたい、と主人から仰せつかつております」

「…………今の今とは、本当に良い度胸ですわね」

「我が主ハイゼン様は面と向かって謝罪したいと申しております。
そして、皆様の武勇伝を是非とも、お聞きしたいと」

「どうする? コーイチ」

「話し合いで解決するならば、その手を逃すつもりはない。
行こう」

「では、皆様。こちらの馬車へ」

＊

「遅い。遅いですわ」

屋敷に案内された光一たちは、応接室で待たされていた。

「人を招いておいて待たせるとは何事ですか」

シェラは出されたジュースを啜りながら、頬を膨らませる。

「ですが、このジュースは美味しいですわ」

「ヴィキラ地方の果物を絞ったジュースって話だったな」

「ほら、アリエル。あなたも飲みなさいな。」

美味しいですわよ」

「えーと、うーん………はーい」

「アリアよ。飲まぬなら、おぬしのを貰っても良いかの？」

壁の絵画を眺めているアリアに、

ジュースを飲み干したフィーが尋ねた。

＊

貴族^{ハイゼン}が応接室に来た時には、光一たちは全員眠っていた。
睡眠薬入りのジュースは、全て空になっている。

「あはははは。バカな奴らだ。
このボクが、謝罪なんかするもんか!!」

ハイゼンは4人の寝顔を見ていく。

「見ろ。じい！」

皆、美女ばかりだぞ。

ここ最近で、一番の当たりだ」

「お気に召して、何よりでございます」

アリアの輝くような金髪に触ろうとしたハイゼンの腕が掴まれた。
「なっ!？」

アリアの緑柱石のような瞳がハイゼンを居抜く。
刹那、アリアは片腕でハイゼンを投げ飛ばした。

「グギャ！」

……な、ななな何故、眠っておらぬう！」

尻餅をついたまま、後ろに下がるハイゼンを、
立ち上がったアリアが見下ろす。

「あんな怪しげな物、飲む方が気がしれません」

「まあ、そう言うな。アリアよ」

フィーが眼を開け、伸びをした。

「バ、バカなッ!!」 その睡眠薬は丸一日、目が覚めないんだぞ!
「!」

「我は『術師』じゃ。」

《毒感知》も《解毒》も魔術の基本じゃよ。
キュア・ボイスン
「解毒!!!」

光一、シェラ、アリエルの身体が淡く発光し、3人が眼を覚ます。

「で、であえー!!!!」 であえー!!!!

曲者だー!!!!」

眼を見開いたハイゼンは、右へ左へ大声を上げた。

「招いておいて曲者とは、随分な言い草ですね」
二本指で額を押さえるアリア。

ハイゼンの後ろに集まる武装兵を見、
両手で銀髪を掻き上げたフィーが唇を歪める。

「どいつもこいつも、後ろ暗いことがありますな奴らばかりじゃな。
なら、この術でいこうかの」

両手で複雑な手印を切るフィー。

「《召霊》！！」

ハイゼンと武装兵が突然、虚空に向かってバタバタと暴れ出した。

首を傾げる光一とアリアに、フィーが八重歯を見せて嗤う。

「死霊術じゃよ。」

今、こやつらには殺してきた者の姿が見え、
さらに、取り憑かれておるのじゃ」

シェラが細眉をしかめた。

「随分と殺してきたものですわね」

「シェラも見えるのか？」

「勿論ですわ。」

私は水の神殿の巫女なのですから」

「へえ。」

アリエルは？」

「んー。何かが居ることはわかりますが、見えません。」

あ、でも、闇の精霊がいっぱい集まっています」

「エルの眼は精霊に焦点が合っておるからのお」

ハイゼンにまわりついている死霊を見たフィーが笑みを浮かべる。

「ほう。その死霊、面白いことを言っておるわ」

＊

アリアが壁の一角を切り捨てると、その奥に、全て『金』で出来た隠し部屋が現れた。

「ひゃく、眼がチカチカします!!」

「趣味の悪い部屋ですわ」

フィーが金の花瓶を取り上げる。

「国庫からの横領の証拠じゃ。」

「どうする？ コーイチ。」

「慰謝料に貰っていくかの？」

光一は首を横に振った。

「いや。横領ってことは本来、この国の人々のものだ。だったら、あとはこの国の人たちに任せよう」

「もったいないのう」

「俺だって、そう思うさ。」

「でも、俺は勇者だからね」

＊

0321勇者のまえに となりのくにのゆうしゃ か、あらわれた。

ウィンデルム武術大会当日。

「久しぶりだね。勇者コウイチ」

ウィンデルム王国の勇者セドリックと、光一は握手した。

「はい、久しぶりです。勇者セドリック。

俺のお披露目以来ですか」

白い簡易鎧を着た、金髪碧眼のセドリックが、光一に笑みを向ける。

「それにしても、昨日は大活躍だったようだね」

「あゝ、すいません」

「いやいや。悪いのは向こうだしね。

僕だって、同じことをしたさ」

「今日は出場するんですか？」

「勿論です。僕は勇者なのですから。

確か、勇者コウイチもゲスト枠で出場するんですよね」

「ええ。そうなるようです」

「では、準決勝、もしくは決勝で会いましょう」

「あ、はい」

「おっと、僕は試合が始まるので、これで。

後の案内は、彼がします」

セドリックは直接、闘技場に向かい、

蒼色のコートを着た魔術師が、爽やかな笑顔を浮かべた。

「やあ、皆さん。いらっしやい。

セドリックは忙しいので、ボクが案内します」

「君は？」

「セドリックの仲間です。
俗に言う勇者一行の一人ですよ」

軽快な口調で喋る魔術師に、鼻を鳴らすフィー。

「久しぶりじゃの。『最速』」

「ええ、お久しぶりです。『術師』殿。

お変わり無いようで、実に喜ばしいかぎりです」

「ほんに、口がペラペラとよう動くのう」

魔術師は顔の前に、ピッと人差し指を立てた。

「魔術師は口を動かすのが仕事ですので」

「では、皆さん。ご案内しましょう」

歩き出す魔術師に、光一が慌てたように尋ねる。

「あ、俺は？」

俺も出場するはずなんだけど」

「勇者殿はゲスト枠ですよね。」

では、シード権がありますので、準決勝からです」

「え？ 良いのか？」

「はい。ゲストの特権です」

爽やかな笑顔を浮かべた魔術師に、

フィーが胡乱げな眼を向けた。

「ぬしは出ないのか？」

「ボクですか？」

セドリックが出れば、ボクは必要ありませんよ」

「はっ！ よう言うわ」

＊

試合は、必ず10分の休憩が挟まれ、観客はその間に賭をおこな

っていく。

換金所は一ヶ所だが、賭札売場は会場に20ヶ所以上あり、混むことはなかった。

実際に金を賭けているフイーのみが勝った負けたと、他の観客たちと騒いでいる。

シェラとアリエルは、売店で買ってきた菓子や食べ物を広げ、試合そっちのけで、お喋りしていた。

行われている試合の戦術や駆け引きをアリアが解説をし、蒼いコートの魔術師が時折、魔術について解説を挟む。

光一は左右二人の説明を聞きながら、試合を食い入るように見つめていた。

＊

セドリックが甲冑の騎士に勝ち、順調に準決勝まで進んだ。

セドリックが掲げたロングソードの聖剣が、目映いまでに光を発する。

大歓声コロセウムが円形闘技場に響き渡った。

「アリアさん。あれって聖剣だよね」

「はい。そうです」

「俺が持つてる聖剣よりも、随分と細いけれど……」

「聖剣というのは、一種類ではありません。」

コウイチ殿が持っている聖剣はバスタードソードですが、あの勇者が持っている聖剣はロングソードのようですね」

「聖剣の種類って……槍とか弓もあるの？」

「さすがに弓はありませんが、

槍、斧、ランス、レイピア、刀などがあると聞いてます」

「へえ」

興味深げにセドリックの聖剣を眺めてる光一に、魔術師が声をかける。

「次の次は準決勝なので、勇者殿の出番ですよ。」

早く準備をしませんと」

「え？ ……えええっ！！」

「次の試合が秒殺で終わっても、10分の休憩を挟みますから、不戦敗になることはないと思いますけど、早めに行った方が良いでしょう」

「わ、わかった」

＊

準決勝開始のドラが鳴り響く。

光一の対戦者はフードを被った小柄な人物だった。

武器もショートソード、一本。

だが、ここまで勝ち上がってきた強者だ。

光一は聖剣を正眼に構え、じりつと間合いを詰める。

先に動いたのは、小柄なフードの方だった。

爆炎球
「ファイアー・ボール！！」

火の玉は、一直線に光一へ飛んでいき、白い鎧に当たって――――掻き消えた。

観客席の蒼の魔術師が、頬杖をつきながら呟く。

「へえ。」

攻撃魔術のみを無効化する『聖なる鎧』ですか。

あれならば、大抵の攻撃魔術は無効化されてしまいますね」

眼下では、小柄な対戦者が何が起こったのか理解できない顔で、慌てていた。

アリアが魔術師を一瞥する。

「一目で見抜きますか」

「それでも、魔術師ですて。

でも、あれって意外と不便なんですよねえ。

鎧自体に状況判断する機能は無いので、場合によっては、かけられた補助魔術が足を引っ張ることがありますし、

大抵の攻撃魔術は防ぐけど、直接攻撃ではない魔術は防げないし、初めに設定した魔術しか通さないから、新しく考案された魔術は弾いてしまうし、

なにより、強力な魔術とか、ドラゴン・ブレスとかは、完全に無効化できませんしねえ」

「随分と詳しいですね」

「ええ、まあ」

闘技場では、魔術拔きの剣技のみの戦いになっていた。

「あゝ。これは、対戦者に不利ですねえ」

溜息を吐く魔術師に、アリアは金髪を揺らして小首を傾げる。

「何故です？」

「あの人、魔法剣士なんですよ。」

魔術と剣術を組み合わせて戦うのが、あの子のスタイルなんですよね。

ですが、その魔術が一切利かない。

そうすると、剣同士の戦いになるんですが……」

「ウェイトですね」

「そうです。」

体格が小さくて軽い体重を、魔術でカバーしてるんです。

ですが、勇者殿が使用してる聖剣は、重いバスタードソード」

光一の横薙ぎの一撃が、防いだショートソードごと対戦者を吹き飛ばした。

「あゝあゝ。」

もう、一方的ですね。

これは、相手が悪かった」

尻餅をついた対戦者に、聖剣を突きつける光一。

「勝者!!」

ファーレン王国、勇者コウイチ・ヤナギ!!」

会場に拍手が響くが、あまりにも一方的な戦いだったので、盛り上がりには欠けたようだった。

＊

10分の休憩後、闘技場に、光一とセドリックが相対した。

会場中に響くドラの音とともに、決勝戦が始まる。

「閃光!!」
フラッシュ

目映い閃光が、闘技場を包んだ。

——しまった!!

まともに光を直視してしまった光一は、慌てて飛び退さった。

視界が青く塗り潰された中、

光一は耳を澄ませて、セドリックの気配を探る。

「……？」

いつまで経っても、攻撃が来なかった。

徐々に視界が戻り、前を見る光一に、

セドリックが肩を竦める。

「魔術には、慣れてないようですね。

こんなので勝ってしまつては、勇者のプライドが許しません。
せめてものハンデです。

僕は剣だけで戦いましょう」

「なんだと？」

「魔術を使ったら、僕の負けということですよ」

「嘗めるな!!」

光一とセドリックが同時に、飛び出した。

金属がぶつかり合う甲高い音が、闘技場に鳴り響く。

聖剣同士が打ち合わされる度に、火花が散り、異音が響いた。

15分ほど、息詰まる攻防を繰り返していた光一とセドリックだったが、

剣の重さとスタミナから、徐々に光一が押され始める。

ガキン！！

剣を打ち合わせ、距離を取った光一は呼吸を整えた。

……長引いたら、俺が負ける。

セドリックはスピードはあるが――、
アリアさんの攻撃に比べれば軽い。

なら、俺が勝つ方法は一つだけだ！

「イヤーアアアアアア！！」

真っ直ぐ突進した光一は重さに任せ、聖剣を思いつき振り切った。

聖剣で防いだセドリックだったが、その威力に、後ろに弾き飛ばされる。

普通のロングソードならば折れる程の衝撃だったが、セドリックの聖剣は傷一つ付かなかった。

「今だ！！」

距離を取った光一は聖剣を振り上げ、魔力を通す。

聖剣が白く光り輝いた。

「喰らえええ！！」

光一は、強烈な光を発する聖剣を振り下ろした。

光の奔流がセドリックへ、一直線に向かう。

「なっ!？」

驚愕の表情を見せるセドリック。

「くっ……シールド!!」
魔力の楯

体勢を崩していたセドリックが右手を掲げた。

聖剣から放たれた光の渦が、
セドリックの前に展開された魔術の楯に当たり、
川中の岩に当たった水の流れのように、後ろへ流れていく。

光の奔流は闘技場を覆う防護結界に当たり、弾け散った。

光が収まった後には、
無傷のセドリックと、その周囲の地面が根こそぎ抉れたフィールド。

防護結界に守られていた観客席には一切、被害はない。

顔色を変えて、聖剣を構える光一を前に、
セドリックがロングソード聖剣を鞘に収めた。

眉を顰める光一に、セドリックが朗らかな声で告げる。

「僕の負けです」

「は?」

「言ったでしょう。」

魔術を使ったら、僕の負けと。

実際に使ってしまったから、僕の負けです」

「だが……」

「勇者に、二言はありません」

隣に立ったセドリックが、

聖剣を持つ光一の手を高く持ち挙げた。

「勝者!!」

ファールン王国、勇者コウイチ・ナヤギー!!」

審判の宣言に、観客の声で会場が沸き上がる。

同時に、外れ賭札も大量に宙に舞った。

しばらく、会場の声援に応えていた二人は手を下ろし、向かい合う。

「今の戦い。本当なら、俺が負けていた」

頭を掻く光一に、セドリックが笑みを見せた。

「その謙虚なところも、勇者らしいですね。」

聖剣に、あんな使い方があったとは知らなかった。

僕も、もっと勇者として頑張らなくては」

「いや。俺の方こそ、まだまだなことに気づかせてくれた。
ありがとう」

光一とセドリックは握手をする。

「次は、魔術有りで勝ってみせる」

「ええ。次こそ負けません」

会場中が暖かい拍手に包まれた。

と、その時――、

「た、大変です!!」

「勇者様!!」

慌てふためいたウィンデルム王国の騎士が、セドリックに駆け寄る。

「何事だ？」

「ファーレン王国の王都が、魔王軍に襲撃されたそうです!!」

一瞬、呆気にとられた光一が大声を上げた。

「な、なんだって――!!?」

＊

033 偽勇者のまえに わいは、ーん か、あらわれた。

「どうしたの？」

偽勇者。浮かない顔して？」

訓練場へ向かうセラが、竜斗を見上げる。

「ん？ ああ。

今、コウたちがウィンデルムに行ってるだろ」

「武術大会だっけ？」

でも、私たちには関係ないじゃない」

「その通り。

コウたちが、どこで何してようと関係ないさ。

ただ、なあ……」

「何よ？」

「良い機会だから、勇者の居ぬ間に、一発、かましておこうとするかなあって……」

「かますって、誰が？ 何を？」

カン！ カン！ カン！ カン！

セラの声に重なって、鉦の音が狂ったように鳴らされた。

「ッ！？」

竜斗が西の空を見上げ、セラの質問に答える。

「誰が、何を、だって？」

魔王軍が王都の襲撃……とかな……」

＊

「ドラ！！」

「ギャウ！」

走ってきた竜斗の呼びかけに、ドラが羽ばたく。

「偽勇者さん」

「ムウ。ここに来て、正解だったか」

「偽勇者さん。敵は、ワイバーンだそうです」

ドラの前には、レイフォン、アーサー、ウィズが揃っていた。

「みんな来てたか。好都合だ」

「待って。ドラは、全員乗せて飛べないわよ」

「わかってる。」

ドラ。俺とツンデレとツツコミ。

三人なら、乗せて飛べるな？」

「ギャオ！」

「よし。」

俺とツンデレとツツコミが攻撃。

内気と筋肉が迎撃だ」

竜斗は手早く指示を出す。

「ワイバーンは空から襲ってくる。」

内気は城の屋上から、上空に魔術をぶっ放せ。
地表には、絶対に向けるなよ」

「は、はい」

「筋肉。お前は内気の護衛と止め役だ。」

内気が魔術を撃ってから、1分半で止める。
そうすりゃ、2回は魔術を放てるはずだ」
「ウヌ！」

「ツンデレ、ツツコミ。
俺たちは頭を潰す。
作戦はドラの背で話す」

竜斗とセラとウィズが、ドラの背中に乗り込んだ。
「いいか。誰一人、死ぬなよ！」
俺は、ハッピーエンドしか許さねえぞ！！」

「了解」
「はい」
「勿論です」
「ウヌ」
「ギャオ！」

*

「レンちゃん！」

背中まである緑髪のレンフェイが銀の瞳を、レイフォンに向ける。
「ねえさん」

城の屋上。
南から吹く乾いた季節風が、緑の髪を靡かせていた。

「ワイバーンは？」
「あそこ」

レンフェイの指す西の空に、徐々に大きくなる影が見える。

「レンちゃん。」

わたし、魔術を撃つよ」

「そう。」

私は、討伐の援護」

「うん！！」

そのやり取りだけで、姉妹は作戦を共有した。

レイフォンが魔法杖を掲げる。

次の瞬間、多数の魔法陣が展開し、炎と雷と風の魔術が撃たれた。

空に爆炎と雷光と爆音が炸裂する。

爆発と稲妻と衝撃波に巻き込まれた多数のワイバーンがボロボロと地上に落ちた。

魔術に巻き込まれ、地上に墜落したワイバーンは死なないまでも、重軽傷を負って、のたうち回る。

魔術に耐性を持つ魔物料のワイバーンは、レイフォンの魔術の直撃さえ喰らわなければ死なない。

直撃以外で死んだのは、墜落した時、運悪く首の骨を折った1匹だけだった。

「ヌ！　そこまでだ！！」

レイフォン嬢！！」

高笑いしているレンフォンの肩に手を置いたアーサーが、大声で怒鳴った。

哄笑と魔術を止めたレイフォンが、その場でうずくまる。

「……う……うう……」

レイフォンは魔術を発散させたい欲求を、無理矢理、押さえ込んだ。

「大丈夫か？ レイフォン嬢」

「……は……はい。……なんとか……」

「……あっ!？」

地上に落ちたワイバーンの中で、まだ飛べるものと、西の空から、合わせて十数匹のワイバーンが城の屋上（ていじょう）に向かって飛んでくる。

「ヌ。もう、第二波が来たか？」

「わたし、もう一回、撃ちます」

「ダメ」

「レンちゃん？」

「第二波じゃない。」

その奥に、まだ控えてる」

「ヌウ。あれは囃、もしくは、つゆ払いというわけか」

アーサーは一步踏み出して、メイスを構えた。

「レイフォン嬢とレンフェイ嬢は後ろに下がっておれ!!」

この鍛えし筋肉に任せろ!!」

*

紅い髪のルキア姫と、濃紫の髪のメイドが、王宮の通路を早足で歩いていた。

「メイド。」

今の爆音はなんじゃ？」

火のように紅い長髪を靡かせながら、ルキア姫はメイドから渡される流線型の甲冑を身につけていく。

「はい。屋上から、レイフォン様が空に魔術を放った衝撃です」

「『欠陥大魔術師』か。」

偽勇者リュウトの判断かの？」

「おそらくは」

歩きながら、ルキアは手甲のベルトを締めていった。

「戦闘指揮官とフレイムは？」

「現在、演習を切り上げ、王都に急行しているとのことですよ。
到着は4〜5時間後になると」

ヒールをその場に脱ぎ捨て、ブーツを履き、足甲を固定する。

「母上は？」

グレート・ソード

「先程、大剣を持って、城から出ようとしておりましたので、
一発、どついて、黙気絶らせておきました」

「うむ。良き判断じゃ。」

狭い街中で、大剣を振り回されたら、被害が激増するわ」

オリエンス

「王妃は、国王様の部屋に放り込んでおきました」

ルキアは両手で、精霊石の嵌まったティアラを髪に留めこんだ。

「大將軍のレッツは？」

メイド

「同僚の話だと、部屋で布団を被って震えているそうです」
「そのまま、閉じこめておけ。」

それから、宮廷騎士団は城から出すな。

足手まといじゃ」

「かしこまりました」

預けていた両手剣をメイドから受け取る。
トゥ・ハンド・ソード

「兵は？」

「聖騎士はアリア様以外、全員揃っております。
軍の歩兵部隊は2千人程です」

「十分じゃ。」

宰相の用心も、偶には役^{たま}に立つの」

バン！ と扉を開き、兵士が整列している城門前に踏み込んだル
キアは、隊列の前に進み出ると、
ウェーブのかかった紅く長い髪を振り払った。

「皆の者。戦争じゃ！！」

＊

雷光と雷音が、王都への襲撃を待つ第二陣のワイバーンたちへ放
たれた。

旋回しながら待機しているワイバーンの中へ、雷が撒き散らされ
る。

ワイバーン群の中を、竜斗のみが乗ったドラが高高度から急降下
で突き抜けて行った。

地面に衝突する寸前で急上昇し、旋回したドラの上で、仁王立ち

した竜斗が叫ぶ。

「俺の名は、勇者コウイチ・ヤナギ！！」

お前たち魔王軍を倒すために、異世界から渡ってきた。

俺の竜に追いつけたヤツだけ、相手をしてやろう！」

竜斗が特大の雷を放つと同時に、ドラが身を翻し、王都と反対方向に飛び去った。

最後尾のワイバーンに乗っていたリザードマンが吼えると、そのワイバーンを含む4匹が竜斗を追い始める。

その予想より遥かに少ない数に、竜斗が舌打ちした。

「チッ。冷静な指揮官のようだな。

作戦B案に変更だ。

ドラ。お前に俺の命を預けるぞ」

「ギャオ！」

＊

「グオオオオオオオオオオオオ！！」

アーサーはたった一人で、十数匹のワイバーンの猛攻を耐えていた。

咬みつかれ、殴られ、それでも、アーサーは一步も引かない。

その後ろで、レンフェイは自分とレイフォンを覆う防護結界の魔術を施術していた。

「レンちゃん」

「ダメ。」

ねえさんと私は切り札」

それは、レイフォンもわかっている。

レイフォンは第二波を落とすのに必要だし、レンフェイも今、対魔能力を持つワイバーン相手に魔力を消費すべきではなかった。

「レイガスタさん!!」

アーサーの首筋を狙って、ワイバーンが急降下してくる。

「ヌツ!？」

首筋に噛みついてきたワイバーンに、アーサーはとっさに左腕を差し込んで庇った。

左腕に食い込んだ牙は筋肉に止められ、ワイバーンの顎でも咬みちぎれない。

筋肉を締め上げて、牙が抜けないようにしたアーサーは、そのまま、ワイバーンを石畳に叩きつけた。

脳天まで走る激痛。

しかし、アーサーは何度も石畳に叩きつけ、

最後に、ワイバーンの首筋にメイスの強烈な一撃。

気絶したワイバーンの顎が開き、左腕から落ちた。

「さあ。次、来い!!」

脆弱なる筋肉どもよ!!」

「アーサーさん!

引いてください!!」

死んじゃいます!!」

全身、血だらけのアーサーの背中に、レイフォンが叫ぶ。

「まだだ！」

ワシは筋肉の尽きぬ限り、偽勇者の従者である」

ボロボロの革鎧を破り捨ててゐるアーサー。

「この筋肉の壁。超えられるものなら、超えてみよ!!」

アーサーは一右足を一步踏み出し、上体を僅かに前かがみに、そして、拳を鳩尾で打ち合わせた《モスト・マスキュラー》。

「この筋肉に、防げぬものはなし!!」

食いしばった歯が白くキラメク。

しぶといアーサーに業を煮やしたワイバーンが、一斉に襲いかかってきた。

一陣の濃紫の風。

ガッ!!

三匹のワイバーンの首が飛んだ。

「申し訳ございません。」

レンフェイ様。アーサー様。レイフォン様。
遅れました」

3匹のワイバーンの首を跳ね飛ばした濃紫の髪のメイドが、深々とお辞儀をした。

右手には、包丁1本。

左手で、アーサーの肩に噛みついてたワイバーンを引き剥がしたメイドは石畳に叩きつけ、

踵落として、背骨を^へ押し折る。

その衝撃に、魔術的に強化してある石畳が揺り鉢状にへこんだ。

死骸を踏み付けたまま、濃紫の髪のメイドは、ワイバーンの舞う空を金の瞳で見上げる。

「お城のお掃除は、メイドのお仕事。

お城を荒らす害獣は、一匹たりとも許しません」

チャキッ！

左手の甲を腰に当てた濃紫の髪のメイドは、頭上で包丁を握り直した。

＊

034ー偽勇者は わいは、ーんと たたかっている。

地上では、墜落したワイバーンの討伐が始まっていた。

「よいか。必ず、6人一組で当たるのじゃ。」

3名が楯を構え、2名で槍を突き刺し、動きが止まったところを斧で叩き斬れ！！」

火のように紅い髪を靡かせたルキア姫が、
スピア アックス
楯と槍と斧を持った兵士たちに指示を出す。

レイフォンの魔術を喰らった際、羽を損傷し、飛べなくなったワイバーンたちは、不利な地上で抗戦していた。

しかし、飛べないと云っても、爪も牙も尾も十分な殺傷能力を持っている。

兵士たちは大型の楯を構え、その楯の間から、同時に槍を突き出した。

ワイバーンの分厚い皮膚は、ドラゴンの鱗と違って、槍でも貫ける。

飛翔というワイバーン最大の武器を封じた今、なんとか歩兵でも対抗できていた。

街中に、爬虫類の鳴き声が響く。

体中を槍で貫かれ、弱ったところを、

斧で首を断ち斬られたワイバーンの絶叫だった。

「よいか、皆のもの!!」

こやつらは、モンスターワイバーン科のワイバーンではない。
魔王軍の魔物料のワイバーンじゃ。

生命力は桁違いじゃ。

たとえ、首だけになったとしても気を抜くな!!」

ルキア姫が兵士たちを指揮しながら、

襲ってきたワイバーンを擦れ違いざま、トゥ・ハンド・ソード両手剣で首を斬り落とした。

返す刀で、真横のワイバーンを腹から一刀両断。

紫の血飛沫が飛び散る。

『ドラゴンバスター』

王都の兵士と民衆は、ルキア姫の称号を、自らの眼で確かめるところとなった。

「レンちゃん!」

「わかってる。」

ホーミング・レイ・ボウ
誘導する光の矢!」

防護魔術を解いたレンフェイが手の中で、光の球を作り上げる。

頭上に掲げた光球から発射された72発もの光の矢が、

狙い過たず、王都中で抵抗を続けている全てのワイバーンへ3本ずつ命中した。

死角からの攻撃に、ワイバーンが動きを止めたところを、
すかさず、取り囲んだ兵士たちが槍を突き刺す。

「さすがは、筆頭宮廷魔術師レンフェイ様です」

メイドは右手の包丁でワイバーンの首を跳ね飛ばし、別のワイバーンの首を左手で掴み、素手でへし折った。

右手の裏拳で、後ろから突進してきたワイバーンの頭を吹き飛ばす。

「あなたの方が凄い」

レンフェイは23個の雷球と氷球アイス・ボールを作り出し、撃ち放った。

王都中に散らばる全てのワイバーンの首筋を正確に雷球が撃ち抜き、神経を感電させる。

直後、背に当たった氷球アイス・ボールが一瞬でワイバーンを冷却し、全身に霜が降りた。

変温動物のワイバーンは急激に体躯を冷やされ、目に見えて動きが遅くなる。

そんなワイバーンに兵士たちの槍が突き刺さり、王都中で鳴き声が響いた。

「いえいえ。それほどでも」

恥ずかしそうに頬に手を添えたメイドが回し蹴り。その蹴りの衝撃で、3匹のワイバーンが即死した。

「ヌウ。どちらも人外なのだが」

アーサーはワイバーンの口に左腕を突っ込み舌を掴んだまま、何
度も石畳に叩きつけ、

弱ったところを、メイスで首筋を一撃し、意識を刈り取る。

口から引き抜いた左腕の噛み痕は、すぐに消えた。

それを見ていたレイフォンがぼつりと呟く。

「アーサーさんも十分、人間離れしてます」

「ヌウツ!？」

城の屋上のワイバーンを全て斃^{たお}したメイドとレンフェイとアーサ
ーが動きを止め、西の空を見上げた。

西の空を旋回していた無数の影が急速に大きくなる。

「第二波の到来ですか？」

「ヌウ。思ったより早いな」

「軽率」

レイフォンが立ち上がった。

「わたし、撃ちます。」

アーサーさん。今度は止めないでください。

いつもみたいに、制御しながらじゃなくて、本気で、――『全力』
で撃ちますから」

「ウヌ」

「ねえさん。」

爆炎系と風斬系を」

「うん。わかった」

急激な魔力増加に、危険を察知したワイバーンが空に散開する。

「ムウ。いかん!!」

焦るアーサーに、レンフエイが首を振った。

「問題ない。」

ねえさんの本気なら」

「又？」

レイフオンの前に、3メートル級の魔法陣が幾つも展開する。

「あ……あ……あは……」

直後、空を絨毯爆撃するような爆発が連爆した。王都の空を爆炎が染め上げ、焼き尽くす。

「……あは……あは……あは……あは……あは……あは……あは……」

杖を持った右手を振り上げると、さらに10の魔法陣が展開。

「あはははははははははははははははははははははははは」

左手を横に延ばすと、20の魔法陣が展開する。空間が歪み弾け、衝撃波が全てを吹き飛ばした。

[illegible]

王都の空に哄笑が響きわたる。

樂しげに、愉悅に、快樂を持つて――。――。
本気で、全力で、人外の力を持つて――。――。

噛いながらレイフオンは、破壊と殺戮の魔術を行使する。

高らかに哄笑しながら、40もの魔法陣を操つり、暴走する、その姿は『忌み名』そのものだった。

独りで、一國を滅す。

しかし、同時に自国を木っ端微塵に破壊する。

そう言われて、皮肉とともに恐れられ、
そう言われて、失望とともに嘲笑された。

——人々から蔑まれ、疎まれ、妬まれ、嫌われ、恐れられ、排斥されて、名付けられた『忌み名』

——その威力に誰もが畏敬し、
——その暴走に誰もが畏怖し、

誰もが呼び捨てた『忌み名』

爆炎の業火が、切断の嵐が、雷光の唸りが、音速の衝撃波が、王都の空を徹底的に蹂躪する。

今、焼き尽くされる王都の空を見上げた誰もが、その『名』を思い浮かべていた。

＊

0351偽勇者のまえに　りさ、ーと、まん　か、　あらわれた。

竜斗の後方で、王都の空が焼けた。

東の空が夕焼けのように赤く染まる。

空一面を絨毯爆撃したような光景だった。

数千の大太鼓を連打したような、下腹に響く音が王都周辺にまで響き渡る。

ドラに乗る竜斗が風圧に眼を細めながら、苦笑を浮かべた。

「内気。王都まで、焼いてくれるなよ……おっと！」

ワイバーンに乗ったりザードマンが放った光の矢を、レイ・ボウドラが避ける。

ドラを追いかける四匹のワイバーンは、東の空が真っ赤に焼けても、王都に引き返そうとはしなかった。

今さら、引き返しても無駄なことを理解してるのだろう。

耳元でゴウゴウと風が鳴り、

下の草原が溶けるように、高速で後ろへ流れていく。

「鈍遅スロウ!!」

竜斗は追ってくるワイバーンへ、遅延の魔術をかけた。

一瞬、遅くなるが、すぐに速度を速める。

魔術耐性を持つワイバーンに、竜斗の魔力では、すぐさま弾かれ

てしまう。

「わかつちやいたが、厄介だ。

ドラ。あの森へ突っ込め!!」

「ギャウ!」

ドラが急降下し、森の中へ逃げ込んだ。

四匹も尻尾を振って、遅れずに追ってくる。

ドラは木々の間を右へ左へと潜り抜けて飛行した。

ワイバーンたちも遅れないどころか、徐々に間を詰めてくる。

「喰らえ!!」

竜斗が魔槍に魔力を流し、雷を撃つ。

一匹の顔面に当たり、方向を乱して、樹木に衝突した。

「ハッ! まずは、一匹!!」

ドラは羽を畳み、木々の間を潜り抜け、真正面に現れた幹を蹴飛ばして、急旋回する。

真後ろを追っていたワイバーンが、直径8メートルもある大樹に、頭から突っ込んだ。

森に衝突音が響き、木の葉が舞い散る。

「2匹目!!」

凄いぞ。ドラ！」

「ギャオ！！」

下降したドラは、地面に着地するなり、自分の足で走り始めた。

ワイバーンは走ることが出来ず、超低空飛行で追いかけてくる。

竜斗が放つ雷を、ワイバーンは右左へ避けた。

ドラの前方には、巨岩と、そこに立て掛けるように倒れた大木。

ドラは身を低くし、潜り抜けるような体勢をとり――

――ジャンプする。

大木の幹を蹴って、三角跳びの要領で真後ろに方向転換すると、正面から向かってくるワイバーンの頭を踏んづけ、その勢いで空へ舞い上がった。

頭を踏まれたワイバーンはそのまま、巨岩と大木の隙間に挟まる。途中で羽が引つかかったワイバーンはジタバタと暴れるが、大木と巨岩はピクリとも動かなかった。

「ハハッ。3匹目！！」

やるじゃないか！！ ドラ！！」

「ギャオン！！」

森の上へ舞い上がったドラの前に、大口を開けたワイバーン。

「うおっ!？」

「ギャワ!？」

竜斗とドラは同時に悲鳴を上げて、森の中へ降下した。

「あれは……そっか、初めの1匹目か。
気絶してなかったんだな」

額に焦げ痕あとのあるワイバーンが赤く目を光らせて、追って来る。
怒り心頭こころのようだった。

樹齢500年以上の針葉樹の大木の連なりを、ドラは左右へと縫
って、飛行する。

「ギャウ!」

直径10メートルの大木の脇を抜けたドラが警告音を鳴いた。

直後、大木の陰から、リザードマンの乗ったワイバーンが突進し
てくる。

飛翔するワイバーン上で、リザードマンが槍を振り下ろした。

寸前、ドラは螺旋ロール飛行して、躲す。

「……ドラ。」

俺は、竜に乗りながら槍を扱えない。

あのトカゲと空中騎兵戦をやったら100%負ける。

だから、ドラ。

お前に、全て任せる!」

「ギャオ!」

一声鳴いたドラはスピードを上げた。

後ろを一瞥したドラは飛行しながら、後ろ足で木の枝を蹴り折る。

折れた枝は、額に焦げ痕のあるワイバーンの顔面に叩きつけられた。

「グルルルル」

折れた枝を鬱陶しげに噛み砕いたワイバーンは歯を剥き出して、ドラを追いかける。

薄暗い森が途切れ、小川の流れる明るい場所に出ると、ドラは川を上流に向かって、速度を上げて飛んで行く。

緩やかなカーブを描く小川に沿って、遮蔽物が無くなった空間を、ドラと、焦げ痕のあるワイバーンが全力で飛翔した。

2匹がスピードを競い合い、風圧で小川に水柱が吹き上がる。

だが、飛行速度なら、ドラよりも、ワイバーンの方に分が有る。
クオランクス

じりじりと追い上げて来たワイバーンが、ドラの真横に並んだ。

スピードが増すとともに、2匹とも大きく広げていた羽を後ろに下げるように仰角を狭め、羽を細かく振動させることによって、更なる加速を得る。

通過した後ろに水柱が立ち昇り、風圧で小石が吹き飛び、木の葉が舞い渦巻く。

飛行に特化したワイバーンが頭一つ分、ドラよりも前に出た。

ワイバーンの目が愉悦に歪む。

それを見、ドラは――

唐突に、立ち上がり、大きく羽を広げ、後ろ足を川に突っ込み、急制動をかけた。

ワイバーンは意味の理解できない顔のまま、全速で飛び――、前方に滝があるのに気づいて、減速する間もなく、最速のスピードで、岩肌正面衝突した。

ガオッンン！！

衝突音が振動として、辺りに響き渡る。

停止したドラは川の上で、優雅に3回転、ターンしてから、大空に舞い上がった。

馬が、走るのを本能に組み込んでいるように、

ワイバーンは、速く空を飛ぶことを本能に組み込んでいる。

ドラの挑発に乗せられたワイバーンは頭に血を昇らせ、容易く本能に飲み込まれた。

ドラを攻撃することよりも、ドラよりも速く飛ぶことに熱中してしまった。

そして、全力の競争によって、それ以外が目にはいらなくなってしまうのだ。

それを止めるはずの騎手がいないワイバーンは、ドラの策略に見

事に嵌まり、

全速で崖に突っ込み、自爆した。

「ドラ！ 凄いぞ！！」

「ギャオ！」

「でも、もう少し加減してくれると、俺も嬉しかったんだがなあ」
「ギャウウ」

全速飛行の最中、竜斗は振り落とされないよう、必死に手綱にしがみついているしかなかった。

残るのは、リザードマンを背に乗せたワイバーン、1匹のみ。

森の上に抜けると、遠くからワイバーンが飛んでくるのが見える。
空高く舞い上がったドラに、竜斗が叫んだ。

「ドラ。北の丘へ全速力で向かえ！！」

「ギャウ！」

ワイバーンの上に仁王立ちしたリザードマンが、槍を振り上げる。

「レイ・ボウ光矢！！」

「ヤベッ！！」

竜斗が身を投げ出して、ドラに当たる攻撃を自分の身体で庇った。
「ガアアアッ！！」

「ギ、ギャウ！？」

「…………ち……ちっきしょう。痛てえ。」

やっば、防御魔術ぐらい覚えておけばよかった」

「ギャウギャウ!!」

「心配すんな。

ヒーリング
「治癒!!」

肩の傷口に《治癒》魔術をかけながら、竜斗はドラを励ます。

「ドラ、頑張れ。

逃げきったら、好物のライ麦パン。

好きなだけ食べて良いぞ!!」

「ギャオ!!」

「ドラ。あの丘だ!!」

超低空飛行で飛んでくれ!!」

——頼んだ!! ミスるなよ!!

＊

「来たわ」

「見えてます」

丘に伏せているウィズとセラ。

「大丈夫。かなり早いわよ。

当たる?」

セラの質問に、ウィズは答えなかった。

今のウィズには、何も聞こえない。
音を音として認識しない。
セラの姿さえ目に映ってない。

真っ白な世界。

視界に写るのは、狙撃対象のワイバーンだけ。

他は、全て白い『障害物』

ウィズは思う。

——遅い。

ワイバーンの飛ぶ速度が、だんだん遅くなっている。

勿論、そんなことは絶対にない。
だが、ウィズの眼には、そう見えた。

ゆっくり飛んで来るように見える。

動きが遅くなり、——遅くなり、——遅くなり、

そして————止まる。

ウィズは笑い出しそうになった。

こんな止まった目標を、僕が外すはずがない。

こんな大きな的を外すはずがない。

たかが、600メートルの距離を外すはずがない。

この間、0.1秒にも満たない短い刹那の瞬間。

ウィズは気負いなく、引き金を引いた。

銃口から、魔力弾が発射される。

螺旋状の、虹色の粒子の尾を引きながら、真っ直ぐ飛んでいく魔力の弾丸。

撃った魔力弾は狙い過たずワイバーンの羽の付け根に当たり、片羽がちぎれ飛んだ。

片羽のワイバーンが紫の血を吹き出しながら、飛んてくる。

そのスピードが、急激に早くなり――

――ウィズに、時間が戻った。

ワイバーンは凄まじい速度で、目の前の丘の斜面に衝突した。

背に乗っていたリザードマンが、宙に投げ出される。

セラが走り出し、地面に叩きつけられたリザードマンに切りかかった。

セラの細剣はギリギリで、リザードマンの槍に防がれる。

ドラが旋回し、墜落したワイバーンの上に着地し、取り押さえた。
「ドラ。そのまま、頑張れ!!」

「ギャオ!!」

ドラの背中から飛び降りた竜斗は、リザードマンと打ち合っているセラの所に向かって走る。

大地に擦り付けられ、紫の血を流しているリザードマンから距離を取ったセラの隣に、

竜斗が並び、槍を構えた。

「助太刀、参上!!」

「バカなこと言っていないで。」

こいつ、強いわよ」

「了解」

乾いた風が、竜斗の背を押すように吹く。

向かい合うリザードマンが、ずっと一歩横に逸れた。

直後、左腕を掠るめるようにして、真後ろから狙撃された魔力の光が通過する。

「ええっ!？」

避けたあ？」

木の陰に逃げ込んでいたウィズが、ライフルから眼を離し、驚愕した。

リザードマンがギロリと縦の瞳孔をウィズに向ける。

「貴様カ。我が愛竜ヲ撃ち落トシタのは。

ソノ素っ首、叩キ切ッてクレル」

殺意の籠った掠れた声を上げた。

「メツチャ、恨まれてるー!？」

「まあ、当たり前だろ。

トカゲ。背中を向けたいなら、いくらでも向けてくれ。
遠慮なく叩き斬ってやる」

「黙レ。

貴様ら! 皆殺シだッ!！」

「上等!！」

「やれるものならね!！」

「できれば、僕は後回しで……」

*

0361偽勇者は りさ、ーと、まんと たたかっている。

丘の上で、リザードマンと竜斗たちは対峙していた。

天高く、白雲が流れ、

風が、竜斗からリザードマンへ吹き抜ける。

リザードマンが眼を細めた。

「ウォーター・プレス
水圧！！！」

セラが剣を差し向けると、大量の水がリザードマンに放水される。が、水辺に住むリザードマンに水など当然、利かない。

竜斗は地面に、槍の先端を突き刺した。

ハッと気づき、飛び退さろうとしたリザードマンに、竜斗が、
「おせえ！！！」

魔槍に魔力を通す。

セラの魔術で、ウォーター地面に溜まった水を通して、雷がリザードマンを襲った。

一瞬、身体を硬直させたりザードマンだったが、

直後、槍の石突を地面に突き立て、その反動で水の範囲から逃げ出す。

「くそっ。下に逃げやがったか」

雷の大半が土の地面へ逃げたことに気づいた竜斗が、悪態をついた。

バシャー！！

ウィズがスリングショットで投擲した油壺が、リザードマンに当たって割れる。

感電で動きの鈍っていたリザードマンは、飛んでくる油壺を避けきれなかった。

「グッ！ 貴様ラっ！！」

「よそ見とは、余裕ね！」

セラが横薙に振ってきた細剣を、リザードマンは槍で防ぐ。

セラがニツと嗤った。

セラの左手に持つ炎の魔剣が火を噴く。

「ガアアああアアアああっ！！」

リザードマンにかかった油に引火し、一瞬で燃え上がった。

《リュケン流地蛇斬》

セラは低く屈み込みながら、回転し、脛を斬りつける。

同時に、地面の泥水を巻き上げ、氷の魔剣で足と地面を凍り付かせた。

ジャンプして離れるセラと入れ替わり、

「喰らえ！！」

竜斗が魔槍で雷撃を放つ。

「がアアああアア！！」

上半身が燃え、右足が地面に凍り付いたりザードマンに向かって、セラが立て続けに魔術を放った。

レイ・ボウ
「光の矢!!!」

サンダー・ボルト

「雷撃!!!!」

ファイアー・ボール

「爆炎球!!!!」

木の陰から、ウィズがライフルを構え、動けない標的に向かって、連射する。

精霊石に魔力を補給しながら撃ってるため、威力は小さいが、10秒に1発ずつ、リザードマンの頭に向けて連射していた。

セラが攻撃魔術を連続して、撃ち込む。

竜斗がここぞとばかり、魔槍に魔力を通し、雷を連発した。

動けないリザードマンを取り囲み、3人は十分な距離を取って、魔術・雷・魔力弾を撃ち込んでいく。

一番初めに攻撃が止まったのは、竜斗だった。

竜斗が小声でセラに囁く。

「悪い。魔力切れだ」

「了解」

セラは両腕を上げ、魔法陣を展開した。

竜巻

「ホール・ウィンド!!!!」

リザードマンの真下から、竜巻が上がり、全身を風の刃が切り裂いていく。

じっと紫の血の舞う竜巻を見つめていた竜斗が舌打ちした。

竜斗は大声で、ウィズに呼びかける。

「ツツコミ。これでトカゲも死んだはずだ。

早く、こっちに来い！」

「はい！！」

＊

ウィズが丘を大きく迂回して、二人の所まで走ってくる。

「どうですか？

トカゲは？」

「……キ、貴様ら……」

「まだ、生きてたー！？」

全身から紫血を流しながらも、リザードマンの眼光は、強烈な殺気を放っていた。

「やれやれ。しぶとい。

さすがに、ネタ切れだ。

こうなりゃ、真正面からやり合うしかねえな。

ツツコミ。ツンデレ。援護を頼む」

「うん」

「了解」

クロスボウ
弩を構えたウィズは、狙いをつけた瞬間、射撃する。

追い風に乗った矢を、リザードマンは難なく槍で叩き落とした。

竜斗の頬がひきつる。

「まだ、あんなに動けるのかよ」

「初めに言ったでしょ。

強い、って」

「さいですか」

槍を構えた竜斗が、リザードマンへ飛び込む。

竜斗はリザードマンの眼に向かって、粉を投げかけた。
傷だらけの腕で顔を庇ったりリザードマンが、槍を振る。

屈んで躲した竜斗は、槍を突き上げた。

槍を弾いたりリザードマンが、石突を跳ね上げる。

仰け反った竜斗へ、追撃しかけたリザードマンだったが、
寸前で槍を捻り、セラの一撃を防いだ。

続く、セラの二撃、三撃を槍で防いだリザードマンが、槍を刺突。
後ろに飛び退さり、竜斗の斜め後ろに立ったセラは、止めていた
息を大きく吐き出した。

丘の草がザワリと靡き、

乾いた風が竜斗から、リザードマンへ抜ける。

向かい合い、槍を構える竜斗とリザードマン。

——と、竜斗がニイと笑みを見せる。

「今だ！！　フィー！！」

「やっちまえっ！！」

竜斗がリザードマンの背中越しに、大声で叫んだ。

背後の気配を探りながらも、セラから眼を離さないリザードマン。

「あゝゝ、……さすがに、ひっかからないか」

「当たり前よ。」

「山賊じゃないんだから」

「正面から正々堂々ってのは、俺のキャラじゃねえよ」

泣き言をこぼす竜斗へ、リザードマンが突進して来た。

リザードマンの刺突を、槍で逸らした竜斗は、顎を石突で打つ。

半円を描くように避けたりザードマンは、袈裟斬りに槍を振り下ろした。

身体を低くして躲した竜斗は、

勢いよく槍を振りすぎ、半ば背中を晒したりザードマンに渾身の突きを放つ——

直前、ぞわっと背筋に寒気が襲う。

竜斗は急制動をかけながら、後ろに倒れ込んだ。

すぐ真上を、槍の閃光が走る。

背を向けたリザードマンが、脇の下から繰り出した一撃。

恐怖に従って反射的に倒れ込まなければ、胸の真ん中を貫かれて

いただろう。

地面に倒れた竜斗へ槍を振り上げるリザードマンへ、ウィズが弩を放った。

リザードマンが矢を弾いた隙に、横転し立ち上がる竜斗。サポートに徹していたセラが、竜斗の横に並んだ。

「今の、よく躲したわね」

「ありがとう。師匠」

「は？」

「ヤバイって感覚のおかげで助かった」

小さく笑みを見せるセラ。

「偽勇者。」

「……………もう、良いわね？」

「ああ、待たせた。」

「一気に決めろよ」

「言われるまでもないわ」

竜斗の前に出たセラが、竜斗すら見たことのない二刀流の構えを取った。

セラが地を滑るように低い姿勢から突進する。

《リュケン流地蛇斬》

セラはしゃがみ込んで回転しながら、双剣で臍を攻撃。リザードマンが、槍を立てて防いだ。

《リュケン流双昇牙》

二本の細剣を下から上へ斬り上げたセラは、右手の細剣を振り切り、左の細剣を胸の位置で前に突き出す。

リザードマンは、上体を半身にして避けるが、刃が胸鎧を掠った。

《リュケン流逆二重撃》

セラの右の細剣の一撃を槍で受けた刃の上に、左の細剣を振り下ろす。

その威力に、リザードマンが後ろへ下がった。

《リュケン流挟刃斬》

交差させた両腕を広げ、刃で挟み斬るように、首を狙う。避けそこなったりザードマンの右の首筋に浅い一筋の傷。

だが、リザードマンは一步前へ踏み出し、両腕が開き、大技と大技の繋ぎで、隙ができたセラの胸元へ、防御を考えず、全力で槍を突き出した。

渾身の一撃。

――が、セラはするりと避けると、細剣を斬り上げる。

紫の血潮と共に、リザードマンの槍を持つ右腕が飛んだ。

「……な、何故ダ……？」

右肩を押さえながら眼を見開くリザードマンに、竜斗が安堵の溜息を吐き出す。

「……はあ。……やっと『痺れ薬』が利いたか。と言うか、利いてくれて良かったよ」

「……ナ、なんだと？」

竜斗は首筋を掻いた。

「電撃くらって、さらに、そんだけ負傷してれば、気づくのも遅れるわな。」

それに、全身、傷だらけで傷口晒してんだ。

そりゃ、直接、血管の中に取り込まれるだろうさ」

風下に居たウィズを自分たちの方へ呼び寄せたのは、別にリザードマンが死んだと思ったからではない。

死んでないとわかっていたからこそ、『痺れ薬』を使うために呼び寄せたのだ。それも、大声で。

策が尽きたと口に出して言ったのも嘘ブラフである。

ウィズを呼び寄せた後は、竜斗たちは常に、風上に立っていた。

竜斗が目潰しにかけた粉がそれであつたし、

その後も、『痺れ薬こな』を常に風に乗せていた。

セラが竜斗の前に出なかったのも、前に出た時は息を止めていたのも、そのためである。

「とことん卑怯よね。あんたって」

「そう、誉めるな」

セラが双剣を構える。

「じゃあね。トカゲ」

《リュケン流断斬》

左手の細剣で深い傷口を作り、寸分変わらずその傷に合わせて、右手の細剣を打ち込んだ。

リザードマンの首が飛ぶ。

胴体の首元から、紫の血が吹き上がった。

「ピーーーーー！！」

天高くワイバーンが鳴く。

「もう良いぞ、ドラ」

ドラが上から退くと、紫の血を流したワイバーンが、首のない主の元まで這い擦っていった。

「ピイ、ピイ、ピイ……」

片羽のワイバーンは鼻面を主の胴体に、何度も押し当てる。

双眸を細めてワイバーンを見るセラに、

竜斗はリザードマンの首をズタ袋の中に入れて、肩に担いだ。

「行くぞ。ツンデレ。」

俺たちに同情する資格なんてないだろ」

「そうね。」

こうなることがわかって、殺したんだもんね。

これで同情したら、救いようのないほど、馬鹿な偽善者だわ」

「ドラ。城まで頼む」

「ギャウ！」

「うう……生き残れたよう……。
一時は、どうなることかと……」

＊

王都は数ヶ所から煙が立ち昇っていた。
だが、消火活動が行われているのだろう。
煙は白くなり、小さくなっている。

「あの丘の上からでも、空を焼く炎が見えたわ。
レイったら、どんな魔術を使ったのかしら？」

「一言で言や、絨毯爆撃だった。
あいつ、いつも制御してたんだな」

「あっ、あそこ!!」

ウィズが指をさすと、

城の屋上で、アーサーとメイドが手を振っていた。

眼を回して気絶しているレイフォンを、レンフェイが介抱している。
る。

その周りには、無数のワイバーンの死骸が積み重なっていた。

「なんか、……僕たちよりも、遙かに凄い激戦を繰り広げたみたい
ですね……」

「あのメイドを、俺たちの常識で考えようなんて、無駄の極致だぞ」

「どんだけ!？」

*

0371 偽勇者は きんか を てにいれた！

「納得いきません!!」

褒賞金を受け取った竜斗に、
憤慨したシェラの声が大広間に響いた。

大広間には、竜斗たちと、ルキア姫。
そして、押しかけてきた光一のパーティーしか居ない。

「コウイチ様がいれば、コウイチ様が倒したはずですわ。
こんな、偽勇者などではなくて!!」

指さすシェラに、セラが言い返す。

「私たちは必死に戦ったのよ。」

それを、とやかく言われる筋合いはないわ!!」

「コウイチ様だって、武術大会で命がけで戦い、優勝しましたわ」

「こっちは、命のやり取りをしてたのよ!!」

「それだけじゃ、ありません。」

わたくしたちは、悪党をやっつけて、横領していた貴族を捕らえる
こともしました。

あなた方のように、リザードマン、1匹ではありませんわ」

セラが据わった眼を、アリアに向けた。

「……ねえ。アリア。」

この巫女、ぶん殴っても良い?」

「止めておいてください。」

セラ。あなたを、斬りたくはありません」

「……へえ」

緑瞳の双眸から感情が消えるセラ。

「ま、待った!!」

こんなところで、決闘なんて止めてくれ!!」
間に入った光一が、竜斗にも助力を求める。

「竜斗も止めてくれ!!」

竜斗は首筋を掻いた。

「ツンデレ」

「なに？」

「やるなら、勝てよ」

「勿論」

「竜斗！」

なんで、けしかけるんだよ」

「んなもん、決まってるだろ。

仲間だからだよ」

竜斗が、魔槍を振り、

セラが、双剣の柄に手をかけ、

レイフォンが、魔法杖を掲げ、

アーサーが、メイスの柄に手をかけ、

ウィズが、ライフルを構える。

シェラが、胸の前で手を組み、

アリアが、バスタードソードの柄に手をかけ、

フィーが、魔法指輪マジック・リングを填めた右手を頭上に上げ、

アリエルが、銀剣ミスリル・ソードの柄に手をかけた。

大広間に殺気が渦巻く。

「止めんか!! このバカ者ども!!」

両陣の間に、怒号と衝撃波が襲い、天井から壁と床まで、一筋の深い亀裂が走った。

魔力を乗せた両手剣の一撃による衝撃波に、両陣営は動きを止める。

皆が注視する中、トゥ・ハンド・ソード両手剣を床から引き抜いたルキア姫が、竜斗たちを睨んだ。

「ここで争うなら、この私が相手をするまでじゃ!!」
ルキアは、剣先を竜斗とシェラへ向ける。

一つ、吐息を吐いた竜斗が肩に槍を担ぐと、シェラが組んでいた手を離した。

他の者たちも柄から手を離し、武器を下ろす。

一触即発の空気が穏和されたことに、光一が大きな溜息を吐き出した。

「まったく……みんな、血の気が多くて困るよ」

無然とした表情のシェラが、ルキアに向き直る。

「姫様!!」

「アンデッド城に攻撃を仕掛けましょう!!」

「シェラよ。」

神殿は、政治に関わらないんじゃないかなかったかの？」

「……そ、それは……」

「ふ。まあ、良い。」

おぬしの気持ちもわかる。

では、シェラ。おぬしの提案で、アンデッド城攻めを議会にかけようかの」

「本当ですか!？」

「うむ。すぐには無理じゃが、全ての準備が整ったら出撃をしようぞ」

「はい! 姫様」

「では、よろしく頼むぞよ。シェラ」

「勿論ですわ!」

「へえ。やるじゃないか、姫さん」

「ウヌ。見事な手腕よ」

感心したように頷く竜斗とアーサーに、セラが小首を傾げた。

「は? 何が?」

「俺たちには、関係ないことさ」

「ウム。ワシにもな」

「はあ?」

「じゃ、行くか」

金貨の詰まった袋を見せ、竜斗は出入口へ歩き始める。

「何処に?」

「いつもの場所さ」

「？」

「どこへ行くこうというのですか！！」

退出する竜斗たちを見咎め、シェラが鋭い声を飛ばした。

「貰うもんは、貰ったしな。」

「アンデッド城のことは、任せる」

「あなたも、勇者でしょう！」

「いんや。偽勇者さ」

「中庭？」

竜斗の後をついて行ったセラたちは、首を傾げた。

濃紫の髪のマイドがセラたちを見て、笑みを浮かべる。

「あら。今日は、全員お揃いなんですね」

「ん。まあな」

紅茶を煎れるメイドの対面に、竜斗が座った。

「メイドさん。」

「次の攻略拠点は何処だと思う？」

「アンデッド城でしょう。」

あそこが魔王軍の守りの要ですから」

「だが、すぐには無理だよな」

「そうですね。」

今回の戦いの死傷者も少なくありませんし、準備に、2、3ヶ月はかかるかと」

メイドが竜斗の前に紅茶を置く。

「そういやあ。死霊王アンデッド対策に、

姫さんが、神殿チビ巫女から言質を、取ってたぞ」

「それだけでは、少々弱いですね」

「まあ、姫さんなら、次策ぐらいあるだろ」

竜斗は紅茶を一口飲んだ。

「メイドさんの紅茶は美味しいな。」

いつも、世話になっている」

「いえ。私も楽しんでおりますので」

「ヒントを貰った俺が、どう行動するか予想をして……か？」

黒瞳を細める竜斗に、

メイドは無言で、薄く微笑んだ。

視線で会話してるような二人に、

セラがピクリと、こめかみを引きつらせる。

「ねえ。偽勇者」

「あん？」

「メイドと、よくお茶しているの？」

「一番情勢を知ってるのが、このメイドさんなんだな。たまに、『メイドさん情報』も聞けるし」

「……………ふ、ふうん」

＊

「ねえ。偽勇者」

「あん？」

「ここ、商工ギルドでしょ」

「ああ」

「なんで、私たち、こんな所にいるのよ？」

「呼ばれたんだよ」

飛竜襲撃から、数日後、竜斗とセラは商工ギルドの応接室にいた。革張りのソファーに、目利きの者が見れば高級品とわかる調度が並んでいる。

「待たせて、すまない」

赤い瞳に焦げ茶の髪と、焦げ茶の口髭を蓄えた壮歳の男が現れた。

「リュウト・カミシロ殿。

お呼びたてして申し訳ない」

「いや。俺の方こそ、話がしたかった。

ギルド長」

「ギルド長!?!」

驚きの声を上げるセラに、商人ギルド長が名を名乗る。

「これは失礼。」

私は、カルク・レプラカン・ハウデス。

商人ギルドのギルド長をしています」

「は、……はあ。」

セラ・オル・ランセルです」

「ほう。ガラス貿易商ランセル家のお嬢さんですか」

「ッ!! ……ええ、そうです」

「さて、ギルド長。」

なぜ、俺を呼んだ?」

「単刀直入に言いましょう。」

我が商工ギルドに加盟して頂けませんでしょうか?

カミシロ殿」

「なぜ?」

「カミシロ殿は勇者をしておられますね。」

我々、商工ギルドはそれを全面的に支援しようと思っております。ただ、そのためには、我らのギルドに加盟して頂きませんか、表だって支援ができません。

加盟と言っても名前だけです。

如何でしょう?」

「ほう。良いことづくめだな」

「勿論です。」

只でさえ、勇者の重圧を負っているのですから」

「偽勇者」

セラが警戒した眼で、竜斗の袖を引っ張った。

そんなセラに、竜斗は唇の片端を上げる。

「ギルド長さんよ。」

偽勇者

それなら、俺じゃなくて、勇者コウでも良いはずだよな。
今から、コウを呼んでこようか？」

「……………」

無言のカルクに、竜斗は喉の奥で笑う。

「ククク。無理だよな。」

コウの従者の術師は、王族派の筆頭だし、
チビ巫女に至っては、神殿の代表だもんな」

竜斗は足を組んだ。

「それとも、姫さんや宰相や戦闘指揮官を紹介しようか？」

商工ギルドが支援すると言ったら、大喜びすると思うぜ」

「……………」

「無理だよな。」

王族に言えば、問答無用に徴収される。

軍閥派は、あんたらを絞れば幾らでも出てくる倉庫ぐらいにしか
思っていない。

神殿は、自分たちの権益以外興味がない。

大臣派は日和見で、言動に一貫性がない。

貴族のアホどもは、論外。

宰相派が一番、現実的だが……、

カリウス宰相

あのモノクル眼鏡に支援するなんて言ってみろ。
骨の髄まで、搾り取られるぜ」

ギルド長のカルクは、背凭れに体重を預ける。

「ふう。こちらとしても破格の条件ですし、良いお話だと思ったのですが……」

「魔王軍に、西の港町を押さえられて、輸出入がガクッと減っただろう。」

商工派に加わった俺たちが、魔王を斃した暁には、それは商工派の手柄となる。

そうすれば、王宮で商工派の発言力も上がるよな。
当然、解放された港町の税率や権利にも口を出せる」

カルクの赤い瞳を、竜斗の黒い瞳が睨んだ。

「ギルド長さんよ。」

俺をおだてれば、コロツといく、そこらのアホと一緒にするな」

「それは、失礼した」

「さて、挨拶は、前置きここまでにして、本題に入ろうか。

今、アンデッド城へ進軍の準備をしていることは知ってるな」

「その節は、どうも。」

色々と儲けさせて頂きました」

「皮肉は後にしろ。」

今後、作戦で必要になるものを融通して貰いたい。

勿論、あんたらが最終的に『黒字』を確保できる範囲内で構わない。

それから、王宮への窓口は、俺が担当させてもらう」

「……………いいでしょう」

「そちらの条件は？」

「まず、商工ギルドに加盟して頂くこと。

それと、魔王城の城下町の反乱軍に協力して頂きたい」

「反乱軍？ 実在したのか。

単なるヨタ話だと思ってた」

「おや。これは、失敗しましたな」

「だが、すぐには行けないぞ

その前に、アンデッド城を攻略しないとならないんでな」

「かまいません。

我々も長期戦を覚悟していますので」

「いいだろう。妥当な線だ。

じゃ——」

「ちょっと待って」

交渉成立する直前、セラが口を挟んだ。

「アン？」

「なんででしょう？」

「一つだけ、聞かせて。

なんで、偽勇者なの？

向こうの勇者じゃなくて」

「だから——」

「派閥のことは、聞いたわ。

でも、あの勇者の性格なら、派閥関係なく支援を受けると思うの」

カルクは一つ頷いた。

「ランセル家のお嬢さんなら、わかるでしょう。」

我々は商人ですよ。

名声だけでは、商売は出来ません。
実績こそが、ものを言うのです。

カミシロ殿は、方法はどうであれ、きっちり実績を出している」

「ただの商人は、金に寄ってくるが、

真の商人は、金の成る木に寄ってくる。

そういうことね」

「正に、その通りです」

「偽勇者が商工ギルドに加盟するなら、私も入るわ。

セットで登録しといて」

「よろしいのですか？」

「私は、偽勇者の第一従者よ」

竜斗は立ち上がって、右手を差し出す。

「利害は一致したな。

カルク・レプラカン・ハウデス商人ギルド長」

カルクも立ち上がり、竜斗を右手を握った。

「ええ。契約成立です。

偽勇者リュウト・カミシロ殿」

*

0381 偽勇者は かしこさ か、あかゝった!

図書館塔の机で、竜斗が突っ伏して寝ていた。

緑の長髪の少女が毛布を持って、そっと近づく。

レンフエイが肩に毛布を掛けたところで、竜斗が眼を覚ました。

「無口っ娘？」

「レンです。」

「無理はダメ」

「ありがとな。」

「無口っ娘」

「レンです」

竜斗に頭を撫でられながら、レンフエイが尋ねる。

「何、調べてるの？」

「んゝゝ。」

神殿の召喚魔法陣が、いつ出来たのか調べてたら、

この国の歴史書に、召喚した勇者が死んじまって。

その後、軍隊が魔王を斃^{たお}したって、記述が出てきてな」

「それが？」

「その時の魔王が陣取ってた場所は、今と同じ港町近くの城。

その都市にあった古代の大規模魔術を復活させたとあるが、……

何だかわかるか？」

首を横に振るレンフエイ。

「……そっか。」

一晩かけて、当時の日記から、魔術書まで当たってみたんだが、それらしき物はなかった。

これは、現地に入って調査しねえとな」

「危険」

「だろうな。」

だが、俺の直感が囁いてるのさ。

こいつは、『切り札』になるってな」

「南の大陸」

「あん？」

レンフェイの銀瞳が、竜斗を見上げた。

「魔術は南の大陸から伝来。」

古代の魔術なら、南の大陸の書物が早い」

「南の大陸か……」

そういや、ライフルの名称も南の大陸からだったな。

南の大陸に、元の世界に繋がっている場所があるのか？

それとも、俺みたいに召喚されたヤツが伝えたのか？

ガシガシと黒髪を掻いた竜斗は嘆息した。

「現状じゃあ、情報不足……か」

「それと——」

「ん？」

「魔物も古い型の魔術を使う」

「魔王軍の魔物が？」

「そう」

「だが、魔物は別世界から来てるんだろ？」

「なんで、そいつらが俺たちと同じ魔術を？」

「……別世界？」

「あん？」

魔大陸に異世界に繋がる穴が開いていて、そこから魔王が来るって……」

「知らない」

「あゝ。あれは、『メイドさん情報』だったのか。

そうだな。神話時代に神竜たちが空間を破壊したなんて情報、人間が知ってるはずねえもんな。

魔術のことは、メイドさんに聞いてみるか」

「私も調べる」

「ありがとう」

再び、竜斗に頭を撫でられたレンフェイが気持ち良さそうに、銀の眼を細めた。

＊

中庭の円卓に本を積み上げた竜斗は、それを片っ端から読んでいた。

「何を読んでるんですか？」

向かい側で、ライフルの整備をしていたウィズが問いかける。

「南の大陸の本だよ。」

おとぎ話とか、歴史とか魔術のな」

「魔術と歴史はわかるけど、おとぎ話もですか？」

「ああ、俺が異世界から来たことは話しただろ」

「ええ……はい。」

未だに、信じられませんが」

「南の大陸の話に、俺の元の世界の物語が色々と混じってるんだよ。今、読んでるこれなんか、特にな。」

爺さんが、鶴を助けて、鶴が青年の姿になって恩返しに来て、

オーガ島のオーガ^鬼を退治しに行くことになって、

途中で、ウサギに足が遅いって虐められてた亀を助けたら、

お礼に竜宮城に連れて行ってもらい、

3日泊まって、帰ってきたら300年経ってて、

土産に貰った玉手箱を、色々な物に交換していったら、最終的に打ち出の小槌になって、

その打ち出の小槌で、親指姫を大きくして結婚しました。

めでたしめでたし……って、

オーガは、何処いったんだよっ!!」

「あ、僕。その話、知ってます。」

確か、お爺さんとお婆さんの孫が身分の差に負けずに、苦勞しながら騎士になって、オーガ島のオーガを倒す話ですよね」

「鶴を助けたこと一切、関係ねえっ!？」

ハッと気づいたように、竜斗が愕然と眼を見開いた。
「……しまった!!」

「ど、どうしたんですか？」

「ツツコミにツツコンじまった!!
アイデンティティ!
ツツコミの自己認識が崩壊しちまう!!」

「……いや、いつ僕が、ツツコミを自己認識にしましたか？」

「これじゃあ、存在感の薄いツツコミが、さらに無味無臭になっちまうぞ」

「僕って、そんなに影、薄いですかっ!？」

「ツ!!……よかった。ツツコミがツツコンだ……」

「なんですか？ その安堵した顔は!!」

僕は、ツツコミが出来ないと死んじゃう生物ですかっ!？」

「……………え？」

「その”違ったの？”っていう顔、止めてください!!」

「やっぱり、ここに居たわね。偽勇者」

「おう。ツン……デレ……?」

竜斗とウィズが、眼を丸くする。

セラがレイフォンとレンフェイを連れだって、中庭にやって来た

のだが、

3人とも服装が、いつもと違っていた。

メイド服だった。

セラが深い赤。レイフォンが明るい青。レンフェイが黒に見まがう濃紫のメイド服。

「おまえ……その服は……」

「き、気分転換よ。
気分転換！」

別に、他意は無いんだからね！」

「そっか……この前、メイドさんを見て——」

「だ〜か〜ら〜っ、ただの気分転換よっ!!」

「ツンデレ」

「何よっ!!」

「可愛いぞ」

「う……あ……うう……べ、別に……ご……ご主人様とか……呼びたいわけじゃ……ないんだからね……」

真っ赤な顔をしたセラが俯いて、もじもじとエプロンを弄ぶ。

トコトコと竜斗の前に歩いてきたレンフェイが、無表情で自分を指さした。

「私は？」

「ああ、よく似合ってる。

いつも、そのフリフリの服だともっと良いぞ」

「そう。

では、そうする」

「絶対に、ダメ！！」

慌てて止めに入ったセラと、レンフェイが視線の火花を散らす。

「ウィズさん。

どうですか？」

胸の前で手を組み、上目遣いで、不安そうに聞いてくるレイフォ
ンに、

ウィズは鼻血を噴きながら倒れた。

「ウ、ウィズさんー！ー！？」

「おいつ。ツツコミ、大丈夫か？」

「うふふ。僕には、もう一片も思い残すことはありません……うふ
ふ」

「ウィズさん、死んじゃダメです……！」

「ああ……。」

レイさんが膝枕で看病してくれたら、元気になれるのに……」

「は……はい！ わかりました！」

「結構、余裕そうね。銃使い」

「欲望に忠実なのは、見習いたいね」

「……ねえさん。どいて。

心臓マッサージ」

頭上でバスケットボール大の《雷球》を作るレンフエイに、ウィズが跳び上がって起きる。

「はい！ 大丈夫です。」

僕、元気になりました！！」

「……そう。」

残念」

「メツチャ殺す気でしよう！ あなた！！」

叫ぶウィズに、

顔の前に立てた手をパタパタと振るレンフエイ。

「セラ！！」

中庭に銅鑼^{どら}声^{こゑ}が響く。

振り返ったセラが眼を丸くした。

「父様？」

貴族の服を着た、太鼓腹で赤髪の男が歩いてくる。

「なんだ！！ その格好は！？」

「べ、別に、何だって良いでしょう！！」

「使用人の格好など、ランセル家を何だと思っておるのだ」

「商家」

「バツカモーン！！」

栄えある貴族だぞ！！」

「栄えある？」

母様が没落貴族で、父様が商人でしょうが。
気取ったって、事実は変わらないわよ」

「バツカモーン！！」

「おい、ツンデレ。」

その人は？」

「うゝゝん。」

あんまり紹介したくないけど、ライオス・オル・ランセル。

私の父様よ」

「なんだ。あの男は？」

「偽勇者よ」

「偽勇者……セラと一緒に、商工ギルドに登録した男か。

君、悪いことは言わない。

勇者などと夢を見てないで、とっとと家に帰りなさい。

さあ、セラも勇者ごっこなどと遊んでないで、家に戻ってくるんだ」

「イ・ヤ・よ！！」

それに勇者ごっこなんかじゃないわ！！

向こうの勇者なんかよりも、遙かに武勲を立ててるのよ！！」

「そんな格好をしているヤツが、何を言っている！！」

「グッ！……か、格好は関係ないでしょ。格好は！！」

兎に角。私たちは、魔王を斃すの！！」

「そんなことは、他の者に任せればよい！！」

お前は、早く婿を取って、ランセル家の世継ぎを作るのだ！！」

「ふざけんじゃないわよ！！」

誰が、言いなりになるもんですか！！」

「父親の言うことが、聞けないのか！！」

「はじめっから、聞かないのよ！！」

「バツカモーン！！」

「あれが、親子喧嘩なんですね」

「内気。」

あれは、そんな憧れの眼で見るとかなものなのか？」

「わたしの家は、喧嘩なんてしません。」

もし喧嘩したら、魔術が飛び交って辺り一面、焦土ですから」

「自己感情制御は、魔術の基本」

「わたしは出来てないですけどね」

「そういや、お前らの両親で、二人とも宮廷魔術師だっけ」

「そう」

「お父様もお母様も、それぞれの部門の筆頭宮廷魔術師です」

「そりゃ、夫婦喧嘩すりゃ大災害だな」

真っ赤な顔で怒るライオスが、竜斗を指さした。

「お前は、こんな何処の誰ともわからん馬の骨が良いのか!？」

「なっ!?!? ……に、偽勇者のことは関係ないでしょ!!! 偽勇者は!?!?」

「あん? 馬の骨がダメなら、スケルトンなら良いのか？」

人間の骨だし。

変わった趣味してんなあ」

竜斗の茶々に、セラの低い声が響く。

「――切り落とすわよ」

「……………冗談だ」

「セラ。何が気に食わないんだ？」

見合い相手も、上級貴族なんだぞ!!」

「何もかも全部、気に食わないのよ!!」

それから、もし強引に見合いしたら、

12歳の時のように、剣で相手を叩きのめすからね!!

いえ、今は、格段に腕が上がってるから半殺しよ!!」

「バツカモーン!!」

怒号の響き合う中庭で、竜斗は読書に戻った。

「大変だなあ。ツンデレも」

「他人事ですねえ」

「ああ言うのは、第三者の俺が口出しすると余計にややこしくなるからな。」

親子の会話は、その家族特有の暗黙の了解があるのさ」

「……はあ」

＊

0391 偽勇者のまえに　ねくろまんさー　か、あらわれた。

「盗掘を防ぎ、犯人を捕まえること。

尚、ゾンビやスケルトンの妨害あり」

二つの満月の下、眼を細めながらセラが依頼書を読んだ。

「偽勇者。これランクEの仕事でしょ。

なんで、受けたの？」

「スケルトンなら、人間の骨だろう」

「――切り刻むわよ」

「……………冗談です。師匠」

「で？」

「ちょっと、気になることがあってな」

月明かりの下、深海に沈むような青い闇の中、白い墓石が整然と並んでいる。

月光の当たらない闇はなお暗く、深淵に落ち込むような黒い影が口を開いていた。

風の音や物音に、ビクッと震えるレイフォン。

「……………うう、怖いです」

「魔術師のレイさんでも、幽霊は怖いんですね」

「はい。思わず、魔術を暴発させてしまいそうなほど怖いです」

「こっちが、コワッ!!」

「ヌッ！　偽勇者よ。」

あそこを」

アーサーが指さす先――、
地面の上を、何かが這い回っていた。

それは、幾つもの背中。

何人もの集団が、素手で墓場を掘り返している。

「やるぞ」

「警告は？」

「夜の墓場で、集団が素手で墓掘り。
いらんだろう」

「それも、そうね」

近づいた竜斗は、四つん這いの人影に槍を振り下ろした。

首が飛ぶ。

腐り爛れた首が。

返す刃で、隣のスケルトンを両断した。

「ほくら。やっぱり」

墓場を素手で掘り続けながら、ゾンビとスケルトンが、首だけを
竜斗たちに向ける。

「ライト・ボール
光球」

竜斗の魔術で、明かり周りが明るくなった。

ゾンビやスケルトンが光に痛みを感じたように、身を縮こまらせる。

竜斗たちの視線はゾンビやスケルトンを越え、闇の奥。

宙に浮く、黒いフードを被ったボロマント姿の影に向けられていた。

フードの中から、双眸が不気味な黄光を発している。

死霊術師

「ネクロマンサーか？」

「このゾンビを見ればわかるでしょ」

ネクロマンサーが両腕を前に掲げた。

ネクロマンサーの両手の間に発生した黒い渦が、竜斗たちへ真っ直ぐ、飛んでくる。

キン！

レイフォンが魔法杖で展開したシールドで弾いた。

双眸の黄光が不気味に瞬き、両腕を上げたネクロマンサーから紫の煙が発生する。

「グッ！」

「クウ！」

煙を浴びた前衛のうち、竜斗とセラが口許を押さえ、後ろに飛び退さった。

竜斗がキャップを飛ばして、中身を半分煽った瓶を、セラに渡す。
「毒消しだ！！」

飲み干したセラが軽く咳き込んだ。

「ケホッ、ケホッ。」

「ありがと。偽勇者」

「筋肉！！」

竜斗が、一人、毒霧の中に立っているアーサーに呼びかけるが、アーサーは平然と、一右足を前に出して右半身になり、メイスを持つ左手首を掴み、胸と腕に力を込める《サイドチェスト》。

「この鍛えし筋肉に毒など利かん！！」

これぞ、筋肉の力！！」

白い歯をキラメかせるアーサーへ、目の前のゾンビとスケルトンが揃って、ふるふると左右に首を振った。

「ヌウッ！？」

「筋肉。そいつは任せた！」

「ウヌ、任せろ。」

腐れた筋肉など、この鍛えし筋肉には利かん！！」

竜斗とセラは周りのゾンビとスケルトンに立ち向かう。

「いい、偽勇者。」

斃すにはバラバラにするか、首や胴体を叩き斬って、自分が死んだことを思い出させるかのどちらかよ」

「了解」

竜斗はスケルトンの首を跳ばし、セラがゾンビを袈裟斬りに切り落とした。

「まったく、単なる墓場荒らしだと思ったのに、なんでこんなヤツが出てくるのよ」

「アンデッドの手下だからだろ」

「え？」

「だから、アンデッド城の主が、戦力を増強してるんだろうよ」

「「ええっ!？」」

セラ、レイフォン、ウィズの声が重なる。

「……知られた……からには……死んでもらう……」

掠れた声に、竜斗がネクロマンサーへ視線を向けた。

「ほう。喋れたのか」

「……もう……遅い……」

ネクロマンサーが一つの墓に、ボロ布に隠れた手をかざすと、半球状に20もの魔法陣を取り囲む。

「……目覚めよ……ウェルツ・サイクロプ・ハーデス」

異音とともに名の無い墓標が起き上がり、銅のような赤銅色の全身鎧フルメイルが起きあがった。

兜の内は白骨化した頭蓋骨と、その眼下の奥に青い光。

「ウェルツ……赤銅のウェルツ？」

油断なく双剣を構えるセラの前で、赤銅色の全身鎧は大刀を抜きはなった。

反りのある黒い片刃の刀が、月光を冷たく反射する。

輝きから見ると、鉄ではなく、石から削りだした刃のようだった。

「なんで、あの『ウェルツ』が、こんな共同墓地に葬られているのよ!!!」

「強いのか？」

「伝説通りならね」

赤銅鎧ウエルツが音を立てて、黒い太刀を構える。

赤銅鎧が一步踏み出すと同時に、竜斗とセラが突進した。

赤銅色の全身鎧が横薙ぎに振った刀を、セラが屈んで避ける。

竜斗が腕甲の隙間に槍の穂先を突き刺さした。

人間なら肘の腱が切れてるだろうが、中が骨の赤銅鎧は構わず黒刀を振り下ろす。

「げっ!？」

竜斗に体当たりをしたセラが、替わって刃を交差させた細剣で受け止めた。

「ぐっ!」

押し潰そうと力を込めてきた刃を滑らせるようにして、横に逸らしたセラは赤銅鎧の胴を蹴って退がり、距離を取る。

セラは月明かりに、細剣を透かして、安堵の溜息を吐いた。

「……魔剣で良かったわ。」

アダマンタイト製の刀なんて、普通の剣で受けたら、それだけでボロボロよ」

「アダマンタイト？」

「ドワーフだけが精製できる鉱物よ。」

ダイヤモンドよりも堅く、鉄鋼よりも衝撃に強いわよ」

「ダイヤより堅いって……さすが、ファンタジー異世界」

赤銅鎧が、ずしりと一步踏み出す。

赤銅鎧が放つプレッシャー威圧に負け、攻撃を仕掛けようとした竜斗の足を、セラが払った。

「なっ？」

仰向けに転んだ竜斗の真上を黒刃が風切音を立てて、通過する。
竜斗の前髪が数本舞った。

「偽勇者。邪魔!!」

向こうへ行ってなさいっ!!」

「……………はい」

すごすごと、ウイズの所へ向かう竜斗。

竜斗は、魔槍を掲げ、

「八つ当たりーッ!!」

雷で前方のゾンビを吹き飛ばした。

「……偽勇者さん……」

「ツツコミ。」

言いたいことはわかるから、その可哀想な子を見る眼は止めてくれ」

「まあ、ゾンビを破壊してくれたのは助かりました。

ウィンド・クロウ
風の爪!!」

ウイズの魔術で、残っていたゾンビが5枚に斬り裂かれる。

「へえ。ツツコミって風の魔術も使えたのか」

コモン
「基礎と風、限定ですが」

「よし。左うちわ役ゲット!」

「将来設計万全!？」

ウィズと竜斗が漫才している後ろで、

「こゝなゝいゝでゝゝ!！」

レイフォンが半泣きになりながら、魔法杖のシールドでスケルトンを弾き飛ばしていた。

アーサーがスケルトンの一群をメイスで薙ぎ払う。

それだけで、スケルトンはバラバラの骨となって転がった。

霊体を直接攻撃できるアーサーのメイスは、掠っただけでもゾンビやスケルトンには致命的な一打となる。

前が開け、突撃したアーサーがネクロマンサーにメイスを振り下ろすも、ひらりと躲され、黒い渦を数発、撃たれた。

「ヌッ!！」

アーサーは腕を十時に組み、黒い渦の衝撃に耐える。

その間に、ゾンビとスケルトンがネクロマンサーの前を塞いだ。

「ヌウ!! ひらひらと、よく躲す」

「……これで……15度……目……」

「……おまえ……こそ……しぶとい……」

墓場に剣戟が鳴り響く。

赤銅鎧の袈裟斬りを、セラは細剣で滑らせて弾いた。
赤銅鎧が黒刀を横薙ぎに振り斬る。

セラの横にあった墓石が斬り落ち、鏡のような断面が月光を反射させた。

剣圧で大木から白い花卉が散り、振り子のようにひらりひらりと舞い落ちる。

黒刀の横薙ぎの一撃を掻い潜ったセラは、赤銅鎧の肘の内側を切りつけた。

セラの氷の魔剣が、赤銅鎧の肘を凍らせる。が、一瞬後に光の粒子となって、大気に散じた。

魔術が利かないことに一切動揺せず、セラは喉元に細剣を刺突。
半身になり、細剣を躲した赤銅鎧は、半円を描くように掬い斬る。
細剣で受けながらも威力を外に逃し、黒刀の峰を叩き上げた。

高く上がった黒石の刃と、白鉄の刃が、冷然な月の青光を写す。

黒刃と白刃が上段から振り下ろされ、打ち合わせた瞬間、セラはもう一本の細剣を細剣に打ち重ね合わせた。

刹那、赤銅鎧は黒刀を引き、セラの喉元へ刺突。

上体を逸らしたセラの顔の真上を黒刃が風の渦を巻いて、通過する。

その場で回転したセラが赤銅鎧の腕甲を蹴り上げ、後ろに跳んで

距離を取った。

赤銅鎧ウエルツが黒刀を青眼に構え、
セラが双剣を構える。

宙を舞っていた白い花卉が、月光を冷たくはね返す墓石の上に舞い落ちた。

赤銅の兜の奥で青い双眸が妖光し、
セラの緑の双眸から感情が抜け落ちる。

セラが地を滑るように低く突進し、
赤銅鎧が右足を一步踏み出した。

セラが双剣を斬り上げる。

赤銅鎧が黒刀を上段から斬り下ろした。

黒刀を振り下ろす赤銅鎧が上半身を捻り、胴鎧と腰鎧の合わせ部が擦れ合う。

——錆び付き、腐食した鉄製の合わせが——。

刹那の遅れ。その遅れで、セラには十分だった。

《リュケン流断斬》

左の細剣で赤銅鎧の首筋の隙間を断ち切り、右の細剣で首を跳ね飛ばす。

胴体だけとなった赤銅鎧が3歩、歩き――、地面に倒れた。

首を断ち切り、動かなくなった赤銅鎧を見下ろすセラ。^{ウエルツ}

「武器と武具は、己の命と同等なもの。」

あんたの言葉だっけ？

錆びないヒイロカネの鎧と言っても、百年も土の下じゃ、そこらの一般品以下よ」

「……ぐ……おのれ……」

ネクロマンサーは赤銅鎧が倒れると、すぐさま暗闇の向こうへ逃げて行った。

周りのゾンビやスケルトンが一斉に崩れ落ちる。

「ヌ！？ 待たんか！」

「この死体って、誰が片づけるんでしょうね」

「怖かったです。怖かったです」

「あゝあ、任務失敗ね」

「首謀者にしっかりと逃げられたからな」

「偽勇者の口八丁でなんとかならない？」

「俺のは、そこまで万能じゃねえよ」

＊

0401勇者は かしこさ か、あかゝった！

「墓場の警備ですか？」

濃紫の髪メイドが、不思議そうに小首を傾げる。

「ああ。死霊王アンデッドの手下が、配下を増やしてるようなんですね」

中庭のテラスで、竜斗とメイドは紅茶を片手に話していた。

「ですが、私にも出来ること出来ないことがあります」

「え？ 出来るでしょう。メイドさんなら」

「私にも出来ないことぐらいあります」

「そんなはずないでしょう」

竜斗は、にこやかな笑みを浮かべた。

眼を合わせながら、二人は無言で紅茶を啜る。

メイドは一つ、吐息を吐いた。

「一概に墓場と言われましても、数がありますし」

「剣豪とか、大魔術師とか、騎士団長とか、そういう墓を重点的に一般人が死霊化したところで、大して力はないからな」

「……それならば、神官騎士と聖騎士で対応できると思います。あと、魔術師の墓は別に良いでしょう。」

上級魔術師だと制御を離れやすいですし、下級だと役に立ちません」

「ほう」

竜斗は紅茶を飲み干す。

「話は変わるが、筋肉たちから、ワイバーン襲撃時の活躍を聞いた。ありがとな。」

メイドさんがいなかったら、筋肉と内気は死んでいた」

「いえいえ。城を荒らす害獣退治もメイドのお仕事です。ええ……、ねずみとか、鼠とか、ネズミとか……」

俯き、うふふふふ、と低く嗤うメイド。

「なあ、メイドさん」

「……あつ、はい」

「メイドさんが魔王を斃せば、手っとり早くないか？」

「申し訳ありませんが、お断りいたします」

メイドは微笑みを浮かべた。

「メイドの美学に反しますゆえ」

「美学……ねえ」

竜斗は片目を眇める。

薄々、感づいていた。

そして、今ので、はつきりと確信した。

この目の前にいるメイドは、人間じゃない。

何らかの種族が、人間に『擬態』してるのだ。

人間の模倣まねは好きだし、

自分が好きな『個人』は守るが、その他の人類など、どうでもよいのだ。

国が、繁栄しようが滅亡しようが、まったく関係ない。

誰が、死のうが生きようが、栄華を極めようが破滅しようが一切、関係ない。

——人間では、ないのだから——

ゆえに、人間の理屈は通じない。

この前、戦ったのも、自分で言った通り、城を荒らす害獣を退治したに過ぎないのだろう。

メイドにとって、ネズミとワイバーンの違いなど、齧齒類と爬虫類の違い程度なのだから。

元が何の種族か……何となく予想できるが、尋ねたりしない。藪を突ついて、命を危険に晒す趣味はない。

そうでなくても、魔王やら魔物やらが飛び出してきてるのだ。

「ふゝゝん」

内心を封じ込め、鼻で相槌を打った竜斗は、軽い調子で尋ねる。
「なら、なんで、姫さんの護衛をしてるんだ？」

それこそ、メイドの美学に反するだろうに」

「いえ、子守り子を守るも、メイドのお仕事ですよ。

私が、元は冒険者なのは知っておりますね。

この国の王妃も、元冒険者なのです。

私やフィーと組んで、世界各国を回っております。

やがて、この国の今の王と大恋愛をし、結婚をして、姫様が生まれた時に、私とフィーが王妃オリエンスと呼ばれたのです。

この子を守り、教育してくれと。

初めは、断るつもりだったのですが……………、

私もフィーも、生まれたばかりの姫様の可愛さにほだされまして
その頃を思い出したのか、メイドは頬に手を当てて、ほうと吐息
を零した。

「そんじゃ、剣はメイドさん仕込みか？」

「はい。剣と格闘技は、私が教えました」

「そりゃ、ドラゴンバスターにもなるわな」

「いえ。王妃が『ドラゴンバスター』でしたので血筋でしょう。
魔術や政治などは、フィーの直伝です」

「なるほど。あの年寄り口調は、フィーをマネていたのか」

「マネるというよりも、移ったと言った方が正しいですね」

「ん？ ちょっと、待て。

ドラゴンバスターの血筋で、

王族の権力持ってて、

メイドさんが剣と格闘を仕込んで、

フィーが魔術と知略を授けて、

って――、

最強じゃねえか!!」

「今頃、気づいたのですか？」

「もう、姫さんが勇者でいいじゃん」

「そういう話も出ていたのですが、神殿が横槍を入れて来まして」
「……ああ。勇者を選定する義務を放棄したら、
神殿、存在意義が無くなるもんなあ」

「誰もが、姫様が召喚されるものだばかり思っていたのですが……」

「出てきたのは、良くわからん二人だったと。
それにしても、よく姫さん、承諾したな」

「勇者の肩書には興味なかったようですし、

「王族の義務として魔王は斃す」と、常日頃から言っておられましたから」
「なる」

「それに、王道を歩いているコウイチ様は兎も角、
リュウト様は見ていて面白いと、楽しんでおられるようですし」
「勘弁してくれ」

メイドは頬に手を当てて、嘆息する。

「ただ、姫様。

口調ばかりか、性格までフィーに似てしまつて、お嫁の貰い手が、
なかなか……。

リュウト様、貰ってくださいませんか？」

「いらん」

「伯爵の地位も付いてきますよ」

「もっと、いらん」

「……残念です」

*

聖騎士の訓練場に、木刀の打ち合う音が響く。

片方は、光輝くような金髪を靡かせ、
もう片方は、赤に近い金髪が跳ねた。

《リュケン流断斬》

セラが放った二連撃を、木剣を立てて防ぐアリア。

《リュケン流地蛇斬》

セラの低く屈み込みながらの、臍への攻撃を、
アリアが木剣を下段から斬り上げて、打ち払う。

振り上げた木剣をアリアは、セラの頭上に振り下ろした。

細身の木刀で受けず、見切ってギリギリで躲すセラ。

躲しながらセラが放った喉元の突きを、アリアは木剣で受ける。

セラとアリアの手合わせを、光一は何一つ見逃さないように見つめていた。

——アリアさんに、手加減されているのは知ってたけど、
……本当に目一杯、手加減されてたんだなあ、俺。

あの宮廷騎士は、光一の何倍も速い。

身体のスピードは眼で追うのがやっとだし、双剣のスピードは、
もはや眼で追えない。

しかし、アリアは全て避け、防いでいる。

《リュケン流二連突》

セラは左の握りを右肘に合わせ、両方同時に突き出した。

右の木刀を弾いたアリアに、左の木刀の一撃が迫る。

上体を傾けたアリアが、寸前で避けた。

《リュケン流近打》

近距離まで近づいたセラが右の柄頭でこめかみを、左の木刀で右
足を狙う。

アリアは後退しながら、左の木刀を弾いた。

《リュケン流双昇牙》

退がったアリアへ、二本の木刀を下から斬り上げ、
右手を振り切り、左手は胸の位置で前に突き出す。

右へ躲したアリアが袈裟斬り、一閃。

セラが踊るようにクルリと回転して躲し、アリアへ斬りかかった。

「……やりますね」

「大技による連続攻撃。」

これがリュケン流、本来の戦い方よ！」

《リュケン流二重撃》

振り下ろした右の木刀が、アリアの木剣と打ち合わされた瞬間、セラが左の木刀を重ね打つ。

「ですが……甘い!!」

木刀と打ち合わさった瞬間、

アリアは魔力を練り上げ、後ろ足を捻り、重心を下げ、震脚して

――、

全身の力を込めて、一気に振り下ろした。

「キャ!!」

細い木刀が二本とも砕け散り、後ろへ吹き飛ばされたセラが尻餅を付く。

「……ふう」

一度、木剣を斜めに振ったアリアが、木剣の先端を地面に突いた。

光一は聖剣の柄を握りしめる。

俺は――、忘れていた。

上には上がいるってことを。

アリアさんと打ち合えるようになって、俺は慢心していた。

敵は、アリアさんよりも強い『魔王』だ。

今の強さで、満足しちゃいけない。

もっと、もっと……強く。

誰よりも強く。

——俺は、勇者なのだから。

アリアがペタンと座っているセラに、右手を差し出す。

「大丈夫ですか？ セラ」

「あたたたた……」

相変わらずの、バカ力デカラね。アリア」

「何度も言うように、力ではなく、『技術』です。

呼吸の仕方、魔力の練り方や通し方、力点の集中、重心の上げ下げ、体重移動、足捌き。

それらを総合的に、組み合わせたものです」

「それでも、あんたの体重で、ウェイトあの力は異常よ」

「ですから、それは——」

「おう。何やってんだ？ ツンデレ」

アリアの手を借りて立ち上がったセラに、歩いてきた竜斗が声をかけた。

「あんたこそ、何やってたのよ？」

待ち合わせ時間、過ぎてるわよ」

「あゝ、すまん。

この前の墓場の件で、メイドさんに対策を頼んできたんでね」

「死霊術師ネクロマンサーって、死霊王アンデッドの手下だもんね」

「そういうこと」

「何の話ですか？」

聞き捨てならない名前が出てきておりましたが」

青髪のシェラが細眉をひそめて、竜斗に詰め寄る。

「あん？

アンデッド城の主が襲撃に備えて、

剣豪やら騎士やらの墓場を掘り返して、戦力にしているってことさ」

「それ、大問題ですわ!!」

青い眼を丸くするシェラに、竜斗が頭を掻いた。

「だから、メイドさんに話しといた。」

今日あたり、コウにも話が行くんじゃないか？」

「竜斗。大將軍とか国王に話さなくて良いのか？」

眉を顰める光一に、竜斗が片目を眇める。

「いいんだよ。」

話すと権限やら縄張りやらで、ややこしくなるから。
メイドさんに任せておくのが一番だ」

「そうですね。それが、一番確実ですもんね」

桃髪を揺らして、2度、頷くアリエルと、

口許に人指し指を当てるセラ。

「ほんと、あのメイドって何者かしらね？」

「知らない方が身のためじゃよ」

「^{ファイ}術師。あなたは知ってるの？」

「さあての」

「そんなことより、仕事だ。仕事。」

行くぞ。ツンデレ」

「は〜い」

セラが鼻歌を唄いながら、竜斗の隣を歩く。

「ツンデレ。聖騎士に負けたってのに機嫌良いな」

「だって、あの聖騎士最強のアリアと互角……とはいかなくても、
打ち合えるようになったのよ。」

前は、一撃で負けてたんだもん。

剣で防いでも吹き飛ばされちゃうから、勝負にすらならなかったわ。

でも、今は避けられるようになったし」

グッと拳を握ったセラが笑んだ。

「私、速くなってる」

「そっか。頑張れ」

「あんたこそ、早く私から一本取れるまで上達することね」

「……………善処する」

＊

041 偽勇者は えむひ。ー か、かいふくした!

表通りから一本外れた通りには、露天市が開かれていた。

露天商の8割は旅商人で、各地の産物を並べている。

呼び込みや、値段交渉の掛け合いで、通りは活気と人に溢れていた。

そんな中を、竜斗とセラは並んで歩く。

2枚の大判の三角形薄焼きクッキーの間に、様々なジャムを段々に塗った菓子をかじりながら、露天商を冷やかしていた。

「平和ねえ」

「この前の飛竜の襲撃で、ここらも結構、破壊されたはずなんだが……人間てのは逞しいな」

「ええ、五日後には市が立ってたもの」

対面から歩いてきたカップルを、セラが眼で追う。

「……あつ、そうよね……」

「なんだ？」

「な、なんでもない!」

ちらちらと竜斗の右手を見るセラ。

「なんだ? 欲しいのか?」

三角クッキーを見せる竜斗に、

半眼になったセラがプイッとそっぽを向く。

「違うわよ!」

わかりやすいセラを見、

悪戯っぽく嗤った竜斗が右手で、彼女の左手を握った。

「はうわっ!」

「ほれ、行くぞ」

「はわわわ……て、ててて手を……はわわわ……」

真っ赤な顔で呟きながら、竜斗に手を引かれて歩くセラ。

竜斗はセラの手を引きながら、市を歩いて行った。

赤い顔をして、恥ずかしそうに手を引かれるセラが時折、繋がれた手を見ては、ニヘラと笑みを浮かべる。

「ねえ……ねえ、リ……リ……リュウ………」偽勇者!」

「あん?」

「……ッ!」

な……なんでもない!」

「なら、いいが」

「うう」

口を開きかけては、赤い顔で俯くセラ。

セラは、冒険者ギルドに着くまで、そんなことを繰り返していた。

「あっ、……もう着いちゃった」

冒険者ギルドの煉瓦作りの建物を見、セラが残念そうに呟いて、
渋々、手を離れた。

「なあ、ツンデレ」

「なに?」

「今度、デートでもするか」

「で、……でででデート!?!」
「おう」

「あ、あんたがどうしてもって言うなら、か、考えとくわ!」

「どうしてもだ。」

「だから、デートしような」

竜斗はセラの顔を覗き込む。

「……は……はううう……」

「で、返事は?」

「……………はい」

真っ赤な顔で俯いたセラが上目遣いで頷いた。

＊

二人は両端から、ギルドの掲示板に張ってある依頼書を見ていく。

「Dランクだと、碌なのがないわね」

「ないな」。

「まだ、運河の土木工事の方が稼げるな」

「アンデッド城戦の前に、稼いでおきたいところよねえ」

「それに、そろそろ、内気に魔力を思いつきり発散させてやりたい
よなあ」

「ねえ、偽勇者。これは?」

参加すれば、1金貨(10万円)。

対戦者のパーティーに勝てれば、金貨12枚（120万円）よ」

「さすがに怪しくないか？」

勝った時の報酬が、相場の3倍から4倍はあるぞ」

「それは、そうだけど……」

依頼内容は賭試合に出て、貴族お抱えの冒険者パーティーと対戦すること。

この手の依頼は、ウィンデルム王国の貴族が賭試合を行うことでよく出されていた。

また、冒険者も出資者を見つける手段として、活用している。

合法的な賭試合で、殺し合うことは無いが、

安易に受けると大怪我したり、最悪、死ぬ場合もあった。

竜斗が心配をしているのは、依頼内容に対して、報酬が異様に高^た価^かいことである。

非合法の殺し合^{死合}いをさせられる可能性もあるからだ。

「でも一応、ギルドは通ってるな」

「違法ではないってことね」

「ランクも適正ってことか……やってみるか」

＊

「ムウ。遠かったな」

「ほとんど、国境付近ですよ」

「付近というか、国境の境だよ」

「ドラさん。ご苦労様です」

「ギャウ！」

竜斗たちは、ファーレン王国とウィンデルム王国の国境に来ていた。

数キロ先がウィンデルム王国である。

辺境の領主らしく、門から屋敷の玄関まで1キロあり、広大な庭園が広がっていた。

辺境の領主の屋敷に着いた竜斗たちは部屋に荷物だけ置いて、そのままダンスホールに案内される。

そこでは、呼び込んだ冒険者と来賓客たちがお披露目の兼ねて、立食会パーティーを催していた。

壇上では、この地の領主が長々と挨拶をしているが、誰も聞いていない。

A～Eレベルの冒険者を1組ずつ、計5組の冒険者が集められるようだった。

ランクAやBの冒険者の周りに来賓客が集まり、武勇伝を聞いている。

明日の賭の情報収集と言ったところだろうか。

竜斗のパーティーでは、アーサーの周りに人が集まってくる。

そして、アーサーが次々とポージングを決めることに、歓声が上がった。

勿論、白い歯のキラメキも忘れない。

「生き生きしてるなあ。筋肉」

「ウヌ！ これだけで来た甲斐があったというものだ！！」

ワシは報酬がなくても、気にしないぞ！」

「いやいや。報酬がなきゃ、俺が困る」

「偽勇者さん。これ美味しいですよ!!」

「ツツコミ。あんまりガッツいて、明日に響かせるなよ」

「大丈夫です。」

その時は、アーサーさんに治癒魔術をかけてもらいますから」

「……食いすぎは、治癒魔術じゃ治らねえと思うぞ」

「ええっ!？」

当てにしたのに!!」

「……人が……着飾った人が、いっぱいです……」

「ねえ、レイ。」

あなたも良家の娘でしょうが。

社交会
パーティーぐらいあったでしょうに」

「いつも、レンちゃんに任せてました」

「……………慣れなさい」

「ひうっ!」

「では、本日お集まりの皆様。」

明日、冒険者たちと対戦するパーティーを紹介しましょう」

壇上の領主の言葉に、談笑していた来賓客や冒険者たちが、一斉に眼を向けた。

現れたのは6人。

光を水紋のように反射する青い鎧を着た騎士。
猫耳の獣人娘。

蒼いコートを着た魔術師。

巨大な斧を背負ったドワーフ。

金糸で縁取られた白い服を着ている女性神官。

そして、輝くような白い鎧を着ている金髪碧眼の剣士。

その最後の一人を見た瞬間、竜斗が青ざめた。

「……おい、マジかよ」

「どうしたの？」

「勇者だ」

「はっ!？」

「ウィンデルム王国の勇者だよ。」

あの真ん中の白い鎧の奴に、会ったことがある」

「マジで？」

「ああ、大マジだ」

「どうするの？」

「皆に声をかけろ。」

「いったん、部屋に引き上げるぞ」

＊

「本当に、ウィンデルム王国の勇者なんですか？」

「ああ、間違いない」

竜斗はクローゼットに吊されていた燕尾服に着替えながら、レイフォンに答えた。

「勇者と戦え……か。」

道理で、対戦者パーティーを倒したら金貨12枚（120万円）のわけだ」

「普通じゃ、勝つのは無理よね」

「まあ、報酬が高価い理由が、非合法じゃないことだけはわかった」

「食べ物とか、ヤバイかしら」

「……かもな」

「ええっ！？ 僕、食べまくっちゃいました！」

「筋肉に毒消しの魔術をかけてもらえば良いだろ」

「あ。それも、そうですね。」

「お願いします。筋肉印の葉箱さん」

「ヌウ！？」

燕尾服に着替えた竜斗が鏡の前で蝶ネクタイを締め、セラがハンカチの位置を調整する。

「そうやって良い服着ると、馬子にも衣装よね」

「んじゃ、ちょっくら、情報収集に行ってくる」

「行ってらっしゃい」

残ったセラたちは、各自の武器を点検し始めた。

セラは魔剣の柄頭を外し、その奥にある《鍊金》の魔法陣に魔力を流し、刃を自動修復させ、

レイフオンが魔法杖を、ウィズがライフルを分解整備し、

アーサーは己の筋肉^{ふき}を磨き上げるために、日課の筋トレを行う。

「そういえば、セラさん。」

この前、デートしてましたよね」

魔法杖を組み上げ終わったレイフォンの問いに、セラが細剣を滑らせた。

「ち、違うわよ！」

「でも、手を繋いで歩いてましたよね？」

「み……見たの？」

「はい。偽勇者さんに手を引かれて、真っ赤になってました」

「つ……つけてたの？」

レイフォンが金の眼を逸らす。

「偶然です」

「そうそう」

「ウヌ」

「し、神官まで!？」

「リュウトって呼びたそうにしないで、でも呼べなくて。
セラさん。可愛かったです」

「や、ヤメテ~~~~!!
言わないで~~~~!!」

布団に顔を埋め、バタバタと足のみで暴れるセラ。

「余裕あるよな……お前ら」

帰ってきた竜斗が扉に寄りかかり、嘆息した。

「あんたのせいよ！」

セラが投げつけた枕を、竜斗は片手で掴み取る。

「何だよ？」

「何でもないわよ！」

それで、結果は？」

竜斗は蝶ネクタイを外した。

「……いまいち良くわからん」

「なによ、それ？」

「噂だけは、いくつもあってな。

この前、ウィンドルムの勇者が、コウに負けただろ」

「あゝ、うん」

「代わりに、冒険者を叩きのめして、憂さ晴らしをするらしい……とか」

「はっ？」

「自分たちは強いってことを、貴族に見せるためらしい……とか」

「……はあ」

「ほら、ウィンドルムって、勇者はいるけど、魔王はいないだろ。

だから、自分たちの有用性を示しておかなきゃならないらしい……

……とか」

「バカじゃないの」

「まったくだ。」

まあ、あくまで噂だからな。
本当のところは、わからん」

荷物の中の水筒から水を飲む竜斗。

「試合形式は、ランクEからAまでの冒険者たちに対して、勇者パーティーが総当たり戦で戦うらしい。

ちなみに、隣の国から冒険者を集めてるのは、自分たちの顔を知られてないからだ、とか。

これも、あくまで噂だが」

「自国の勇者相手じゃ、後込みするもんね。

リタイアじゃ、興ざめでしょうし」

「だな。」

と、いうわけで内気」

「は、はい」

「明日は思いっきり、魔術をぶっ放せるぞ。

だから、今日はもう寝とけ」

「はい!!」

続きの部屋に入ったレイフォンを見届けた竜斗は、椅子の背を前に跨った。

「さて、俺らは作戦会議だ」

「え？ レイが撃てば終わりでしょ？」

「それでも、耐える奴がいるかもしれん。

何せ、勇者様御一行だしな。

現に、コウたちでも、フィーあたりなら、余裕で耐えそうだし」

「ムウ。確かに」

「ですよねえ」

「アリアも耐えそうよね」

「てなわけで、作戦を考えるぞ」

底意地悪い笑みを浮かべる竜斗に、
セラが頬杖をつく。

「あんたって、悪巧みしてる時、本当に楽しそうな顔をするわね」

「実際、楽しいしな」

「あなた。絶対に、勇者じゃないわ」

*

0421偽勇者のまえに　となりのくにのゆうしゃ　か、あらわれた。

試合当日、空は快晴だった。

領主の敷地内にある円形闘技場。コロセウム

会場自体は、ウィンデルム王都の闘技場の、3分の1の規模だが、それでも、観客席を守るように、半球状に防護結界が設置されている本格的な施設だった。

その円形闘技場コロセウムに、観客の歓声が轟く。とどろ

昨日、竜斗が入手した情報通り、
ランクEの冒険者たちから、隣国セドリックたちの勇者パーティーと順に戦う催しであった。

賭は、どちらが勝つか？　の勝敗枠、
勝敗が決まるまで、何分かかるか？　の時間枠、
勝ったパーティーが何人、残っているか？　の残留枠、の3枠がある。

勝敗枠の倍率は、ランクCまでセドリックたちで、勇者ほぼ一倍。
セドリックたちの正体は、貴族たちの間では公然の秘密であり、
その強さは周知の事実だった。

現に、セドリックは、勇者たった一人で、ランクEの冒険者パーティー4人を、5分弱で倒していた。
彼の仲間は後ろで見えていただけである。

会場に、時間枠の外れ札^{チケット}が舞った。

もつとも、このような賭試合では、ランクBとAが本戦なので、観客も、ランクCまでは冒険者の様子見程度に少額しか賭けない。

「殺しはしないようだな」

「みたいね」

ランクEの冒険者たちが運ばれ、

ランクDの竜斗たちが円形闘技場の中央に進み出た。

今は、ベット^{賭け}タイム中で、試合開始まで、しばらく時間がある。
観客たちは、竜斗たちを見、思い思いに賭けていった。

「ウヌ。心地良い視線である。
見よ！ この筋肉！！」

「……ひ、人が……いっぱいの人に、見られてます……」

「大丈夫よ。レイ。」

人なんて、全部、ケーキだと思っておけば良いのよ」

「……ケーキですか……」

んうゝゝ、人は、ケーキケーキケーキ、ケーキ……。美味しそうです」

「いや、食べれないわよ」

「……………そうですか」

「レイさん。」

緊張する時は、こうやって、手のひらに『人』という文字を書い

て――」

「あゝゝん」

「喰われるっ!?!」

「余裕だなあ。お前ら」

半笑いで、黒髪を掻く竜斗。

「やあ、君たちが次の対戦相手だね。

良い勝負をしよう」

金髪碧眼の隣国^{セドリック}の勇者が朗らかな声で、先頭にいる竜斗に話しかけてくる。

不正防止のため、試合前に対戦者に触れることは禁止されているが、

許されるならば、握手を求めてきそうな笑顔であった。

竜斗は槍を肩に担ぐ。

「あんた。さっき、1人で戦ってたな」

「ええ。せめてもの、ハンデです。」

僕が一人で、あなたたち全員とお相手しますよ。

こう見えても、僕は強いので」

「ふゝゝん。

こっち全員対、あんたら1人1人の勝ち抜き戦でどこか?」

「そんなところですよ」^{勇者}

うんうんと頷くセドリックに、

竜斗は人懐っこい笑顔を浮かべた。

「あんた、良い奴だなあ。」

後ろの奴らは、審判役ってわけだ」

「はい。その通りです」

竜斗は振り返り、大声で叫ぶ。

「みんな、この白い鎧だけを狙えよ!!」

後ろの奴らは、無視して良い!

せっかく、手出ししないんだ。

態々、藪を突く必要はない。

いいな!!」

セラたちは薄い笑みを浮かべて、頷いた。

竜斗はセドリックの後ろに立つメンバーに呼びかける。

「審判どもは、そこにいと邪魔だ。」

下がってろ!!」

と、その時、銅鑼が鳴り響いた。

ロングソード
聖剣を抜くセドリック。

後ろに下がり、対戦をじっくりと見守る勇者の仲間たち。

レイフォンを先頭にして、後ろに武器を構える竜斗とセラとアーサー。

その後ろで、ウィズがクロスボウを構えた。

レイフォンの真後ろに立った竜斗が、彼女の耳元で囁く。

「後ろの奴らも、まとめて、やっちまえ!」

「はい!」

レイフオンが、ゆつくりと魔法杖を掲げる。

瞬間、3メートル級の魔法陣が10陣、展開した。

眼を見開くセドリツク。

にやりと嗤う竜斗。

刹那、全ての魔法陣から、一斉に魔術が放たれた。

「……あ……あははは……あはははは……あははははははっ」

光が、炎が、風が、衝撃波が、氷が、雷が、全てを薙ぎ払い、破壊していく。

攻撃魔術が観客席を守る防護結界と接触し、凄まじい閃光を放つ。

[illegible]

闘技場に響き渡る、暴走したレイフオンの笑い声。

さらに魔法陣が10陣、展開し、怒濤の攻撃が絶え間無く撃ち放たれる。

ドラゴン・ブレスすら耐えると言われている防護結界が、衝撃に耐えきれずに歪み出した。

勇者 セドリックの後方に座っていた観客たちが、我先に逃げ出す。その手に、しっかりと賭札を握り締めながら。

[illegible]

コロセウム
円形闘技場に、レイフオンの哄笑が反響する。

軽やかに、高らかに、楽しげに、愉悦を伴って。

嗤い声が高まるにつれて、魔術の威力も、さらに上がっていく。

次元波の共鳴音が鳴り響くと同時に、観客席を覆う防護結界が崩壊し、

コロセウム
円形闘技場の一角が吹き飛び、

その後ろにある牧草地帯を、根こそぎ抉り、消し飛ばした。

「は は は は は は は は は は …… は は は …… は は ……」

唐突に、笑い声と魔術が途切れる。

眼を回し、唐突にパタリと倒れるレイフオンを、後ろにいた竜斗が抱えた。

「内氣。ご苦労さん」

氣絶したレイフオンを、闘技場の隅に寝かせる。

竜斗がセラの横に並んだ。

コロセウム
円形闘技場の観客席の一角と、選手用通路が吹き飛び、
視界を遮っている、舞い上がった粉塵が収まれば、遙か向こうに
山々が見えるだろう。

竜斗は舞い上がった粉塵の奥に向かって、礼を言う。

「ありがとよ。気を抜いてくれて。

おかげで、苦勞せずに倒せたぜ」

「とことん卑怯よね。あんたって」

「今回は、向こうが間抜けなだけだと思っぞ」

「あはは。耳が痛いですねえ」

「「「ッ!？」」」

粉塵の中から聞こえてきた爽やかな声に、
竜斗たちが、瞬時に武器を構えた。

薄れていく粉塵の中で翻る、蒼いコート。

一人の青年が、無傷で佇んでいた。

茶色の髪に、焦げ茶色の瞳の魔術師。

端正で爽やかな容貌の、20代前半の美青年。

その青年の身体に沿うようにして、幾何学模様の線状に、青い光を発している。

手には、身の丈ほどもある長い魔法杖。

杖の先端に、鉄棒に囲まれた球が付いていなければ、鉄製の棍だと見紛いそうな魔法杖だった。

「いやいや、シールドを小さく堅く絞らなければ、打ち抜かれるところでした。」

4枚あった魔術シールドの盾の3枚は、打ち砕かれましたし」

全身から、幾何学模様状に青い光を放ちながら、爽やかな笑顔を浮かべる蒼いコートシールドの魔術師。

「他の奴はいいのかよ？」

仲間を気につけない魔術師の態度に、

油断なく魔槍を構えながら、竜斗が問いかけた。

蒼いコートの魔術師は、ピッと人差し指を、顔の前に立てる。

「みなさん、頑丈です。」

女神官セリーヌは、双月の加護を受けてるから、滅多なことでは傷つきま

せんし、

獣人娘ミヤニーヤは生命力が強く、特殊変異で桁外れの回復力を持っています。

竜騎士カイトルは、本物のドラゴンの鱗を使った特注ドラゴンメイルの青い鎧を着てま

し、

ドワーフガングルフはドワーフ族で、知っての通り、無駄なほど頑丈です。

そして、セドリックは、ゴキブリ以上にしぶといですよ。

どんな環境下だって、彼は生き残るでしょう。

ボクが保証します」

片目を睨める竜斗。

「……………伊達に、勇者はやっちゃいないってか」

「あれ？　ボクらが勇者一行だと知ってたんですか？

それは、それは。通りで。

あつ、そうそう。自己紹介しておきましょう。

ボクの名は、レティスと申します」

一礼する蒼いコートレティスの魔術師の名乗りに、
セラが眼を見開く。

「『最速』の魔術師！！」

「知ってるのか？」

「ええ。加速魔術ヘイストを扱う、『最速』と呼ばれてる魔術師よ。

1対1で相手になるのは、『術師』のフィーぐらいだって……」

「いえいえ。あなたたちの国の姫の護衛をしている、紫の髪のメイドに、

1対1で戦って、ボコられたことがありますよ。

……………メイドの方は、姫に格闘技を教えながらの、片手間でしたか」

「本当に何者よ！？　あのメイド！！」

「そう言う、あなたたちこそ、何者ですか？」

竜斗が嗤い、
セラが笑み、
ウィズが笑い声を洩らし、
アーサーが白い歯をキラメかせた。

「 「 「 偽勇者!!
「
「
「

＊

043 偽勇者のまえに まし、ゆつしか、あらわれた。

幾何学模様状の青い線を発光させているレティスを前に、前衛にセラとアーサー、中間に竜斗、後方にウィズと、陣形を組んだ。

ウォーター・プレス
「水圧」

セラの放った大量の水が、蒼の魔術師へ渦を巻いて迫る。

シールド
「力の楯！！」

レティスが展開したシールドに、水渦が弾かれ、水飛沫を飛び散らせた。

竜斗が石畳に溢れる水流に魔槍を突き差し、魔力を流す。

竜斗の魔槍が帯電したのを見て、

コールド
「氷結！！」

レティスは一瞬で足下の水を凍らせた。

レティスが竜斗に気を取られた死角を突き、セラが斬りかかる。

《リュケン流十字斬》

二筋の閃光が疾しかった。

だが、残像を残してセラの2連撃を避けたレティスが、魔法杖を横薙ぎに一閃。

ドゴッ！

細剣で魔法杖を受け止めたセラは、その衝撃に吹き飛ばされる。

宙に浮くセラへ、レティスが魔法杖を刺突し――。

直撃する寸前、割り込んだアーサーが腕で魔法杖を叩き落とした。

踏み込んだアーサーがメイスを振り下ろす、その刹那の間――、
レティスは高速で、急停止、後退、半円を描くようにステップし、
下段から魔法杖で打撃。

ズドン！！

「ヌウッ！！」

腹に打ち込まれた魔法杖の一撃を、アーサーは耐えきる。

「へえ、耐えましたか……」

呟くレティスを前に、アーサーが右へ跳んだ。

同時に、アーサーの後方で、クロスボウ弩を構えたウィズが引き金を引く。

飛来する弓矢を、レティスは平然と避け、

ウィズと竜斗に眼を向け、苦笑した。

キュア・ボイゾン
「解毒」

竜斗が風に流していた痺れ薬の効果が、一瞬で消去される。

「げっ、バレた！」

「当然です。」

ウィンド
風圧！！」

レティスが放った風の魔術で、粉末痺れ薬が、竜斗たちへ舞い戻り、
「やべっ！」

竜斗が魔槍の雷を発して、宙を舞う痺れ薬粉を焼き払った。

咳込んだ竜斗が唾を吐く。

「……チッ。少し吸い込んだか」

竜斗・アーサー・セラが、レティスを取り囲み、
竜斗の後ろで、ウィズが弩を構えた。

「なんだよ。あのスピード。

本当に人間かよ」

「だから、言ったでしょ。

『最速』だって。

すでに、加速中なのよ」

「ヌウ。羨ましき筋肉だ」

「いえいえ。

ボクは、極平凡な人間ですよ」

油断なくレティスを弩で狙うウィズが、文句を付ける。

「そんなことより、なんで、魔術師が魔法杖でぶん殴ってくるんですか？」

「魔術を施術するよりも速いからです。

せっかく《加速》してるのに、魔法陣の展開で遅くなってるのは本末転倒でしょう」

「魔術師じゃない!？」

「いえいえ。ボクは魔術師ですよ。
戦える魔術師——戦闘系魔術師です」

「あんた。加速状態なのに、よく普通に話せるわね」

「あはは。

慣れですよ。慣れ」

レティスは明日の天気を話すように、笑顔を浮かべた。

「あつ、そうそう。

こうやって、会話で時間を稼いで、《加速》切れを狙っても無駄ですよ」

レティスは顔の前に、ピッと人差し指を立てる。

「ボク、三日間、この状態でいられますので」

「マジに、反則チートかよっ!？」

竜斗の悲鳴とともに、セラとアーサーが攻撃をしかける。

前方に出たアーサーを壁役とし、

2刀流のセラが、胴薙ぎ、袈裟斬り、掬い斬り、刺突、斬り落とし、回転斬り——

その連撃を、爽やかな笑みを崩さずに全て避けたレティスが、魔法杖を振り下ろした。

ズゴッ!!

「ヌウッ!!」

その魔法杖を、身体筋肉で受けきるアーサー。

セラの動く楯と化しているアーサーに、レティスが感心したように眼を見張る。

「丈夫な方ですねえ」

「ウヌ！ ワシの筋肉に防げぬものはない！！」

「あはは。

それは、凄いですねえ」

会話の間も、絶え間無く繰り出されるセラの縦横無尽の連続攻撃は、

幾何学線状に青い光を発している、笑顔のレティスに掠りもしなかった。

二人を、子供のようにあしらう^{蒼の魔術師}レティスを見、竜斗が奥歯を軋らせる。

「やれるか？ ツツコミ」

「はい。でも、対『勇者』用の罠ですよ。

『最速』、しかも魔術師。利きますかね？」

「わからん。

だが、隙を作るくらいは出来るだろうよ。

て云うか、出来てくれ」

メイスで魔法杖を撥ね除けたアーサーの渾身の体当たりを、レティスが残像を残すスピードで避ける。

その瞬間を狙って、ウィズがカスタム・弩^{クロスボウ}から、鎖分銅を発射した。

飛来する分銅を、一瞥したレティスはあっさりと避ける。

「……クソッ。無理か。」

剣士だと、反射的に剣で弾くから、鎖が絡みつきやすいんだが…。

ツツコミ。もう一度だ。

今度は、魔術師に掠るように、ツンデレとの間を狙え」

「はい！」

前もって、準備しておいた二台目の弩からクロスボウ発射された鎖分銅を、レティスが軽やかなステップで避けるのと同時に、セラが細剣で、分銅を打ち返した。

「おや？」

分銅の鎖が、不意を突かれたレティスに絡みつく。

「ナイス！！ ツンデレ！」

地面ごと鎖を、雷の魔槍で突き刺した竜斗が魔力を流した。

「喰らえっ！！」

「ガッ！」

鎖を伝導した雷に、レティスの身体が撥ねる。

「グッ……なかなか……。
レイ・ボウ
光の矢！！」

レティスの前に魔法陣が展開し、2本の光矢が竜斗へ飛来。

咄嗟に、魔槍から手を離して地面に転がり、光矢を避ける竜斗。

直後、レティスの背後から、セラが双剣を斬り下ろした。

《リュケン流十六連撃》

セラの一番速い高速連続双剣技――

――1撃、上体を傾けて、避けられ、

――2撃、身を低くし、躲され

――3撃、半身になり、刃をやりすごされ、

――4撃、鎖の下、肩口に刃が食い込んだ。

鮮血が飛び散る。

だが、セラには見えていた。

刃が食い込む刹那、レティスは身体をずらして、態^{わざ}と刃を喰らい

――セラに、分銅の鎖を断ち切らせたことを。

――5撃、細剣が宙を空振った。

一瞬で3メートル、離れ、

セラの攻撃の間合いから脱出したレティスが、コキリと首を鳴らす。

血の染み出す肩を見、レティスが痛そうに顔をしかめた。

「傷を負ったのは、久しぶりです。」

やっぱり、痛いですねえ。

《ヒーリング^{治癒}》！

雷で感電し、さらに、鎖に巻かれた相手に放ったセラの最速連続攻撃は、わずか四合で逃げられ――

しかも、当たった一撃は、鎖を断ち切るために態と喰らったレイスを眺め、

急に、泣き出しそうに顔を歪めたセラが、目尻を手のひらで拭う。

「神官!!」

傷を負ったってことは、生身は傷つけられるのよ! もう一度、行けるわね!!」

「ウヌ!! まだ、ワシの筋肉は尽きてはおらん!!」

「いやゝゝ。

次は、どんな手で来るか、楽しみになってきました」

頭の後ろに右手を当て、爽やかに笑うレイスに、セラの双魔剣が、炎と氷を吹き上げた。

「……………絶対に、殺す」

鎖から脱出したレイスの動きに、ウィズが恐慌を来たしていた。

「なんですか、あれ!？」

ほとんど、分身して見えましたよ!!」

「どんだけ、化け物なんですか!？」

「ああいう奴は、反則^{チート}って言うんだよ。

「ったく……、主人公と戦う三流悪役や雑魚の気持ちが、よくわかるぜ。」

「そりゃ、『バカなツ!!』と叫びたくもなるわな」

「……やっぱり、あの人、倒せてなかったんですね」

「内気？」

「レイさん？」

振り返る竜斗とウィズに、小さく頭を下げるレイフォン。

「はい。すいませんでした」

「よく起きたな」

「最近、8割とか5割とかで魔力を止める練習^{暴走}をしてたからでしょうか？」

でも、急激な魔力低下で、眼を回してしまいました」

「残りの魔力は？」

「2割弱ぐらいです」

「ツツコミ、ライフルは持ってきてるよな」

「勿論」

「もう1回、仕掛けるぞ」

竜斗はウィズとレイフォンに、策を耳打ちする。

「タイミングが難しいですね」

「他に方法がねえんだよ。」

あったとしても、今の俺には思いつかん」

「やるしかないですね」

「そういうこった」

「わかってると思いますが、その魔術だと、わたしは一度しか使え

ません」
「了解」

竜斗は魔槍を握り、前線に走った。

「筋肉は俺とオフェンス^{攻撃}。

ツンデレはサポ^{補助}ート!!」

振り向いたセラだったが、
竜斗の瞳に、無言で後方に下がる。

前に出た竜斗が魔槍を振った。

光速で発される稲妻を、レティスは難無く避ける。

セラが魔剣を振り抜き、多数の氷弾を飛ばした。

全弾、魔法杖で弾くレティス。

アーサーが上段からメイスを振り下ろす。

レティスは魔法杖を打突し、メイスを押さえ込んだ。

眼を瞑ったレイフオンは魔法杖を掲げ、魔力を練り上げ、
片膝をついたウィズは銃口を下に向け、ライフルの精霊石に左手
を当てて魔力を充填しながら、じっと戦闘を見つめていた。

＊

044 偽勇者は まし、ゆつし と たたかっている。

竜斗は、間合いの外から魔槍を振った。

振った刃から、宙を裂いて稲妻が飛ぶ。

レティス 魔術師は、わかっていたように雷を避けた。

光速で飛ぶ雷を余裕で避ける。そんなこと、あり得ないのに、現実には躲していた。

ホール・ウインド
「竜巻!!」

ホール・ウインド セラが切り裂く竜巻を作りだし、炎の魔剣を竜巻に突き入れる。

風の渦に魔力の炎が巻き込まれ、炎を吹き出した。

セラの細剣に従って、炎の竜巻がレティスへ襲いかかる。

ブラスト
「衝撃!!」

魔術 レティスの衝撃波で、炎の竜巻が一瞬で掻き消された。

レティスが魔術を使う瞬間を狙って、

セラと竜斗が氷の散弾と雷を撃ち込むが、平然と躲される。

闘技場に、炎と氷と雷が乱舞する。

竜斗とセラは、もう後のことなど考えず、魔力を連発していた。

レイフォンは魔法杖を掲げながら、レティスの気が一瞬でも逸れる瞬間を待っていた。

今、魔術を行使しても、寸前で躲されるか、自分が倒される。

そして、レイフォンの悪癖の一つとして、魔力消費量の少ない魔術を放つと、全魔力をその魔術に変換し、必ず暴発させてしまう。

——ゆえに、チャンスは、たった1回のみ。

今のレイフオンは、戦闘を見つめ続けることしか出来なかった。

黒髪黒眼の長身痩躯な兵士が魔槍を振り、雷を飛ばす。

レイイスは苦笑を浮かべて、避けた。

雷が真っ直ぐ飛来することがわかっているのならば、避けることは容易い。

この兵士は、初動動作が大きすぎるので、次の攻撃が予測しやすいのだ。

ならば、その刃筋の直線上にいなければ、いいだけのこと。

それよりも、双剣使いの方が遙かに厄介である。

獣人猫娘ミヤニーヤと同等のスピードで動き、剣捌きは一流。

その双剣の軌道は読めず、さらに炎と氷を纏っている。

その剣幅といい、間合いといい、二本の大剣クレイモアを、操っているようなものだ。

逆に言えば、そう想定して戦っていれば、不意を付かれない限り、不覚を取ることはない。

そして、筋肉質のメイス使いはひたすら頑丈。

魔法杖で殴打する、こちらの手が痛くなってくるほどである。

たぶん、治癒と防護の無意識魔術の持ち主なのだろうが、ここまですごいのは、初めて見た。

さらに、その後ろにいる二人が気にかかるが、
双剣使いと筋肉質のどちらかが、常に直線上に居るように動いた
め、なかなか隙が見つからなかった。

と、黒髪黒眼の兵士の動きが止まる。
魔力切れのようだった。

双剣使いの炎の鞭を避けながら、レティスは呟く。

「……そろそろ、飽きてきましたねえ。

終わりにしますか……。

エンチャント・ウエボン
《武装魔力付加》——！」

セラの炎の魔剣で作った炎鞭を、蒼いコートを靡かせて避けなが
ら、

魔法杖に攻撃力付加魔術をかけた魔術師が瞬間、——消えた。

ゴキヤ——！！

レティスが一瞬でアーサーの懐に入り込み、
下段から魔法杖を打ち込んだ。

彼の身体を浮かせるほどの強打を放ったレティスが、
魔法杖の放つ銀光魔力付加光しか見えないスピードで、宙のアーサーを滅多
打ちにする。

リアルで空中コンボを見せつけられた竜斗は眼を見張ったまま、
一歩も動けなかった。

アーサーの手足が嫌な音とともに、あり得ない方向に曲がついていく。

「ヤアアアアアアア!!」

背後から突進するセラへ、

レティスが振り向きざま、魔法杖を横薙ぎに一閃。

ガッツ!

細剣を十字にして、魔法杖を受けたセラが、吹っ飛ばされた。

バランスを崩しながらも着地したセラへ、

地を滑るように迫ったレティスが魔法杖を打突。

横っ跳びに避けたセラへ、レティスが魔法杖を引き――、

その杖の先端に、展開する魔法陣。

宙に浮いた状態のセラは、眼を見開く。

眼を細めたレティスが、
ブラスト

「衝撃!!」

魔法杖を突き放った。

その瞬間、セラの目の前に人影が覆い被さる。

「……え?」

「グアアアアアアアア!!」

セラの耳元で、悲鳴が響いた。

セラに覆い被さり、衝撃を背中でもに受けた竜斗の絶叫。
ブラスト

セラと倒れ込みながらも、竜斗が叫ぶ。

「やっちまえ!!」

ディ・スベル
「解呪!!」

レイフォンが魔法杖を地面に突き、半径5キロを白い光が覆い満
たした。

白い光に覆われ、視界0の中、片膝をついたウィズは息を長く吐
く。

——まだだ。まだ、……早い。

「……リュ……リュウト!! リュウト!! リュウト!!」

白い光の中、覆い被さる竜斗へ、セラが必死になって呼びかけた。

「……セラ……」

「リュウト。」

あんた、なんてバカなことを——」

半泣きになっているセラへ、竜斗が朦朧と告げる。

「……セラ。……お前で……決めろ……」

「……う……うん……うん!!」

セラの返事を聞き、安心したように崩れる竜斗。

セラは双剣の柄を握り締めた。

「……ヌウ」

捻り切るような痛みが全身を貫いたアーサーは、呻き声を押し殺す。

レイフォンのディ・スベル解呪で、アーサーの無意識治療魔術が解除されたのだ。

だが、——ここは、笑うところである。

アーサーの無意識魔術すら無効するレイフォンの解呪魔術。

たとえば、レティスの《加速》魔術だとしても、その影響からは逃がられない。

視界を埋め尽くす白い光が徐々に下がっていく。

白い光に透けて見えるレティスは、幾何学模様の青い線の発光が消えていた。

地面に転がったまま、アーサーは血だらけの歯を見せて、破顔した。

——まだだ。

ウィズは狙撃したくなる手を押さえる。

膝をついた僕からでは、解呪の白光でレティスの姿が見えない。

隣で、レイフォンの倒れる音。

しかし、ウィズの眼は、白い光の向こうにいるレティスから離れ

なかった。

——まだだ。

白光が下がりながら薄れ、レティスの人影が朧気ながら見えてくる。

全身を覆っていた青い光の線が消えていた。

——まだだ。

ここで撃っても、レイさんの解呪に、魔力弾が巻き込まれる。

——もう少し、あと少し……。

白光がウィズの肩まで光が下がり——、

今——！

ウィズは、ライフルを肩に構えると同時に狙い——、狙うと同時に引き金を引いた。

——その間、わずか0.8秒の早撃ち。

ウィズの殺気に、レティスが振り返り、反射的に避けようとする。

流石は勇者一行。人並み外れた反射神経だった。

しかし、それでは——『遅すぎる』。

《加速》してない、人並み外れた反応速度程度では、『遅すぎる』

。

このライフルに対しては——、魔力弾に対しては『遅すぎる』。

レティスの脇腹を魔力弾が貫通し、血飛沫が舞い散った。

脇腹を押さえたレティスが頭上に魔法杖を掲げる。

ガラス玉のような、無機質の焦げ茶色の瞳。
視線の先は、レイフォン。

——やばい！！

ウィズはライフルを投げ捨て、倒れているレイフォンに覆い被さった。

同時に、レティスが魔法杖を振り下ろす。

サンダー・ボルト
「雷撃！！！」

ウィズの背中に、雷が落ちた。

大口を開けたウィズは、痛みで声すら出せない。

一瞬の通電が終わり、ウィズは気絶した。

《リユケン流2重撃》

殺気を感じ、レティスが振り返った時には、白刃が振り下ろされていた。

ガキン！！

セラの一撃を、とっさに片膝をついたレティスが両手で、横に持った魔法杖で防ぐ。

受けた魔法杖は半ばまで斬り裂かれ、レティスの頭上、3センチで刃が止まった。

目前で、鋭光を反射する白刃。

レティスが受け止められたのは、まさに幸運。

「惜しかったー」

口を開くレティスの魔法杖を、細剣で押さえつけたまま、

セラは、もう片方の細剣を、横からレティスの脇下へ刃を滑らせる。

殺気の籠った必殺の一撃。

と、その時、押さえつけていた魔法杖が、溶けるような感触で消えた。

横薙ぎに振った細剣が空振り、セラはたたらを踏む。

「ッ！？」

顔を上げたセラの3メートル先には、全身に青い光の幾何学線を纏^{まと}い、

《加速》状態の『最^レ速』の魔術師。

「……な……なんで……？」

笑みを浮かべたレティスは、端正な顔の前に人差し指を、ピツと立てた。

「《加速》と肉体強化を、無^レ詠唱で、
しかも、一瞬で自分にかけられる。だからこそ――、

ボクは、――『最^レ速の魔術師』――と呼ばれているのです」

「どこまで、反^{チート}則なのよ!!」

「うん。なかなか、頑張りましたよ。あなた方は。
ボクを、ここまで追い込んだ方たちは、本当に久しぶりです。
実に、楽しかったですよ」

血濡れた脇腹を押さえながらも、心底、楽しそうな笑顔を見せる
レティス。

セラは、右に眼を向ける。

手足が振じれ曲がったアーサーの全身から、無意識治癒魔術の発
光が洩れていた。

セラは、左に視線を移す。

背中から煙を上げているウィズと、その下のレイフォン。

セラは斜め後ろを一瞥する。

俯せに倒れ、ぴくりとも動かない竜斗。

セラは真正面を見据えた。

風に蒼いコートを靡かせ、全身に青い幾何学線の光を纏い、
爽やかな笑みを浮かべている『^{レイズ}最速』の魔術師。

レイズを睨み――、

「……………まだよ。……………まだ、負けてないわ」

双剣を構えるセラ。

「まだ、私がいるもの!!」

「へえ。名前を聞いておきましようか」

「偽勇者リュウト・カミシロの第一従者!!」

セラ・オル・ランセルよ!!」

*

045 偽勇者は まし、ゆつし に まけた。

「……ツッ………ッ!!」

竜斗はベッドから飛び起きる。

「あいつらは!？」

「全員、生きてるわよ」

頭に包帯を巻いてるセラが、隣のベッドで上半身を起こして、竜斗を見ていた。

「……ツンデレ」

「おはよう」

「あ、ああ。」

「無事か？」

「なんとかね。」

起きたのは、あなたが最後よ」

上半身を起こした竜斗が見回すと、

ベッドに腰掛けているアーサー、

ベッドの上にペタンと座っているレイフオン、

俯せに寝て、顔だけこちらに向けているウィズと眼があった。

安堵の吐息を吐いた竜斗が、セラに尋ねる。

「で、勝負は？」

「負けよ。負け。」

「完璧に負けたわ」

「……そっか。」

俺が気絶してからの説明を頼む」

「リュ……リュウ………偽勇者の作戦通り、レイの解呪で、
『最速』^{レティス}の《加速》も解除されたわ。」

その解呪の影響が残ってるうちに、銃使いが狙撃して、
それが、脇腹に命中」

「ただ、ライフルの魔力弾も、レイさんの《解呪》に巻き込まれて、
威力が落ちてました。」

本来、解呪で解けるのは魔術だけで、
魔力の弾丸には影響ないはずなんですけどね」
「ほう」

「直後に、『最速』^{レティス}は、レイに《雷》を落としたんだけど、
とっさに、銃使いがレイの上に被さって、

《雷》は銃使いの背中に直撃したわ」

「ツッコミが俯せに寝てるのは、そういうわけか」

「治癒魔術で火傷は治りましたが、まだヒリヒリします」

「二、三日は残るぞ、それ。
で、その後は？」

「『最速』の意識が、レイたちに向いた隙を狙って、
死角から、私が剣を斬り下ろしたけど、ギリギリで防がれたわ。」

それで、細剣で魔法杖を押さえたまま、
もう片方の細剣を横から振ったんだけど……」

「だけど？」

「――避けられたわ」

「は？」

「あの『最速』……、無詠唱で、しかも一瞬で《加速》できるんだって！」

「……………どこまで、反則だよ^{チート}」

「……その後、私、独りで戦ったんだけど、10分保たなかったわ。

魔法杖を躲し損なって、細剣で受け止めたけど、そのまま振り切られて、吹っ飛ばされて――。

そこから記憶がないから、場外の壁にぶつかって、気絶したんだと思う」

うなだれたセラが、目尻を手のひらで拭う。

竜斗は手を伸ばして、セラの頭を撫でた。

「頑張ったな」

「……………うん」

セラの赤に近い金髪から手を離れた竜斗は、ばふっとベッドに倒れ込む。

「俺たちも、まだまだだなあ。」

その場凌ぎの罨じゃ、牽制にもなりやしない」

「私もスピードには自信あったのに、ぜんぜん届かなかったわ」

「ウヌ。ワシも頑丈さには評価があったのだがなあ。

それが、全身骨折だ。

もつとも、ここに運び込まれた時には治っていたがな」

「それ、もう人間じゃねえよ」

「わたし……自分の意志で、魔術放出を止めて、
もう少し、回数を使えるようにしたい」

「それが出来たら、欠陥返上して大魔術師ね」

「頑張ります」

「僕は、近距離の対策をした方が良いかな」
寝ているウェズと眼を合わせる竜斗。

「いや、遠距離からの狙撃精度と、『ライフル』の威力を上げろ。

《解呪》程度で威力が落ちたんじゃ、魔王の防御は撃ち抜けんだ
ろ」

「……………魔王……………」

レイフォンの呟きに、部屋に沈黙が降りた。

「そうよね、私たちの敵は魔王だったっけ」

「魔王は反則^{レテイス}より、強いと考えた方が無難だよな。
魔王専用の大がかりな罠を考案するか」

「私は速度を極めるわ。」

「せめて、師匠に匹敵する速さを持たなきゃ」
細剣を抱くセラと、上半身を起こす竜斗。

「反則が使ってた《加速》^{ヘイスト}の魔術はどうだ？」

「ダメよ。《加速》をかけて、10分も戦えば、身体中の腱が切れるわよ。」

あの『最速』は、加速の他にも、無意識肉体強化魔術も持つてると思う。

じゃないと、あんなスピードで長時間、動けないわよ」

「そっか」

「ヌウ。ワシは無意識で使っている回復と防御を、意識的に使えるようにして、

さらに、この筋肉を鍛えなければな」

「あん？ 意識的に行ったら、弱くなるんじゃないか？」

「いいや。意識的に使えば、一部を早く回復したり、何十にも防御をかけられるぞ」

「……おいおい。それ以上の不死身になるのかよ」

「ウム。筋肉の思召しよ」

白い歯をキラメかせるアーサーに、
俯せのウィズがパタパタと手を振る。

「いやいや。筋肉を極めても、普通、不死身にはなりませんから」

「ウヌ。人類は未だ、完璧な筋肉は到達しておらんからな」

「どこに、達するつもりですか!？」

その時、扉がノックされ、

爽やかな笑顔を浮かべた蒼いコート^{レティス}の魔術師が入ってきた。

「やあ、皆さん。」

身体の方は、大丈夫ですか」

竜斗が無然と問う。

「何のようだ？ 反則」

「反則？」

「喜べ。お前のあだ名だ」

「あはは」

「それで、何しに来たんだ？」

半眼の竜斗に、苦笑を浮かべるレティス。

「報酬を払いに来たんです」

仏頂面のまま、竜斗は右手を差し出した。

「……………貰おう」

「あ、そこは受け取るんですね。

報酬は参加費1金貨と、6人中5人を倒したので金貨10枚で、
合計、金貨11枚（110万円）です」

「おい、反則。

お前を倒す分が金貨2枚（20万円）って、理不尽すぎだ」

「いやゝ。申し訳ありません。

うちも財政難でして。

だからこそ、こんな大会を開いて、資金集めをしているのです」

「え？ これって、資金集めのためだったのか？」

「ええ。貴族同士の賭もありますし、結構、身の入りが良いですよ。
ちなみに、ここの領主は竜騎士カイテルの友人でして、

名前と場所を格安で借りているのです」
「なる」

「あの、残りのCからAランクの冒険者さんたちは、あの後、試合をしたんですか？」

片手を上げるレイフォンに、

レティスは頭の後ろに右手を当てる。

「いやー」。

それが、残りのパーティーは全部、棄権してしまっていましたねえ」

セラが鼻を鳴らした。

「当然ね。」

あれだけ、魔術をぶっ放して勝てないんじゃ、誰だって辞退するわよ」

「ですよねえ。」

でも、希にみる激戦が見れて、ここの領主と観客たちには評判が良かったみたいですよ。

ランクAとの戦いでも、あそこまで派手にはなりませんからねえ。ボクたちは、儲け損ないましたけど」

顔を見合わせて、力なく笑う竜斗たち。

「ところで、偽勇者さんたち。

僕たちの国——ウィンデルム王国に来る気はありませんか？勇者待遇で、お迎えいたしますよ」

「断る」

即答した竜斗に、レティスは肩を竦めた。

「ですよねえ」

＊

「よ、コウ」

「竜斗！」

包帯だらけの竜斗たちが、王宮に帰ってきた時、

迎賓館に明かりと音楽が溢れ、

その前に、軍服を変形したような白い燕尾服姿の光一と、
薄い水色のドレスを着たシェラが立っていた。

「これ、何のパーティーだ？」

「あ、ああ。俺がネクロマンサーを斃したから、……その、お祝い？」
死霊術師

「コウイチ様。なんで、疑問系なんですか。」

『光の勇者』なんですから、もっと自信を持つべきですわ！」

「光の勇者？」

迎賓館の明るさに眼を瞬かせる竜斗に、

青髪青瞳のシェラが、我が事のように胸を張る。

「隣の国の勇者に勝った時に付与された、コウイチ様の二つ名ですわ。」

コウイチ様の名前の意味『光の一番』と、戦い方から付いた名で

すわ」

「ふゝゝん」

死霊術師

「ネクロマンサーも斃したことですし、

これで晴れて、コウイチ様も二つ名持ちですわ。

あなたたちでは、隣の国の勇者の、

その『従者』にすら、勝てないでしょうけど」

一斉に、セラたちの頬が引きつった。

勝ち誇るシェラから、視線を外した竜斗は、光一に眼を向ける。

「良かったな。コウ」

「いや、俺も恥ずかしいんだけどさ。

でも、勇者だからな。

勇者たるものの、義務ってところかな」

「そうかい」

「あ、竜斗たちもパーティーに参加しないか？」

「冗談じゃねえ。

今の俺たちの姿を見りゃわかるだろ。

兎に角、早く寝たい」

「なんで、そんなにボロボロなんだ？」

「ただの反則野郎に、負けてきただけだ」

「へえ。竜斗が負けるなんて珍しい」

「それでもねえよ。

負けないお前と違って、俺はよく負けるよ。

挽回できる場所はしてるがね」

と、シェラが、光一の袖を強く引っ張る。

「コウイチ様。もう、行きましょう。」

主役がここに居ては、皆が興ざめします」

「でも、ここに連れ出したのはシェラー——」

「ほら、早く行きましょう」

「あ、ああ。じゃあな、竜斗」

「おう。頑張れよ。コウ」

目映ゆい光の中へ戻る二人を、ひらひらと手を振って見送った竜斗に、

「ね、ねえ。」

リ……偽……リュ、リュ、リュウト！ の名前の意味って、何なの？」

問いかけたセラが何かをやり遂げた表情で、小さく拳を握った。

「アン？」

「あの勇者の名前に意味があるなら、リ、リュウトもそうなのかなって」

「……名に、意味ねえ。」

ん……。竜はドラゴン。

斗は……何だろうな？

柄杓とか、わずかな、とか色々あるが……、

名前に付けるなら、北斗七星から中心って意味や、突き出た、突き出したって意味が本筋か」

「竜が突き出す……ですか？」

……角竜ホーン・ドラゴン？」

小首を傾げるレイフォンに、竜斗が首筋を搔く。

「名前そのものに、意味なんかねえよ。」

だったら、内気はレイフォン・アルス・フェンリルだから、
フェンリル——神狼の血でも引いてるっていうのか？」

「はい。引いてると言われています」

「はあっ!？」

「わたしの一族は『フェンリル』の血を、

さっきの水の巫女さんは、シエラ・カステラネル・フェリアースウインデネル——『水の精霊ウインディーネ』
の子孫だと言われています。」

この世界の全ての人間には、モンスターの血が混じっていますよ。
生粋の人間は、偽勇者さんと勇者さんだけだと思います」

「ほう」

「そして、だいたいミドルネームが、モンスターの由来を示しています。
す。」

本当かどうかは、確かめられませんけど」

「……なるほどな。」

お前たちの髪や瞳が、やたらとカラフルなのは、そういうわけか
「はい?」

「人間は遺伝子上、髪が青とか緑になるはずがないんだ。
それが、この世界では、極彩鳥のようにカラフルだろ。
人間以外の血が——遺伝子が混じっているなら、カラフルにもな

るか」

竜斗は顎に手を当てた。

「そっか。そう考えれば無意識魔術なんか、それこそ、モンスターの『特殊効果』、そのものじゃねえか」

一人、納得していた竜斗は、

パーティー会場を、ふくれっ面で眺めてるセラに気がつく。

「どうした？ ツンデレ」

「……私たちが、リザードマンを斃した時は、祝賀会なんて無かった」

セラの頭をポンポンと叩いた竜斗は、迎賓館パーティー会場を見上げ、唇の端を吊り上げた。

「それが、『勇者』と『偽勇者』の違いだろ」

「ううゝ、納得いかない」

＊

046 偽勇者は まし、ゆつ を おほ、えた！

魔術図書館で竜斗は独り、魔術書を開きながら、机の上に20個ほど、『おはじき』のような物を複雑な形に並べていた。

「偽勇者」

「おう。無口っ娘」

「レンです。」

「何をしてるの？」

竜斗は椅子の上で伸びをした。

「この前、魔術師反則にボロクソに負けてな。

その対抗策を考えてるところだ」

「それが？」

机の上を見る緑髪銀瞳のレンフェイに、竜斗がおはじきを摘み上げる。

「こいつは、精霊石の破片だよ。」

レイ・ライン魔法陣の魔力線を見るだけならば、これぐらいで十分だしな」

「そう」

「けど、なかなか上手いかなくてな。

簡単な魔法陣は威力も弱いし、範囲も狭い。

精霊石の数を増やせば、範囲は広がるが、今度は金がかかりすぎる。

なにより、発動させる前に、一個でも石の位置をずらされたら起動しない」

竜斗は椅子の背に体重を預けた。

「どうやっても、戦闘中には組めんな」

「裏技。魔法陣で魔法陣を組む」

「あん？」

「効果範囲拡張の魔法陣で、魔法陣を組む。

効果範囲が大きく広がる裏技」

「あゝ、拡張魔法陣を一つの精霊石と見立てて、それで魔法陣を組むのか」

「そう」

「でも、それだと陣を敷くのに、時間がかかるよな」

「かかる」

「しかも、複雑な魔法陣になるよな」

「なる」

「さらに、起動に莫大な魔力が必要になるよな」

「なる」

「……完全に、待ち伏せ専用の罠か」

「そう」

鼻の頭を掻いていた竜斗が、魔術書を広げた。

「ところで、この本に載ってるフェザー貨って、知ってるか？」

魔術書のページを指さす竜斗に、

レンフェィが小首を傾げる。

「ドラゴン貨のこと？」

「ドラゴン貨？」

「ドラゴンが使用してると言われてる虹色の通貨。

一枚で、金貨100枚（1000万円）分の価値」

「あん？」

「なんで、そんな硬貨が魔術書に載ってるんだ？」

「フェザー貨には、不思議な魔法特性がある」

「魔法特性？」

「そう。」

「フェザー貨3枚を正三角形に並べて、魔力を流すと、魔力を止めても、魔力が流れ続ける。」

「原因不明。解析不能」

「止めても、流れ続ける？」

「どこかで……」

顎に手を当てて考えていた竜斗が顔を上げた。

「絶対零度か！」

「絶対零度？」

「1273℃のことだ」

「？ 温度は関係ないことが確認されている」

「ん……。……まあな」

誤魔化すように、頭を撫でてくる竜斗に、

「……………ずるい」

レンフェイは気持ち良さそうに、銀の眼を細めた。

＊

中庭の円卓に、5人分のティーカップが用意してあった。

紅茶を準備する濃紫の髪のメイドを見、セラが竜斗に尋ねる。

「ねえ。リュウト。」

5人分あるけど、あと2人は誰なの？」

「最高権力者二人」

「は？」

「姫さんと宰相」

「ルキア姫とカリウス宰相！？」

「なんで、私たちが呼ばれるのよ？」

「姫さんが話があるんだとよ」

「私にも？」

「いや、話が来たのは俺だけ。」

ツンデレは、俺の護衛」

「護衛？」

「姫さんとメイドさんだけなら要らんが、

宰相と護衛なしで会うつもりはねえよ」

「随分と慎重ね」

「当たり前だ。」

宰相相手に隙を作れば、そこから振じ込まれるぞ」

「ふゝゝん」

「あら、いらっしゃったようですね」

紫髪のメイドが金の瞳を向け、セラが竜斗の椅子の後ろに立った。

頬杖をついた竜斗は現れた二人連れの人影に、視線を向ける。

深海のように深い青の瞳と、火のように紅い髪のルキア姫と、

黒髪をオールバックにし、銀眼に片眼鏡モノクルをかけたカリウス宰相が、並んで歩いてきた。

「お似合いじゃないか。

付き合い始めたか？」

「おめでとうございます。姫様」

茶化す竜斗と、頭を下げるメイドに、ルキアが鼻を鳴らす。

「戯れ言をほざくな」

「ようやく、姫様にも恋人が……。

これで、オリエンス王妃も草葉の陰で喜んでいることでしょう」

態とらしく、ハンカチを眼許に当てるメイドに、ルキアが半眼を向けた。

「メイドよ。母上は、まだ死んでおらぬぞ」

「……………そうでした。

最近、あまりにも影が薄いので…………」

「あん？ 王妃なんて居たか？」

「おるぞ。

おぬしが、父上国王に謁見した時も、父上の隣に座っておったぞ」

「……………記憶にねえ」

「居たかしら？」

額に手を当てて考え込む竜斗とセラに、

メイドが頬王妃に手を当てる。

「それが、オリエンスの特技です。

とにかく影が薄くて、眼を離せば存在を忘れてしまうほどなのです。

オリエンス王妃が冒険者だった頃は、ドラゴンの真横に立っていても、そのドラゴンが気付きませんで

したから」

「……そいつは影が薄い云々じゃなくて、すでに特殊能力だろうか」

「内輪の話は後にしてもらえないだろうか。

そろそろ、本題に入りたいのだが」

カリウス 片眼鏡
宰相がモノクルを中指で押し上げた。

「うむ。そうじゃな」

「脱線しました」

「へえへえ」

ルキアと宰相^{カリウス}が椅子に座ると、メイドが紅茶を置いていく。

カリウス
宰相は紅茶に眼もくれず、円卓に肘を突くと、手を組んだ。

「偽勇者。死霊王^{アンデッド}の手下のネクロマンサーは、勇者が斃したのは知ってるな」

「墓場が一つ、全損したらしいな」

「そんなことはどうでもいい。

問題は今までに、だいぶ墓を暴かれたことだ」

「それだけ、アンデッド城攻略の難易度が上がったということね」
細眉をひそめるセラに、天を仰ぐ竜斗。

「厄介だ」

「ふむ。

さらに、厄介なことに、^{死霊王}アンデッドのゾンビは一体残らず、完璧にメンテナンスされておる」

「それだけじゃないわ。」

普通のゾンビは首を落とせば、ただの死体に戻るのに、

死霊王

アンデッドのゾンビって、首を斬ろうが、胴体を裂こうが動き続けるのよ」

「ますます、厄介だ」

ルキアの説明とセラの補足に、項垂れる竜斗。

「対応策はバラバラに切り刻むか、

イクシズム

浄化の魔術で、動かぬただの死体に戻すかの二通りだけじゃない」

紅茶に口を付けるルキアに、

メイドも首肯する。

死霊王

「さらに、仲間の死体をアンデッドにゾンビにされたら、アンデッド軍の戦力となります」

「取った駒が使えるって、将棋かよ」

クッキーを口に放り込む竜斗に、

カリウス

宰相が乾いた視線を向けた。

「一度、アンデッド城を攻めたことがあるが、

仲間の遺体を細切れにしたことで、前線の兵士の3割が精神を病んだ」

「それから、迂闊に攻められなくなった。ってわけか」

「戦力をくれてやってるようなものだからな」

「じゃからこそ、一度の戦闘でケリをつけたいのじゃよ」

「なるほどな」

「この会合の趣旨がやっと掴めたわ」

椅子の背に寄りかかり、紅茶を飲む竜斗。

「そんなゾンビ相手じゃあ、通常の城攻めだと被害が大きすぎる。やっぱ、神官騎士を戦場に引っ張り出すべきだと思うぜ」

「だが、神殿は自己の権益以外では出てこない。」

権益が絡む時は無理矢理、首を突っ込んでくるがな」

片眼鏡モノクルを押し上げるカリウスを見、

竜斗がルキアに問いかける。

「姫さん。この前、チビ巫女の言質を取ってたよな？」

「じゃが、あれだけでは弱すぎる。」

シエラは神殿の代表じゃが、実権は先代巫女アラリエルが握っておるからの」

ティーカップを円卓に置いたルキアは、カリウスと竜斗を見る。宰相

「ふむ。今日、宰相と偽勇者を呼んだのは、その件で頼みごとがあったからなのじゃ」

「頼み？」

「姫が頼みとは珍しい」

「流言を広めて欲しいのじゃよ。」

偽勇者は、民に『神官騎士がアンデッドを恐れて戦に出てこない』と、

宰相は、貴族に『勇者が召喚された今、動かない神殿にもう価値は無い』とな」

「ふーん。確かに、神殿を追いつめる一手にはなるが、それだけで出てくるかね。」

宰相の方は特に」

「決定打には欠けるだろう」

「だよな」

「じゃが、流す価値はあるじやろうて。

それと、最後の一押しに関しては、フィーが面白い話を持って来ておるしな」

薄く笑んだルキアが紅茶に口を付けた。

「でも、そうやって神殿を引っ張り出せたとしても、ただの兵士として働かせるのは、もったいないと思うわ」

「確かにな。」

戦場に引きずり出せたなら、徹底的に利用すべきだよなあ」

竜斗は背凭れに体重を預け、セラを見上げる。

「なあ、ツンデレ」

「なに？」

「城攻めよりも野戦の方が良いよな」

「勿論よ。」

多数のゾンビを操るのは死霊王^{アンデッド}、一人なんだから。

戦術を駆使すれば、被害はかなり減ると思うわ」

「……………そうだよな。」

神官どもに、城を囲むように浄化魔法陣を張らせるのはどうだ？」

「ふむ？」

「浄化魔法陣？」

「詳しく説明しろ」

「ゾンビの軍勢なら、基本的に浄化魔術には弱いだろ。

なら、大規模な浄化魔術の魔法陣を敷いちまえばいいんじゃないかと思っただけな」

「リュウト。それが出来るなら、とっくに城を奪い還してるわよ」

「魔法陣を敷くのを邪魔しに来るってことは、

奴らが城から出て来るってことだよな」

「あ、そういうこと」

「ふむ。これ見よがしに魔法陣を敷き、出て来たところを叩くわけじゃな。」

「じゃが、撃破する前に魔法陣を崩されるぞ」

「範囲拡張魔法陣を浄化魔法陣に組み込んで、効果範囲を広げりやどうだ？」

「なに、浄化魔法陣は本当に使う必要はない。」

一旦浄化したところで、死霊王アンデッドが消滅するとは思えないしな。だから、レイ・ライン魔力線だけ組んで、浄化するぞと脅すのさ」

「一応、理に適っておるな。」

あとは、軍がその作戦を了承するかじゃが」

「そいつに関しては、宰相に任せる」

「いいだろう」

頷くカリウスと、宰相

頬杖をつき、人差指を振る竜斗。

「で、もう一つ。」

その浄化魔法陣で使う精霊石は、神殿に用意させようと思う。

魔力線レイ・ラインを引くだけなら、精霊石は消費されない。

なら、その精霊石は、何処からか借りてくるだけで済むはずだ。

この戦いに勝てれば、精霊石を出した神殿の評判も上がるし、俺が流す噂を払拭することにもなる。

しかも、出費は精霊石の借賃のみ。

そうやって、神殿あいつらに花を持たせれば、

戦いの場に出てくる理由の一つになると思うぜ」

「ふむ。脅しばかりでは余計、意固地になる。

飴と鞭は使い分ける方が効果的というわけじゃな」

「ああ。

神殿への説得は、宰相。あんたに任せても良いか？」

「いいだろう」

「ふむ。それならば……いけるかもしれぬな」

*

047 偽勇者は うてゝわ を てにいれた!

「お久しぶりです。カミシロ殿」

「ああ、久しぶりだな。ギルド長」

商工ギルドの応接室で、竜斗とギルド長カルクが面会していた。
竜斗の隣には、セラが座っている。

「あんた、ツンデレと俺が夫婦って、登録しただろ」

「はい。セットでと言われたので」

半眼になった竜斗が親指で、セラを指さした。

「あの後、こいつの親父さんが乗り込んできて大変だったんだぞ」

「それはそれは」

ギルド長カルクが愛想笑いを浮かべ、

セラが唇を尖らせて、竜斗を睨みつける。

「何言ってるのよ。」

あんた、他人顔してたじゃない」

「当たり前だ。あそこで、身内面して口を挟んでみる。

さらに大騒ぎになってたぞ。

それに、あれぐらいなら、ツンデレだけで十分、対応できるだろうが」

「ううゝ。納得いかない」

「それで、今日はどのような、ご用件で？」

「今度、軍がアンデッド城に攻めるのは知ってるな」

「勿論です」

「じゃあ、神殿の神官騎士が出張るのは？」

「神官騎士が？」

「ああ。そのために、今、神殿は安く精霊石を借りられるところを探している」

「ええ、うちにも話は来ました。」

「さすがに採算が合わないので、断ろうと思っているのですが」

「今日、俺が来たのは、そいつについてだ」

「ほう。何でしょう？」

ギルド長
「カルクが手を組み、身を乗り出し、

唇の片端をつり上げ、笑みを形作った竜斗も身を乗り出した。

「ギルド長。」

精霊石を消費した場合、別料金を取る項目を加えた契約書を交わして、

精霊石を貸し出せ」

「どうということ？」

浄化の魔法陣は、見せ掛けブラフなんですよ。

あんた、この前、そう言ってたじゃない」

小首を傾げるセラに、

ニヤリと口元を歪める竜斗。

「いや、実際に使っちゃおうと思っている」

「へ？」

「ほう」

「今、レンフエイ無口っ娘に、実際に発動する浄化魔法陣を作成してもらってる」

「筆頭魔術師に？」

「神殿が、拡張魔法陣を使った浄化魔法陣を組めるとは思わなかったんでな。」

なら、誰が組むんだろうな、と。

で、普通に考えれば、専門部署だよな」

「それで、抱き込んだと……」

「失礼な。お願いをただけさ。」

万が一の事態を考えて、実際に使えるようにしといた方がよい……ってな」

セラが唇を尖らせる。

「……このタラシ」

「偽勇者だよ!」

咳払いをする竜斗。

「ギルド長。」

神殿が要請している数の精霊石を、実際に消費したとして、精霊石の値段を通常価格の1.5倍に設定すると、……どうだ?」

「それならば、……濡れ手に粟ですな」

「……クッククク」

「……ふふふふふ」

低く笑い合う竜斗とカルクに、

頬を引き吊らせて、無言で引くセラ。

竜斗が口の端を歪めた。

「ギルド長。契約書を取る時、初め、貸し出し価格は、通常の価格を出せ。」

そこで高いと言われたら、ギリギリの安値を提示するんだ。我々も、この戦争に勝ってもらいたいと言いくるめてな。

その代わり、精霊石を消費した場合の価格は、高く設定する。^{1.5倍に}
文句を言われたら、初めに妥協したことを持ち出せば良い。

あ、言うまでもなく、契約を交わす相手は、チビ巫女じゃなくて
先代巫女アラリエルの方な。

それと、俺の名は出すなよ。グルだと気付かれるからな」

ふと気づいたように竜斗は黒髪を掻いた。

「おっと。……あんたに、こんな説明いらないよな。

ギルド長の方が専門だし」

「カミシロ殿は商売でもしてらしたのですか？」

「いんや。『仲裁屋』さ。

小さな恩を着せて、見返りを強制させ、

現状を殊更悪く認識させてから、対比で未来をより良く見せ、

先に小さな譲歩をして、相手から大きな譲歩を引き出し、

相手から話させ、肯定させることによって選択肢を狭めていく。

相手に『要求を吞ませる』小細工だよ」

セラが横目で竜斗を見上げ、呟く。

「この悪党」

「失礼な。偽勇者だよ」

革張りのソファの肘掛けに、肘を突いた竜斗は、手を組んで口許を隠した。

「ちったあ、神殿にも身銭を切ってもらわねえとな。

市民がお布施をしている意味がねえ」

＊

「店主。情報が集まるってことは、情報を広める方もできるよな？」

「事実無根な事柄じゃなければね」

問いかけた竜斗に、情報屋兼雑貨屋の店主は肩を竦める。

竜斗はルキア姫の依頼を果たすために、

下町の裏通りのさらに奥まった所にある情報屋兼雑貨屋に、顔を出していた。

「で、どんな噂を広めるんだい？」

「水の神殿の神官どもは、アンデッドのゾンビを怖がっていて、軍の要請から必死で逃げ回っている。

ゾンビを怖がる神官など存在する意味あるのか？　ってな。

この話を、この王都中に広めてほしい。

幾らになる？」

「うーん。そんなに荒唐無稽な話じゃないし、金貨7枚（70万円）かな。

4日ほどかけて、東西南北と50人くらいが一気に流せば、王都内にはすぐに広まるよ。

噂を確実に広めるには、人海戦術が一番だからね」

「1人から聞いたんじゃないが、3人以上から聞けば真実か？」
「その通り」

竜斗は、金貨7枚（70万円）をカウンターに置く。

「それで頼む」

「うん。いいよ」

竜斗は肩の荷を降ろしたように、伸びをした。

「ん〜。よし、仕事はおしまい！

なんか、面白い物ある？」

「今回は、男子の永遠の夢を手に入れたよ」

「ほほう」

眼を輝かせる竜斗に、店主はカウンターの下から、金の腕輪を取り出す。

「じゃじゃ〜ん。

禁制品の『インビジブル・リング透明化の腕輪』だよ。

本人の姿は勿論。身につけている物から、気配から、魔力まで消せる優れ物！！」

「透明化？」

「そう、これに魔力を流し込むと、約一時間、姿を消せるのさ。使い捨てだから、一度、使っちゃうとそれで終わりだけどね」

「おおっ！」

「これで、寝込みを襲うのもOK。
お風呂に忍び込むのもOK。

正に、思春期の男子たちの永遠なる夢さ!!」

「おおおっ！」

「禁制品のマジックアイテムだからね。

値段は1個、金貨5枚（50万円）。

所持だけで違法だから、お役人には見つからないようにね」

「……透明化か。

上手く使えば、策に組み込めるか。

店主。今、いくつある？」

「五個かな」

「全部、買った！」

「全部、買っちゃうんだ!？」

金貨25枚（250万円）を置いた竜斗に、

店主は心底、羨ましそうな吐息を吐いた。

「5時間も!! 頑張るなあ」

「凄い惹かれるが違う」

「あつ、注意事項を忘れてた。

この腕輪。使ってる人が強い衝撃を与えられたり、魔術を放った
り、強い魔力を浴びると、

効果が切れちゃうから気をつけて。

剣で打ち合うのは、ダメだね。

でも、『夜の運動^{アレ}』くらいなら大丈夫。

もともと、そのために作られた物だからね」

「そっか。衝撃と魔力で姿が見えちまうのか」

考え込んでいた竜斗が、店主を見下ろす。

「店主」

「なに？」

「またあったら、仕入れといってくれ」

「了解了解。好きだねえ」

「大好きだが誤解だ」

店主はパンと手を打ち鳴らした。

「あ、いけない。忘れるところだった。

注文されてた物が届いたよ」

「あん？」

店主は木箱を取り出して、蓋を開ける。

その中には、バスケットボール大の『紫水晶』が入っていた。

竜斗の黒瞳が、鈍く深く輝く。

「そっか。……届いたか」

「でも、精霊石でもなんでもない、ただの紫水晶なんて、何に使うんだい？」

球形の紫水晶の入った木箱を持ち上げた竜斗は、声なき笑みを浮かべた。

「こいつが、俺の計画の要なのさ」

＊

「身体の調子はいかがですか？」

「『反則』^{レティス}にやられた怪我也治ったし、もう普段通りだな」

「それは、よかったです」

「ふむ。好都合じゃ」

中庭の円卓に集まっているのは3人。

竜斗の前に、濃紫の長髪のメイドと、火のように紅い髪のルキアが座っていた。

「偽勇者。」

この前の依頼は果たしてくれたようじゃな。

市民に急速に噂が広まりつつあるようじゃ」

「ま、これが一役かってくればいいがな」

「ふむ。そこは任せよ」

ルキアはメイドの煎れた紅茶に口をつける。

「さて、今日、呼び寄せた本題じゃが、

一件、依頼したいのじゃ」

「依頼内容と報酬によりけりだな」

「うむ。ドラゴン退治じゃ！」

「無理だろ」

即答する竜斗。

「ドラゴンと言っても、ドラゴン属ドラゴン科ではなく、

ドラゴン属ワイバーン科の『ガイアレイズ』じゃ」

「……ワイバーンか。」

んゝ、それなら……」

「ただし、ワイバーンの最上級種で、強さはドラゴン科のレッサードラゴンとタメを張るんじゃないが。」

鱗が無いだけで習性もドラゴンと、ほぼ変わらん。

冒険者ギルドでは、その強さからドラゴンに分類されておるぐらいじゃしな」

「無理だろ！」

軍に頼めや！！」

竜斗は半眼で、ルキアを睨めつけた。

「残念ながら、兵士は魔王軍からの防衛と、墓場の警備で大忙しじや。」

グールが大量発生しおってのお」

「コウにでも、依頼すればいいだろうが」

「もうしておる。」

偽勇者たちにも共同で当たって貰いたいのじゃ」

「んゝゝ」

腕を組んで検討する竜斗。

「本当は私が行きたかったのじゃが、許可がでなかったのじゃ……！」
「当たり前です。」

姫様が斃してしまつては本末転倒です」

拳を握り締めて訴えるルキアに、メイドがダメ出しをする。

「私も、久々にドラゴン狩りがしたいのじゃあ!!」

「ダメです」

「あゝ、盛り上がってるところ悪いが、
そういうのは、冒険者ギルドに頼めよ」

「無理じゃよ。」

「引き受ける者がおらん」

「あん？」

「おぬしらは参加するが、

『功績と名声』は全て勇者のものじゃからな。

依頼料は払うが、おぬしらの名前は一切出ない。
それが、私からの条件じゃ」

訝しげに眼を眇めた竜斗だったが、
一つの結論にいき当たり、大きく嘆息した。

「なるほど……それが、最後の一押しか」

片目を瞑るルキア。

「ふむ。そういうことじゃ」

「それじゃあ、俺たちが行くしかないな。
他の奴らじゃ、そんな条件、絶対に呑めないだろうし……。
だが、その分、報酬は弾んでもらうぞ」

「うむ。勿論じゃ」

竜斗はティーカップの縁を指で弾いた。

「いいだろう。妥当な線だ」

＊

0481勇者は かしこさ か、あかゝった!

「なぜ、あなたたちまで、参加なのですか!？」

「それは、依頼主の姫さんに言え」

ガイアレイズ討伐の日。

青髪青瞳のシェラが、竜斗に抗議していた。

「まったく、姫様も何を考えているのでしょうか」

「結構、色々と考えてると思うぞ」

「あなたに、姫様の何がわかるというのです!」

「さてねえ」

竜斗が抗議をのりくらりと躲していると、

頬を膨らませたシェラは、埒が開かないと諦めたようで、

「アリエル!!」

何時まで、遊んでいるのですか。

さっさと出発準備を始めますわよ!!」

ドラに頬擦りしている桃髪赤瞳のアリエルに、怒声を飛ばす。

が、アリエルは緩んだ笑みを浮かべて、ドラを撫で回していた。

「偽勇者さん!!」

ドラちゃん、ください!!」

「ダメだ。」

ドラは、俺たちパーティーの『最後の良心』だ。

ドラが抜けたら、パーティーの属性が一気に邪悪^{エビル}に傾いちゃう」

「邪悪筆頭のリュウトが何を言ってるのよ」

「うう。否定したいけど……否定できません」

「うーうーうー」

涙目で唸るアリエルに、竜斗が黒髪を掻く。

「仕様がねえな。元氣娘。^{アリエル}」

替わりに俺の宝物をやる」

「宝物？」

竜斗はバックパックの底から、^{ミニチュア・クオランクス}ミニ・ドラ人形を取り出した。

「ふわわわあゝ」

ド、ドラちゃん。そっくりですゝ」

「そうだろう。そうだろう」

竜斗が右手に乗せたミニ・ドラを上下左右に動かすと、釣られて、子猫のように顔を動かすアリエル。

その仕草を十分に堪能した竜斗は、アリエルにミニ・ドラを手渡した。

「これ、くれるんですか？」

「おう。」

しかも、そいつは魔力を通すと羽根を動かすぞ」

「はわわわわ。か、可愛いです。」

私、感激しましたゝゝッ！！

巫女姫様ゝゝ、貰っちゃいましたゝゝ！！」

「物を貰った時のお礼は？」

「はい！ 偽勇者さん。」

ありがとうございます。

我が家の家宝にします。子子孫孫、大切にしますゝゝ」

「おう。たまにドラと遊んでやってくれ」

「はい!!」

コクコクと肯くアリエルを見、セラが竜斗を横目で見る。

「ふ〜ん。リュウトが他人に物を、ただであげるなんて珍しいわね」

「そりゃあ、俺はドラ・ファンクラブ会員ナンバー001にして、ファンクラブ会長だからな。」

ドラ・ファン獲得のためなら当然のことさ」

拳を握って天を見上げる竜斗を、

半眼で眺めたセラは溜息を吐いて、ドラに話しかける。

「……………ドラ。」

とうとう、あんたのファン・クラブまで出来ちゃったわよ」

「ギャウ？」

丸い目でセラを見ながら、ドラが首を傾げた。

金髪緑瞳のアリアが数度、両手を打ち鳴らす。

「皆さん。」

そろそろ、出発しないと日のある内に、村まで着きません。

早く馬車に乗ってください!」

＊

「なあ、委員長」

ゴトゴトとホロ馬車に揺られながら、

竜斗は同じ馬車に乗っているアリアに話しかけた。

「委員長？」

金髪を揺らして小首を傾げるアリア。

「聖騎士。あんたの、あだ名だ」

「……は……はあ……」

今、ドラが引く6人乗りのホロ馬車には竜斗、セラ、レイフォン、ウィズ、アリア、フィーが乗っている。

御者を務めるアリエルはドラに跨り、楽しそうにドラに話しかけていた。

シエラは、光一とともにペガサスに乗り、重量オーバーだったアーサーは馬に乗り、ホロ馬車の横を併走している。

「委員長。」

あんた、ガイアレイズと戦ったことってある？」

「はい。2度ほどあります」

「ほう。ガイアレイズについて、説明して貰っても良いか？戦う時の注意点も含めて。」

本で調べたんだが、詳しいことまで載ってなかったんでな」

メンバーの顔を見回したアリアは一つ、頷いた。

「そうですね。」

話しておいた方が良いでしょう。

ドラゴン目ワイバーン科地駆属ガイアレイズ。

通称、アースドラゴンと呼ばれているワイバーンです。

勿論、ドラゴン科のアースドラゴンとは、全くの別種ですが。

ワイバーンの上級種で、
成体の頭から尻尾の先端までは、8メートル前後。
空を飛ぶよりも、地を駆ける方が得意なワイバーンです。
その皮膚は、ドラゴンの鱗と同じくらい硬く、
尻尾の一撃は、重装備騎士が吹き飛ばされるほどです。
そして、もっとも厄介なのは、口から放つ『衝撃波のブレス』で
す。

鱗が無いことを除けば、ほとんどドラゴンと変わりません」

「全長8メートルに、

ドラゴンと同じくらい硬い皮膚に、

口から衝撃波ね」

額を押さえる竜斗に、

フィーが銀髪を掻き上げる。

「冒険者ギルドの中では、ガイアレイズはドラゴンと見なしておる
ぐらいだからの」

「うわっ。僕、一気に自信がなくなってきました」

「うう。そんなのに勝てるんでしょうか。わたしたち」

ホロ馬車の隅で、ウィズとレイフォンが手を取り合って、震えて
いた。

外からは、アリエルの調子外れた唄と、

ドラのギャウギャウという合いの手の入った、暢気な合唱が聞こ
えてくる。

「実際に見ねえことには、策を立てるのも難しいな」

竜斗は頭の後ろで手を組んで天井を見上げた。

「偽勇者さんでも、対策が思い付きませんか」

「会話が出来ねえから、説得もできねえだろうし」

「ですよー」

「最終手段としては――」

「え？ 手があるんですか？」

「ガイアレイズに、ガブツと咬まれたツツコミが「怖くない。怖くない」と言えば、

種族を越えた友情が芽生えるはず！」

「いやいやいやッ！」

芽生える前に、ガブツとやられたら、そのまま咬み千切られますからー！」

「美少女吸血鬼でも対応可！」

「噛まれた時点で、すでに下僕化してますー！！」

二人の会話に溜息を吐いたセラが、金髪緑瞳のアリアを真正面から見据える。

「アリア。あんたの時はどうやって、そのガイアなんとかを斃したの？」

「ガイアレイズです。」

あの時は、攻撃力の高い数名が、胴体の一カ所を狙って何度も強打しました。

衝撃波

カイト・シールド

ブレスを喰らう前衛は、大型の楯を構えた聖騎士を配置し、

一カ所を攻撃している間、そのことを悟られないように、周りから他の騎士も全身を攻撃しました。

だいたい、20回から30回程度の剣撃で皮膚を突き破った覚えがあります」

「……完全に物量攻撃だな。」

口の中を狙うことは無理か？」

説明聞きながら、考え込んでいた竜斗の質問に、上を見上げたアリアが唇に人差し指を当てた。

「正直言って、難しいと思います。」

衝撃波 ブレスを撃たれて、武器が届かなかった記憶があります。

昔、姫様がブレスが弱まった瞬間を見計らって、一撃で貫いたのを見たことがありますか……」

「ツンデレ」

竜斗の視線に、細眉をひそめたセラが首を横に振る。

「私じゃ、口の中を突けても、貫くには威力が足りないわ」

「……そっか」

*

朝方出発し、ガイアレイズが住み着いてる山の麓の村に到着した時には、昼過ぎになっていた。

ホロ馬車から降りた竜斗は、大きく伸びをする。

「コウ。今夜はこの村で一泊するから、宿の手配を頼む」

「いや、竜斗。まだ、日も高いし、すぐに退治に向かおう。

村人たちはドラゴンのせいで、山に入れないんだ。

一刻も早く退治しないと」

「アホか!!」

ガイアレイズに遭^あったらどうするつもりだ？」

「勿論、戦うさ！」

そのために来たんだ」

「このドアホッ!!」

山の急斜面や、崖っぷちで戦う羽目になりたいのか!!」

「コウイチ様にアホとは、何ですかっ!？」

食ってかかるシェラを制止しながら、

光一は竜斗に反論した。

「だけど、竜斗。」

村人たちは困ってると思うんだ。

多少のリスクを負ってでも斃^あさないと、人死にが出てからじゃ遅いと思う」

「ガイアレイズが住み着いてると知ってる山に行こうとする村人なんかいないだろ。」

いたとしても、そんな自殺志願者のことまで構ってられるか。

それになあ、俺たちに依頼が来た時点で、

すでにガイアレイズが住み着いて数ヶ月経ってるんだ。

1日や2日遅れたって、どうってことねえよ」

「そ、そうなのか？」

「この世界には、ネットもテレビも電話すら無いんだよ。

その情報が、今現在のものである可能性は低い。

この世界で言う『最新の情報』は、間違いなく1日か2日前のものだし、

『今の情報』は1ヶ月から半年、下手すりゃ1年前のものが普通

に出回ってるからな。

元の世界のスピードで考えると、思わぬ落とし穴に嵌まるぞ」

「……わかった。覚えとく」

竜斗がドラから馬車を外しながら、フィーたちに声をかける。

「まずは、偵察だ。」

フィーとツンデレと……そうだな。

ツツコミ。来てくれ」

光一が聖剣を確かめ、竜斗に近寄った。

「竜斗、俺も行こう」

「来て、何すんだよ？」

「え？ 何って？」

勿論、ドラゴンの偵察だけど」

「ガイアレイズの様子なんか見に行くつもりはねえよ。

だいたいお前は、その鎧で重量オーバーだ。

いいから、宿を取っというてくれ」

＊

049 偽勇者のまえにとらこんか、あらわれた。

竜斗たちは空を滑空するドラの背から、針葉樹と広葉樹の入り混じった山を見下ろしていた。切り立った崖などは少なく、地肌を晒している所も少ない。

「なだらかな山だな」

「休火山だからの」

「なる。じゃあ、温泉も出るのか？」

「うむ。勿論じゃ」

「そいつは、楽しみだ」

竜斗とフィーの会話を遮って、セラが山の中腹の一角を指さした。

「リュウト、あれ見て！」

「村？」

ドラ、あそこに降りてくれ。

3人とも警戒を怠るなよ」

「了解」

「わかりました」

「ふむ。人の気配はせんがのう」

＊

「偽勇者さん。やっぱり、廃村みたいです」

クロスボウ
弩を手に、村を見回ったウィズが竜斗の所に戻ってきた。

「死体は？」

「ありませんでした。」

伝染病でやられたわけじゃないと思います」

「過疎にしては、変な村だよな。」

見張台の高見櫓なんかあるし、家の朽ち方が大体同じだし」

「ふむ。大方、盗賊の隠れ里だったかもしれぬな」

赤い唇に指を当てるフィーに、セラも同意する。

「それ、当たりかもね。」

村の出入り口は狭く作ってあるし、

あそここの壁は、出入り口から身を隠して防衛するために作られた物だとしたら、辻褄が合うわ」

空き地の広さを、槍を使って測っていた竜斗が身体を起こした。

「なんにしても、俺たちにとっちゃ好都合だ。」

ここの広さも20メートル×30メートル。

ここまで、ガイアレイズをおびき出せば、言うことなしだな」

「そうね。」

地面もしっかりしてるし、これならエリアも全力を出せるわ」

「それから、向こうに獣道があって、降りると川に出るようです。」

あそこに井戸があるから、生活水はそこから取ってたんでしょ
うけど」

「へえ、斜面の向こうは川か」

耳を澄ますと、微かに川音が聞こえてくる。

対岸には山の中腹が見え、木々が青々とした葉を茂らせていた。

「その川の水量は？」

「上流の川だから、水の量はそう多くないですね」

「んっ、川底に叩き落としても、溺れそうにねえな」

「ただの水浴びになりますよ」

「だよなあ。」

だったら、大量に酒を用意して、呑んだガイアレイズが酔って寝てる隙に斃すとか」

「ワイバーンで、お酒、呑むんですか？」

「知らん」

「馬鹿者!!」

ガイアレイズに吞ます酒があるなら、我が呑むわ!!」

竜斗はフィーをじつくりと眺める。

「ん〜」。

……ガイアレイズ以上の大物^{ファイ}を討ち取ったので、これで勘弁してください。って、姫さんに言うかな……」

「そりゃ、確かに大物ですけどね!!」

何の解決にもなってませんよ!!」

「さあ、リユート。酒を用意せい!!」

「こっちは討たれる気、満々!？」

竜斗は黒髪を掻いた。

「やれやれ。戦える地は見つかったが……、

ガイアレイズをどうやって、この地におびき寄せるか？

戦いの最中、ガイアレイズをどうやって、この地に引きつけとくか？

堅い皮膚を持つ、ガイアレイズをどうやって斃すか？

問題山積みで、楽しくなってくるな」

「大量の生肉でも置いとけばいいんじゃないの？」

「ガイアレイズよりも、狼が寄って来そうだけだな」

「なら、その狼も斃して、餌に加えるとかどうですか？」

「先に狼が来てから、ガイアレイズが来れば良いが、

ガイアレイズと戦ってる最中に、狼が寄って来たら最悪だぞ」

「うわっ、想像したくない！！」

「竜をおびき寄せても、餌だけ取って逃げられたら元も子もないし」

「だよなあ」

「地面に縛り付けられれば良いのじゃがな」

「だから、どうやってよ？」

「フイー。その案、いただき！」

「ふむ？」

「は？」

「へ？」

竜斗は周りを見回し、靴先で地面を軽く掘る。

「ん。いけそうだ。

こいつで有利になるな。

ここじゃ、内気の魔術は使えないし」

「レイが魔術を撃ったら、山崩れが起きるわよ」

「崩れるよりも、消し飛ぶかも」

「その内気を、地面に縛り付ける役にする」

竜斗の考えを読んだフイーが、薄い笑みを浮かべた。

「なるほどのお……、それが一番じゃな。

じゃが、どうやってここにガイアレイズをおびき寄せるのかの？」

「それが問題だよなあ」
槍を肩に担いだ竜斗が黒髪を掻いてると、微かな振動が伝わってくる。

紫の眼を細めるフィー。

「む、これは……」

「ギャオン!!」

「ッ!! みんな、ドラに乗るんだ!!」
ドラが警吠を発し、竜斗が焦ったように3人へ叫んだ。

全員がドラに乗った直後、

『ガイアレイズ』が村を囲う柵を破壊し、巨大な尾を振り回して、突進してくる。

「ドラ!!」

「ギャウ!!」

竜斗の声で、ドラが大空に飛び立った。

頭から尻尾の先端まで7メートル^{全長}。

赤茶けた皮膚に、獠猛な牙と歯並び。

長い腕と鋭い6本爪。

腕に張る蝙蝠のような羽根。

縦に割れた瞳孔。全体重を支える太い2本足。

「まんま、羽付き恐竜じゃねえか!!」

ガイアレイズ
恐竜が、上空に向けて大口を開いた。

「ぬ！？ あやつ、まさか。
プロテクション・バリア
防護結界！！！」

フィーの展開した結界が、ドラと竜斗たちを覆う。

ギユアアアアアアアアアア！！

ガイアレイズの口から吐き出された衝撃波が、結界に当たり、
衝撃で、ドラが弾き飛ばされた。

「グッ！！」

「キャア！！」

「ウワッ！！」

バインド
「束縛！！」

咄嗟にフィーが施術した束縛の魔術が、竜斗たちとドラを結び、
転がり落ちるのを防ぐ。

体勢を整えたドラが必死に羽ばたき、ガイアレイズから距離を取
った。

「追って来ないな」
小さくなるガイアレイズを見、竜斗が安堵の溜息を吐いた。

「ガイアレイズの羽は、主にジャンプする時の補助に使うものじゃ
からのう」

「じゃあ、あのワイバーンは飛べないんですか？」

「いいや、飛べる。」

飛ぶ時は特殊能力魔術を使うのじゃ。

じゃから、発動に時間がかかり、

地面に降りると、再び飛び上がるまで時間が必要なのじゃよ」

「つまり、地面に引きずり降ろせば、飛べないってこと？」

「その代わり、死にもの狂いで攻撃してくるじゃろうがな」

セラたちの会話を聞きながら、竜斗は顎に手を当てて、考え込む。

「あのガイアレイズ。なんで、俺たちの所に来たんだ？」

「ふむ、そうじゃな。」

大方、このドラ坊の臭いでも嗅ぎつけたんじやろう」

「そういや、ドラゴン属は総じて、縄張り意識が強かったな」

「ふむ」

「それって……」

「つまり……」

「ああ、ドラを囚にできるってことだ」

「ギャウ？」

＊

光一が取った宿屋の夕食は、山の幸をふんだんに使ったものだった。

西の港を魔王軍に占領されてから、王都に海の魚がほとんど入って来なくなっていたため、

竜斗と光一が川魚に、喝采の声を上げていた。

山菜の豊富な食事が終わった後、

長テーブルを2つ貸し切り、大雑把に地形の描かれた地図を広げ、

竜斗が今回の作戦を説明した。

「————作戦は今、話した通りだ。」

日の出前の朝4時に出発し、

廃村でドラを囚に、罾を張って待ち構え、

内気の魔力で地に縛り付ける。

ツツコミ。お前の配置は、後で個別に話し合おう。

何か質問のある奴はいるか？」

見回す竜斗に、青髪青瞳のシェラが睨みつける。

「なぜ、あなたが仕切ってるのですか？」

「……………このチビ巫女は——。」

何か、作戦について、質問のある奴はいるか？」

「わたくしの質問に答えなさい！！」

激昂するシェラの前に、

一升瓶を抱え込んで、酒を呑んでいるフィーを押し出した。

「フィー。代わりに、説明しといてくれ。

他には？」

輝くような金髪を揺らしたアリアが、ずっと白い手を上げた。

「何故、朝4時に出発なのですか？」

「ワイバーンガイレイズは変温動物だからな。

太陽が出るまで、動きが鈍いんだよ。

巣穴から出てこないはずだから、その間に罾を仕掛ける」

「でしたら、その時間帯に巣穴へ奇襲をかければ良いのでは？」

「特殊能力ガイレイズも魔術特殊能力が使えるからな。

自分の身体を暖める魔術は、基本中の基本だろうよ」

「そういえば……………そうでしたね」

「コウ。なんか、あるか？」

「よく、こんな作戦、思いつくな」

「当たり前だ。」

こっちは、元^前の世界から、ともに戦えば絶対に負けるような組織ばかり、相手にしてたんだよ。

何もなければ、終わりにするぞ」

不機嫌そうに頬を膨らませているシェラを見、

セラが竜斗に緑瞳を向けた。

「水の巫女に睨まれてるわよ」

「だから、なんだ。」

ご機嫌でも取れってか？

冗談じゃないね」

が、竜斗は全く気にしてない。

「明日の竜退治に影響しない？」

「するようなら、朝の段階で外すさ。」

戦力的にきつくなるが、そんなときゃ、初めから居なかったものとして考える」

「なんですって!!」

怒声を上げるシェラを、竜斗は一瞥した。

「いったい、お前は何が気に食わないんだ？」

「あなたが、わたしたちのリーダー面していることですわ」

「フイー。説明は？」

「なんで、我が。面倒臭い」

「おい、こら。」

お前んとこのメンバーだろうが」

「知らない」

酒杯を一気に空けるフィー。

そんなフィーの唇の端に、試すような笑みが薄く浮かんでいるのを見、

竜斗が半眼で睨めつける。

竜斗が一つ、溜息を吐き出した。

シェラの隣で、笑顔でデザートカボチャの金団を頬張っているアリエルを眺めてから、目配せしてくる竜斗に、
セラが無言で頷き、さりげなく鞆に手をかける。

「チビ巫女。お前がリーダーになりたいのか？」

「そんなことは言ってませんわ」

「なら、コウにやらせるべきだったか？」

「ええ、そうですわ！」

あなたみたいな『まが紛い物』ではなく、『本物』が皆を率いるべきですわ」

「何も考えずに、真っ直ぐ、山に入ろうとした奴にか？」

「それでも、わたくしたちは勝てますわ」

「死傷者は？」

「え？」

「死傷者が出る可能性は？」

「わたくしたちは平気です。」

ドラゴンごときに負けはしません」

「お前たちはな。」

なら、俺たちのメンバーは？」

クスツと、微笑むシェラ。

「それは、あなたたちが弱いせいですわ」

「つまり、俺たちが死んでも関係ねえってことだろ！

そんな奴に、リーダーが務まるわけねえだろうがっ！！」

ギンツ！！！！

アリエルの銀剣と、セラの細剣が打ち合わされた。

竜斗がシェラを一喝した瞬間、

シェラの隣に座るアリエルが銀剣を鞘走らせたのである。
ミスリル・ソード

竜斗の首筋に刃が叩き込まれる寸前、

抜刀したセラの細剣が防いだ。

無表情のアリエルの光の無い赤瞳と、

感情の抜け落ちたセラの緑瞳が交差する。

「すまん。ツンデレ」

「……精霊騎士がヤバイって聞いてたけど……、本当みたいね」
この子

セラとアリエルの鏢迫り合いを一瞥した竜斗は、シェラに黒瞳を

向けた。

「さて、チビ巫女。俺の意見に反論はあるか？」

「せ……戦闘に、死傷者は付きものですわ」

「そりゃ、戦闘すりゃ死人が出る可能性はあるさ。

だが、死者が出る可能性があるとわかっていて、

——未来にデメリットがあるとわかってて、

何とかなると安易な予測で、何の対策も取らねえのは馬鹿のやることだろうが」

「だからって、あなたが——」

「シェラ、竜斗。喧嘩はそこまでだ。

アリエルも剣を引くんだ。

明日は早いし、ドラゴンと戦闘なんだから。

なら、こんなことで仲違いするべきじゃない。

それにシェラ。俺は別にリーダーになりたいわけじゃないし、
竜斗がやってくれるというなら、任せるさ」

「……………コウイチ様が、そう言うのでしたら……」

シェラが渋々と承諾すると同時に、

無表情無感情のアリエルが銀剣を引き——、

瞬転、満面の笑みに切り替って、食事を再開する。

眉間を指で押さえる竜斗。

「……………コウ。…………お前…………喧嘩って…………」

「ん？　なんだ？」

「……………いや、何でもない。

主人公体質のお前と、英雄級のお前のメンバーは死なんだろうさ」

脱力した竜斗が、納刀したセラに向き直った。

「ツンデレ。脇役で凡人の俺たちは、死なないように作戦を練るぞ」

「勿論よ。

絶対に、生き残るわよ」

「わたしも…………死にたくありません」

「僕なんか、一番ヤバイです」

「ウヌ。ワシも——」

「いや、筋肉。お前だけは、何があっても、絶対に大丈夫だ」

「「「 同感
「「「

「ヌウッ!？」

＊

0501勇者のまえにと、ら、んか、あらわれた。

翌日の朝、4時――。

「は？ この山を歩くのですか？」

「当たり前だろ。て、いうか昨日説明しただろ。」

「何を聞いてたんだ？」

「そちらこそ、何の冗談を言ってるのですか。」

「こんな山、歩けるわけありませんわ！！」

「は？ 歩けるだろ。」

一カ所獣道だけど、登山道も続いてるし、十分に歩けるぞ」

「何時間、歩くつもりですか！！」

「そうだな。だいたい2時間あれば着くだろ」

「こんな山道、2時間も歩けませんわ！！」

シェラの怒声で、竜斗はやっと、その意図を察する。

「あゝ、歩けねえってそういう意味か。」

確かに箱入りチビ巫女じゃ、無理か」

「そっちの魔術師だって、無理ですわ。」

作戦を立てるなら、現実可能なものになさい！！」

指をさしたシェラに、

セラがレイフォンの緑髪の頭を抱き込んだ。

「あら、レイは平気よ。」

今では5キロぐらい普通に走れるし、

平地なら15キロから20キロぐらい、休憩なしで歩けるわ。

この程度の山なら、余裕よね」

「はい。頑張りました」

「トレーニングを始めた最初の3日は、1キロ走っただけで吐いたもんなあ」

「……………あれは、ツラかったです」

竜斗の視線に、項^{うなだ}垂れるレイフォン。

「うんうん。よく頑張ったわ。レイ」

レイフォンを抱きしめたセラが緑髪を撫でる。

「うふふ……………くすぐったいです」

二人は姉妹のようにじゃれあう。

「てな訳で、登れないのは、お前だけだぞ。

チビ巫女」

「どうするの？

置いてく？」

「じ、冗談言わないでください!!」

「でも、歩けないんですよ。」

確か、一人じゃ馬も乗れなかったわね」

「姫巫女様が残るなら、私も残る〜。

残るったら、残ります〜!」

姫巫女様のためなら、地獄の底まで付いていきます〜!!」

「アリエル。何故、わたくしが地獄の底に行かなければならないのですか!？」

「え? 逝かないんですか？」

シェラの斜め後ろで、小首を傾げる桃髪赤瞳のアリエルを見、竜斗は手を打った。

「元氣娘がいたか。
なら、話は簡単だ。
狼煙が上がったら、ペガサスで来ればいい。
元氣娘。場所はわかるな？」
「うん。大丈夫」

＊

バックパックを背負った竜斗たちは、山道を歩いていた。
濃密な山の匂いが、身体を取り巻く。
音、匂い、感触、空気、風、――全てが、命の息吹きを自己主張
してくる生命が絡み合った空間。
山に踏み込めば踏み込むほど、その無数の生態系に、そのまま取
り込まれていくような錯覚に陥る。

獣道を抜けたところで、竜斗が光一の隣に並んだ。
「なあ、コウ。」

お前ら、魔王城まで、優雅に馬車で乗り付けるつもりだったのか」

「でも、シェラは巫女だし」

「だからなんだ。」

魔術師と神官は、体力が無いのが普通だが、無けりやつけろよ。
ゲームじゃねえんだ。

数値補正なんかねえし、戦いだけでレベルが上がるわけじゃない
んだから、走らせろよ」

「いやあ、……でもなあ。」

俺が言って走るかな」

「……………あゝ」

他人のパーティーのことに、俺が口出しすべきじゃなかったな」
竜斗はガシガシと黒髪を掻く。

「いや、参考になったよ。

そういや、こうやって話すのも久しぶりだな」

「だな。小学生の時には、よく遊んでたけど、

中学になってからは、あまり遊ばなくなったしな」

「そうだったな。

中学じゃ、俺は剣道部で朝から晩まで部活漬けだったし、

竜斗はバイトだったけ？」

「んゝ。まあな」

「同じ高校に入ってから、顔を合わせても挨拶程度だったから」

「まあな。

お前と話しても、厄介ごとが舞い込んでくるだけだし」

竜斗の暴言に、光一が苦笑を浮かべる。

「ひっでえなあ」

「事実だろうが。

小・中の時、お前、来るたびにトラブルを抱えてたじゃねえか」

「そんなことないぞ」

「あゝ。お前は気づいてなかったんだっけ。

まあ、お前のトラブルのお陰で、俺のバイト先も見つかったことだし、……妥当な線か」

「あ、竜斗。それ、聞きたかったんだ」

「あん？」

「中学生になってから度々、その『妥当な線だ』って言ってたけど、それって何で？」

「バイト先の所長の口癖。

依頼を受ける時は、『いいだろう。妥当な線だ』ってのが、決まり文句でね」

「竜斗のバイト先の所長って、あの真っ赤でゴージャスな女性だろ？」

「ゴージャスカどうかは知らんが、

真っ赤で、暴力的で、口が悪くて、一人でヤクザの事務所をぶっ潰せて、

敵に回したら最悪の女だったのは合ってる」

「いや、そこまで言っていないけど……。

それと、何度も聞いてるけど、竜斗がやってたバイトって何なんだ？」

「さあね」

「教えてくれたって良いだろう？」

「お断りだよ。」

お前、絶対にいらん首、突っ込んでくるから」

「ひっでえなあ」

「事実だろうが」

＊

「ふーん。魔法陣を描く時は、木や石も考慮に入れなきゃならないのか」

「当たり前じゃ。」

全ての物に、魔力は宿っておるし、大気には精霊の力が満ちておる。

力の強い植物や石があると、そこで魔力線レイ・ラインがねじ曲がってしまうのじゃよ。

力の強い石が偶然、魔力線レイ・ラインを描き、魔法陣化してることもあるぐらいじゃしの」

「力の強い石って？」

「そうさのう。」

遙か古代から、そこに鎮座しておったり、

人から崇められたり、その石に纏わる話があったり、

自然が作り上げた完全な球形の岩じゃったりな。

下手な精霊石よりも、強い力を発してる物もあるぐらいじゃぞ」

「ほう」

廃村の広場に魔法陣を作り上げたフィーの講義を聞きながら、竜斗はメモを取っていた。

「リュウト。」

ドラが来たわよ」

狼煙を上げていたセラが、竜斗へ呼びかける。

竜斗が見上げると、

幾つかの木材を背中に括り付けたドラが舞い降りるところだった。

「時間ぴったりだな」

「ギャオ！」

竜斗が背中の紐を解き、木材を降ろしてやると、

ドラは高見櫓の屋根の上に飛び乗り、クアアと欠伸をする。

「竜って、どれくらいで来るかしら」

「そうじゃのお。」

今日は風が無いから、時間がかかるかもしれんな」

「だが、ここがガイアレイズの縄張りなら、必ず来ることだけは間違いない」

「それよりも、シェラたちはどうしたのでしょうか？」

同じ時間に出ているはずなのですが」

「二度寝でもしてるんじゃないね」

「さすがに、それは無いかと思いますが」

「ふむ。エルが、何かに興味を引かれて、ふらふらと寄り道でもしたかの」

「「「あゝゝ」」」

有り得るとばかり、竜斗とセラとアリアが同じ声を上げた。

狼煙を焚き始めてから、村の出入口を見張ってた光一が振り向いて、話に乗ってくる。

「何か、あったんじゃないか？」

たとえば……途中で、ドラゴンに見つかったとか」

「ほう。勇者をやってるだけあるな」

「凄い直感力ね」

「流石、コウイチ殿です」

「ふむ。危機感知能力は、勇者の必須条件じゃからの」

「?? みんな、何を言ってるんだ？」

竜斗たちは光一の背後を、一斉に指さした。

「後ろ? ……ア、アーーーーーッ!?」

そこには、ガイアレイズに追われ、必死に逃げているペガサスの姿。

空飛ぶペガサスを、ガイアレイズが地上を疾走して、追っていた。ペガサスの背には、シェラとアリエルが乗っている。

「うわゝゝっ!!」

シェラゝゝ!! アリエルゝゝ!!」

頬に両手を当て、悲鳴を上げる光一と、顎に手を当て、納得したように頷く竜斗。

「確かに朝飯としちゃあ、ドラよりもあっちの方が美味そうだな」

「本当ね」

「ふむ」

「何、のほほんと見てるんだよ。竜斗。

助けないと!!」

「安心しろ。コウ。

こっちには、困った時の最終兵器——『フイーえもん』がいる」
「は?」

「てなわけで」

咳払いした竜斗は笑いをかみ殺し、

「助けてゝ、フイーえもんゝゝ!」

フイーに哀れっぽい声で助けを求めた。

「む? 『フイーえもん』ってなんじゃ?」

「そうだな。」

俺の元の世界じゃ、『何でもあり』^{万能}って意味さ」

「竜斗、説明は後だ!!」

「フィー。早く!!」

「ふむ。そうさのう」

フィーは自分の顔を、右手で覆う。

指の隙間から、紫瞳でガイアレイズを見つめた。

真っ直ぐこちらへ向かって飛んでいたペガサスが、突然、よろよろと飛行姿勢を乱す。

「ああっ!?!」

光一が悲鳴を上げると同時に、

羽を広げ、垂直に飛び上がったガイアレイズが、牙の並ぶ大口を開け――、

ペガサスに咬みついた。

ガキンッ!!

フツと、ペガサスの姿が掻き消える。

同時に、ペガサスが土埃を舞上げて、光一の横に着地した。

「シェラ、アリエル!!」

「無事か!?!」

「コウイチ様――!!」

ペガサスから降りたシェラが光一にしがみついた。

「うわわわ。シ、シェラ?」

「いや、危なかった。」

フィー、ありがとう」

「何の何の。エルの為じゃ」

眼を見開いてた竜斗がフィーの隣に並ぶ。

「瞬間移動か？」

「いや、幻術じゃ」

「へえ。あんな遠くまで掛けられるものなのか」

感心する竜斗に、

レイフォンがパタパタと手を振った。

「いえいえ。偽勇者さん。

普通、あんなに遠くまでは、無理です。

幻術を掛けるには、相手の視界に入っていなければならぬのですから」

「ふむ。欠陥大魔術師。

その認識は正しくないのお」

「はい？」

「幻術の基本は、こちらが相手の眼を見ることじゃ。

視界に映っているといまいと、無関係じゃよ」

「でも、角度的に、こっからワイバーンの目を見るなんて、

《鷹目》でも無理だと思いますけど」

「《鷹目》の上級の《遠視》、その上級魔術《千里眼》じゃ。

でなくば、おぬしら全員に掛からんじやろ」

「《千里眼》……それって、占術師の最高奥義ランク魔術では……」

「ふむ。我はこれでも、全ての魔術を扱える者『術師』じゃからの」

ペガサスを食べ損ねたガイアレイズは理解が及ばないのか、

口を開いたり閉じたりした後、
辺りの草むらを、あちらこちらと嗅ぎ回っている。

「ああしておるのを見ると、可愛いもんなんじゃないがのう」
「いやいや。可愛くは見えねえって」

うろうろしていたガイアレイズが風の匂いを嗅ぎ、顔を上げ、
ペガサスを見つけると、途端に目をぎらつかせた。

「バレたな。」

皆、配置に着け!!」

「だから、何故、あなたが指揮を取っているのですか!？」

「この期に及んで、まだ言うか。」

このチビ巫女は」

「私は、チビ巫女などという名前ではありません。

水の巫女様と呼びなさい!」

「自分に様付けって、何様だよ」

「水の神殿の代表ですわ!」

「ああ、そうかい」

全長7メートルのガイアレイズが一直線に走って来る。

「偽勇者殿の作戦通り、ここは私が――」

アリアが長剣を抜き払い、

ガイアレイズの直線上で、バスタードソードを上段に構えた。
後ろには、メイスを構えたアーサー。

「アリアさん。俺も――」

「コウ。」

お前には、お前の役割があるだろうが」

「だ、だけど……」

握ねる光一を、竜斗はずるずると引っ張って行く。

広場の中央には、アリア。その後ろにアーサー。

広場の谷側には、竜斗、光一、フィー、セラ。

山側には、アリエル、シエラ、レイフォンが位置に着いた。

騒がしい外野を一顧だにせず、真っすぐガイアレイズを見据えるアリア。

広場の中央に立つアリアに向かって、

涎を垂らし、大口を開けたガイアレイズが突進してくる。

だが、アリアはバスタードソードを上段に構えたまま、微動だにしない。

その距離は1メートルに迫り、

「アリアさん!!」

光一が悲鳴を上げ、

「フッ!!」

アリアがバスタードソードを振り下ろした。

ガゴォォン!!

突進してきたガイアレイズの鼻面に長剣が当たる。
バスタードソード

一瞬、両者の力が均衡し――

ズン！

アリアが全体重を込めて、一步、震脚。
ふみこむ

勢いを殺されたガイアレイズは後ろに踉蹌めき、長い尻尾を地面に着けた。

「さすが、アリアさん！！」

全長7メートルのガイアレイズの突撃を押し返したアリアに、光一が喝采を上げ、

「マジかよ。……あれで掠り傷か」

竜斗がじわりと冷汗を滲ませる。

アリアの強烈な一撃でも、ガイアレイズの鼻面には、浅い傷しかできてなかった。

「コウ。」

「お前の番だ！！」

「あ、そうか」

聖剣に魔力を溜めていた光一は、剣を振り上げる。

再び、アリアに襲いかかろうとするガイアレイズに、

「させるかああああ！！」

光一は聖剣を振り下ろした。

聖剣から発せられた光の奔流が、ガイアレイズの脇腹にぶち当たる。

踏鞴^{たたら}を踏んだガイアレイズは、竜斗たちの方へ向き直った。
目が怒りに燃え、牙を剥き出す。

「内気!!」

「はい!」

レイフォンが魔法杖を地面に突き、魔力を流した。

尻尾側にいるレイフォンの魔力で、
地面に埋まっていた精霊石がレイ・ラインを描き、魔法陣が発動する。

《拘束^{バインド}》

魔法陣から伸びる幾重もの光の鎖が、
ガイアレイズに絡み付き、縛り上げ、地に束縛していった。

ガアアアアアアアア!!

吼え猛るガイアレイズが暴れるが、光の鎖が切れる気配はない。

「ほう。流石は『欠陥大魔術師』じゃ。

魔力量だけなら、ドラゴン種に匹敵しておるのお」

「ここまでは、リュウトの作戦通りね。

あとは、斃すだけよ」

「ああ、斃すだけだが……。

……これは、本当に斃せるものなのか？」

「大丈夫だ。竜斗。

今までだって、何とか生きてきたんだし、
今回だって、何とかなるさ！」

「……………お前が羨ましいよ。コウ。

ま、やるしかねえか。

内気の魔力も無尽蔵じゃない。

短期決戦で決めるぞ!!」

＊

051ー勇者は と、らこ、ん と たたかっている。

魔法陣でガイアレイズを束縛したことを確認したアリアが振り向く。

「神官騎士殿。

シェラたちの防ガード護に行きましょう」

「ウヌ！」

レイフォンたちを護衛するために、アリアとアーサーが駆け出した。

「いけない！！

神官殿。

近づきすぎです！！」

「ヌ？」

一直線にレイフォンたちの所へ向かったアーサーへ、ガイアレイズが光の綱に拘束された尻尾を叩きつける。

ズバン！！

「おおおアッ！！」

アーサーは砲弾のように吹っ飛び、

家の壁を打ち破り、反対側の壁を貫き、煉瓦の壁を打ち崩し、大木を圧し折って止まった。

全員が無言で、倒れたアーサーを見つめる。

皆が注目する中、むくりと起き上がるアーサー。

そのまま、何事も無かったかのように、ドタドタと竜斗たちの所へ走り、

「ヌウ。驚いた驚いた。」

大惨事になるかと思っただわ」

アーサーは額をペチペチと叩いた。

「なんで、今ので大惨事になってないのよ!!」

「ヌウッ!？」

ツッコむセラと、地団太を踏む竜斗。

「チクシヨウッ!!」

ツッコミがいねえから、ツッコミ役が足んねえよ!!」

フィーが呆れたように紫の瞳を、竜斗たちに向ける。

「おぬしらも、ガイアレイズを前に余裕じゃのう」

「だがよ、フィー。」

あいつ。なんで、あんなに動けるんだ？」

「伸縮する鎖に繋がれてるようなものじゃからな。」

この地からは動けぬが、攻撃は出来るのじゃよ」

「なるほど」

「了解」

「ウム」

泰然とガイアレイズの真正面に歩み出たアーサーは、――後頭部で手を組み、太腿を若干前に出し、腹筋と太腿に力を込める《アドミナブル・アンド・サイ》。

「ウヌ! なかなか良い一撃だった。」

さあ、どちらが強き筋肉か、筋肉勝負!!」

アーサーの白い歯がキラメいた。

しないしない　と、後ろで手を振る竜斗とセラ。

叩き下ろされるガイアレイズの尻尾を、

アリアがバスタードソードで防ぎ、弾き返す。

「偽勇者殿、神官騎士殿、セラ、フィー。

遊ぶのは、そのくらいにしておいてください！

アリエル！！」

「ほいさっ」

ミスリル・ソード

アリエルが銀剣を抜刀した。

同時に、井戸から水柱の渦が噴き上がり、

ガイアレイズの背中に襲いかかる。

それに合わせて、フィーが魔術を施術した。

フリーズ

「氷結！！」

ガイアレイズの背に当たった水流が一瞬で氷と化し、全身を覆っていく。

「よし！　こいつも変温動物だ。

これで、動けなくなるはず——」

竜斗が拳を握り締めた時、

ガアアアアアアアアア！！

ガイアレイズが雄叫びを上げた。

ガイアレイズの身体が発熱して氷が融け、
一瞬で沸騰し、全身から水蒸気が立ち昇る。

竜斗と光一は、ぽかんと口を開けて眺めていた。

「なんつーか……」

「ファンタジーな生き物だな……」

ガイアレイズがブルツと身体を震わせると、熱湯と化した水滴が飛び散る。

大きく息を吸い込むガイアレイズを見、

「む、マズイ……」

疾とくと、避けよ……」

フィーの警告とともに、竜斗たちが左右に逃げ出した。

ガイアレイズが衝撃波プレスを吐き出す。

ただ独り、逃げ遅れたアーサーに向かって。

ギユアアアアアアア……！

「ヌウ……」

腕を交差させたアーサーは衝撃波プレスを真正面から受けた。

革鎧ハーデレザが、音を立てて破断していく。

ギシギシと全身の骨が軋んだ。

皮膚が弾けるように切れていく。

ワシは……自分の筋肉を信じておる。

——ならば、超えられるはずだ！

意識せよ。

意識せよ！

意識せよ！！

強固な防御を――。

強靱な筋肉を――。

防いでいる両腕がギチギチと曲がり、
衝撃波の威力に、ズルズルと後方に押されていく。

「筋肉！！」

ゴウゴウと鳴るアーサーの耳に、竜斗の声が響いた。

安心せよ。偽勇者。

ワシの筋肉に――――防げぬものはない！！！！

ズン！！

アーサーは引き足を踏み込んだ。

「ヌオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

轟声を上げるアーサー。

衝撃波に曝さらされているアーサーの身体に、
幾何学模様の線が白く発光し始める。

押されていたアーサーが踏み止とどまった。
折れ曲がりそうだった腕が元に戻り、
損傷していた皮膚が修復していく。

白い幾何学線を発光させたアーサーの身体は、衝撃波を完全に防いでいた。

ガイアレイズのブレスが弱まり――、
衝撃波

途切れると同時に、アーサーは膝をついた。

「筋肉。大丈夫か!？」

駆け寄ってくる竜斗に、

アーサーは親指を立てて、白い歯をキラメかせる。

「ウヌ。日頃の筋肉トレの成果だ」

「いや、絶対に違うだろ」

「ヌウ!？」

「アイス・サーパント
氷大蛇!!!」

衝撃波

ガイアレイズのブレスが途切れた直後、

シェラが氷の大蛇を2匹、召喚した。

氷の大蛇はガイアレイズに絡みつく。

熱せられたガイアレイズの皮膚に触れた氷の大蛇が熱を奪い、ジュウジュウと音を立てた。

「氷の蛇だと？」

そんなことが出来るなら、作戦会議の時に言えや!!」

竜斗の抗議に、つーんとそっぽを向くシェラ。

氷の大蛇に絡みつかれ、

尚克つ、熱を奪われたガイアレイズの動きが鈍ってくる。

「何にせよ、ナイスじゃ。シェラ。」

アース・ジャベリン^{土槍}！！」

フィーの右手の中指に填めた魔法指輪の前に魔法陣が展開した。

地面の魔力線^{レイ・ライン}を避けて出現した、無数の円錐形の石の槍が、比較的柔らかいガイアレイズの腹を貫く寸前――、

ゴアアアアアアア！！

ガイアレイズの咆哮で、土の魔法が無効化^{アース・ジャベリン キャンセル}される。

「え？」

「おいおい」

「なんで？」

「おお！

そういうえば、ガイアレイズは土属性のモンスターじゃったな」

「いやいやいや。」

さつきから、アイツ。

飛行やら、衝撃波やら、加熱やら別属性の魔法^{特殊能力}ばかり、使ってるけど！？」

「じゃが、吼えただけでキャンセルされたところを見ると、土属性なんじゃろ」

「……モンスターに属性があるなんて、すっかり忘れてたぜ」

「普通は同属性攻撃が多少、効きにくい程度じゃからのお」

「クソッ！！ 土系魔法は全てダメか。」

フィー^{術師}、一撃必殺の魔法ってないか？」

「ふむ。隕石召喚があるが、……あれは論外じゃな。」

我は、人間が扱える全ての魔法を扱える『術師』じゃが、

魔力量は『欠陥大魔術師』と違って、高位の魔術師レベル程度なのじゃよ」

「人間が扱える魔術の中で、

ピンポイント

一撃で、ガイアレイズの皮膚を貫く魔術は存在しないってことか」

「ふむ。残念ながらの。」

種族の差は如何ともしがたいのじゃ」

「リュウト」

「……………すまん。ツンデレ。」

時間を稼いでくれ」

眉間に皺を寄せる竜斗を見、

セラはガイアレイズに向き直った。

「アリア。神官。」

攻撃するわよ。

リュウト。信じてるからね！

氷槍

アイス・ジャベリン！！」

時間さえ稼げば、竜斗が何とかする。

セラはその信頼を持って、ガイアレイズに氷弾を飛ばした。

アリアが尻尾をバスタードソードで吹き飛ばす。

アーサーがガイアレイズの右手をメイスで殴り飛ばした。

アリエルが氷の大蛇を避けて、無数の風の刃カマイタチをガイアレイズの背

中に降らせる。

「なら、俺も一発——」

聖剣を振り上げる光一の背中を、竜斗が槍の石突で小突いた。

「何すんだよ！ 竜斗」

「あの光の渦を撃つつもりだろ」

「勿論だ」

「ガイアレイズを縛ってる内気に負荷がかかるだろうが」

「あ、ああ。そういえば……」

「じゃあ、………どうしよう？」

「そうだな。」

その聖剣の光撃は、刃物みたいに収束できないのか？」

「刃物みたいにか……」

「わかった。やってみる」

「おい。やってみるって」

光一が眼を瞑ると、振り上げた聖剣が白光の輝きを放つ。

「刃物に収束……斬る形に……薄く……鋭く……刃へ………」

光一はカッと眼を見開いた。

「喰らえええええええッ！！」

光一が聖剣を振り下ろすと、

刃の軌跡に沿って、光の薄刃がガイアレイズを斬りつけた。

「これでいいか？ 竜斗」

振り向く光一に、

半眼を向ける竜斗。

「コウ。出来るなら、始めからやれよっ！」

「いや。今、言われて、やってみたら——何かできた」

「あゝあゝ、そうかい！
お前は主人公だよ。コウ」

「勇者やってるからな。
いくぜ！！」

光一は光の斬撃を、ガイアレイズに向けて連発する。

「リュウト。あれで斃せると思う？」

「無理だろうな。」

ガイアレイズが動いてるのもあるが、狙いが悪すぎる」

光一の斬撃は、一ヶ所に集中できていないため、
ガイアレイズの皮膚が傷だらけになるものの、貫くには至ってな
かった。

「で、こんな手を考えてみたんだが――」

耳打ちする竜斗に、片目を瞑るセラ。

「この詐欺師」

「失礼な。偽勇者だよ」

竜斗は気合を入れるように、声を張り上げる。

「ツンデレ。ヤツの喉を狙え、

口が開いたところを、フィー、魔術で攻撃だ」

「了解！」

「む？」

セラは炎の魔剣を一振りし、炎を鞭状にした。

「喰らいなさい！！」

振り上げた炎の鞭をガイアレイズの喉元に叩きつける。

——寸前、ガイアレイズは右手を攻撃しているアーサーを見下ろした。

刹那、セラは手首を捻り、鞭の軌道を変え、ガイアレイズの双眸に炎鞭を叩きつける。

ガアアアアアアアアアアアアア！

苦痛に大口を開け、天に咆哮するガイアレイズ。

「誘導する光矢ホーミング・レイボウ！！」

フィーが撃ち放った6本の光矢が、ガイアレイズの口元へ飛翔した。

が、咄嗟に顎を閉じたため、光矢はガイアレイズの堅い皮膚に阻まれる。

その動きを見ていたセラが、竜斗へ振り返り、頷いた。

「いけそうね」

「おう」

口角を上げた竜斗が、アーサーと光一に呼びかける。

「筋肉。コウ。」

ガイアレイズのブレスは何回、耐えられる」

「ヌウ。ワシは3、4回程度だな」

「俺は……1回が限度だと思う」

頷いた竜斗は、陽の陰った空を見上げ、

「光球ライト!!」
魔術光球を打ち上げた。

太陽に流れる雲がかかり、明暗する広場が、
竜斗の光球によってスポットライトのように照らされる。

竜斗が全員に聞こえるように、腹の底から声を張り上げた。

「みんな、聞け!!」

「ガイアレイズを斃す算段がついたぞ!!」

＊

0521偽勇者は と、らこ んと たたかっている。

「^{光球}ライト!!」

竜斗が打ち上げた^{魔術}光球で、

流れる雲により明暗する広場が、スポットライトのように照らされた。

竜斗が全員に聞こえるように、腹の底から声を張り上げる。

「みんな、聞け!!」

ガイアレイズを斃す算段がついたぞ!!

チビ巫女。氷の蛇をあと二匹増やせ。

俺が左手。ツンデレが右手。委員長は尻尾を攻撃。

元氣娘は、精霊で攻撃組をサポート。

筋肉とコウは真正面から攻めろ。

そして、一度だけ、^{衝撃波}ブレスを耐え切れ。

筋肉。お前は前に立って、コウの負担を軽減しろ。

フィーは、ブレスが切れたところで、口の中を魔術攻撃。

そして、コウ。奴が怯んだ隙に、聖剣の光撃でトドメを刺せ!!」

「了解」

「了解しました」

「はい」

「ウム！」

「わかった」

「ふむ。なるほどのお」

「何を勝手に命令してますか！！」

「シェラ！」

アリアの叱咤の視線に、

ぶちぶちと悪態を吐きながらも、シェラが召喚し、

二匹の氷の大蛇が、ガイアレイズに絡み付いた。

計4匹の氷の大蛇が暴れるガイアレイズを巧みに絞め上げていく。

レイフォンの束縛の魔法陣に加え、シェラの氷の大蛇で動きが制限されたガイアレイズの右肩を、

竜斗は魔槍の稲妻で、集中的に貫いた。

セラが左爪を避けながら、

炎と氷を纏った魔剣で、ガイアレイズの左腕を連続で斬りつける。

レイフォンのシェラを狙うガイアレイズの尾を、

アリアがバスタードソードで弾き返した。

ガイアレイズが苛立ったように、

目の前にいる光一とアーサーを噛み砕こうと大口を開ける。

「喰らええええッ！！」

光一が聖剣を発光させて、光の斬撃を放った。

ガイアレイズは傷つくことも構わず、鋭い牙をアーサーへ向ける。

「ヌン！！」

アーサーはメイスを振り下ろし、ガイアレイズの鼻面に叩き込んだ。

ガツッ!!

アーサーの一撃が、ガイアレイズを押し止める。

拮抗したガイアレイズとアーサーが押し合い、
渾身の力比べをしているところへ、

「そおおおれっ!!」

明るい掛け声とともに、ミスリル・ソード銀剣を振ったアリエルによって作り出された風の塊が、

ガイアレイズの横っ面を張り飛ばした。

「あはははは。

当たった。当たった」

殴られた姿勢のまま動きを止めていたガイアレイズが、怒り心頭に発した怒声を咆哮する。

グウアアアアアアアアアアア!

アーサーと光一を見下ろしたガイアレイズは牙を剥きだして、大きく息を吸い込んだ。

「ヌンッ!!」

腕を十字に組んだアーサーの身体に、白い幾何学模様が発光した。

「来い!!」

魔力を流した光一の聖剣が光り輝き、聖剣の前に半球レンズ状の光の

壁が展開する。

ギユアアアアアアアアアアアアアア！！

ガイアレイズが大口を開き、
光一とアーサーへ^{衝撃波}ブレスを放った。

幾何学模様の白線を強く発光させたアーサーは^{ブレス}衝撃波を完全に防ぎ、

その後ろで、光一の展開した聖剣のレンズ状の光壁が^{ブレス}衝撃波を後方に受け流していく。

アアアアアアアアアアア………。

ガイアレイズの^{衝撃波}ブレスが途切れると、
光壁を消した光一が疲労したように膝を崩しかけ、――踏み止まった。

「《ス。^{雷球}パーク・ショット！！》」

直後、フィーの撃った雷球がガイアレイズに、一直線に飛翔する。
咄嗟に口を閉じるガイアレイズ。

フィーの雷球は狙い^{……}過たず、
ガイアレイズの眉間にぶち当たった。

ガイアレイズの目前で、青白い火花が盛大に弾け散る。

「ヤバイ！ ミスった！！」

コウ！！ 逃げろおおおッ！！」

同時に、竜斗の焦った大声が広場に響き渡った。

ニイと目で嗤ったガイアレイズが再び^{衝撃波}ブレスを吐こうと、大口を開き――、

口内から、^{魔力弾}脳天を一筋の光が貫く。

「……………え？」

聖剣を頭上に振り上げた光一の目の前で、轟音とともにガイアレイズが崩れ落ちた。

広場に、無音の静寂が満ちる。

歩み寄ったフィーが、ガイアレイズの首筋に手をかざし、竜斗へ振り返った。

「ふむ。完全に死んでおる。

我らの勝ちじゃ」

盛大に吐息を吐き出した竜斗は《鷹目》をかけ、谷を挟んだ、向かいの山の中腹を眺める。

1キロほど先の山の中腹で、

腹這いになっていた岩の上から身体を起こし、カムフラージュ偽装していた木の枝と木の葉を払い落とすウィズの姿があった。
同時に、高見櫓の上のドラが、ウィズを迎えに飛び立つ。

「コウイチ様、大丈夫ですか!？」

御怪我は？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

「よかったですわ!」

駆けてきたシェラが安堵の吐息を吐き、光一に飛び付いた。

「……………な、なあ。竜斗」

「あん?」

「いったい、どういうことなんだ。

なんで、死んだんだ? このドラゴン。

俺がトドメじゃなかったのか?」

「ああ、アレ。
ブラフ
嘘だ」

「……………は?」

「お前、気づいてなかったのか?

そのガイアレイズ、人語を理解してたぞ」

「ええっ!？」

「うちのドラだって、言葉を理解するんだ。
ガイアレイズ
最上級のワイバーンが、理解しないはずないだろう。

もっとも、俺も確信を持てたのは、

目を狙えと耳打ちしておいたツンデレに「喉を狙え」と言った時、
「ガイアレイズが首を庇った時だけだな」

「あ、ああ。そうなのか……。」

「……えーと、だから、どういうことだ？」

「言葉が理解できたとして——……、だから、何なんだ？」

「会話ができなきゃ、説得や交渉は難しい。」

だが、言葉が通じるのなら、騙すことはできる」

「^{だま}騙す？」

魔槍を肩に担ぐ竜斗。

「^{光球}ライトを打ち上げて、ツツコミに合図を送ってから、

ガイアレイズに態と、こちらの作戦を聞かせる。」

一発目のブレスが切れたところで、
フィーが雷球を眉間に当てて、火花でガイアレイズの目を眩ませる。

同時に、俺が「逃げろ！」と叫んで、

火花で前が見えないガイアレイズにチャンスと思わせ、
ブレスを撃つために口を開かせる。

で、大口を開けたところに——」

竜斗は指鉄砲を作り、バン！ と撃つ真似をする。

「堅い皮膚の無い口腔口のに、ツツコミの狙撃一発。
策を立てた俺が言うのもなんだが、

よくとまあ、あんな距離から当てられたもんだ」

竜斗が空を仰ぐと、ドラの背に乗ったウィズが手を振っていた。

「偽勇者さーん。やりましたよー」

「やれてなきや、今頃、死人が出てたかもしれんがな」

「……凄いな。竜斗」

光一の呟きに、

鼻を鳴らす竜斗。

「本当に、凄いのはファイだよ。」

事前打ち合わせも、アイコンタクトも無しに、目配せ

俺の作戦を完璧に読み切って、最善の手を打ったんだからな」

竜斗の視線に、

紫の眼を細め、銀髪を両手で掻き上げるファイ。

「正道も良いが、邪道も嫌いじゃないのでな。」

リユートとセラの連携で予想もついてたしのお」

「そうかい」

竜斗とファイが挑戦的な薄い笑みを浮かべ合う。

「……………そうか」

「コウイチ様。どうなさったのですか？」

浮かない表情の光一に、シェラが心配そうに覗き込んだ。

「うん。強いドラゴンだったし、
正々堂々、己の力の限りを尽くして、戦いたかったな。……と思
つてさ」

「それでこそ、勇者様です。」

コウイチ様は、常にそうあるべきですわ」

「そうかな？」

「そうですとも！」

シエラに慰められる光一を眺め、

竜斗は片目を睨めて、自嘲の笑みを浮かべる。

「リュウト？」

「真正面から正々堂々が『勇者の資格』なら、俺は偽勇者でいいさ。」

真正面から正々堂々と全力を尽くして――など、余裕のある奴ら
の台詞だよ。

俺らに、そんな余力はない。

ツンデレ、内気、ツツコミ、筋肉、ドラ。

そして、俺自身が生き残り、明日を見るためならば――、
誰であろうと、正々堂々、背後から不意を打ってやるよ。

だから、俺は『偽勇者』だ」

竜斗の傍らに、そっと寄り添ったセラが微笑む。

「……大丈夫よ。リュウト。」

私にはわかってるから。

仲間が死なないように、

必死に情報を集め、事前に手を回し、策を練り、

不意を打ち、嘘で騙し、死角を突き、
——敵を完膚無きまでに、叩き潰す。

あなたと私たちが生き残るために。

あなたのことを、私はわかってるから。
だから、大丈夫。

私が知ってるから、リュウトは大丈夫」

「……………セラ」

「ん？」

「ありがとな」

「うん」

微笑みを交わす竜斗とセラ。

二人から少し離れた場所でも——、

「完全に二人の世界に入ってますね、あれ。

声、かけづらいな」

「キャ〜、キャ〜」

「ヌウ」

「ギャウ！」

その仲間たちは声をかけられず、困っていた。

「あ、そういえば、アーサーさん」

レイフォンがアーサーを見上げる。

「ヌ？」

「ブレスを真面^{まへ}に受けてましたけど、大丈夫なんですか？」

「ウム。意識して、無意識防御魔術を使えるようになったのでな。

あと3回程度は耐えられる」

「どこまで、不死身!？」

ていうか、さらに不死身化してますよ、この人!!」

「ウヌ。筋肉の思し召しだ」

「筋肉は、そんな思し召しはしません!!」

「又ウツ!？」

「おう。ご苦労だったな。

ツツコミ」

歩いてくる竜斗とセラに、
ウィズが苦笑いで頷いた。

「ええ、偽勇者さんも。

なんとか、斃せましたねえ」

「ああ、まったくだ。

それにしても、ツツコミが居なくて大変だったよ」

「え？ 本当ですか？」

「ああ。

ツツコミ役が足りなくて、大変だった。大変だった」

「僕の役目は、ツツコミだけですかっ!？」

「「……………え?」」

「偽勇者さん。セラさん。

その”違ったの?”っていう顔、止めてください。

本気で泣きそうですから」

「あのー、偽勇者さん。

手伝わなくて良いんですか？」

「あん？」

レイフォンが指さす先には、

一人で、黙々と、ドラが運んできた木材を――『台車』を組み立てているアリア。

竜斗は黒髪を掻いた。

「真面目だなあ。……委員長も」

＊

0531勇者は と、ら、こ、ん を たおした！

「さて、あとは竜を麓まで運ぶだけですわ。

わたくしたちが台車で運びますから、

あなたたちは歩いて、麓まで下りてきてくださいな」

ガイアレイズを荷台に括り付け終わった時、

両手を腰に当てたシェラが竜斗に提案をした。

「あん？」

「台車を引っ張るには、ペガサスとクオランスドラが必要でしょう。
なら、全員、荷台には乗れませんわ」

「冗談言うな」

「冗談を言ったつもりはありませんわ」

「うちのドラなら、あの程度、一匹で運べる。

な、ドラ？」

「ギャオ！」

「ほら、ドラもそう言ってる！」

「……そっちのことでしたの。

兎に角。わたくしたちが先行して運びますわ」

青髪青眼のシェラを見下ろしていた竜斗が視線を外す。

「アリッ
委員長」

「はい？ なんでしょう」

「麓まで着いたら、ドラを放せ。

俺は兎も角、内気が疲労してるんでな」

「では、私たちと一緒に下りれば良いのでは？」

レイフォンさん、一人分のスペースなら十分にありますが」
「言っただろ。疲労困憊してるって。」

山道じゃ、荷台の上は揺れるんな。

暫く、ここで休ませていく」

「そうですか」

「そう言うわけだ。」

麓に着いたら、ドラを放せ。

いいな」

「了解しました。」

約束しましょう」

「アリア!!」

「なんです? シェラ」

「偽勇者と、そんな約束を交わす必要はありませんわ」

「いいえ。ドラは彼らのパーティーの一員です。」

「なら、帰すのは当然のことだと思えますが」

アリアの正論に、唇を尖らせるシェラ。

「それは……そうですが……」

「ならば、いいでしょう」

「ドラ。お前も麓の村に着いたら、すぐにここへ戻ってこいよ」
「ギャオ!」

「では、コウイチ様。
行きましょう」

「ああ、そうだな。」

竜斗。悪いな」

「別に。」

それと、ドラの御者は、元氣娘アリエルにした方がいい。

ドラも慣れてるからな」

「わかった。そうしよう」

そこで、銀の長髪を掻き上げたフィーが片手を上げた。

「コイイチ。我も残ろうと思っておるのじゃ。

さすがに疲れた」

「大丈夫か？ フィー」

「うむ。少し休めば回復するじやろう」

「コウイチ様。

出発準備が整いましたわ」

「……じゃあ、フィー。」

後から来いよ」

「うむ」

竜斗の袖を引っ張るセラ。

「ねえ、リュウト。

大丈夫なの？」

「あん？」

「そのまま、勇者パーティーにドラを誘拐されない？」

「平気だ。

あの委員長は、筋を通すからな」

片目を瞑る竜斗に、

セラがポンと手を打つ。

「あ、そうよ。……そうだったわ。

昔から、アリアは出来ないことは約束しないし、約束したら何があっても、絶対に守ってたわね」

「ふむ。それが、アリアの健気で可愛いところじゃよ」

台車の見送りから、戻ってきたフィーを、

腕組みした竜斗が出迎えた。

「……へえ。『術師』が、お疲れ……ねえ」

「ふむ。私も、頑張ったからのお」

薄い笑みを浮かべて、眼を見交わす竜斗とマスター・フィー。

「さて、フィー」

「なんじゃ？」

「取り分は20分の1だ」

真正面から言い放った竜斗に、

フィーは紫の瞳をニイと細める。

「何を、人数で割った6分の1が常識じゃろう」

「ガイアレイズ討伐の名声は、お前らのものだ。

だから、実は俺たちが取る。18分の1」

「我らの功績と言っても、正確にはコーイチのものじゃ。

8分の1でどうじゃ」

「いやいや、名声は大事さ。17分の1」

「何を言う。ルキアから別途に依頼料を貰えるのじゃろう。10分の1じゃ」

「チッ。知ってやがったか。15分の1だ」

「そうじゃのう。我は15分の1でよい。

その代わり、魔法具があったら、優先で我が貰い受けようぞ」

「魔法武器じゃなくて、魔法具だな。

内気が解析できない物ならいいぞ」

「ふむ。よかろう。

交渉成立じゃな」

「あん？」

「欠陥大魔術師は、魔術・魔法陣分析構築課に所属してるから、魔法具の知識はあるじやろうて。」

じゃが、魔術による解析はできまい。

暴発するからの」

「……………あっ！」

「ククク。まだまだじやのう。リユート」

「あのー、何の話をしてるのですか？」

「ドラゴンは光物を溜め込んでるからな。」

そいつの分け前の相談」

「……………はあ」

「ふむ。異世界から来たリユートは、知らんと思ってたんじゃがな」
「悪いが、ドラゴンの習性は、元の世界異世界にまで知れ渡ってるよ」

「なんと!？」

＊

ドラが竜斗たちの元に戻ろうと山間を飛んでいると、
一筋の白い煙が昇っている廃村の方向から、何やら美味しそうな
匂いを嗅ぎ分けた。

「ギャウ？」

ドラは空を滑空しながら、首を傾げる。

ドラが高度を落とし、廃村の広場に着地した。

「おっ、ドラ。タイミングばっちりだ。

そろそろ、出来る頃だぞ」

竜斗が笑みを浮かべて、手を振る。

トストスとドラが近づくと、皆は鍋を囲んでいた。

セラがドラに微笑みかける。

「猪鍋よ。

味を調えるまで、もう少し待ってね」

「ギャオ！」

ドラはその場で、”待て”のように伏せた。

「ふむ。ドラ坊は完全に、我らの言葉を理解してるようじゃな」

「ふふん。うちのドラは世界一だからな。

ドラ・ファンクラブ会長の俺が保証するぜ」

「リュウトは、本当にドラバカなんだから。

はい。煮えたわよ」

「お腹、空きました」

「朝食を取ってから、大忙しでしたからね」

「ウム」

「ドラもお疲れさん」

「ギャオ！」

この猪鍋は、ドラが戻ってくるまでに、

竜斗が空き家を探り、鍋を見つけ、

ウィズが火を熾し、

フィーとセラが猪を狩り、

レイフォンが山菜を摘み、
アーサーが薪拾いと水汲みをして作った昼食だった。

猪と山菜を煮込んだ鍋を食べながら、
フィーが小枝から魔術で削り出した箸を、竜斗へ向ける。

「どうじゃ。我なら、ガイアレイズの巣穴を探し当てることもできよう。」

じゃから、取り分を10分の1にせぬか？」

「ふふん。」

ドラ。ガイアレイズの巣穴の場所はわかるか？」

「ギャオ!!」

セラから分けて貰った猪肉を丸飲みしたドラが、任せろと鳴いた。

「てなわけだ。必要ないね」

「……優秀なもの、時には問題じやの」

舌打ちしたフィーは、煮えた肉の塊に噛^{かぶ}り付いた。

＊

ガイアレイズの巣穴に、

ドラは初めから位置を知ってるような足取りで一直線に辿り着いた。

ドラはその巣穴に入りたがらず、入り口で見張りを務めている。

「やっぱり、縄張りとか、そういうのがあるんですかね？」

「さあな」

ガイアレイズの巢穴の奥には、竜斗たちの期待通り、光物が集められていた。

だが――、

「ガラクタばかりだよなあ」

「一応、金貨と銀貨はあるけど……思ったよりも少ないわね」

「ふむ。人間の価値を意識して収集しとるわけじゃないから、こんなもんじゃろう」

「少ないと言っても金貨と銀貨合わせて、

50金貨（500万円）分くらい、余裕にあるのはいいが……」

「その数十倍のガラス玉。ガラス玉。ガラス玉。

ガラスですっ！！」

ガイアレイズの巢穴には一面、ガラス玉が敷き詰められていた。

「どっから、こんなに拾ってきたんだ？」

「ヌウ。同じような物を、収穫祭の飾り付けで見たことがあるぞ」

「あ、そういえば。」

ランプの光が当たると、凄く綺麗に見えるんですよね」

「こりゃ、麓の村から、ごっそりと盗んで来たんだろうなあ」

「ふむ。その場面を想像すると、ガイアレイズも可愛いもんじゃって可愛くない可愛くない、と手を振る竜斗とウィズ。」

「ん？」

足下で反射した光を頼りに、ガラス玉を踵で掻き分ける竜斗。

「ナイフ、2本見つけ。」

おっ、刃に魔法陣が刻まれてる」

竜斗が見つけたナイフを、レイフォンが覗き込む。

「魔法武器ですか？」

「内気。この魔法陣、何かわかるか？」

「えっ……と……。あっ、凄いです！」

こっちは^{防護}プロテクションの上位の「ダイヤ・プロテクション《金剛保護》・ナイフで、

もう一本は、^{聖光}ヒーリングの上位のセイクリッド・^{治癒}ヒーリング・ナイフです。

ここまで複雑な魔法陣を刻まれてる魔法武器は、^{レア}滅多にないですよ」

「おおっ!!」

歓声を上げる竜斗に、

唇の端に笑みを乗せたファイが顎をしゃくった。

「欠陥大魔術師。もちっとよく見よ」

「はい？」

もっとですか？」

じっとナイフを見つめるレイフォン。

そして――、

「……ああっ！」

「あん？ どうした？」

「魔法陣が刃の部分にあります……」

「それが、どうした？」

「え……と、刃の部分に魔法陣が展開するんです」

「だから、プロテクトするんだろ」

「そうですけど、違います」

「は？」

「ですから、刺した相手をプロテクトするんです!!」

「そうだろ。だから、刺した相手を………刺した方!？」

「はい。そうです。

その魔法陣の構造だと、持ち手の魔力を吸収して、
刺した相手を《—ダイヤ・プロテクション《金剛防護》》してしま
います」

「……………それって、何の意味があるんだ？」

「……………さあ？」

「役に立たねええ!!」

でも、面白い!!

こういうバカな物が、大好きだ!!」

感極まって叫んだ竜斗がふと、もう一本のナイフもレイフォンに
見せる。

「てことは、こっちのナイフも、刺した相手をヒーリングするって
ことか？」

「治癒するだけじゃなく、『穢れ』魔素も祓います」

「意味ねえええ!!」

でも、メツチャ面白い!!

こういう、バカな物が、超好きだああ!!」

竜斗が、ガイアレイズの巢穴の中心で叫んだ。

「……いったい、誰が何を考えて、こんな物を作ったんでしょうか？」

小首を傾げるレイフオンの後ろで、俯いたウィズが両拳を握り締める。

「……クッ！」

「………いつか作ろうと思ってたのに、先を越された………」

「ええっ！？ ウィズさん。」

「なんで、そんなに悔しそうなんですか？」

「また、面白い物を見つけたのお。リユート。」

「ちなみに、我が見つけたのは、こんなものじゃ」

「フィーが金色の『天秤』を掲げた。」

「内気、アレが何だかわかるか？」

「本で読んだ覚えがあるんですけど、……ごめんなさい。」

「……思い出せません」

「では、我の物じゃな」

「……ああ。約束だからな」

「ふむ。素直な子は好きじゃぞ」

「後学のために聞くが、それって幾らぐらいする物なんだ」

「そうじゃのう。」

「本物ならば、300金貨（3000万円）くらいかの」

「……本物なのか？」

「さあてのお」

振り返る竜斗に、レイフオンが細眉を下げる。

「マスター・ファイ術師さんが、偽物を掴まされとは思えません」
「……クッ！」

「ククク。恨むなら、交渉に負けた己を恨むことじゃ」
「……まあ、いい。」
どうせ、俺らだけじゃ、価値あるものだとすら見抜けなかったんだ」

「カカカ。負け犬の遠吠えは、耳に心地良いのう」

「た、……ただ単に、年寄りの功に負けただけだ」
「ま、精進するんじゃない。リュート坊や」

「……………グウッ。」
何としてでも、もっと価値のある物を探し出してやる！」
「ほほう。ガンバレ」

「リュウトが、手玉に取られてるわね」
「珍しいですねー」
「術師さんでは、相手が悪いと思います」
「ヌウ」

爪先でガラス玉を漁っていた竜斗が足を止めた。
「なんだ、こりゃ？」
銀貨？ ……いや、コバルト白金貨か？」

真珠のような白色に見えるが、光を反射させると虹色に見える不思議なコイン状の物を竜斗が拾い上げる。
その周りを探ると、他に5枚見つかった。

光に反射させながら、貨幣を見ていた竜斗へ、セラが叫ぶ。

「リュウト！ それ、フェザー貨よ！！」

「フェザーって、ドラゴン貨か？」

「ええ。」

商家の私でさえ、一回しか見たことないわ。

一枚で、金貨100枚（1000万円）の価値があるわよ」

「なんじゃ、指摘しなかったら、

『天秤』と交換して貰おうと思ったんじゃないのう」

「これが、フェザー貨か……」

掌の6枚のフェザー貨を眺めていた竜斗が、拳を握り締めた。

「よし！！ これで、次のアンデッド攻略のピースが嵌はまった！！」

「フェザー貨が？」

「ああ。だから、コイツは換金しない」

「え〜っ、もったいない！！」

「金なんて、命を失ったら自分以外の誰かの物になるだけさ」

「それは、そうだけど……」

＊

「アリアたちは、どこ行ったのかしら？」

竜斗たちが麓の村に着いた時、

光一たちの姿も、台車も、斃したガイアレイズも見当たらなかった。

「十中八九、先に王都に行っただろうな」

「置いてかれてしまいましたねえ」

「予想できてましたけどね」

「ヌウ」

「それって……竜討伐の手柄を独り占めにされるわよ！」

「その代わり、ガイアレイズの溜め込んだお宝は、俺たちの物だろ」
「うううう、納得いかない」

「今回の依頼条件は、ガイアレイズ討伐をコウたちの手柄にするのとだからな。」

もつとも、こうも堂々とネコババされると、さすがにカチンと来るぜ」

「我は、ゆっくりしてゆこうかの。」

臨時収入も入ったことじゃし」

「フィー、ここには温泉もあるって言ってたよな？」

「ふむ。そこそこの値段で、良い温泉宿なら知っておるが」

「よしっ！ 俺たちも、休んでいくぞ！」

「温泉！ 大賛成です！！」

「ウヌ。筋肉も賛同しておる」

「嬉しそうですねえ。偽勇者さん」

「……あれは絶対、何か悪いこと企んでる顔だわ」

＊

054 偽勇者は ひっとほ。いんと か、かいふくした!

岩に囲まれた露天風呂に、夜空の双月が静光を降り注いでいた。

満月に近い二つの月明かりで、足下に影が出来るほど明るい。

10名は入れる露天風呂を3人が独占していた。

「温泉は露天風呂に限るな」

「ウヌ。ワシも昔は、よく浸かってたものよ」

「……………」

「コウも、もったいねえなあ。

こんな良い温泉があんのに」

「ウム。筋肉もピクピクと喜んでおるわ」

「……………」

「どうした? ツツコミ。

さっきから黙ってて」

「……………なぜ……………?」

「あん?」

「何故、男湯!?

サービスシーンは、どこにいいい!?!?」

満天の星空を仰ぐウイズに、
竜斗も頭上のタオルを押さえる。

「俺も、ファンタジーだから、混浴を期待したんだが、……さすがに、甘かったか」

「こうなれば、覗きです!!」

「その欲望に忠実な姿勢は尊敬に値するが、バレた時のことも、ちっとは頭の隅に置いといた方がいいぞ」

「バレたが、なんです。」

壁の向こうには、レイさんの大きなおっぱいが待ってるんです!
!」

「ああ。内気のやつ、何げにツンデレよりも大きいよな……。それは兎も角、バレた時、飛んで来るのが桶とか石鹸ならまだしも、

大規模破壊魔術が飛んで来るかもしれんぞ」

ウィズがサーツと青ざめた。

「さらに、フィーまで居るからなあ」

「ク……クウ。」

神は敵対した!」

「ウヌ。神は筋肉に宿っておる。
見よ! この筋肉!!」

「敵だああッ!!」

「ヌウッ!」

男泣きするウィズに、
フツと笑みを見せる竜斗。
「やれやれ。ツツコミ。」

この程度で萎縮するなんて、お前には失望したぞ」

「え？ でも、偽勇者さんが危険を説いて――」

「試したんだよ。お前を」

「試す？」

「俺とともに、命を賭けられるか……な」

竜斗は金色の腕輪を取り出した。

「一回きりで、使い捨ての『姿を消せる腕輪』だ」
インビシブル・リング

「そ、それは……まさか……、

あの伝説の禁制品……全ての思春期男子の憧れの品……透明化の腕輪……」

湯の中で後退^ずさるウィズに、

竜斗が自嘲するような陰のある笑みを浮かべる。

「主人公体質のコウなら、何もしなくてもハプニングとサービスシーンに向こうから舞い込んでくるだろうよ。

仕切板が倒れたり、間違えてこっちの風呂に入ってきたり、向こうに熊が現れたりな。

しかし、しかしだっ！

脇役たる俺たちに、そんな美味しいイベントは、100年待っても現れない。

だからこそ、サービスシーンは自らの手で掴まなければならないのだ……！

据え膳は、自ら動かなければ、用意すらされない……！」

ギリツと金の腕輪を握り締める竜斗。

「この1個、5金貨（50万円）の腕輪。

俺は、それを、あえて、覗きで使う！！！！」

「普通の人なら躊躇することを、堂々で行う。

偽勇者さん！　そこが、痺れます！！　懂れます！！」

「ヌウ。帰ってこれんかもしれんがな」

「望むところ！！」

「望んじゃうの！？」

「バカ！　常に、ツンデレや内気の裸が隣にある世界だぞ
「僕も片道キップでお願いします！！」

「ツッコミ」

「偽勇者さん」

「栄光は——」

「自らの力で掴んでこそ——」

「「価値がある！！」」

ワハハハハと、素っ裸で哄笑する竜斗とウイズ。

「おぬしら、実は本当の兄弟だったりしないか？」

半眼のアーサーに、ウイズが親指を立てる。

「アーサーさん。魂の兄弟ソウルブラザーです！」

「てなわけで、筋肉。ちよっくら、行ってくる」

「ヌウ。ちよっくらで済めば良いがな」

「どうしますか？」

ここで腕輪を使ってから、仕切板を越えますか？」

「いや。ツンデレやフィーに察知される可能性が高い。

ここは、あえて崖側から回る」

「なるほど。簡単だけど察知されやすい方法よりも、

危険だけど、確実な方法を取る。

流石は偽勇者さんです！」

「フッ。そんなに褒めるな」

腰にタオルを巻き、意気揚々と崖を上っていく二人を見送ったアーサーは湯に浸かり、星空を見上げた。

こうしていると思い出す。

昔、露天風呂に浸かりながら、幼なじみと星空を眺めたことを。

その幼なじみは無意識肉体強化魔術を宿していた。

それも、凄まじく強力な。

その幼なじみにとって、人間など壊れやすいガラス細工だっただろう。

幼い子供だったから、余計に。

だが、ワシだけは違った。

どんだけ壊しても、次の日にはケロッと治り、

さらに、壊せば壊すほど、壊れにくくなる。

まさに、幼^{彼女}なじみにとっては、最高^{遊び相手}の相棒。

そのころ、ワシは2つの強力な無意識魔術に翻弄され、体調を壊しがちで、常に寝込んでおった。

だが、その幼なじみ^{彼女}が無理矢理、外へ引つ張り出し、
「身体が弱ければ、強くすればいい。」

さあ、走れ、跳べ、筋肉を付けろ！！」と笑顔で言い放った。
子供の発想であったが、子供だけに本気だった。

鉄塊を持った幼なじみ^{彼女}に追いかけて、必死に逃走し、
幼なじみ^{彼女}が片手で持ってきた20キロの岩を背中に、腕立て伏せ
をやらされ、

軽々と10キロの両手剣を素振りしている幼なじみ^{少女}を肩車して、
スクワットをやらされた。

一日のトレーニングを終えて、指一本動かせないワシを、
幼なじみ^{彼女}は裸に剥いて、露天風呂に入れるのが好きだった。
正確に言えば、少しずつ筋肉^{筋肉が育つ}が付いてくるワシの身体を見るのが。

男として恥ずかしかったが、
疲れきって動けないのと、無意識強化魔術を持つ彼女^{幼なじみ}に、力では
どうやっても勝てなかった。

その露天風呂で、二人並んで、星空を見上げていたものだ。
ワシは寝込んだ頃、本ばかり読んでおったから、
星々の名前や、それにまつわる伝説などを彼女^{幼なじみ}に語った。

そして、話が終わると、最後に彼女^{幼なじみ}は必ずこう言って笑った。
「世界の色々な場所でも、見える星空は同じなのかな？」
アタシが想像も出来ない光景であるかな？

アーサー、今度はアタシが世界の隅々まで見て来て、教えてあげ
る！！」

トレーニングと称して、無茶苦茶やらされたが、彼女のことは、

まったく恨んでない。

それどころか、感謝している。

彼女の好みの筋肉隆々の男に成ろうとして、頑張ってるうちに、

『筋肉の素晴らしさ』に、目覚めたのだから。

「ウヌ。筋肉は素晴らしい」

アーサーはピチピチと水を弾く、上腕二頭筋の力こぶを惚れ惚れと眺めた。

さて、ワシの幼なじみ殿は今頃、世界の何処を旅してることやら。偶に、手紙が来るから、元気なのは確かなのだが。

アーサーは静光を降り注ぐ、天空の双月を見上げた。

＊

「レイさんのおっぱいは、大きいし形も良いし、最高ですね」

「いやいや、ツンデレの胸もなかなか」

何より、あの脚が至高レベルだな。

クッ！ むしゃぶりつきてえ」

「僕も正直、辛抱堪りません」

『インビジブル・リング』を填めた竜斗とウィズが、忍び込んだ女湯の

岩陰で囁きを交わしていた。

この腕輪は、姿と魔力と音を完全に消し去るが、腕輪を付けている者同士だと、相手の姿が半透明に見える、会話も出来る。

一度限りの使い捨てで、効果時間も1時間、しかも、強い魔力や衝撃で効果が解除されてしまうのに、5金貨（50万円）もしただけの価値があった。

赤に近い金髪を纏め上げ、白い裸身を夜風に晒したセラが温泉の縁に腰掛けて、膝下を湯に浸しながら、湯に身を沈め、地酒を呑んでるフィーに問いかける。

「ねえ、術師。

聞きたいことがあるんだけど？」

「……ん？ なんじゃ？」

「あの精霊騎士^{アリエル}って……何なの？」

「どういうことじゃ？」

「ん、だから……、

普段は元気一杯なのに、突然、水の巫女至上主義に切り替わる人格とかよ」

「そうです。

突然、無表情になって、眼に光が無くなって、とっても怖かったです」

チャプチャプと白い手でお湯を掬うレイフォン。

酒を呑んだフィーが一瞬、岩陰を一瞥してから、セラへ紫の瞳を向けた。

「ふむ。おぬしらになら、話しても良からう。

エルは風の神殿の父親と、水の神殿の母親の間に生まれた子じゃ。生まれた時から、風の精霊に高い感応力があっての。

これが、風の神殿のある地じゃったら、間違いなく風の巫女になっ
ておったじやろうな。

しかし、ここは水の神殿の地じゃ。風の巫女に出る幕はない。

風の巫女は要らぬが、精霊使いの素質を持つ子を、ただの子供として育てるのは勿体無い。

そう考えた神殿は、エルを精霊騎士として育てたのじゃ。

ただのう……神殿の教育とは『洗脳』じゃ。

巫女のためなら、己の命を含めて、全てを亡き者にするように刷り込む洗脳なのじゃよ。

我が初めて会った時には、催眠と洗脳の結果、眼に光りが無く、一切の表情と感情が抜け落ちた子じゃった。

欠陥大魔術師の妹みたいに、感情を制御しとるのではなく、何も感じなくなるほど、自我も感情も壊されておったのじゃ。

まさに、神殿に不利になる者は老若男女、全てを斬り捨てる『キリ処刑人形』シグ・ドールじゃったよ。

そのままいけば、神殿きつての暗殺者になっておっただろうが、幸か不幸か、我に遭あった。

6歳にして、すでに神殿一の精霊魔術師じゃったエルに、精霊魔術を教えるように、神殿から要請されての。

教えられるのは、『術師』たる我しかおらんかったわけじゃ。

そこで、我はエルに偽りの人格を――、感情豊かで、表情豊か、元氣一杯の、本性とは真逆の性格を常に演じるようにさせたのじゃ。

神殿とエルには、巫女を護衛するために必要じゃと丸め込んでの。

感情豊かで元氣な普段が、偽りの仮面。

シエラを護る時の、容赦ない人格が本性ってところじゃな」

「え？ ……じゃあ、あの「私、感激しました」っていうのも、笑って、泣いて、はしゃいでいたのも……」

「そう。全部、嘘じゃよ。」

エルは何も感じておらぬ。

感情からではなく、意識的に演じとるため、常にオーバーアクションになってるのじゃ。

大袈裟の方が、表現しやすいからのう」

「なんで、そんな演技なんてさせてるの？」

「ふむ。一種の治療じゃよ。」

人の心は、そう簡単に二つに分けたりはできん。

相互に、表の人格は裏の人格に影響し、裏の人格は表の人格に影響するものじゃ。

本音を言えば、魔術で本性を封印したかったんじゃが、心は繊細じゃ。
神殿

やつらの洗脳と催眠で、どんな影響が出るかわからん。

じゃから、こうして時間を掛けて『普通』の生活をさせておるのじゃよ。

いずれか、裏^{本性}の性格は無くならんまでも、自己制御できるようになれば良いんじゃないかな。

そうそう。今は、神殿の『教育』^{洗脳}は受けておらん。

シェラ専属の精霊騎士として、我が引き離したからの」

「……そう、そんな過去があったのね。

苦労してるのね。あの子も」

「本人が苦労とも、何とも思って無いところが、一番の問題なのじゃよ。

エルが辛いと思っておれば、まだ手の打ちようはあったんじゃないのう」

眼を伏せ、地酒を口に含むフィー。

「……………そう」

「………そうですか」

「ふむ。真面目な話もしたことじゃし、

そろそろ『酒の肴』が欲しいところじゃのお」

「なに、それ？

奢れってこと？」

八重歯を覗かせて、フィーが笑みを形作る。

「いや。楽しまして貰おうと思っただけじゃ」

フィーはすっと右手を水平に挙げ、魔力を一点に放った。

「しまった！ 逃げ――」
フィー、セラ、レイフォンの前で、透明化が解けた姿を現した竜斗とウィズが慌てふためく。

「……………な、なぜだ？」

「ククク。リユート。」

その腕輪は『出来が良すぎる』のじゃ。

この世界には、常に精霊の力が満ちておる。
インヒジブル・リング

腕輪は、その精霊の力まで隠してしまうから、
そこだけ、ぽっかりと抜けておって、逆に何かあると丸わかりなのじゃよ」

「精霊魔術師には、バレるってことか？」

「まあ、エルや我ぐらいのレベルならば、じゃ」

「それって、何人ぐらい――」

「――リユ・ウ・ト」

吹雪すら凍てつかせるような声が、竜斗の質問を遮った。

竜斗とウィズがギギギッと首を巡らした先には、
裸身を惜しげもなく晒したセラが、両手に細剣をだらりと吊り下げている。

セラの口許には、絶対零度の微笑が形作られていた。

*

0551偽勇者は えむひ。1 か、かいふくした!

「――リュ・ウ・ト」

優しげにさえ聞こえるセラの声に、

竜斗とウィズが凍り付いたように動きを止める。

竜斗とウィズがギギギッと首を巡らす先には、

裸身を惜しげもなく晒したセラが、両手に細剣をだらりと吊り下げていた。

肢体を伝う水滴が、白い肌の艶めかしさを際立たせる。

セラの唇には、絶対零度の微笑が形作られていた。

「ツ、ツンデレ。その双剣はどこから？」

「私が武器を半径3メートル以内から離すと思う？」

「思いません」

すうっと氷笑^{微笑む}するセラ。

「さて、二人とも、何か遺言は？」

「死亡確定!？」

「そう。それが、あなたの最後の言葉ね。銃使い。大丈夫。レイには、事故だったと伝えとくから」

「すぐ、後ろに居ますから!!」

「事故です!」

「退路、断たれた!?!」

「さて、リュウト。

あなたの遺言は?」

「に、偽勇者さん。

ここは、起死回生の一言を」

「わ、わかってる。

えくと、ツン……………あゝ、セラ」

「……………」

「その……………うん!

アリア委員長よりも、断然、俺好みのからだ臆だぞ。

つまり、俺の中では世界で一番だ!!

だから——」

拳を握り締めた竜斗の一言に、

セラの表情がひび割れた。

「!?!」

「……………どうせ……………どうせ……………」

……………どうせ、私はアリアよりも、背が低いわよ。

……………どうせ私は、アリアよりも胸が小さいわよ。

……………どうせ私は、アリアよりも剣技が劣るわよ。

……どうせ私は、アリアよりもウエスト太いわよ。
……どうせ私は、アリアよりも頭悪いわよ。
……どうせ私は、アリアよりも人望無いわよ。
……どうせ私は、アリアよりも地位が低いわよ……」

俯き、赤に近い金髪の前髪を顔に垂らしたセラが、泣きそうな声で呟き続ける。

「や、やべえ！

トラウマ
地雷、踏んだ！！」

「ええっ！？」

「ツンデレの地雷は、トラウマ委員長に劣つてると思い込んでることだけじゃない。
地雷

委員長と比べられること自体、トラウマだったんだ」

「なに、命の瀬戸際でミスってんですか！？」

「仕様が無いだろ！

目の前に、好きな女の全裸があるんだ！

まともな思考なんかできるかつ！！」

「心の底から、激しく同意です！！」

「……どうせ私は、アリアみたいな綺麗な金髪じゃないわよ。

……どうせ私は、アリアよりも足短いわよ。

……どうせ私は、アリアよりも目つき悪いわよ。

……どうせ私は、アリアよりも料理が下手よ。

……どうせ私は、アリアみたいに性格良くないわよ。

……どうせ私は、アリアみたいに綺麗じゃないわよ……」

涙目のセラが双剣を振り上げる。

「どうせ、私は、アリアの劣化版よおおッ！！！！」

「うおッ！！」

「うわーッ！！」

二人は左右に分かれて、振り下ろされたセラの魔剣を避けた。

逆方向に逃げようとする竜斗とウィズの前に、
炎の鞭と氷の鞭が叩きつけられる。

「危ねえ！！」

「うわわっ！！」

急停止した竜斗とウィズは反転し、
アイコンタクトし
二人は視線を合わせて頷き合った。

セラに対峙するように立ち止まった竜斗の真後ろに、ウィズが並ぶ。

プロテクション・バリア
「防護結界！！」

竜斗はウィズも含めて、魔術防護結界を展開した。

「後は頭が冷えるのを待つだけだ」

「冷えますかねえ」

「……………冷えるといいな」

ゆっくりと歩いてきたセラは、プロテクション・バリア防護結界など眼に映ってないかの
ように双剣を振り上げる。

《リュケン流二重撃》

竜斗の背筋に寒気が走った。

「ツツコミ。」

伏せろ!!」

竜斗とウィズが伏せると同時に、
プロテクション・バリア紙のように防護結界が斬り裂かれる。

「ゲッ!!」

慌てて、後退する竜斗とウィズに、
セラは細剣を斬り上げた。

右半身になり、紙一重で躲した竜斗へ、
セラの横薙の一撃。

咄嗟に身体を沈めて避けた竜斗は、後ろに飛び後退さり、

「防護プロテクション・結界バリア!!」

魔術を施術する。直前――、
セラが突き出した氷の魔剣に、
プロテクション・バリア《防護結界》が展開さ巻き取られる。

「魔術を持ってかれた!?!」

双月の月明かりに浮かぶ白い裸身のセラから後退さった竜斗とウイズが、岩の塊に後ろを阻まれた。

「束縛^{バインド}!!」

苦し紛れの竜斗の光の鎖^{魔術}を、

セラの右手が一閃し、炎の魔剣で切り捨てる。

「あゝ、これは……死んだな」

「ふっ。レイさんの大きなおっぱいを眼に焼き付けられたんです。悔いはありません!!」

「この窮地でも、欲望に素直な姿勢は尊敬するよ」

「じゃあ、偽勇者さんは後悔してるんですか？」

「いいや。まったく。」

命を懸けただけの対価は既に得た!!」

「それでこそ、偽勇者^{ソウルブラザー}さんです!!」

セラの赤い唇が、三日月型に歪^{わら}い――、

《リュケン流二重撃》

寸前で、竜斗とウイズが左右に跳んで躲した。

そのまま、後ろの岩に炎の魔剣を打ち込み、

その上から防護結界に包まれた氷の魔剣を打ち重ね――、

ズガンッ!!

爆音とともに、岩が左右に碎け散り、爆風でセラが後方に吹き飛ばされる。

一瞬の爆風が過ぎ去ると、
魔剣を打ち込んだ岩は、粉々に碎け散っていた。

皆は啞然と、粉碎された岩の残骸を見つめる。

「何故だ？」

なんで、爆発した？

あの岩は砂岩や軽石だったのか？」

竜斗は足下に落ちていた石を手にとった。

「……いや、違う。」

じゃあ、何故、岩が弾け飛んだんだ？

ツンデレの攻撃力が上がった？

だが、それにしても、岩は内側から弾けたみたいだし……、
それに、あの爆風は熱風じゃなかった」

割れ爆ぜた岩に屈み込んだ竜斗が眼を細める。

「岩のせいじゃない。」

たぶん、ツンデレの攻撃のせいだ。

……だが、何が違った？

いつもの”二重撃”と何が違った？

炎の魔剣に氷の魔剣を叩きつけたからか？

いや、俺の防護結界を斬った時には爆発しなかった。
プロテクション・バリア

その後……確か、俺の防護結界を氷の魔剣に巻き取られて……
、

もしかして……熱膨張か？

氷の魔剣で、マイナス何十度にも、極限まで冷やされた空気が防護結界で覆われて密閉状態となって、

その状態で、加熱した炎の魔剣へ叩きつけられた。

超低温の空気は、一気に加熱されて膨張し、

防護結界の裂けた箇所から――剣の打ち合わされた所から、一気に噴出する。

そう、空気の逃げ場のない岩の中で……だから、爆破した。あとは……何か、魔術的な要素も絡んでる可能性があるな」

直前に、ファイが展開した《シールド》で怪我一つ無く、

魔力楯

全裸のまま石畳にペタンと尻餅をついているセラの肩を、竜斗が掴んだ。

「ツンデレ！

お前が悩んでた攻撃力不足が解消されるかもしれないぞ。

さっきのは、冷えた空気が膨張しただけだが、

風の魔術で氷の魔剣に空気を凝縮し、

氷の魔剣で、その空気を瞬間冷却して、

プロテクション・バリア

防護結界で、極限まで冷やした圧縮空気を密閉する。

それを、”二重撃”で加熱した炎の魔剣へ叩きつける。

それが、さっきの岩みたいに、剣が相手に食い込んでれば、内側から破壊できるぞ。

圧縮空気ポンペを熱した斧で叩き斬るようなものだ。

不確定なところが幾つかあるが、こいつが使えれば――……………
ツンデレ？」

セラの肩を掴んで力説していた竜斗が説明を止める。

竜斗の声が聞こえてないのか、

セラは、竜斗のある一点を凝視していた。

爆風で腰布が、どこかへ飛んでいった竜斗の股間を。

セラの顔が徐々に紅潮してくる。

顔から首筋から耳まで、真っ赤に染まり、

「キ……キャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

セラの悲鳴が露天風呂に響き渡った。

そのまま、竜斗の顎にアッ^拳パーカットを叩き込む。

「オゴオッ！！」

「リュウトのバカ~~~~~~~~~~~~ッ！！」

胸を腕で隠したセラが真っ赤な顔のまま、竜斗へ怒鳴り、
脱衣所に駆け込んで行った。

「何とか、治^{おさ}まりましたねえ」

ウィズが、顎を押さえて立ち上がった竜斗へ^{腰布}タオルを渡す。

「あゝ、痛てえ。

ツツコミ。これは、治まったって言うのか？
問題を先送りにしただけじゃないのか？」

「そうとも言います」

「そういう、ツツコミこそ、いいのか？」

「はい？」

「確か、内気もいるはず――」

「……………」

「……………」

顔を見合わせた二人が、そおっと右に眼を向けると、

「二人とも出てってください〜〜い！！！」

身体に、きつくバスタオルを巻いたレイフオンが涙目で叫んだ。

ちなみに、フィーはというと――、
温泉の片隅で、しっかりと自分の周りにだけプロテクション・バリア防護結界を張り、
乱闘を『肴』に地酒を呑みながら、指をさして、カラカラと笑っ
ていた。

＊

双月も山の陰に傾き、星々が降ってきそうな星空が広がっていた。山に近いため、上空に強い風が吹き、星々が強く瞬く。

そんな真夜中、宿の玄関口で、セラが膝を抱えて座り込んでいた。

「ツンデレ」

後ろからの呼びかけに、

セラはむくれたまま、無言を貫く。

隣に座った竜斗に、

頬を膨らませて、顔を背けるセラ。

「ツンデレ」

「……………なに」

唇を尖らせたセラが、突っ張った声を返した。

竜斗がセラの顔を見つめる。

「……………すまん」

「……………誠意がない」

「ごめん」

「心が籠もってない」

「悪かった」

「……………」

宙の一点を睨みつけるセラに、
竜斗は頭を下げた。

「……………ごめんなさい」

「……………本当に、悪いと思ってる?」

「思ってる」

「本当に?」

「誠心誠意」

「…………じゃあ、私の言うこと聞いてくれたら、許してあげる」

「なんだ?」

「私のこと、ツンデレなんて呼び方じゃなくて……、
…………セ…………セラ…………って呼んで」

竜斗は、セラの耳元で囁きかけるように名を呼ぶ。

「……………セラ」

「…………も、もう一回」

「セラ」

「もう一度」

「セラ」

「…………リュウト」

「セラ」

「リュウト」

「セラ」

「リュウト」

二人の顔が近づく。

二人の唇が触れる——寸前、

ガタン!!

突然、響いた物音に、セラはパツと身体を離した。

二人の視線の先には、

慌てているレイフォンと、ニマニマと笑みを浮かべてるフィー。

「はわわわわ。」

み、見つっちゃいました……」

「我らのことは気にせずに、ブチューっといくじゃ。」

ブチューっ」と

「……………」

「……………」

二人のじと目の視線に、

「ご、ごめんなさ……い!!」

グルグルと眼を回したレイフォンが慌てて逃げ出し、

「なんじゃ、せぬのか。残念。」

暇じゃし、もう一っ風呂、浴びてくるかのお」

フィーが悠然と去って行く。

「……気が削がれたな……」

「……………う……………うん」

やれやれと立ち上がる竜斗。

「俺は行くが、……セラはどうする？」

セラは真っ赤になった頬を隠すように両手で挟んだ。

「……………もう少し……夜風に当たってる……」

「そっか。

風邪引くなよ。セラ」

「……………うん」

＊

0561勇者は ちから か、あか、った!

王宮の庭園でアリアの指導の下、素振りをしていた光一が唐突に、聖剣を止めた。

「どうしたのですか？」

コウイチ殿

「アリアさん。」

俺に、あの『会心の一撃』を教えてくれ」

「はい？」

会心の一撃？

何ですか？ それは」

緑の眼を瞬かせたアリアは金髪を揺らして、小首を傾げる。

「ほら、あれだよ。」

アリアさんが、ドラゴン相手に使ってた技。

突撃を止めたり、尻尾を弾き飛ばしてたりしてた、あの強烈な一撃だよ」

光一は両腕を開いて、勢い込んで説明した。

「？ ……ああ！」

『アリア・スペシャル』のことですか」

「……アリア・スペシャル？」

アリアが頬を染める。

「わ、私が名付けた訳ではありません。

6年前、初めてセラに見せた時に、彼女が名付けたのです。

その後、誰も技の名前を尋ねなかったもので、今もその技名のままなのです」

「そのままって……アリアさんも律儀だなあ」

「それに、当時のセラが一生懸命、考えてくれた名前なのです。途中で、『グレート・アリア怪力槌落とし斬り』になりかけて、慌てて拒否したものです」

懐かしそうに、微笑むアリア。

「そうか！ 技の名前か！！」

「はい？」

「何か、足りないと思ってたんだ。

そうだよな。聖剣の攻撃にも名前がないとな。

いつまでも『光撃』とか『光の斬撃』じゃ、寂しいし」

「そうなのですか？」

「そうなのさ！」

……っと、話が逸れた。

それで、会心の一撃は教えて貰える？」

「……そうですね。

基礎は出来てきましたので、身体に魔力を循環させる方法を教えますしょう。

この魔力循環は、達人の域に達すれば、ルキア姫のように剣に魔力を乗せて、剣圧だけで物を斬れるようになります」

「凄いな。『奥義』みたいじゃないか。

やっぱり、勇者として『必殺技』と『奥義』は必要だし」

「そうなのですか？」

「そうなのさ！」

さあ、アリアさん。早速、修行を始めよう！」

「は、はい」

＊

濃紫の長髪のメイドが紅茶に口を付け、対面の竜斗に金の瞳を向ける。

「城下の噂はコウイチ様のドラゴン退治、一色そうですね」

「みたいだな。」

ついでに、俺が流した噂も付随して王都中に広まってるらしいぜ」
竜斗はジンジャークッキーを一つ、口の中に放り込んだ。

光一たちは帰り際、ガイアレイズの死骸を台車に括り付けたまま、王宮まで引っ張ってきたため、パレードさながらの状態だったらしい。

ガイアレイズ討伐の3日後には、

『勇者コウイチのドラゴン退治』が吟遊詩人たちによって唄歌にされ、王国中に広まっていた。

宰相

「カリウス様の流した流言も、貴族に広まってきたようです」

「勇者が召喚されたなら、神殿は用無しってやつだろ」

「はい。コウイチ様が活躍され、評価が高まれば高まるほど、何も動かない神殿が目立ってきております」

「となるように、メイドさんたちが情報操作したんだろうが」

「あら、気付バレいておられましたか。」

先代巫女

アラリエル様が手を打っているようですが、遅きに失しましたね。
神殿は出兵するしかないと思われます」

「姫さんとメイドさんとフィーが、本気で動いたんだ。
そりゃ、打つ手なんか残っちゃいねえだろうよ」

「ふふふ」

口許を指で隠して、笑うメイド。

「これで、早ければ2週間後、遅くとも1ヶ月以内にアンデッド城へ進軍が始まると思います」

「ああ。」

軍は、アンデッド城を広域浄化魔法陣で囲む案を採用したみたいだしな」

「命令されなければ動かない魔術師団が、自ら魔法陣を組むと言いつて出しましたから。」

何かご存じですか？ リュウト様」

「さあ、知らない」

金の瞳を、ずっと細めるメイドに、
竜斗は微笑みで表情を隠したまま、紅茶を飲んだ。

「リュウト！」

「おう。セラ」

「むー。また、メイドとお茶してる……」
中庭まで迎えに来たセラがふくれっ面になる。

「ほら。銃使いが、新兵器の実験をするんでしょ。
早く行くわよ」

「そーいや、そうだった。
じゃあな。メイドさん。
紅茶、ごちそうさま」

「いえいえ。また、お越しく下さい。」

お待ちしております」

手を振る紫髪のメイドに、

「フウ〜ッ！」

猫のように毛を逆立てるセラ。

「こら、メイドさんを威嚇するな」
「ム〜」

「ツンデレ。妬いてるのか？」

「セラ よ！」

「……あ、すまん。

で、どうなんだ？ セラ」

「うう〜」

唇を尖らせたセラが紅い顔で、そっぽを向いた。

ウィズに指定された王宮の裏庭まで、二人は並んで歩いて行く。

「そういや、セラ」

「なに？」

「『反則』^{レティス}や、ガイアレイズ相手に、魔剣の炎を鞭状にして、攻撃してたよな」

「それが？」

「俺の魔槍でも、雷を鞭状にできるのか？」

「そうね。出来るとは思うけど……、

鞭として使うなら、あまり意味ないわよ」

「いや、電撃の『固定化』が最終目標だ」

「？ そんなのが出来て、何になるの？」

「少し、考えてることがあってな。」

あくまでも、机上の理論だけだけど」
「ふっふん」

指定された場所は、すぐ傍に見上げるほど高い城壁がそびえ立っている裏庭だった。

城壁の壁には焼け焦げた跡や、抉れた跡が多数ある。

青空の下で、レイフォンたちが手を振っていた。

「セラさくん。偽勇者さん。こっちです」

「おう、待たせた」

「良い天気になりましたね」

「ヌウ。良い筋肉日和きんにくにちである」

額に片手で笠を作り、青空を見上げるアーサーに、竜斗が顔を向ける。

「筋肉日和？」

「ウヌ。筋トレに最適な日よ」

「最適じゃない日ってあるのか？」

「ヌ。ないな」

「ないのかよ！」

「ウヌ。」

雨にも負けず、風にも負けず、

雪の寒さも、夏の暑さも物ともせず、

日照りの時は耐え忍び、

雹が降れば弾き、

稲妻に打ち勝ち、
嵐に立ち向かう。

そんな筋肉で、ワシはあり続けたい」

「なりたいんじゃないくて、あり続けるのかよ！」

「ウム!!」

アーサーの白い歯がキラメいた。

「へえ。こんな場所があったのね」

「はい。ここは、魔術・魔法陣分析構築課が試作品を実験する時に
使ってる場所なんです」

「だから、城壁が傷だらけなのね」

「はい。この壁は強化と固定化の魔術がかけてあって、とっても
頑丈なんですよ」

「ふ〜ん」

城壁を見上げて会話してるセラとレイフオンを横目で見ながら、
竜斗が小声でウィズに問いかける。

「ところで、ツツコミ。」

温泉で覗いたこと、内気に許してもらえたのか？」

「ふっ。僕が、工房で親方相手に培った『高速50回土下座』の威
力です」

「……それは、誇ることか？」

澄まし顔のウィズが焦げ茶の髪を掻き上げた。

「僕は1秒間に5回、「すいません」と言うことが出来るのです」

「すげえ!!」

「何の話をしてるの？」

尋ねてきたセラに向かって、
爽やかな笑みで両腕を広げる竜斗。

「勿論、新兵器のことさ！」

それで、ツツコミ。新兵器って？」

「実は、新兵器って言うほどでもないんですけどね。」

この前のガイアレイズ退治の時のレイさんの魔力量を見て、ちょっと思いつきましてね。

魔力蓄積量

キャパシティーの大きい高級な精霊石を手に入れて、予備のライ

フルに取り付けて、

その精霊石に魔力を込めるのを、僕ではなく、

レイさんにやって貰ったんです」

「……………もう、試し撃ちしたのか？」

「いえ、これからですよ。」

だから、皆を呼んだんですけど…………」

「ツツコミ。そのまま、ライフルを撃つのは止めとけ。」

どこかに銃身を固定して、

引き金に紐を結んで、離れた所から撃つんだ」

「は、はあ。……………まあ、良いですけど」

「でも、なんで？」

小首を傾げるセラに、

竜斗は眉を顰めて、腕を組んだ。

「俺の悪い予想が当たれば、暴発するぞ」

「暴発？」

暴発って何？」

「……見てりゃわかる」

ウィズが銃口を斜め上に向けたライフルを、
半分まで地中に埋もれた鉄筋に縛り付けて固定し、引き金に紐を
結ぶ。

「じゃあ、いきますよーっ」

十分に離れたウィズが、紐を引っ張った。

ズガン！！

銃声とは明らかに違う爆音が、裏庭に反響する。

そして、ライフルは、

銃筒が捲り上がり、
パレル

銃底が破裂し、

上部の精霊石は衝撃で、木っ端微塵に砕け散った。

同時に、城壁に直径20センチの穴を開けて貫通した魔力弾が、
虚空へ飛び去る。

「「「「……………」」」」

全員、声の無い中、竜斗が黒髪を掻いた。

「あれが、暴発だ。」

そのまま撃ってたら、大怪我してたな」

鳴り響いた爆音に、駆けつけて来た城の警備兵がレイフォンを見て、
怒声を上げる。

「また、魔術師団ですか!!」

「え? ええっ?? ……えっと、今回は――」

「今月は、もう3回目ですよ!!」

いい加減にしてください!!

それから、城壁の修繕費は、魔術師団に請求しときますからね!」

「は、はい!

すいません。すいません。すいません」

ペコペコと頭を下げるレイフォン。

「……まったく。

いつもいつも、人騒がせな」

レイフォンを叱責した警備兵は黄色い頭髪を掻きながら、元の護衛場所に戻って行った。

「ねえ、レイ。

城壁に穴開けて、単なる叱責で済むなんて、

魔術師団

あんたたちって、どれだけ城壁を壊してるのよ」

「え……と、月に2回くらい?

魔術師団の予算の10分の1は、ここの城壁の修繕費に消えてます……」

「さっきの警備兵の叱責にも諦めが混じるわけだわ」

「……………はい」

「ツッコミ。

さすがに、これじゃ使えねえよ」

嘆息する竜斗に、

プルプルと震えていたウィズが青空を仰ぐ。

「これ、キターーーーーッ!!!」

「は？」

「今のを鉄製の大筒で撃てば、暴発することなく、大火力が得られます!!!」

狂喜乱舞するウィズに、

腕組みした竜斗が黒瞳を眇めた。

「それ、そのまま撃ったら、反動で後ろに吹っ飛ばされるぞ」

「え？ 魔力弾射出式筒型弩 ライフルは無反動ですから大丈夫ですよ」

「じゃあ、なんで、その鉄柱、傾いてるんだよ」

「あっ！ 本当だ。」

あー、えーっと、えっと……。

そう！ 反対側からも同じ威力の魔力を放射すれば、反動は押さえられます！」

「だが、そのバックファイア分で、折角の大火力が半分になっちゃうぞ」

竜斗の指摘に、焦げ茶の髪を掻きむしったウィズの頭脳が高速で回転し始める。

「……なら……なら……なら……、

そうだ！ これは遠距離を飛ばす必要がない。

なら、精霊石を魔力で飛ばし、そこで爆発させれば」

「それじゃ、初速が遅すぎる。

避けられちゃったら、大火力も何もねえだろう」

「んんー」。

……なら、そのまま飛ばすんじゃないくて、精霊石を2段階構造にします。

発射は、今のように精霊石に貯めた魔力を使い、反動を押さえる魔力を後ろから放射状に放ちます。

そして、弾丸は、精霊石を中心とした魔力弾を形成して、2段目で、弾丸用の精霊石を弾かせて、更なる加速と威力を得ます。

これなら、威力はそのまま、射手の反動はほぼ無くなります」

「だが、2段目の精霊石を着火^{弾か}させるタイミングはどうする？」
「うっ!!」

……えーつと、えつと、だからー、
精霊石の周りに氷を張って……駄目だ。厚いと割れないし、薄いと溶ける。

火の精霊石を使って、水の精霊石で反発させたら……対消滅するだけだ。

そもそも、属性を持つ精霊石って、すっごく希少だし。

一瞬、魔力を遮断する……いや、この場合、一瞬、魔力を貯めてから、流せばいいんだから。

ううー……」

「あの……でしたら、セラさんの魔剣や、偽勇者さんの魔槍で使われているオリハルコン^{魔法金属}を使ったらどうでしょう」

「え?」

魔法金属
「オリハルコンは一瞬だけ、魔力を留める特性があります。

魔法武器で火や雷を放つ時、術者の魔力を術式に変換するために、一瞬、魔力を留めておく必要がありますから。

魔法金属
だからこそ、オリハルコンは、魔法武器に使われているんです。

その特性を使えば――」

「それだあああー！ツッ！！」

ナイス、アイデアです。

さすがは、僕の女神様だ！！」

彼女の手を取って、滑稽に踊り出すウィズと、
引っ張られながら頬を染めるレイフオン。

「め、女神……女神って」

「弾丸用の精霊石を円筒状にオリハルコンで包んで、
円筒状のオリハルコンは、宙で脱落させ、
魔力弾のみを対象に当てる。
うん。あとは、命中率か。

これは、作ってみたいことにはわかりませんね」

魔法金属

「オリハルコンを葉莢として使い捨てるわけか。

一発、一発が高価たかくつきそうだな」

「ムウ。『切り札』というわけだな」

「バアアアアアアアア！！」

燃えてきましたあああアアアアアアアア！！」

ウィズの興奮した叫び声が城壁で反響し、裏庭に響き渡った。

＊

0571 勇者は きょうさ か、あかゝった！

竜斗は、ふらりと魔術師団の勤める図書塔の最上階の部屋に入っ
た。

「よう。無口っ娘」

「……レンです」

読んでいた書類にサインしながら、顔も上げずに返事をするレン
フェイ。

「頼んでおいた魔法陣。

どんな案配かなと思ってね」

「もう、できてる。

あとは、微調整」

「そっか。忙しい中、悪いな」

「別にいい」

「大変だったろ。

神殿が施術する広域浄化魔法陣の中に、別の魔法陣を組み込むな
んて」

「ねえさんが、手伝ってくれたから。

そういうの、ねえさん。得意」

「へえ。内気がねえ」

「そう。

ねえさんは、魔法陣のエキスパート」

「そうは見えねえけどな」

書類を読みながら、レンフェイは独り言のように話す。

「ねえさんも、幼い頃は普通に魔術を施術できた。暴発も暴走もなかった」

「そうなのか？」

「そう。」

けど、年齢とともに魔力が桁外れに上がっていった。

そのまま、魔術を撃てば暴発する。

ねえさんは暴発させないために、独自に魔法陣の研究を始めた。

ねえさんは魔法陣を作り替え、組重ね、

大量に魔力を消費する連重魔法陣で魔術を行使するようになった」

「それが、あれか」

「初めの内は良かった。

発する魔力量と、魔法陣の魔力消費量が釣り合っていたから」

「だが、すぐに、利かなくなった。……か？」

「そう。」

ねえさんの魔力量の増加に、魔法陣が追いつかなかった。

だから、ねえさんは、さらに魔法陣を重ねるようになった。

最大、50陣。

でも、……それでも、ねえさんの発する魔力量に、50の魔法陣

は耐えきれなかった。

その齟齬そごが……暴走マジック・トリップ」

「魔術を自分では、止められなくなったってことか」

「そう」

「色々あったんだな。内気にも」

「あった」

重い空気を振り払うように軽く首を振った竜斗が、レンフェイに笑みを見せた。

「二人には何か礼をしなきゃな。
無口っ娘。お前は何か良い？」

緑の長髪を揺らして、顔を上げたレンフェイは銀瞳を竜斗に向ける。

「デート」

「へ？」

「デートしたい」

「……俺と？」

「そう」

こてんと小首を傾けるレンフェイ。

「………まあ。それが望みなら、構わないが」

「約束」

＊

「よく、許可がおりましたね」

「ウヌ。今回の作戦には、神殿が加わるからな」

水の神殿の通路を、ウィズとアーサーが歩いている。

水の神殿内部は全て白亜の大理石で建造されていた。
水の神殿の名の如く、

神殿内部に噴水があり、
ガラスの面を水が伝い流れ、
支柱に支えられた透明な石のパイプの中を水が流れ、噴水に注が
れている。

「へえ。水の神殿って初めて入ったけど、綺麗な所ですねえ」

「ウヌ。便利だぞ」

「便利？」

「ウム。あそこの傾斜は、頭を下にして腕立て伏せをするのに最適
だし、

あそこの壁の出っ張りは、懸垂をするのに丁度良いし、

あの太いパイプは、足をかけて腹筋しやすいし、

あの噴水で、水を被りながらスクワットをすると気持ちよいぞ」

「トレーニング・ルーム!？」

「夜警の時には、何時も筋^{そうやって}トレで時間を潰しておったな」

「本場に、神官騎士なんですよね!？」

「まだ、見習いだがな」

「アーサーさんが、なんで見習い止まりなのか、わかった気がしま
す」

「又……そうか」

「そうです」

「……又ウ。やはり、筋肉がまだ足りておらんか」

「すでに、満ち満ちてますから!！」

今回、アンデッド城攻略のために、
神殿が保管している文献を閲覧する許可を取り、書庫に向かっていた。

普段、書庫は開放されてないが、
アンデッド城攻略に神殿が正式にバックアップすることになった
ことと、

申請したのが神官騎士見習いの身分のアーサーだったことが幸い
して、正式に許可が下りたのである。

ウィズは声を潜めて、アーサーに尋ねる。

「でも、偽勇者さんは、ああ言ってましたけど、
本当に、調べるのはアンデッド城じゃなくて、魔王城で良いんで
すかね？」

「ムウ。最終目的は魔王だからな。

良いのだろう。

それに、アンデッド城は案内用小冊子パンフレットがある」

「まあ、そうですね」

「そういや、前から聞きたかったんですけど……」
「又？」

「神って言われてるけど、神に名前ってあるんですか？」

「ヌウ。……………無いな。

神は神だ」

「え？　じゃあ、神の姿形は？」

「それも記述がないな」

「神って、何人ぐらい居るんですか？」

「さあな。それも記述されておらん」

「……なんで、何も書かれてないんです？
信仰の中心でしょうに」

「ヌウ。……何故であろう。」

神に関しての記述は、『神が顕現する場所は竜統山脈ホワイト・ウエッジである』と
いうだけだな」

「そこって、たしかドラゴンの生息地ですよね」
「ウム」

「なんで、人間の神なのに、そんな所に出現するんですか？」
「ヌウ。」

「……そう書かれてるから……としか、わからんな」

「……………はあ」

神殿の奥まで行くと、
水の精霊を象ったとされる大理石の女性の像が鎮座していた。

「なんですか？ アレ」

「ウヌ。水の精霊の像だな」

「そうじゃなくて、あの精霊石ですよ!!」

「ヌ？」

その女性像の胸元に、涙型の青い精霊石が埋め込まれている。
直系15センチ程の精霊石が青い光を淡く発していた。

大理石の像に駆け寄ったウィズが、まじまじと精霊石を見上げる。

「おかしい。魔力を流し続けてるのに体積が減ってない？」

「ムウ。」

この精霊石から流れる魔力を使って、地下水から水を組み上げ、この神殿内に水を巡回させていると聞いたことがあるな」

鋭い眼差しで観察していたウィズが腕を伸ばし、手から魔力を放射した。

「……これ、自然に魔力を集めてる？」

——聞いたことがある。

属性を持つ精霊石には、普通の精霊石にはない特殊効果があるって。

これが、『水の精霊石』の効果か」

「ムウ。」

道理で、魔力を使い続けてるのに、精霊石が無くならんわけだ」

「……………欲しい」

「ヌツ？ やらぬぞ。」

神殿のシンボルだから、盗むと厳罰だぞ」

「でも、……………欲しいなあ」

ウィズの呟きを聞いた神殿関係者の眼が厳しくなってきたところで、

アーサーがウィズの腕を引いて、書庫まで歩きだす。

未練がましく、ちらちらと後ろを振り返りながら、ウィズは書庫に引かれて行った。

＊

「双眼鏡がいらぬのは便利だ」

アンデッド城から10キロほど離れた岩山で、
俯せになった竜斗とセラは《鷹目》をかけて、アンデッド城を子
細に観察していた。

「窓がないな」

明かり取りは全て柵が付き、そこから弓を撃てるような構造にな
っている。

「そりゃそうよ。この城は、要塞なんだから」

「こんな、国の真ん中に？」

「ここの領主が反乱を起こそうとしたことがあるのよ。」

この城は、その名残。

ちなみに、その侯爵は、さあ、反乱を起こすぞという時に、ポツ
クリ逝っちゃったらしいけど」

「そいつは、また」

「その子孫が観光地化して改築、補修してたんだけど、
まさか、それが魔王軍に使われるなんて、皮肉なものね」
「ほう」

竜斗は屋根の平たい部分を指さした。

「あの屋根は？」

「見た所、飛竜フイバーンの発着場のようね」

「その周囲のアレは大型弩の対空武器か。」

あんなの、王都にだってないぞ。

どこまで本格的なんだよ」

「観光地化した時には結構、実入りが良かったそうよ。」

本格指向だって」

「何処にでも、マニアは居るってか……。ここからは、これくらいでいいだろう。」

次は反対側へ行くぞ」

竜斗とセラは別の角度から、アンデッド城を観察するために、ドラの所へ戻る。

「セラ」

「何？」

「確か、死霊王は、アンデッド死なないから『アン・デッド』って呼ばれてるんだよな」

「2度、斃ゾンビを全滅させたしたはずなんだけど、すぐにゾンビ群が形成されたからだ……。って、私は聞いたけどね」

「殺しても死なないのか、すぐに復活するのか。」

それとも……」

「リュウトは、どう思う？」

「そうだな。今すぐ、思いつくものとして、5パターンだな。」

第一として、吸血鬼のような特定の殺し方が必要な奴だった場合。個人的には展開的に、そろそろ、美少女吸血鬼が出てきても良いころだと思っしな。

第二として、ネズミのような小動物。

普段は、死霊王の使い魔アンデッドの振りをしていて、実はそっちが本体だった場合。

第三として、幽霊。

宿主を殺されても、次々に乗り移って行けば、死んでも死なない。

第四として、サークレットや指輪などの道具に宿っている。

《魅了》^{チャーム}が付与されている高価な装飾品に憑いていて、拾った奴が次の死霊王^{アンデッド}となる。
俺は、この可能性が一番高いと思ってる。

五番目。最悪の可能性として、真正正銘の不死身。死んでも死なない。殺しても殺せない。
正に『アン・デッド^{不死}』だとしたらお手上げだな」

「そしたら、どうするの？」

「素直に、メイドさんに頼る。」

メイドさんなら、死なない奴も殺せるだろ。

メイドさんが動いてくれるかどうかは、別としてな」
「あゝ、うん。そうね」

セラがドラの耳の後ろを搔いてやりながら、竜斗に尋ねる。

「ねえ。リュウト。」

私からも一つ聞いていい？

よく、あの水の神殿が動く気になったわね」

「あん？

セラも、俺と姫さんと宰相^{カリウス}の会合の場に居ただろうが」

「居たけど……リュウトと宰相が、ルキア姫から噂を流すように頼まれてただけでしょ。」

後は浄化魔法陣の話だけだったし……」

言葉を濁すセラを見、竜斗はドラに寄りかかった。

「そうだな。大雑把に説明するとすれば……、俺たちが、リザードマン退治の報酬を貰った時のことを覚えてるか？

チビ巫女が姫さんにアンデッド城の城攻めを提案してたよな。

実質、神殿は先代巫女が中心とはいえ、その娘のチビ巫女は表の代表だ。

その代表が城攻めを提案したんだ。

内心はどうであれ、神殿も動かざる得ないさ」

「どうということ？」

「権力を持つというのは、部下をこき使うためのものじゃない。

そいつ言動が、そいつのバックの国や組織や部下の『総意』になるってことなんだよ。

そいつが、軽率な発言を繰り返せば、その組織が軽率な発言をしてると同じことなのさ。

あの姫さんは、チビ巫女の言質を捉えて、

『神殿チビ巫女の代表の提案』で城攻めを議会に通したんだよ。これの一つ。

次に、俺が『アンデッドが相手なのに、動かない神官は、何のために居るんだ』と、民衆に噂を流した。

神殿を動かざる得ない方向に、世論が不満を洩らし始めている。

世間の不満ってのは、即効性こそないが、じわじわと効くぞ。

特に権威って奴を笠に着てるに奴らはな。

これが、二つ目

それから、この前、コウがガイアレイズを狩っただろ。

宰相がその事実を利用して、

『召喚した勇者がドラゴン退治級の活躍をしてるのに、神殿は臆して動かない。

勇者が召喚された今、もう神殿に価値は無いから、機嫌を取る必要もない』と、宰相の部下たちが貴族連中に吹聴したのさ。

神殿の金蔓は民衆よりも、金を持っている貴族の献金だ。

宰相の話が貴族たちに広まり、献金が一気に減り始めた。

これが、3つ目

『言質、世論、金』

姫さんは、この3つを使って引っ張り出したのさ。

聞いた話じゃ、神殿の方から『お願いしますから、参戦させてください』って、状態だったらしいぞ」

「……え……えげつないわねえ」

「姫さんは、メイドさんとフィーの一番弟子だからな。
これくらい、当然だろ」

＊

幾つものシャンデリアから光が溢れ、軽快な音楽がパーティー会場を踊り流れていた。

着飾った男女がホールの中央で、軽やかなステップを踏んでワルツを踊り、

壁際では、気取った口調で口説く紳士の熱い視線を、淑女が艶やかな微笑みで躲していく。

やたら長い家名の貴族の娘と踊り終わった光一は壁際に避けて、一息吐いた。

「勇者よ。お疲れかな」

「あ、これは」

大將軍のレッツに、光一は頭を下げる。
大將軍
レッツが、この舞踏会の主催者だった。

「俺のためにパーティーを開催して頂いて、ありがとうございます」
「なに。勇者は、それだけ価値のあることをしたのだ」

「ですけど、俺、他でも祝って貰ってて、
ドラゴン退治だけで、すでに3度目の祝賀パーティーなんですけど……」

「気にすることはない。
こういうのは、何回祝っても良いものなのだ」

「そういうもんなんですか？」

「うむ」

大將軍
鷹揚に頷くレッツ。

「勇者よ。今度は、アンデッド城だな」

「はい。そうですね」

「勇者も忙しいだろう」

「いいえ。そうでもありません。

今の時点で、俺がすることは何もありませんから。
軍の準備が整うまで、待ちですね。

あと1週間で、進攻準備が整うらしいですけど」

「勇者には、次の戦いも是非、
われらの先頭に立って、戦って貰いたい」

「はい。勿論、そのつもりです。
腐った死体
ゾンビとは一度、戦ったことがあります。」

聖剣の一撃で、壊滅させてみせますよ！」

自信に満ちた笑みを浮かべる光一に、
満足そうに頷いた^{大將軍}レッツが顔を寄せ、声を潜めた。

「そういえば、聞いたかね？」

「何をです？」

「ここだけの話だが、今回の戦に、水の神殿も参加するそうだ」

「はい。聞きました。

シエラの話では、神殿は自ら率先して、今回の戦いに加わってくれるそうです。

士気も高いし、ゾンビ如き、敵ではありません」

「ほう。それは、頼もしい。

その水の巫女殿は？

確か、前の2つの祝賀パーティーには出席していたはずだが」

「シエラですか？

今日は、戦の準備に忙しくて欠席です。

神殿代表も大変なようですよ。

代わりに、アリアさんが来てるはずなんですが」

^{大將軍}レッツが肥満の腹を揺らして、口角に笑みを浮かべる。

「ほっ、噂をすれば。

では、わしは、これで失礼する」

^{大將軍}レッツと入れ違いに、

光一の前に、アリアが現れた。

「……ア、アリアさん」

「コ、コウイチ殿。

い……いかがでしょうか？」

薄いピンクのドレスに、光り輝くような金髪が映える。

真珠のネックレスに、緑瞳と同じ色のエメラルドの髪飾り。

背中が開いている薄桃色のドレスは金糸で彩られ、抑えた中にも華やかさがあった。

「……す、すごく綺麗です。アリアさん」

「あ、ありがとうございます」

頬染め俯くアリア。

キョロキョロと辺りに視線を泳がせていた光一は意を決して、アリアの前に膝をついた。

「アリアさん。

お、俺と踊って頂けますか？」

光一の差し伸べた右手に、
微笑みを浮かべたアリアが、そっと左手を重ねる。

「はい。よろこんで」

*

0581勇者のまえに そ、んひ、か、あらわれた。

地面に虹色の魔力線レイ・ラインが走るように発光していく。

アンデッド城を中心に半径10キロの魔法陣が虹色魔力線の光の筋で描かれた。

だが、魔法陣の浄化効力イクソシズムは発現しない。

直径20キロの広域魔法陣を起動させるには、魔法陣に加えてい
る魔力が少なすぎるのだ。

アンデッド城の屋上に身を潜めていた竜斗たちが、展開された魔法陣を見下ろしている。

薄暗い朝方に、竜斗とセラとレイフオンはドラに屋上へ運んで貰っていた。

3人を降ろしたドラは、すでに別行動してるウィズとアーサーの所へ戻っている。

竜斗たちは身を低くし、東側の正門を伺っていた。

遠くに、隊列を整えた軍が突撃の命令を待ち、待機してるのが見える。

その時――、アンデッド城の正門が重々しい音とともに開き、
無数の人影が飛び出して行った。

「話には聞いてたが……ゾンビには見えねえよなあ」

土煙を上げて疾走する死体^{ゾンビ}たちは、
どこも腐っておらず、身体も欠損しておらず、
血の気が無く、青白いことを抜かせば、生者と同様――、
否、生者以上のスピード^{戦闘能力}とパワーを誇っていた。

「墓場から出てきたばかりの亡者じゃないからね。
生き返らせることは無理だけど、
身体の欠損は魔術で修復できるし、
腐敗防止の魔術で腐ることもないわ。」

ゾンビの方も、痛覚が無いから限界以上の力を出せるし、
筋肉が切れても、骨が砕けても平気だし、
自己修復能力はあるし、
しかも、バラバラになるまで止まらない。
はつきり言って、嫌な敵よ」

「ホラーじゃなくて、アクション・スプラッタの方かよ」

死霊王
「アンデッドは、まだ城の中かしら？」
「さあな。もしかすると、前線で戦ってるかもしれねえぜ」
「正体が、わからないってのも厄介ね」

「この戦いの要はそれさ。
どうやって、死霊王^{アンデッド}を特定するか？
それさえ判れば、後は軍の物量で圧倒できるからな。」

ま、それは筋肉とツツコミとドラに任せるさ。
俺たちは俺たちの仕事をするぞ」

「はい」
「了解」

飛竜^{ワイバーン}の発着場にある扉を、
解錠で開けた竜斗たちは城内に滑り込んだ。

＊

2万の軍勢が距離を取って、城を囲んでいる。
神殿が展開した魔法陣の魔力線^{レイ・ライン}が、地面で淡い虹色の光を放っていた。

遠方に見えるアンデッド城の東の正門がゆっくりと開いていく。

軍の先頭で、天馬^{ペガサス}に跨った光一は聖剣を構えた。

光一の隣で、白馬に跨ったアリアがバスタードソードを振り払う。
「コウイチ殿。」

決して、私の傍から離れず、
一体を複数で攻撃するようにしてください」

「え？ でも、ゾンビだろ？」

「ゾンビなんか、聖剣の一撃で終わると思うけど――」

「来ます！！」

アンデッド城の正門が開ききると、無数の人影が飛び出して来る。
あまりのスピードに、黒い弾丸が飛び出したようにしか見えなかった。

上体を低く倒し、両手を後ろに疾走する『死体』たちが、
光一の眼には『ゾンビ』ではなく『忍者』に見えた。

「コウイチ殿!!」

アリアの声に、我に返った光一の目前に拳が迫る。
「クッ!!」

ガアアアアアン!!

素手で聖剣を殴ったとは思えない打撃音が響き、光一は後ろに仰け反った。

ゾンビの手刀が光一の喉元を狙い――、

「セヤアッ!!」

アリアが袈裟斬りに斬り下ろしたバスタードソードを、ジャンプして避けたゾンビが空中で一回転し、拳を突き下ろす。

拳を紙一重で躲したアリアが、バスタードソードを斬り上げた。

ゾンビの左腕が斬り飛ぶ。

しかし、一滴の血も流れず、マネキンの腕を斬ったような光景だった。

地面に着地したゾンビはバク転をしながら、地面に落ちた左腕を取ると、後方に大きく跳躍する。

女の死体^{ゾンビ}は、シアアアッと顎を開き、青白い舌を出しながら、左腕を肩の傷口に押しつけた。

ギチギチと音を立てながら、胴体と腕が繋がる。

繋がった両腕をダランと垂らして、立ち上がった女^{女の死体}ゾンビを見、

アリアが柳眉をしかめた。

「相変わらず、嫌な敵ですね」

「シイイイイッ!!」

奇声を発しながら突進する女ゾンビの打拳を、馬上のアリアが迎え撃つ。

拳とバスタードソードが打ち合い、女ゾンビの右腕を縦割りに両断した。

しかし、女ゾンビは歯牙にも掛けず、白馬の首筋へ左拳を振る。馬を立たせて、一撃を避けたアリアは馬の重さも加算されたバスタードソードの一撃を振り下ろした。

女ゾンビが間一髪、避けたにも関わらず、剣圧で右腕が斬り飛ぶ。

女ゾンビは地面に落ちていた誰ともわからない甲冑を纏った左腕を拾うと、右肩口に押しつけた。

グチグチと音を立てて、兵士の左腕が右肩に接続される。

「あ、……あれが、ゾンビだってーッ!?!」

女ゾンビとアリアの戦闘を見、

顎を落とす光一に、フィーが唇の端を歪めた。

「うむ。これが、死霊王アンデッドのゾンビじゃよ」

「で、でも、どこも腐ってないし、パワーもあるし、
なにより、もの凄いスピードだし」

「ゾンビやスケルトンを操る魔術があるのなら、
当然、修復魔術も腐敗防止魔術もあるに決まっとるじゃろう。
爆裂系魔術一発で全滅するような、

腐った体で、鈍重な動作がやっとの死体ゾンビしか操れんかったら、
『ネクロマンサー』死霊術師なんぞ、存在しておらんわ」

「でも、自己修復なんて……」

『ネクロマンサー』「あやつらは、研究と人体実験が何よりも好きな連中じゃからの。
ひたすら、高性能を目指した結果じゃよ。」

腐った身体で、低戦力のままにしておくなど、
『人体の探求者』ネクロマンサーの、あやつらにとってみれば、ただの怠慢じゃ
ろうて」

「でも、あんなのどうやって斃すんだ？」

光一の目の前では、
女女の死体ゾンビとアリアが高速戦闘を繰り返している。

「ふむ。この類のゾンビの斃し方は、二通り。
まず、一つ目は――アリア!!」

彼女の呼びかけで、

アリアが白馬の手綱を引くと同時に、

『レイ・ボウ!!』光の矢

フィーが10本の光矢魔術を撃った。

光矢が女ゾンビに、10の風穴を開ける。

「イヤアアアアアッ!」

アリアが気合い一閃、穴を繋ぐようにして、縦横無尽に女ゾンビ
を斬り裂いた。

女ゾンビは一滴の血も流さずに、何十にも分断されて崩れ落ちる。

「と、再生できぬぐらい、バラバラにするのが一つ目じゃ。」

そして二つ目――」

別の男の死体ゾンビがアリアの背中へ飛びかかる。

イクソシズム
「浄化!!」

襲いかかってきたゾンビが、フィーの浄化魔術の青白い光に包まれた。

動く死体は膝から崩れ落ちるようにして、動かない死体普通のへと戻る。

「エル!!」

「は〜い」

アリエルが銀剣ミスリル・ソードを振り下ろすと、

風の刃が、死体を細切れに切断した。

「あはははは。」

バラバラです〜」

「エル。」

そこは笑うのではなく、悼むいたのじゃよ」

「いたむ? ……別に、どこも痛くないですよ?」

「眉を下げて、悲しい顔をするとうい」

「敵を斃すと、嬉しいんじゃないの?」

「敵が『人』や『人の子供』の形をしている場合は、

悲しい顔をしておく方が無難なんじゃ」

「は〜い。」

かなしいかおー。かなしいかお〜」

指で眉の端を押し下げているアリエルに言い聞かせたフィーが、

光一に振り返る。

「二つ目の方法は、
今のように浄化の魔術で『ただの死体』に戻してから、切り刻む
戦法じゃ」

銀髪を両手で掻き上げるフィーに、光一は大きく頷いた。
「フィー。作戦を思いついたぞ！

アリアさんが足止め。
シェラとフィーが浄化の魔術を。
そして、俺とアリエルがゾンビを破壊する。

征くぞ！ みんな！！」

「はーい！」
アリエルのみが元気に返事を返す。

無言で見つめてくるアリアとフィーの視線から、
シェラは、そっぽを向いていた。

「？ ……どうしたんだ？」

「コウイチ殿。その作戦は無理です」
「え？ どうして？」

「ククク。シェラは一切、聖光魔術を使えんのじゃよ。
ヒーリング プレス
治癒も、祝福も、
イクソシズム
勿論、浄化魔術もな」

「え？　だって、シェラは水の神殿の巫女なんじゃ……」

「だ、誰だって、得手不得手ぐらいはありますわ」

唇を尖らせるシェラに、

フィーは八重歯を見せて笑う。

「カカカカ。一言で言うならば、シェラの勉強不足じゃよ」

「なっ！？　フィー！

な、何をデタラメを言ってるのですか！？」

「事実じゃろうが。

召喚魔術の方が精霊を感知できる者しか使えず、高等で、派手じゃからと熱中し、

聖光魔術は誰でも使えて、しかも、地味じゃからと見向きもしなかったのは、おぬしじゃろうて」

「わ、わたくしには召喚魔術があるから良いのです！

《雪狼スノー・ウルフ》！！」

召喚された二匹の氷の狼が、ゾンビをバラバラに引き裂いた。

ほら、見なさい。と言うように、薄い胸を張る青髪青眼のシェラ。

「ふむ。イクソシズム我が浄化魔術で死体に戻し、

シェラおぬしの氷狼が切り刻む。

聖騎士のエリアがイクソシズム浄化魔術を使い、
コオイチが死体を解体する。

アリエルは、前に乗ってるシェラの護衛と、コオイチのサポート。
これで、行こうかの」

「は〜い」

「了解です」

「わたくしの力、存分に見せてあげますわ」
「わかった」

「ふむ。お喋りはここまでのようじゃな。
第二波が来るようじゃ」

「皆さん。決して、バラけないように」

「ふむ。各自、バラバラにもされぬようにな」
「あはははは」

「冗談を言ってる場合ですか。フィー！！
そして、笑ってる場合ですか。アリエル！！」

「ほら、来たぞ。アリア」
「もうっ！」

＊

セラが氷の魔剣で、メイド服を着た女ゾンビの両足を凍らせ、
次の瞬間、双剣で八つ裂きに斬り裂いた。

「ま、こんなところね」

セラが大広間へ繋がる扉を開く。

竜斗たちは城の屋上から進入し、一階の大広間まで辿り着いていた。
た。

大広間に、ゾンビは一体もない。

「予想通りだな」

「そうね」

途中、遭遇した数体のメイド服の女ゾンビは、先程のように、セラが奇襲で機動力を奪ってから、破壊していた。竜斗とレイフォンは後ろから付いて来ただけである。

「やっぱり、死霊王^{アンデッド}は居ませんでしたねえ」

「さすがに、野戦時には戦場に立たなきゃ、指揮できなかったらしいな。」

ま、居たら居たで、逃げ場の無い城ごと、内気の魔術で吹き飛ばしてやったんだがなあ」

「鬼」

「失礼な。偽勇者だよ」

竜斗は大広間を見回した。

「事前調査通りの広さだな。」

内気、指示を頼む」

「はい」

レイフォンが洋紙皮を広げて指示を出し、竜斗が精霊石の粉を固めたチョークで石畳に^{魔法陣}図形を描き始める。

「リュウト。私は見張りをしてるわね」

「頼む。」

あ、そうだ。セラ」

「なに？」

「ゾンビが子供でも、手加減するなよ」

「当たり前よ。」

この私が死人相手に、手加減なんかするはずないじゃない」
「だな」

＊

戦況は一進一退の攻防が続いている。

数は軍の方が圧倒的に多いが、ゾンビの斬っても動き続ける特性と、

死んだ遺体を回収されると敵が^{ゾンビ}増えることによって、攻めあぐねていた。

「コウイチ殿！！」

危ない！！」

アリアの警告に、

光一は死角から飛び込んできた人影に向けて聖剣を振った。

ギイイイイイン！！

聖剣に拳が打ち込まれた瞬間、

有り得ないような甲高い打撃音が響き渡る。

その威力に、光一は^{天馬}ペガサスから転げ落ち、

小さな人影は反動で弾き飛んだ。

光一は地面で回転して受け身を取り、
小さな人影は土埃を巻き上げながら、地面に着地する。

「なっ!？」

光一が驚愕の悲鳴を上げた。

光一の前で、虚ろな目を向けていたのは、幼い少女の動く死体^{ゾンビ}。

農村に居るような、浅黄色の簡素な服を着た少女が、
能面のような無表情の真っ白い顔を光一に向けていた。

「……そんな……なんで……」

少女のゾンビは、一切の助走なしに光一に飛びかかる。

「クッ!!」

光一は聖剣の腹で、少女のゾンビの頭を打ち据えた。

吹っ飛んだ少女は、ザリザリと土を削りながら地面に溝を作り、
止まる。

少女は何事もなかったように、ゆらりと立ち上がり、光一に能面
の顔を向けた。

肉体も強化されているのか、地面と接触した箇所^{箇所}に掠り傷すら付
いていない。

「コウイチ殿！！」

それは、ただの死体です！！

躊躇すれば、こちらが殺されます！！」

別のゾンビを12等分に斬り裂いたアリアが、コウイチに叫んだ。

ギリりと齒軋りした光一は聖剣を握り締める。

身体を丸めた少女は、そのバネだけで、

地面すれすれを弾丸のように跳躍し、光一へ突撃する。

突進してくる少女の右拳の打拳を、光一は地面を転がるようにして躲した。

「このっ！！」

輝く聖剣を振り下ろして、光刃斬光の斬撃を飛ばす。

光刃斬光の斬撃が方向転換した少女の左肩を、ボトリと切り落とした。

無表情の少女は目を一切、動かさずに左腕を拾い、肩口に押しつける。

ギチギチという異音とともに、すぐさま修復した。

「……………ぐっ！！」

なら、もう手加減なしだ。

許せっ！！」

振り上げた光一の聖剣が光り輝いた。

「光刃斬フォース・ブレードッ！！」

技名を吼えた光一は聖剣を振り下ろす。

光の斬撃が少女を頭から真っ二つに斬り割った。

両断されても、一切、血が出ず、マネキンのように左右に分かれて倒れ——る途中で、

菌糸のような極細の白糸が沸き出し、両方の身体を繋ぎ、ギチギチと修復していく。

光一が唾然と見ている前で、傷一つ無く修復した少女が、地面を凹ませるほどの衝撃で地面を蹴り、右斜めに飛び、反転、左斜方向へ、着地と同時に、右斜へ反転し、光一の懷へ飛び込んだ。

「なっ!?!」

反射的に、聖剣に魔力を流し、レンズ状の光壁を展開する。

ガスッ!!

光壁を殴った少女は反動で吹き飛び、宙で一回転して、地面に着地した。

光一は荒い息を吐きながら、呼吸を整える。

——ダメだ。光刃斬じゃ、決着がつかない。
ここで時間を食っていると、死霊王に逃げられてしまう。

光渦の光撃は乱戦状態で、味方を巻き込むから使えない。

勇者は——どんな技を使ってた？

ゲームの『勇者』は、他にどんな技を使っていた？

剣を光で纏って巨大な剣にして攻撃——、

……ダメだ。仲間を巻き込む。

光の速さで、連続攻撃——、

……ダメだ。向こうの方が速い。

他には……一振りで複数攻撃。

——いけるか？

大丈夫だ。信じろ。信じろ。

自分を、信じろ！！

俺は、勇者なのだから。

「うおおおおおおおおおっ！！」

吼え猛けた光一は、魔力を聖剣に流し込んだ。

聖剣が目映いまでに、白光を放つ。

「喰^龍らええええええ！！

トリプル・ストーム・ブ^牙レードオオオオオオオッ！！」

光一が聖剣を振り下ろすと、
三筋の光の刃が、少女を4等分に斬り裂いた。

「まだまだああッ!!」

光一はさらに、袈裟斬りに聖剣を振り切る。
斜めからの光の3刃で、少女は16分割され、崩れた積み木のよう
うに、地面に散らばった。

「これで、トドメだ!!」
地面の肉塊へ、光一は竜牙斬を叩きつける。

光一の目の前には、
一滴の血も流れず、バラバラになった立体ジクソーパズルのよう
な元少女。
肉片

オーバーキル状態の少女の白い肉片を、
光一は肩で息をしながら、見つめていた。

14体のゾンビを屠ったエリアが白馬から降り、心配げに光一を
覗きこむ。

「コウイチ殿。大丈夫ですか？」

「……………許さない」
「え？」

「許さないぞ! アンデッド!!」
死霊王
よくも、こんな小さい子を!!
絶対に許さねえええ!!」

光一が怒号を発した時、戦場の空気がざわめいた。

視線を向けると、アンデッド城の正門から甲冑を着込んだ一団が現れる。

着ている鎧の種類も年代もバラバラな、ゾンビの騎士団だった。新しい鎧のゾンビは、この戦いで殺され、ゾンビにされた兵士のようである。

「出てきましたね」

「うむ。予定より遅かったのう」

「あれは？」

「死霊王のゾンビで構成された騎士団ですわ。
アンデッド

生前が騎士だけあって、単なる力押しの軍団ではありませんわ」

「これからが本番ですね」

光一の周りに、アリア、フィー、シェラ、アリエルが集まってきた。
た。

「……………そうか。あれが、アンデッド軍の中核か」

光一が前に進み出て、聖剣を天高く掲げる。

「お前らに、慈悲などやらない！」

光一の聖剣が光り輝き、辺りが白光に包まれた。

「喰らえええッ！！」

光渦撃
バスター・サイクロン！！」

振り下ろした聖剣から発された光の渦に、

ゾンビ騎士団たちが、《強化》を付与されたカイト・大楯シールドを構える。

中心に居た3体が消滅し、その後ろの5体が吹き飛ばされた。

しかし、それだけだった。他は無傷で歩を進める。

「クソッ!!」

なら、何度でも喰らわせてやる!」

「待ってください!」

こんな所で、魔力を消耗するのは得策ではありません。
それに、ほら——」

光一たちが見ている前で、
ゾンビ騎士団の右翼へ、騎馬の一団が突撃をかけた。

先頭の赤い女騎士^{フレイム}が、紅の長刀から紅炎を振り撒く。
フレイムの長刀から発する業火の火炎が、ゾンビ騎士を骨まで焼
き尽くし、

彼女が通った跡には灰と鉄屑しか残ってなかった。

フレイム騎士団の中央突破に、アリアが眼を輝かせる。

「さすがは、フレイム先輩です!!」

コウイチ殿。私たちも行きましょう!」

「……………あ、ああ」

＊

0591勇者は そゝんひ、と たたかっている。

戦場は混戦を極めていた。

光一ベガスが天馬の馬上から聖剣を振り下ろす。

至る所に宝石を埋め込んだ甲冑を着ているゾンビを袈裟切りに斬り落とし、

氷狼スノー・ウルフが残りの身体を引き裂いた。

だが、周りのゾンビが動きを止める気配はない。

「こいつも違ったか！」

光一たちは死霊王アンデッドを探して、

指揮官らしき格好をしたゾンビを見つけだしては、破壊していた。

「死体を回収している道筋を見ると、こちらの方向であっているのは確かです」

「フイー。」

なんか、死霊王アンデッドを見分ける方法ってないか？」

「ふむ。一度でも、会っておれば、どんなに姿形が変わろうとも判別できるんじゃないが、

さすがに会ったこともない者となるとな」

「コウイチ様。

こうして、地道に司令官らしきゾンビを斃していくしかありませんわ」

「ううう。面倒くさいです」

「やっぱり、アンデッド城の中にいるんじゃないのか？」

「前回の戦闘時、アンデッド城の中のゾンビを一体残らず殲滅しましたが、外のゾンビは動き続けました。

今回も、城の中にいるとは思えません」

「ふむ。城ごと破壊されたら、終わりじゃしの」

「あゝ、鬱陶しい！！」

どいつが、死霊王^{アンデッド}が判れば^{わか}、簡単に片が付くのに！」

悪態を吐きながら、光一はゾンビを光の斬撃^{フォースブレード}で斬り裂いた。

＊

空間に閃光が走り、連続で7つの頭が弾ける。

魔力弾が、騎士、貴族、老人、美女等々、指揮官らしきゾンビの頭を撃ち抜いた。

だが、他のゾンビたちは変わらず動き続けている。
死霊王^{アンデッド}ではなかったらしい。

だが、ゾンビたちは何処から攻撃されたのか、わからなかったのだろう。

周辺のゾンビたちが辺りを見回していた。

「ムウ。偽勇者の言う通りになったな」
アーサーは口の中で呟いた。

——どんな形であれ、生存し続ける意志があるのならば、必ず身を守る。

この作戦を伝えられた時、竜斗に言われた言葉だった。

どこから攻撃されたか判別できなかったゾンビたちが、主を護るために——、
死霊王

否、——死霊王が自分の身を守るために、ゾンビたちで楯を作る。
アンデッド

守りたい者を中心に同心円状にゾンビが集まっているのが、ここからは、良く見えた。

「では、ドラよ。

ワシは行くぞ」

「ギャウ」

そして、アーサーは、ドラの背から飛び降りた。

加速していくアーサーの身体に、白い幾何学模様の線が発光する。

高度 400メートルの上空から飛び降りたアーサーはメイスを振りかぶり——、

ズドオオオオオオオン！！

ゾンビたちの中心にいた金髪紫瞳の10歳程の少年に、メイスごと衝突した。

土煙が立ち昇り、アーサーを中心にクレーターが出来る。

中心にいた少女のような容姿の少年は木っ端微塵に弾け散り、周りにいたゾンビも衝撃で吹き飛び、半壊した姿で辺りに転がっていた。

人体が散乱する中、

ただ独り、全身に幾何学模様の白線を発光させたアーサーが無傷で、ゆらりと立ち上がる。

右手にメイスを吊り下げたアーサーが油断なく、鋭い視線で周りを見回した。

アーサーの青い瞳が宙の一点で止まり、風切音を立てて、メイスを切り上げる。

アーサーの眼が右へ動き、メイスを横薙ぎに振り切った。

何もない宙を見据え、アーサーは白い歯をキラメかせる。

「ムウ。ワシも神官騎士見習いだからな。

幽霊ぐらい見える眼を持っておる！」

アーサーは宙に浮かぶ死霊に、淡い光を放つメイスを差し向けた。

「筋肉失せし者など、この強い筋肉の敵ではない！！」

アンデッド
死霊王！

おぬしなど、その正体を特定し、その存在を判別し、その位置さえ確定できてしまえば恐るるに足らず！！………と、偽勇者が言っておったわ！」

アーサーはメイスを振り下ろすが、

死霊王^{アンデッド}に、するりと避けられる。

「ヌウウ……ちょこまかと……。
ヌッ？」

一瞬、青眼を細めたアーサーは、
一右足を前に一步踏み出し、上半身を僅かに倒して、鳩尾で拳を
突き合わせて、胸と腕に力を込め《モスト・マスキュラー》、
「ウヌ！ 死霊王^{アンデッド}よ。
無駄である。おぬしの姿は見えてるぞ！！」

戦場に響き渡るような大声で一喝した。

その怒号は、死霊王^{アンデッド}から遠く離れたウィズとドラの許^{もと}まで届く。

その言葉で、ウィズは気付いた。
ウィズの眼には見えない者と、アーサーが戦ってることに。

そして、飛んで来るドラの姿を見つけ、
アーサーが死霊王^{アンデッド}に気付かれないように、注意を喚起してくれた
ことに。

ウィズはドラの手綱を引いた。

「ドラ。直接、アンデッド城に行くよ」
「ギャオ！」

*

光一は天馬^{ベガサス}を止め、戦場を見回していた。

他の兵士も戸惑ったように周りを見回している。

ゾンビのみが一時停止ボタンを押したように、一斉に動きを止めていた。

「……これは？」

「ふむ。死霊王^{アンデッド}に何かあったのじゃろう」

「何かって……誰かが斃したのか？」

虚空をじっと見つめていたフィーが小首を傾げる。

「わからぬ。」

支配力は弱まっておるが、戦場に満ちる死霊王^{アンデッド}の魔力は減ってないようじゃ。

死霊王は斃されておらんが、何かが起きた。もしくは、起こっている。

そうとしか言えん状況じゃな」

「大変ですわ。」

他の者に手柄を奪われてしまいますわ。

すぐに、探し出さないと!!」

「兎に角、アンデッド城の方へ行こう」

焦る光一を、アリアが諫めた。

「待ってください。コウイチ殿。

これも死霊王^{アンデッド}の罠かもしれません。

このゾンビたちが、再び動き始めれば袋の鼠となります」

「うっ！ ……そうか」

「どうする？」

ゾンビたち、バラバラにする？

竜巻で一発ですよ」

首を傾けて見上げる桃髪赤瞳のアリエルに、

アリアが二本指で額を押さえ、柳眉をひそめる。

「止めなさい。アリエル。」

味方を巻き込むでしょう」

「……………でした」

「コオイチ。悩んだる時間は無いぞ」

「……………決めた！！」

このまま、行くぞ」

「このままですか？」

「そうだ。」

指揮官らしきゾンビを破壊しながら、アンデッド城に向かう。

もし、その中に死霊王アンデッドがいれば、それで良し。

動き出したとしても、指揮官がいなければ統率を取れないだろう。

他のゾンビは軍に任せる」

「む。コオイチ。」

ゾンビどもは、指揮官が別個に――」

「流石、コウイチ様ですわ！！」

アンデッド

死霊王を追い詰めつつも、防御を考える。

それでこそ、勇者様ですわ！」

「みんな。征いこう！！」

死霊王アンデッドに引導を渡してやる！」

光一は天馬ベガスの馬首を返した。

「は〜い」

「了解です」

「わかりましたわ」

「――指揮しとるわけじゃなく、全て、死霊王アンデッドが統括しとる………

……ふむ。まあ、いいかの。

最悪、ゾンビに囲まれても、このメンバーなら切り抜けられるじやろ。

それもまた、一興じゃ」

光一たちは騎士や貴族など、立派な身なりをしたゾンビを斬り裂きながら、

アンデッド城を目指した。

＊

「偽勇者さん!!」

大広間に入ってきたウィズの方を見向きもせず、床の魔法陣の一部を消して、精霊石のチョークで新たな線を引きながら、竜斗が返事をする。

「なんだ。描き終わる前に、決着ついちゃったのか」

「いいえ。アーサーさんが見えない敵と戦っています。たぶん、幽霊たぐいの類だと思いますが」

「ああ、ケースその3か」

大広間の扉に背を預けているセラが、
床に座り込んでる竜斗を見下ろした。

「『吸血鬼のネクロマンサー』や『本物の不死』じゃなくて良かったわね」

「そうだな。」

まあ。個人的には、美少女吸血鬼じゃなくて、ガツクリきてるけどな」

「いやいやいやッ！

吸血鬼はモンスターです。血を吸い尽くす鬼ですよ。

美少女だろうが何だろうが、厄介な敵でしかありません！」

「……この世界って、モンスターに対してだけは、シビアな見方しかないんだよなあ」

「他に、どんな見方があるんです？」

「愛でる」

「無理ですッ！！」

「思ったよりも遅かったわね。」

銃使い」

扉に寄りかかるセラに、ウィズが肩を疎める。

「ええ。」

範囲を区切って、ライフルで炙り出しをしたんですけどね。

結局、49発も撃つ羽目になりました。
魔力充填 充填した換えのライフル用精霊石を持って来なかったら、魔力切れしてましたよ」

「あとは、神官次第ね」

「何にせよ。」

アーサーさんが負けることはないと思いますよ。

ていうか、僕には、今のアーサーさんが負ける姿がまったく、想像できません」

「それには同感」

「それにしても、偽勇者さん」

ウィズが大広間の床一杯に、精霊石チョークで描かれた魔法陣を見渡す。

「こんな詳細で、でっかい魔法陣に、フェザー貨を使う必要あるんですか？」

「死霊王を斃す為のものじゃないからな」
アンデッド

「へっ？」

「偽勇者さん。」

それが最後の修正です。

他の回路魔法陣チェックも終わりました」

「やっと、終わりやがった」

立ち上がった竜斗は線チョーク跡を踏まないように、魔法陣の中央へ行き、懐からフェザー貨ドラゴン貨を取り出すと、正六角形に並べ置いた。

線を踏まないように飛び跳ねながら、セラたちの所へ戻ってきた竜斗が、

レイフォンの肩を叩く。

「内気。あとは、任せる」

「はい。任せてください！」

＊

0601勇者のまえに あんて、っと、か、あらわれた。

竜斗は懷からフエザ^{ドラゴン貨}ー貨を取り出すと、魔法陣の中央に、正六角形に並べ置いた。

飛び跳ねながら、セラたちの所へ戻って来た竜斗が、レイフォンの肩を叩く。

「内気。あとは、任せる」

「はい。任せてください!」

最終チェックのために、魔法陣をざっと見回したレイフォンは、魔法杖を顔の前に掲げて集中する。

風も無いのに、レイフォンの緑の髪がふわりと浮き上がり、竜斗たちは突風を受けたように、魔力圧に圧迫された。

魔法杖の魔術回路が過負荷で発光し始める。

レイフォンが、ずっと眼を開いた。
金の瞳に、光彩が走る。

「アクセス!!」

レイフォンが石畳に魔法杖を突くと、
魔法陣の外円を、^{レイ・ライン}双方向に虹色の光が輝き^{はし}駆った。

魔法陣の反対側で合流し、次に内円の魔力線に虹色の光が走る。

中心部に虹色の光が到達すると同時に、

金色の光の柱が立ち昇った。

金色の光を放つ魔法陣の中心部で、

六角形に配置されていた6枚のフェザー貨が、ふわりと浮き上がり、

フェザー貨を六芒星の金色の光が互いを結び合う。

フィィィィィン！！

甲高い音を立てながら、六芒星のフェザー貨の周りを、帯電した光の帯が高速回転し、

六芒星の中心部から、濃密な魔力が溢れ出した。

「フェザー貨——魔力伝導展開。

魔力放出——設定出力で安定。

地脈直結魔法陣——正常起動」

吐息を吐いたレイフォンが、大きく息を吸い込み——、

「魔法陣、連結結合開始します！

アクセス——」

大広間の端を横切っていた淡い光を放つ浄化魔法陣の魔力線が光
り輝き、
レイ・ライン

虹色の光の奔流が、爆発したように解き放たれる。

アンデッド城を跨ぐ浄化魔法陣の魔力線レイ・ラインから、虹色の光の滝が噴出し、天空に聳え立そびった。

魔法陣の中心部のアンデッド城から外円に向け、魔力線レイ・ラインに沿って、虹色の光の粒子が津波のように次々と吹き上がり、

高さ500メートルの壁状に沸き立っていく。

わずか10分で、その虹色の光壁粒子群が、数多の精霊石を配置した外縁部まで辿り着き――、

最初に浄化魔法陣の魔力線レイ・ラインを構成した精霊石から、青白い光の柱が渦を巻いて、天へ駆け昇った。

精霊石が粒子となって、溶け消え――、

同時に、青白い光が、虹色の粒子の壁を呑み込むように、中心部に向かって、青白い光へと染め上げる。

5分で、外縁から中心部のアンデッドの城まで、光壁の粒子が青白い光に変換され、

魔法陣に囲まれた地面が青白い淡い光を放った。

直後――、全ての青白い光の壁が上部から弾け散じ、燐光が舞い散るように消えてゆく。

光壁が完全に散じる瞬間、一瞬、地面で強く発光し、青白い光を放つ魔力線レイ・ラインが、直径20キロの浄化魔法陣を完成させ

た。

レイフォンの宙に浮いていたショートカットの緑髪が元に戻り、
圧されるほどの魔力圧が消える。

「広域拡張浄化魔法陣——正常起動。
魔法陣連結結合——正常稼働。
双魔法陣——安定状態に移行完了。

……………ふう。

偽勇者さん。無事、終わりました……………あら？」
振り向いたレイフォンが、ぐらりと倒れかかり、

「ツと！！」

咄嗟にウィズが抱き止める。

「大丈夫ですか？」

レイさん」

「……はい。ちょっと、疲れました」

「良くやった。内気。」

「ご褒美はツツコミから貰え」

「ええっ!？」

「ぼ、僕ですか？」

レイフォンとウィズは顔を見合わせ、同時に赤くした。

金色の魔法陣の中心で、六芒星6枚のフェザー貨の外周を、光の帯が凄
まじい速度で回転している。

「ねえ。リュウト。」

何、あれ？」

「超伝導体の魔力版」

「……………は？」

「普通、魔法陣ってのは魔力供給が途切れれば、効果が切れる」

「でも、この魔法陣って——」

「ああ、それを可能にしてるのが、あの6枚のフェザー貨だ。」

フェザー^{あれ}貨の六芒星がある限り、この魔法陣は作動し続ける。

そして、この魔法陣と連動させた広域浄化魔法陣もな」

「え……………どうして？」

「俺の元の世界に『超伝導体』と呼ばれる物質がある。

絶対零度^{1273℃}。もしくはその付近まで冷やした超低温下で、水銀や鉛やアルミ、ある種の合金、セラミックスなど、

電気抵抗が0となる物質のことだ。

それと同じように、正三角形に配置したフェザー貨は魔力抵抗値が0となり、『超魔力伝導』物質となる」

「……………は……………はあ……………」

「故に、この正三角形を二つ重ね、六芒星に並べたフェザー貨に魔力を流すと、魔力抵抗値が0になり、常に魔力が流れ続ける。

それが、この『地脈から魔力を汲み上げる魔法陣』を作動させ続ける。

魔法陣の効力を発揮するには、魔力が必要となるが、この『魔力を汲み上げる魔法陣』は、その地脈から汲み上げた魔力で、自らの魔法陣の作動魔力を補充し、
尚且つ、膨大な余剰魔力で、神殿の広域浄化魔法陣に魔力を供給し続けている」

「……え……え……と……」

「起動させた広域浄化魔法陣は、各拠点の精霊石が消費されても、一度組んだ魔力線に一定以上の魔力が流れ続ける限り、
浄化魔法陣は消えることなく、効果を発揮し続ける。」

よって、地脈が尽きない限り、広域浄化魔法陣は浄化魔術を発現し続けることができる」

「……………」

閉口するセラに、

曖昧な笑みを浮かべるレイフォン。

「つまり……そのコインのお陰で、地脈から『魔力を汲み上げる魔法陣』が作動し続けて、

その汲み上げた魔力を使って『広域浄化魔法陣』が、この地を浄化し続けます。

効果時間は、汲み上げる基の地脈の魔力が尽きない限り、ずうつとです。

簡単に言えば、そういうことです」

「ああ！ ……リュウトも初めから、そう説明すれば良いのよ」
「してただろうが」

「どこがっ!!」

未だレイフオンの身体を支えているウィズが、これ幸いと堪能しながら、竜斗に尋ねる。

「偽勇者さん。」

地脈が尽きない限りと言いましたけど、実際にはどれくらいの期間なんですか？」

「この城は、地脈の上に立っているらしい。」

50年魔力を吸い上げたって、地脈は枯れない。……と、この魔法陣の作成を依頼した時、無口^{レンフェイ}っ娘が言ってたっけかな。

まあ、魔王を斃した後は必要に応じて、フィーかメイドさんが調整するだろうよ」

「はー」

セラが纏わり付く虫を振り払うような仕草で、手を振った。

「ねえ。リュウト。」

地脈直結魔法陣

魔法陣から、魔力が溢れて出てるわよ。

……魔力酔いしそうだわ」

「いっけねえ。忘れてた」

竜斗は腰元からナイフを抜き、セラへ手渡す。

「セラ。」

こいつを、その六芒星の中心に刺してきてくれ。
あ、間違っても回転してる光の帯には触るなよ」

「ん。良いけど。」

レイ。金色の魔法陣の線レイ・ラインで、踏んでも良いの」
「構いません。」

一度、起動してしまえば、正常に稼働しているのを示すものでし
かありませんから」

「ふゝゝん」

刃の部分に魔法陣が刻み込まれているナイフを持ったセラは、金
色の光を放つ魔法陣の中心まで歩き、

「せいっ!!」

六芒星の中心の石畳の境目にナイフを突き刺した。

広域浄化魔法陣を作動させても、まだ余り、

魔法陣の中心から溢れ出ている魔力が、
光の帯六芒星の中心に刺された、

刺した対象を金剛ダイヤ・プロテクションする『ダイヤ・プロテクシ
ョン・ナイフ』の柄に吸い込まれ、
刺さった対象を――このアンデッド城を金剛ダイヤ・プロテクシ
ョン護する。

「……リュウト。」

なんか……城全体が薄く発光し始めたんだけど……」
辺りを見回すセラに、竜斗は片目を瞑る。

「備えあれば、憂いなしさ。」

さ、早く出るぞ。

コウたちが来ちまうと面倒だ」

*

アンデッド城の屋上で、ドラの背に乗ったセラが頬を掻いた。
「なんか、今回の作戦って、私、ほとんど働いてないんだけど」

「それを言うなら、俺なんて、魔法陣描いてただけだぞ」

「ははは。僕なんか、毎回、遠くから狙撃してるだけです」

「そ……そんなことはありません！」

セラさんがいたから、大広間まで辿り着けましたし、

ウィズさんがいたから、死霊王を特定できましたし、

偽勇者さんがいたからこそ、この作戦が立てられたんです。

皆さんがいたからこそ、魔法陣は起動したのです！！」

両手を握りしめて、懸命に反論するレイフォンに、

セラが小さく笑う。

「ありがと。レイ」

ドラが4人を背に乗せて、

アンデッド城の屋上から飛び立った。

「さて、大仕事の後で悪いんだが、内気。

最後の仕上げを頼む」

「はい！」

ドラの上で立ち上がったレイフォンは、眼下のアンデッド城へ魔法杖を向けた。

ハード・ロック
「鎖錠……！！」

アンデッド城内の全ての門と扉と窓が、一斉に閉じる。

《ハード・ロック》で、鍵の有る無しに関わらず、《解錠》^{アンロック}以外

では、扉や窓が開けられなくなった。

そして、レイフォンは消費魔力の少ない魔術を放ったせいで、
魔術が暴発し、残りの全魔力が鎖錠ハード・ロックに変換されて、気を失い倒れる。

「ツと!!」

レイフォンを抱き止め、落ちそうになったウィズを、
竜斗が襟首を掴んで引き戻した。

『ダイヤ・プロテクション・ナイフ』によって、城全体がダイヤ
並の硬度と、石造り本来の強度を持ち、
レイフォンの全魔力を使った《鎖錠ハード・ロック》で、城門と全ての扉と窓が
固く閉ざされる。

これで、この城は——広域浄化魔法陣を持続させている魔法陣を
抱え込む、この城は——、

——『開かずの城塞』となった。

「ギャオッ!!!」

突然、ドラが吼える。

「「「!?!」」」

急旋回するドラの真横を、光の渦が突き抜けていった。

*

ぎりぎり、光の渦を回避したドラが北の城門の前に着地すると、
北の門を背に立っているアーサーと、勇者パーティー光一たちが対峙していた。

「あん？ コウたちか」

「偽勇者」

「竜斗」

ドラの背から降りる竜斗たちを見、
光一が眼を細める。

「レイフォンさん、……だったか。
大丈夫なのか？」

「気絶してるだけだ。」

アンデッドで、筋肉。死霊王は？」

「ウヌ。浄化魔法陣が発動すると同時に、逃げだそうとしたのでな。
プロテクション・バリア防護結界で閉じ込めて、戦っておった」

「ほう」

「だが、途中でプロテクション・バリア魔術効果が時間切れで消えおった」
「へ？」

「上空へ逃げられたところを、
その勇者が、聖剣の光の渦で消し飛ばしたというわけだ」

竜斗は光一に顔を向けた。

「消し飛ばした？」

コウ。お前、幽霊なんて見えたのか？」

「いや。フィーが掛けてくれたスピリチュアル・サイト《霊視》のおかげだ」

半眼で、黒髪を掻く竜斗。

「『マスター・ファイファイえもん』は、相変わらず便利だよなあ」

「……竜斗。」

俺の仲間のことを、便利だなんて言うな」

「へいへい」

金髪緑瞳の^{聖騎士}アリアが一步、前へ進み出る。

「それで、偽勇者殿はアンデッド城で何をしていたのですか？」

「見りゃ、わかるだろ。」

浄化魔法陣を起動させてただけだ」

「ふん」

「……こ、これを……ですか……」

鼻で相槌を打つ光一と、

直径20キロの広域浄化魔法陣を見渡し、言葉を無くすアリア。

「これで、ちっとは休息できるだろ」

「休息？」

「ふむ。なるほどのう。」

この地は敵の守りの要であると同時に、我らにとっても守りの要じゃ。

魔王軍が大軍で王都を攻撃するには、この平地を通らなければならん。

他のルートは、山岳地帯じゃしな。

じゃが、この地に浄化魔法陣が展開しておると、

闇の者は通れんし、魔の物は力を減衰するじやろう。

正に、『最強の防御壁』じゃ」

「その通り。」

宰相の作った運河だけじゃ、ちっと心許無かったんでな。

これで、本格的に対魔王戦に取り組める」

アリアが金の柳眉をひそめた。

「ですが、こんな大掛かりな魔法陣だと、すぐに効果が切れませんか？」

「いんや。それを切れないように、金貨6百枚分（6千万円）費やしたんだ。」

2ヶ月程度は大丈夫だろ」

「この規模を2ヶ月って……いったい、どれだけの精霊石を燃料代わりに用意したのですか？」

「んゝ。まあな」

竜斗に顔を近づけ、小声で囁きかけるフィー。

「リユート。フェザー貨を使こうたな」

「ああ。あと、50年は平気で保つと思うぞ。」

城に《鎖錠》を内気に掛けさせたし、

ハード・ロック

魔力が回復してから、もう一度、城全体に《保護》プロテクションを施術させる

つもりだからな」

「それなら、我とメイド以外、誰も入れぬな」

「そういうこと。」

魔王を斃すまで、入るなよ」

「当然じゃ」

竜斗たちを苛立たしげに眺めていた青髪青瞳のシェラが、ポン！

と手を打ち、アリエルに命令する。

「アリエル。」

わたくしの声を戦場全体に伝わるように拡散させなさい」

「は〜い」

シェラの声を、アリエルが風の精霊に乗せて、戦場全域に響き渡らせる。

『わたくしは、水の神殿代表、シェラ・エスティン・ウインデネル・フェリアースです。』

今回の宿敵、死霊王^{アンデッド}は、

我が勇者、コウイチ・ヤナギ様が完全に滅ぼしましたわ。

もう、安心して頂いて結構ですわ。

コウイチ様の尽力で、この地は、我々が取り戻しました。

この戦い、わたくしたちの勝ちですわ!!!』

戦場が一瞬、沈黙し――、

次の瞬間、

兵士たちの歓声が爆発したように戦場全体に轟いた。

発動した浄化魔法陣によって、一斉に倒れ伏したゾンビを警戒し

ただの死体に戻った

ていた兵士たちが、思い思いに歓喜の声を叫んでいる。

空気が痺れるような、全兵士の歓呼の喚声を受け、

満足そうに頷いたシェラは振り返って、竜斗を見上げた。

「ふふん。」

今回は、わたくしたちの勝ちですわ！

いっつもいっつも、最後の美味しいところばかり、掠め取られて
ましたが、

これからは、もうそんなことありえせんわ」

クスツと微笑むシエラ。

「――ご愁傷様」

「あっそ」

「さっ。コウイチ様、参りましょう。」

皆が、コウイチ様を待っておりますわ」

「わかった。」

じゃ、また後でな。竜斗」

ペガサス
天馬に跨った光一は、アリアたちと共に戦場の中心へ向かった。

「ムウ。すまぬ。偽勇者。」

トドメは勇者に持って行かれた」

小さく頭を下げるアーサーの胸板を、拳で小突く竜斗。

「謝る必要はねえよ。筋肉。」

お前は、何もミスしちやいないしな。

それに、むしろ好都合だ。

前回と今回、派手に動き過ぎたからな。

これで、ほとんどの目がコウに向くだろ」

戦場の中心で、勇者^{歓声}コールを受け、
馬上の光一が天高く、右拳を振り上げる。

「「「「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」」」」

足踏みが地鳴りのように鳴り響き、

耳をつんざくような歓声が戦場全体に響き渡り、
さらに大きく歓呼される勇者コールを聞きながら、

竜斗が眉間に皺を寄せて、腕を組んだ。

「やつらも、この程度で目を眩ませられれば楽なんだがな……」

＊

061 偽勇者は えむひ。ー か、 かいふくした！

夏も終わりに近づく、涼風が吹き始めていた。

蒼穹に、白雲が天高く流れる。

竜斗とセラは、木漏れ日の差す林道を二人っきりで歩いていた。

未だに慣れないのか、セラは林道の光景よりも、繋がれた手の方を気にしている。

死霊王を斃し、アンデッド城を中心に広域浄化魔法陣を張ったことによって、

一段落ついたと判断した竜斗とセラは、以前に約束したデートをしていた。

空色の上着に、黒のズボンというラフな格好の竜斗は、腰の後ろのホルスターに大型ナイフを差している。

セラの方はベルトに双剣を佩^はいているものの、布目に沿って流線模様に橙色が濃淡に織り込まれた、着物のように前を打ち合わせる上着に、

ウエストを赤の幅広のベルトで留め、

藍色の巻きスカートは外^上と中^下の二段のデザイン。

首元に、レースのあしらわれた黒布のチョーカー。

左手首に金のブレスレット。

ヒール型のサンダル^{ストラップ}の足首の留め金には、紫の小さな宝石^{アメジスト}が輝く。

デートモード
完全武装のセラであった。

午前中は全て、セラの買い物に費やした。

服屋、雑貨屋、アクセサリーショップを何十件回ったか、荷物持ちに徹してた竜斗は覚えていなかった。

一端、セラの寮に荷物^{戦利品}を置き、

レイフォンお勧めの定食屋で昼食を取った後、武器屋で新作ナイフをチェックしてから、この林道へ来ていた。

尚、武器屋では、

『書類仕事中の暗殺者にも即対応!!』の宣伝文句に釣られて、

『ペン付きナイフ』なる物を買おうとした竜斗が、

セラに叩^{はた}かれて止められたのは、余談である。

林道を行き交う人は少ない。

さらに、林道を外れて少し奥に分け入れれば、人目のつかない場所など幾らでもある。

故に、ここは王都で定番のデートコースだった。

偶に人を見かけても、カップルばかりで、

そんな彼らは二人の世界に入っており、周りのことなど見向きもしない。

同じように見られているのかと思うと、頬が熱くなるセラだった。

沈黙に耐えきれなくなったセラが、上機嫌な竜斗に話しかける。

「そ、そういえば、あの何たらっていう勇者。

男爵の称号を授かったみたいね」

「あん？

ああ、コウか。

ガイアレイズ討伐と、死霊王^{アンデッド}を斃した功績らしいな。

確か、『コウイチ・ペガス・ヤナギ』になったんだっけ。

あいつ、元の世界に帰る気ねえのか？

まあ。それなら、それでもいいけど」

「そういえば、ガイアレイズで思い出したんだけど、
ガイアレイズ
竜退治の報酬は？」

「あゝ。実は、まだ貰ってない」

「ええ〜！？」

「いや、俺が決めかねていてな……。

第一候補は、運河の船着き場の独占権かな？」

「お金じゃなくて？」

「王宮にある金なんて、高が知れてるだろ。

なら、権力を持っている奴から権利を貰い、

それを金を持っていて、権利の欲しがっているところに売る」

「……というと？」

「宰相が防衛の為に掘った運河は、実際に荷物の運搬路になる。

運河は直接王都に接続してないが、海や上流から荷物を運ぶには
圧倒的に便利になるからな。

物が動けば金も動く。

運河と、王都からの公道が交わる村の船着き場の独占権を、
金を持っている商工ギルドに高値で売る。

商工ギルドは、確実な商機のある物件には幾らでも金を積むだらうよ。

王宮から報酬として貰う金貨がバカらしくなるくらいのお金をね」

「リュウト！」

「あん？」

「それいい！！」

それにしましょう！！」

「おまえもそう思うか？」

「ええ！！」

私、お金を貰うことより、お金が増える話の方が好き！！
儲かる話って大好き！！」

「そういうところは、商人の血筋だよなあ。」

セラのリクエストもあることだし、それにするか」

「うん！！」

両手を握って、返事をするセラを見、
小さく笑う竜斗。

セラが上目遣いで睨んだ。

「何よ？」

「いやあ。セラが午前中に、

『お洒落に使うお金は女の子にとって、軍資金と同じ意味。

お洒落は女の子同士の戦争なんだから』……って、

力説してたのを思い出してなあ」

「や、やめてよ」

「実際に、あの時、買った服は似合ってたしな。

今度、あの服を着たセラを見てみたい。

誰よりも真っ先に見たいから、服を着た時は、俺を呼んでくれな

いか？」

心底、楽しそうな竜斗の笑みに、
頬を紅く染めて俯くセラ。

「……………え……………う……………うん」

セラと手を繋ぎ、
しばらく、ゆっくりと歩いていた竜斗が突然、立ち止まった。

「あゝ。」

セラ」

「な、ななな何？」

「誰も居ないな」

「え？」

……………う……………うん……………居ないけど……………」

「キスしよう」

「ひゃうっ!!」

真正面に立った竜斗がセラを見下ろす。

「嫌か？」

「え……………えっと……………えっと……………い、イヤじゃない」
視線を逸らし、赤い顔を俯かせたセラが小さくボソボソと返した。

夏の終わりの風が、セラの髪を揺らす。

竜斗が、赤に近い金色の長髪を梳くと、
セラがビクツと身体を震わせた。

「セラ」

「……………リュウト」

セラが潤んだ緑瞳で、竜斗を見上げる。

竜斗が屈み、セラが眼を瞑った。

二人の唇が近づき――、

重なる寸前で、二人はピタリと動きを止める。

セラが眼を開き、

至近距離で、互いの瞳を見つめ合った二人は――、

「もっ、いやっ!!」

セラが叫び、

吐息を吐いた竜斗が黒髪を掻いた。

竜斗から離れたセラが涙目で、周りに怒鳴りつける。

「出てきなさい!!」

林道の陰から飛び出した5人の黒尽くめの男たちが、竜斗とセラを取り囲んだ。

「デバカメにしちゃ、物騒だな」

据わった眼のセラが、デート中でも佩^はいていた双剣を抜刀する。
「リュウト。こいつら、始末するわよ！」

竜斗は腰から大型ナイフを引き抜いた。

「構わん。人気の無い所とはいえ、真っ昼間から堂々と姿を現す暗殺者など、どうせ三流だ。」

重要な情報なんか持ってないだろうよ!!」

「了解ッ!!!」

怒り心頭に発したセラが振った氷の魔剣から、多数の氷槍が飛ぶ。

暗殺者が氷の槍を横に跳んで避けた瞬間、

《リュケン流断斬》

一瞬で接近したセラが首を刎ねた。

「一人目!!!」

動揺する暗殺者たちに、リーダー格の暗殺者^{黒尽くめの男}が一喝する。

「狼狽えるな。」

女の方は足止めする。

男の方を確実に殺せ!!!」

リーダー格の暗殺者を含めた2人がセラの前に立ち塞がり、残りの2人が竜斗へ向かった。

「リュウト!!」

セラの切羽詰まった声に、

竜斗と相對する暗殺者の眼がニイッと歪み笑む。

嗤った暗殺者が風切り音を立てて、斜めに斬り下ろしたナイフを、屈んで躲した竜斗が、大きく跳び後退る。

直後、竜斗の居た場所を、横からナイフが薙いだ。

刺突されたナイフを左半身になって避けた竜斗は、もう一人の暗殺者の振ったナイフを、大型ナイフで弾く。

竜斗の太股を狙ってくる、緑色の液体で滑ぬめっているナイフを、半円を描くような足捌きで躲し、上半身を反らした直後、顔の上方をナイフが通過した。

暗殺者の膝を蹴り飛ばし、竜斗は距離を取る。

苛立たしげに睨む暗殺者に、

竜斗は唇の片端を吊り上げた。

「ハッ！ 遅えよ！」

この程度、避けられないようじゃ、疾とうの昔に、セラの手で、あの世逝きだっ！」

「こんな時に、何言ってるのよ!!」

セラのツツコミに、
竜斗が魂の叫びを返す。

「しかし、事実だ!!!」

シュツ!

暗殺者は無言で、ナイフを投擲した。

飛来したナイフを左に避けた竜斗へ、
もう一人の暗殺者が毒を塗ったナイフを右手に、タックルをかける。

タイミングを計った竜斗は、
体勢を低くめて突進する暗殺者の顎に、右膝を蹴り当てた。

ガツツ!

尻餅をついた暗殺者が後方に一回転して立ち上がり、
隣の暗殺者が新しいナイフを抜く。

「おい」

大型ナイフを構えた竜斗が暗殺者に呼びかけた。

無言の暗殺者たちに、竜斗が唇の右端を上げる。

「タイムオーバーだ」

《リュケン流断斬》

背後からの一撃で、暗殺者の首が刎ね跳ぶ。

慌てて後ろを振り向いた隣の暗殺者を、

《リュケン流二重撃》

セラは袈裟斬りに斬り伏せた。

血糊を振り払ったセラは双剣を鞘に納める。

「んもう！」

せっかくのデートだったのに！！」

憤慨するセラに、

苦笑を浮かべる竜斗。

「ごりゃ、また、厄介事が降り懸かってきそうだなあ」

「……………やめてよ」

細眉をしかめたセラは心底、嫌そうに答えた。

*

0621 偽勇者のまえに しんかんきし か、あらわれた。

王宮の広間に、竜斗たち5人が呼び出されていた。
呼びつけた相手は、神殿と貴族の連名である。

「なんで、私たち呼び出されたの？」

「何となく、予想はつくがな」

「なに？」

「やられたら、やり返すのは、俺たちだけじゃないってことだ」
「え？」

魔槍を肩に担ぎ、竜斗は前を見据えた。

そこには、偉丈夫な神官騎士と、

大將軍のレッツと、

金髪縦ロールドリルの女宮廷騎士が壇上に立っている。

「で、チヨビヒゲ狸。大將軍

俺たちに何の用だ」

「相変わらず、口の利き方を知らん小僧だな」

「いんや。相手に合わせて最適な言葉使いをしてるだけさ」

フンツと鼻を鳴らした大將軍レッツが肥満腹を揺らした。
「お前たちを呼び出したのは、他でもない。」

お前たちのメンバーの交替が決まったからだ。

そっちの神官騎士見習いは、この神官騎士殿と、
そっちの宮廷騎士は、宮廷騎士シヤクティ嬢とな。

これは神殿と貴族が話し合った結果だ。
お前らに、拒否権は無い！」

「又？」

「は？」

「何の冗談ですか？」

「……そ……そんなことって……」

「ほう。……そう来たか」

セラが小声で、竜斗に囁く。

「どういふことかしら？」

「簡単だ。派閥の影響力が、俺たちに届かないからだよ。

お前は貴族騎士の間じゃ、爪弾きにあつてたし、

筋肉は言わずもがな。

二人とも組織に忠誠心がないから、派閥の意向を反映できないの
さ」

壇上を見上げた竜斗が黒瞳を鋭く細めた。

「だが……、ただ一つ、気に食わないところがあるけどな」

「何、言ってるのよ！

どこもかしこも、気に食わないところだらけじゃない！！」

「……………違う」

金髪青瞳の偉丈夫な神官騎士が前に進み出た。

「返事は出たか。アーサー」

「……ヌウ」

白い鎧を着込み、長い金髪を無造作に束ねて背中の位置で縛っている神官騎士の呼びかけ方に、

竜斗がアーサーを見る。

「知り合いか？」

「兄者だ」

「兄？」

「ウヌ」

「リュウト・カミシロだったな。

紹介が遅れた。

私の名は、ランスロット・レイガスタ。

弟が世話になっている」

神官騎士

小さく頭を下げるランスロットに、

竜斗が戸惑ったように眼を瞬かせた。

「あ……ああ」

「アーサー。いい加減、神殿に戻ってこい」

「兄者よ。ワシの答えは変わらん。

ワシは偽勇者の従者だ」

「アーサー。この数ヶ月の功績から、お前は神官騎士へ昇格が決まった。」

だが、そこに、神官が条件をつけてきたのだ。

それが『神殿に戻ること』だ。

お前も神官騎士になるために、頑張ってきたのだろう」

「ムウ。確かに、神官騎士になろうと思っておった。

だが、神官騎士になるよりも、面白いものを見つけてしまったのだ。

そして、神官騎士と同じくらい価値のある居場所もな」

一度、後ろを振り向いてから、
ランスロットに視線を戻すアーサー。

「ワシの筋肉を認めてくれ、
ワシの有用性を示してくれる^{偽勇者パーティー}居場所を。

この数ヶ月の功績は、ワシの筋力^{ちから}を引き出せる偽勇者が居たからこそだ。

だから、今のままで良い」

「戻る気は無いのだな」

「ウム。ない！」

「……………そうか」

きっぱりと否定したアーサーに、ランスロットが眼を閉じる。

アーサーは、じっと^兄ランスロットの姿を見つめた。

広間から音が消え、

無音の圧迫感が空間を占める。

皆の視線が集中する中、
暫し、眼を瞑っていたランスロットが瞼を開き、
深い青色の瞳をアーサーに向けた。

「良いだろう。」

アーサー。お前は、お前の道を進むといい。
それも、精霊の導きだろう」

「ウヌ。兄者よ、済まない」

「構わん。」

心配するのが兄の務めだ。
父上には私が話しておこう。
だが、これだけは覚えておいてくれ。

お前、一人の居場所くらい、いつでも家族の力で作ってやる!!
戻って来なくなったら、いつでも戻ってこい」

拳を突き出すランスロットに、アーサーも拳を突き出す。

「兄者よ。心配されるな。
筋肉の尽きぬ限り、ワシは偽勇者の従者よ!」

その姿に、幼い頃の姿が重なったのか、ふっと笑みを零すランスロット。

「大將軍レッツ殿。私の話は終わりだ」

「なっ!？」

上司命令で、強制的に戻せば良いではないか!！」

「私は、先代巫女アラリエル様の『精霊の議』で、

意にそぐわない従者を強制されてないかと心配しただけだ。
弟が自分の意志で、その場に居るのならば、

家族である私にできることは応援してやることくらいだ。
では、私はこれで失礼する」

後ろで縛った金色の長髪を翻し、去って行くランスロット。

「あゝ。筋肉。

正直、神殿関係者というだけで、お前の兄さんを見くびってた。

……………すまん」

戻ってきたアーサーに、竜斗が謝った。

「ウヌ。兄者は、今も昔も心配性だからな。

幼い頃のイメージが強すぎるのだ」

「幼い頃?」

疑問の視線を向けるウィズに、腕を組んで頷くアーサー。
「ウム。子供の頃のワシは、筋肉の無い身体だったからな。

兄者も、それはそれは心配だっただろう」

「……多分、違う理由だと思います」

「ヌッ？」

「そういえば……、幼い頃は寝込みがちだったな」

「間違いなく、そっちの理由です！」

「しかし！　今や、ワシは強き筋肉を得た。

見よ！　この筋肉！！」

アーサーは、一右足を一步前に踏み出し、鳩尾の位置で右手首を左手で掴み、胸筋と腕に力を込める《サイドチェスト》。

白い歯をキラメかせるアーサーへ、

ウィズがビシッと指をさした。

「それこそが、お兄さんの、今の心配の元凶です！！」

「ヌウッ！？」

「筋肉の方は良いとして……」

竜斗は、視線の火花を散らしてるセラと宮廷騎士シャクティを眺める。

「貴族連中は、俺の予想通りのようだな」

金髪縦ドリルロールの女騎士シャクティを、

セラが苛立たしげに睨みつけた。

「シャクティ。

なんで、今更、あんたが出てくんのよ」

「あなたが、御役御免だからよ。

成り上がり貴族風情がちょっと成果を上げたからって、好い気になってんじゃないわよ」

「そう言えば、あんたは何も成果を上げてないものね。

ワイバーン襲来でも、死霊王戦^{アンデッド}でも、

後ろでプルプル震えてただけじゃない」

「居たくて、後方に居たわけじゃないわ。

王宮を守護しろと命令だったからよ！」

「ああ。あんただけじゃなくて、宮廷騎士全部隊が安全な所でプルプル震えてたわけね。

宮廷騎士から、『宮廷スライム』に改名すれば？」

「あなたたちこそ、偽勇者ですら勿体ないわ。

『盗賊団』とでも変更しなさいな。

あなたの彼氏も裏でこそそするしか能のない、貧相な盗賊なんだから、お似合いよ」

金髪を指に巻くシャクティを、

鼻で嗤うセラ。

「あんたの婚約者の、身の程知らずの勘違いバカよりも、遙かにマシよ。

そういや、昔、ナンパされたっけ。

肘鉄、喰らわせてやったけどね」

「宮廷騎士団長として、可哀想だから声をかけただけよ！！」

「シャクティ。あんた、本当に、そう思ってるの？」

本当にそう思ってたなら、あんた、すっごく可哀想な子よ」

セラの見下した目線に、

ギリッと齒を軋らせたシャクティが、金切り声を上げる。

「勝負よ！！」

あなたのその鼻柱、へし折ってあげるわ！！」

「勝負？」

暗殺者を差し向けておいて、よくも言えたものね」

「暗殺者？ 何のことかしら？」

もしかして、自信がないの？

成り上がり貴族さん」

「自信？ シャクテイ。」

そういうのは、勝ってる方が言うから様になるのよ。

万年、負け続けているあんたが言っても、僻みにしか聞こえないわ」

片目を眇めるセラ。

「あら、単なる僻みだったわね」

「グ、グダグダ言わず、勝負なさい！！」

「ええ、いい——」

「やめろ。セラ。」

時間の無駄だ」

止めた竜斗へ、セラは胡乱げな視線を向けた。

「なんでよ？」

「そのドリルシャクテイが負けたら、今度は別の奴を出して来るだろうさ。

懲りずに何度もな。

そして、毒やら闇討ちやら、様々な手を使い、まぐれでも『1回』
勝つ。

それだけで、お前との交換を迫るのさ。

だから、時間の無駄だ」

前に進み出た竜斗が、大將軍レッツを見据えた。

「俺は、セラを手放すことはない。」

そもそも、交渉するつもりさえない」

息を吸い込んだ竜斗は、レッツへ一喝する。

「失せろ!!」

レッツが憎々しげに厚い唇を歪めた。

「き……貴様。誰に暴言を吐いたか、わかっているのか？」

「お前らこそ、『俺』に喧嘩を売ってるのを、自覚してるのか？」

「コワッパが!!」

「へえ。『俺たち』に小童こわっぱねえ。勇気のあることだ。
その言葉、後悔してもらおう」

「貴様こそな!!」

＊

063 偽勇者は めいほ、を てにいれた!

「ねえ。竜斗」

「あん？」

「商工ギルドに何の用があるの？」

「お前だってあの場に居ただろう？」

貴族派が、商工ギルドに喧嘩を売って来たからだよ」

「は？」

「^{貴族}大將軍が、商工派の窓口である『^{商工派}俺』に、

商工ギルドに所属している『^{商工ギルド}俺たち』に、喧嘩を売って来たんだ。

お望み通り、値引きせずに買って、叩き潰し、骨の髄まで搾り取って、地獄の底で後悔させてやるさ」

「あ、……あんなって」

商工ギルドの応接室のソファで、セラは口許をヒクつかせた。

商工ギルドに来ていた竜斗とセラの二人を、

商人ギルド長のカルクが見つめる。

「事情は理解しましたが、^{商工ギルド}我々に手助けできることなど無いように
思えるのですか？」

「そうよ。」

商工ギルドに何ができるのよ？」

「色々、できるさ。」

ギルド長。

聞いた話だが、商工ギルドは貴族相手に貸金業をしたよな？」

「ほう。」

よく、ご存じですね」

「え？　でも、金貸ギルドってあったでしょ。」

何で、商工ギルドが？」

「ランセル嬢。」

それには、三つの理由がありましたね。

第一に、金貸ギルドは平民のための金貸ギルドで、そこから金を借りるのは貴族のプライドが許さないこと。

第二に、用立てる金額が大きすぎて、金貸ギルドが二の足を踏んでいること。

第三に、戦時中に貴族に金を貸しても必ず赤字になること。

三つの理由から、うちに話が舞い込んできております」

「あん？」

必ず、赤字になる？」

片目を眇める竜斗に、セラが嘆息する。

「戦時免責ね」

「仰る通りです。」

国王命令で利子の免責や、借金が減額されてしまうのです。それを当て込んで、多額の金額を借りる貴族もおります。

ですが、この国で商売をするためには、貸さないという選択肢は取れないのです。

逆に言えば、非常時下で金や物資を用立てる契約を交わしているからこそ、

この国で、商工ギルドの独自体制を維持していただけるのです」

後頭部で手を組んだ竜斗は、ソファの背凭れに寄りかかった。

「ハン。金と面子が絡むものは、実に面倒臭いねえ。」

ま、そこが面白いんだけどな。

ギルド長。悪いが、借金をしてる貴族の名簿を見せてくれないか？」

「他言無用ですよ」

「当たり前だ」

借金の貸付簿を捲る竜斗の横から、セラが覗き込む。

「わかった！ 大將軍を借金で脅すのね」

「そう簡単にはいかねえよ。」

あのチヨビヒゲ狸。権力には執着してるが、それ以外には、それほど拘りがねえんだよ。

必要以上に飾り立てることがないから当然、借金もない」
「んっ」

「そうそう。カミシロ殿。

一点、報告があります」

「あん？」

「神殿から精霊石代を全額回収致しました」

帳簿のページを捲る手を止めた竜斗が顔を上げた。

「捏ねただろう。神殿のやつら」

「ええ。それは、もう。」

不敬だの。詐欺だの。神殿を敵に回すのかだの。精霊の呪いがあ
るだの」

「精霊って呪うのか？」

「いいえ。そんな話ほんと聞いたことはありません」
「だろうな。」

で？」

「余りにも捏ねるので、

『では、仕方ありません。

宰相殿に、この証文を買って頂くことにしましょう』

と、オハナシギルド長しましたら、それはもう大変な慌てようでしたよ」

口許を歪ませるカルクに、

竜斗は笑い出す。

「はははははは。

そりゃ、そうだ。

そんな証文、宰相に渡ってみろ。

絶対に金を払うだけじゃ済まなくなる。

神殿の人事権ぐらい乗っ取られるだろうな」

「神官もそう考えたのでしょね。

あっさり手の平を返して、次に金額交渉にきました。

せめて、7割にしろと」

「負けてやったのか？」

「まさか。

そのような義理はありません」

「だが、宰相に売るにしても、7割が良いところだろ」

「はい。彼らもその点を突いて来ましたので、

『宰相殿に7割、ルキア姫に3割で協同購入して頂こうかと思つております』

と、セツト...くしましたら、

銅貨1枚値引きすることなく、全額払って頂けました」

喉の奥で嗤う竜斗。

「ククク。姫さんと宰相がそんな債権を握ってみろ。

今ある神殿の特権が、あらかた無くなるだろうよ」

「ええ。」

ですから、神殿も良い取引をしたと思いますよ。
何せ、お金だけで済んだのですから」

「良い商売をした後は、実に気持ち良いな」

「いやいや。まったくです。」

お客様が得をされ、我々にも少々の利益がある。

これこそ、商人名利に尽きるというものです」

「さすが、商人の鏡だな。ギルド長」

「いえいえ。私など、まだ道^{なか}半ばですよ」

高らかに笑い合う竜斗とカルクに、
半眼のセラがツツコム。

「……この悪党ども」

「失礼な。」

ただの偽勇者だよ」

「そうですとも。」

しがない商人に、人聞きの悪い」

帳簿を全て捲り終わった竜斗が、あるページを広げ、テーブルに
置いた。

「ギルド長。」

俺たちが、借金回収の道筋を作ろう」

「カミシロ殿が……ですか？」

「ああ。ちつとは、ギルドの仕事もやっとなかないとな」

「嘘つき。」

自分のためでしょ」

「セラ。建前と大義名分は重要じゃないが、大事だぞ。」

なあ、ギルド長」

双眸を細める竜斗に、

ギルド長
カルクが口許を微かに緩める。

竜斗が開いたページにある一人の名前を指さした。

「この貴族は、借金に借金を重ねている。」

追加融資の理由が、勇者のドラゴン退治の祝賀パーティーを開くため。

こいつは踏み倒す気、満々だな」

「ですが、無理矢理取り立てると、商工ギルドの信用問題に関わってきます」

「大々的にやると貴族派が集団で抵抗するからな。」

対処するのは、こいつら上位6名だけだ。

貴族派が5名。日和見の中立が1名。

その貴族派の内、1名は侯爵。2名は伯爵。

上手くいくかもな」

セラが眼を瞬かせる。

「え？」

全額、回収できるの？」

「いんや。」

戦時免責が存在している時点で、黒字は無理だ。

あとは、赤字幅を下げることでくらいだな」

「できるのですか？」

ギルド長
カルクの猜疑の視線に、
眼を歪ませて嗤う竜斗。

「ギルド長。」

お前の前に居るのは誰だ？

奇道も、邪道も、正道も、道無き道も扱う、『偽』勇者だぞ」

＊

「姫さん」

王宮の通路で、竜斗たちがルキア姫を呼び止めた。

「偽勇者よ。」

私を、そんなに気安く呼び止めるのは、おぬしとフィーだけじゃぞ」

「今更だろうに」

「ふむ。確かに今更じゃな。」

貴族と神殿の話は聞いておるぞ。

おぬしも忙しい男じゃな」

「まったくだ。」

デートする暇もないぜ」

「ふん。そこは、如何に時間を作り出せるかが、
男の甲斐性の見せどころじゃろうが」

「へいへい」

ルキアの隣にいる紫髪金瞳のメイドが小首を傾げる。

「それで、リュウト様。」

今日は、どのような御用でしょうか？」

「ああ。この前の『ガイアレイズ討伐』の報酬が決まったんでな」
「ほう。なんじゃ？」

「戦時免責の凍結」

「無理じゃ」

ルキアは言下に切り捨てた。

「だろうな」

「わかっておるなら、言うでない」

「そうよね。」

そんな命令出されたら、全貴族が反乱を起こすわよ」

腕を組んだセラが二度、頷く。

「てな訳で、第二案。」

借金免除か減額の総額が、1000金貨（1億円）以上の貴族のみ、

戦時免責は『条件付き』となる。

その条件とは、『宰相と産業大臣、財務大臣の三人の許可を必要とする』こと。

この政策が、ガイアレイズ討伐の『報酬』だ」

「ふむ。1000金貨（1億円）以上は、宰相たちに許可のう」

「帳簿上では11人ほどだ。」

だが、その内、1000金貨（1億円）に近い者は、1000金貨以下になるように血縁の貴族が肩代わりするだろうさ。

だが、借り過ぎていて、どうにもこうにもならないのが6人前後。こいつらは、商工ギルドとして、きつちりと片かたを付ける」

「……ふむ。良からう。

戦時免責を当てにして、多額の金を借りることは問題になっておつたしの。

抑止力見せしめとしては十分じゃろ」

「では、手配いたします」

「報酬なのに、全くお金が入ってこなくなっちゃったわね」

去って行く二人の背を見ながら、ポツリと呟いたセラに、竜斗は黒髪を掻いた。

「今は守りの時だよ。

攻められてるのに見なかったことにして、目先の楽観的な予想に飛びついて、勝手に安心して、完全に追い詰められてから、

『運が悪かった』とか『社会情勢が悪かった』と愚痴るのは、無能の証だよ。

見なかったことにしたって、攻められてる事実はなくならない。攻めどころで攻めて、守りどころで守れなきゃ、そりゃ、負けるだろうよ」

*

064 偽勇者のまえに ししゃく か、あらわれた。

「旦那様」

「なんだ？」

イブニングスーツを着込んだ男が鏡の前で己の姿を確認していた。

「商工ギルドの方が、いらっしゃっておりますが……」

ピクツと身体を震わせた男は速足に玄関フロアに向かいながら、
メイドに吐き捨てる。

「居ないと言って、追い返せ！」

「あつ、そちらには……」

玄関口へ速足に歩いていた男が、ピタリと足を止めた。

「これはこれは、子爵様。

お出迎え、恐縮です。

商工ギルドの者だ」

玄関の扉に背を預け、簡易鎧を纏った長身痩躯で黒瞳黒髪の男が、
ニヤリと口許を歪める。

その隣には、吊り目気味で緑の瞳の、宮廷騎士の少女が立っていた。

光の当たる箇所は金色に、影の部分では赤色に見える長髪を細い指で梳く。

その清華な美貌と、耳の僅かな尖り具合から、人の中に交わり消えたエルフの一部族に連なる『オル』の名のミドルネームを持つ貴族のように見えた。

子爵が振り返ると、メイドが何度も頭を下げる。

「も、申し訳ございません。

応接室に、ご案内しようとしたのですが、扉の前から動かれず……」

子爵がメイドへ怒鳴る寸前、

竜斗が扉から背を離した。

「さて、子爵様よ。

貴族ならば知っていて当然だと思うが、

借金が1000金貨（1億円）以上の場合、

免責条件に、宰相たちの許可が必要になったことはわかってるよな？」

「あ、当たり前だ」

「そいつは、重畳。

では、利子分だけでも払って貰おうか」

「後にしろ！

私は忙しい！！」

怒鳴り散らす子爵に、

竜斗が首を振る。

「おやおや。

さすがに、パーティー会場まで追って行くのはダルイんだが……仕方ねえか」

「なん……だと？」

パーティー会場まで、取り立てに来るつもりか!？」

「勿論。」

付き纏いは、借金取り立ての基本だろう」

「貴様っ！」

私の面子を潰す気か!？」

「だが、金を借りたのは、貴方だろう」

「……………何が望みだ？」

ギリギリと歯を軋らせた子爵が、漏らすように声を発した。

「改めて問う必要なんか無いだろう。」

金だよ。

利子分だけでも払って貰おうか」

心底、楽しそうに追い込む竜斗。
桐喝する

「……………わかった。」

5金貨(50万円)、貴様に払おう。

だから、取り立てを1ヶ月後に延期するんだ」

「おいおい。利子分には、到底足りない金だぞ」

「だから、貴様に払うと言っている!!」

「ははは。」

なんで、より多くの金が取れる権利を、

そんな端金で手放さなきゃならないんだ」

「誰も、手放せとは言っていない!!」

「俺が、その金を受け取ったら、公の場に強請^{ゆす}られたと、訴えるんだろう。」

そして、借金をチャラにさせる。

強請^{ゆすり}は犯罪だが、借金自体は罪でも犯罪でもないからな。多少の遅れは、貴族の特権で何とでもなる」

頬をヒクつかせた子爵が吐き捨てる。

「……………な、無いものは払えないぞ」

「おやおや、『資産』は結構ありそうじゃないか」
屋敷を見回す竜斗に、詰め寄る子爵。

「貴様！」

怒声を流すように、竜斗は肩を竦めた。

「まあ。金で解決できれば、こちらもそれに越したことはない」

「その金が無いと言ってるではないか！」

「そうだ。あんたは持っていない。」

だが、あんたは貴族だよな？」

「それがどうした？」

「俺は平民だから、よくわからんが……、

貴族ってのは血の結び付きを大事にしているようだな」

「当たり前だ。それこそが、貴族だ。」

功績を上げて貴族になる。別に、それは否定せん。

しかし、有事の際に、誰よりも国王に忠誠を誓い、王国の為に動けるのが、

我ら血脈によって結ばれた貴族だ」

「ほう。」

じゃあ、あんたのピンチに、その血族は何で力を貸してくれない

んだ？」

「そ、それは……」

左手を腰に置き、竜斗は右手を振る。

「いやいや。責めてるわけじゃないんだよ。

単純な疑問なんだ。

あんたは今まで、貴族として色々と役目を果たしてきた。

そう。貴族のトップからの命令をね。

違うかい？」

「……………そうだが」

竜斗は子爵の顔の前に、人差し指を立てた。

「だからこそ、疑問なんだよ。

あんたは貴族連のトップに――、大將軍に、十分な便宜を図ってきた。

金を融通し、兵力を出し、時には優秀な人材を渡した。

渡した中には、確保しておいた美女もいたんじゃないか？

政治では手間のかかることもしたし、

人に恨まれながらも、大將軍の希望に沿った主張を通したことも

あるんじゃないか？

それは、なんでだ。

こういう、危機に陥った時のためじゃないのか？」

パンと手を打ち鳴らした竜斗が腕を大きく開く。

「なら、俺たちに借金を返すように、

今までの恩を返して貰ったって、それは当然のことだと思うけどね。

なあ、子爵さん。あんたはどう思う？」

「どうって……………」

困惑する子爵に、

竜斗が同情するような沈痛な面持ちで首を振った。

「いやいや。借金の中には、大將軍の為に使った金もあったはずだ。

なら、こういう危機の時に役に立つのが、

トップとしての務めなんじゃないかと思ってね。

ほら、俺ら商工ギルドでも下っ端が失敗すれば、上がフォローに走るもんさ。

なら、あんたがほんの少し困ったならば、

大將軍が少しくらい手助けするべきだと思うんだがね。
違うかい？」

「……………うむ……………」

「だよな。

今回のように、いざという時、トップが危機に陥ったメンバーを
助けられるからこそ、

大將軍を中心に組織が成り立ってるんだろう。

現に、そうだよな？」

「……………うむ」

「そうだよな

出来ないのならば、組織の意義が無くなっちまうさ。
だろ？」

「……………そういう考え方もあるな」

「そうそう。

だからこそ、組織を存続させ続けるのならば、

大將軍が子爵さんを助けるのは義務に他ならない。
そうだろう？」

「まあ、そうだな」

「そうだろう。そうだろう。」

だから、大將軍が子爵さんを手助けするのは、当たり前なんだ。
現に、初めに取り立てをした、とある貴族に今の話をしたら膝を打って、大將軍の所へ飛んで行ったしな」

「な、なに？」

眼を見開く子爵を無視するように宙を見上げた竜斗は顎に手を当て、独り言のように吐露する。

「大將軍も一人目は援助するだろう。二人目までも渋々、出すだろう。」

だが、3人目は？

幸いなことに、あんたは二人目だが……、

まだ、この後に数人いるから、こちらも早く、次へ回りたいんだけどな……」

「ま、待ってくれ!!」

「ん？ 何をだい？」

眉を上げ、大袈裟に首を傾ける竜斗に、
子爵は声を張り上げた。

「き、急用を思い出した!!
今日は失礼する!!」

扉の前から横に逸れた竜斗が一礼する。

「では、また後日。」

より良い返事をお待ちしております」

馬車で走り去って行った子爵を、門の外で見送ったセラが伸びをした。

「よくとまあ、思ってもない出任せをあれだけ言えるわね」

肩に手を当てて、首を鳴らす竜斗。

「貴族ってのは、プライドが高いからな。」

自分からは弱みを、決して言い出さない。

だからこそ、心の奥底で思ってる『理想論』を肯定してやると、それしか見えなくなっちまうのさ」

セラは、竜斗を横目で見上げる。

「この詐欺師」

「失礼な。」

ただの偽勇者だよ」

「……………絶対に、『ただの』じゃない」

「さて、あと一人か」

掌に拳を打ちつける竜斗に、
セラが小首を傾げた。

「リユウト。」

今の子爵で4人目なのに、何で2番目って言ったの？」

「セラも大將軍の屋敷から遠い順に回ってるのは気づいてただろ。5人全員が大將軍の所で鉢合わせれば、と思っただけ。まあ。あまり期待してないけど」

「なんか、かなり遠回りのような気がする。

直接、殴り込めば良いのに。

もしくは、殲滅レイの魔術とか」

不満げに唇を尖らせるセラに、

竜斗は肩を竦める。

「その時は解決するだろうさ。

だが、その後は？」

時間てのは、その後も続いていくんだ。

物語みたいに、その事件が終わればハッピーエンドとはいかないからな。

俺たちは、その後も生きなきゃならないんだよ」

＊

ボタン！！

大將軍のレッツは、後ろ手にドアを叩きつけて閉じた。

ソファに、ドカッと腰を下ろし、

円卓に置いてあったワインを一気に飲み干した。

対面のソファでワイングラスを回し揺らして、香りを楽しんでいた金髪銀瞳の男性が口許に涼やかな笑みを形作る。

「ご機嫌斜めのようなだね。大將軍殿」

鼻を鳴らすレッツ。大將軍

「ふんッ。借金の肩代わりの陳情だ。

趣味の悪い金ピカの服を着て、金を貸せもクソもあるか。

貴族とは血筋によって、民の上に立つものだ。

服と金で立つものではない」

男は金髪をふあさっと梳き上げた。

「その通り。

そう。この私のようにね」

「それが5人。

雁首揃えて、何が融資しろだ。

しかも、勝手に借金を作っておいて、

わしが手助けをする義務があるときた。

馬鹿じゃないのか!!」

吐き捨てたレッツ大將軍は分厚い唇を歪める。

「まったく、財務大臣が横領で逮捕されて、宰相派に替わってから、やり難くてかなわん」

酌をしていたメイドから、ワインの瓶を引ったくったレッツは手酌でグラスに注ぎ、一気に空ける。

「おい。

お前に、任務を与える」

レッツの視線に、

メイドが怯えて、身体を震わせた。

「……………は……………はい……………」

「これを偽勇者に飲ませろ」

「で……………でもでも……………」

円卓に置いた小さな小瓶から後退るメイドに、
レッツは鼻を鳴らす。

「これは惚れ薬だ。」

毒薬ではない。罪には問われん」

「……………ですが……………」

「わしの命令に逆らうのか!!」

「……………す、すいません」

恐る恐る小瓶を持ったメイドが、一礼して部屋から出――。

ゴン!

閉まっている扉に鼻先からぶつかった。

「……………い……………痛ひゃい……………」

蹲るメイドへ、レッツの罵声が飛ぶ。

「何をしている!!」

このドジめ!!」

「す、すいません。すいません」

「とっとと出てけ!!」

また地下房に入れられたいのか!!」

「ごめんなさい。ごめんなさい」

涙目で部屋から飛び出して行くメイド。

「大將軍殿」

「何かね。『宮廷騎士団長』」

目の前の金髪銀瞳の『宮廷騎士団長』^男は、端正な美貌をレッツに向ける。

「あんなので、良いのですか？」

「瓶の中身は惚れ薬ではない。
即効性の劇薬だ」

「ほう」

「それに、捕まるのは二等養子だ。

言い逃れは、どうとでもなる」

「それなら、構いませんね」

レッツはグラスに注いだワインを水のように飲み干した。

「あれで成功するとは思ってらん。

あのような、確証の取れん策謀を幾つも仕掛け、
疑心暗疑に陥ったところを、要人の殺人犯に仕立ててやる」

「要人というと？」

「ふむ。そうだな。

宰相の若造とかな」

「なるほど。それは、一石二鳥ですね」

「宮廷騎士団の方はどうかね？」

ワインを一口含んだ騎士団長が片目を瞑る。

「もちろん、手配できてます。」

あの偽勇者とか名乗る一団が、襲撃してきた時のために、この屋敷に宮廷騎士団を配置しておきましたよ。

乗り込んで来た時に殺してしまえば、後は死人に口無し」

金色の前髪をふあさつと梳き上げる騎士団長。

「そして、私は報酬として『セラ・オル・ランセル』を貰うよ。

大將軍殿。生きたまま捕らえた彼女を『死亡扱い』にするのは任せました」

「ふんッ。あの成り上がりの跳ねっ返りか」

「ええ。あの気の強い娘が泣き喚き、絶望し、そして、私の権力と美しさの前に屈服する。

それが楽しいんじゃないやありませんか」

長い足を組み、上っ面に上品な笑みを浮かべる騎士団長に、レッツは鼻を鳴らした。

「ふんッ。相変わらず、理解できん趣味だな。

カー——」

「おっと、名前は伏せてもらいましょう」

手の平を掲げて遮る騎士団長。

「『名』は、しかるべき時に、しかるべきやり方で名乗るのがエレガントというものです」

「相変わらず、理解できん趣味だ」

*

065 偽勇者は ししゃく を せつとくしている。

竜斗とセラは子爵の屋敷の応接室に案内されていた。

応接室のソファに座った竜斗は出された紅茶に口を付ける。

「ん。美味しい。」

だが、紅茶に金かけてる場合じゃないと思うんだけどな」

対面の子爵が睨むような視線を向けた。

「貴族の嗜^{たしな}みだ」

「それは、それは」

もう一度、紅茶で喉を湿らせてから、竜斗はソファに寄りかかる。

「大將軍に断られたらしいな。借金」

「ど……どうして貴様が知っている？」

「情報は商売の基本だろう」

「知らんな。私は商人じゃない。貴族だ」

「ごもつとも。」

だが、金が必要なのは、貴族だろうが商人だろうが、村人だろうが変わらんけどな」

竜斗は宙を見上げた。

「やれやれ。それにしても、貴族のトップってのも薄情だよな。」

こういう時のために恩を売っていたのに、裏切られるとはなあ」

「……………」

空のカップをテーブルに置く竜斗。

「俺も正直、吃驚だよ。」

血族の力は、何よりも強いと聞いていたんでね。
まあ、過去の話よりも先の話をしようか」

「屋敷を手放すつもりはないぞ」

「金はない。でも、屋敷も手放したくない、ねえ。
知ってるかい？」

『地位』てのは、高く売れるもんなんだぜ」

「……なに？」

「貴族って地位は、高く売れるのさ」

「……き、……ききききキサマアアア!!」

激昂する子爵を受け流すように、竜斗は軽く肩を竦める。

「ま、それはあんたと俺がどうしようもなくなった時の、最終手段
として取っておこう」

無言で睨み付ける子爵。

「金は無い。」

しかし、屋敷も手放したくない。

勿論、その中の先祖代々の調度品コレクションも。

そうだろう？」

「……………その通りだ」

「……………いやいや。」

さすがは貴族様だ。

断言されるとは思わなかったぜ」

カップを手にとった竜斗は二杯目の紅茶に口を付けた。

魔力駆動式の振り子時計の秒針が、一定間隔で音を立てる。

子爵はちらちらと竜斗とセラに視線を送るが、

竜斗は紅茶を味わってる振りをし、

セラは微かな笑みを浮かべたまま、無言で座っていた。

静黙した応接室に、秒針音のみが響く。

眼を宙に漂わせ、口を開いては閉じ、

手を伸ばそうとしては、力なく落とし、

そわそわと身体を揺らしていた子爵が、

部屋の沈黙に耐えきれずに声を発しようとした、

その瞬間——、

「——では、妥協案だ。

そのまま金を返すのが無理ならば、

あんたの一族郎等、全てが貴族派を抜けて、

宰相派の陣営に降^{くだ}り、免責許可を貰うことだな」

薄目で、子爵を観察していた竜斗が機先を制した。

「そ、そんなことできるか!!」

「何故だ？」

「私の一族は先祖代々、貴族派だからだ！！」

「何故だ？」

「あんたは、すでに大將軍から裏切られたんだろう？」

「ち、違う！」

「でも、手助けはない」

「……………」

「裏切られたのに忠誠を誓い続けてる愚図は、

平民の世界じゃ、『間抜け』と呼ばれるのさ」

竜斗は子爵を指さす。

「そして、当然、あんたは『間抜け』じゃない」

無言の子爵に、

カップを置いた竜斗がテーブルに肘を突いた。

「なに、先に裏切った方は、貴族のトップの大將軍だろ。

あんたの、ほんの少しの困り事にすら、手を差し伸べず、

無下に切り捨てたのは大將軍の方だろ。

今まで、散々尽くしてきたのに、寝返ったのは大將軍の方だろ」

俯き、拳を握り締めてる子爵に顔を近づけた竜斗は、内密な話を
するように囁きかける。

「良いのかい？」

躊躇してると、屋敷やコレクションはおろか、

『貴族』すら、失うかもしれないぜ」

顔を上げる子爵に、同情を見せる竜斗。

「あんたの代で、貴族の地位を失うなんて『先祖』に顔が立たないだろ。」

なに、許してくれるさ。

これは『緊急回避』だ。

『正当防衛』とも言えるかな」

上体を起こし、竜斗は爽やかな笑みを浮かべた。

「大丈夫だ。」

宰相側に着いたとしても、

今回の件は、あんたに正義がある」

「……だ……だが……」

頭を抱えて悩み始めた子爵を見、

顎に手を当てる竜斗。

「大いに悩んでくれ。と言ってやりたいところだが――、

俺が思うに、あまり悩んでる時間は無いだろうよ」

問い質しげな子爵の視線に、竜斗は説明する。

「あんたら貴族ってのは、あっちもこっちも血筋が重なっていて、親戚どうしだ。」

だからこそその貴族なんだけどな。

別の貴族が一族郎等を引き連れて宰相派に与した後、

あんたが移ろうとしても、誰もいない。なんて可能性も十分過ぎるほどにある。

そうすりゃ、最悪、宰相に断られるかもしれないな」

「右手を顔の前上げた竜斗は指を折り曲げ、ゆっくりと数える。

「確か……あんたより、地位の高い貴族も何人か居たよな」

一つ溜息を吐いた竜斗は、項垂れている子爵を見下ろした。

「免責を受けられなければ、俺らも『最終手段』を取らざる得なくなる」

子爵が何かを言う前に、言葉を重ねる竜斗。

「だが、そいつは悪手なんだ。

商売の基本は顧客を、いかに長く確保し続けられるかだ。

目先の金が入っても、

行く先々で顧客を潰してちゃ、その会社に発展はねえよ」

竜斗は子爵と真正面から眼を合わせる。

「あんたは頑張った。本当に頑張った。

二人で考えつけるだけの手段は全て講じた。

取り得る手段は最悪のもの以外、全て試した。

だから、もう良いんじゃないか？」

竜斗は子爵の右手を取った。

ギョツとした子爵が引きかけた手を、竜斗は強く握る。

「たかが、金ごときで潰れないでくれ。

貴族ってのは、国の有事の時にこそ必要なんだろう。

そして、今がその時だ」

握った手に、左手を上から被せた竜斗は眉尻を下げ、口をへの字にして、悲しみの表情を見せた。

「だから、俺はあんたから貴族を奪いたくはないんだ」

眦を鋭くした竜斗は、じっと子爵の眼を覗き込む。

「俺らに発展の余地を残しておいてくれよ。

子爵さん。あんたもこんなところで埋もれないでくれ」

その竜斗の強い視線から、子爵は眼を逸らせなかった。

「あんたは貴族なんだろう。」

今まで通り、貴く、誇り高く生きるべきだ。

道はある！！

なら、あとは突き進むだけだ。

臆病風なんかには流されるな。

あんたの祖先は国王と共に、この国を作り上げた。

その子孫のあんたが、この程度の試練を乗り越えられないわけがない！！

そうだろう！！

今まで積み重ねてきた貴族の誇りを胸に、気高く生きるべきだ。

あんたが平民なんかに、落ちぶれて良いはずがない。

あんたは、絶対に打ち勝てる！！」

竜斗は眼に力を込め、僅かに顔を近づける。

「あんたは貴族として、やらなければならぬことが沢山あるんだろう。」

俺らギルドが商人として、

あんたが貴族として、

これからも、共に生きていこうぜ」

手を握ったままの竜斗は、子爵の眼から、決して視線を外さなかった。

絵画のように誰もが動きを止め、沈黙した応接室に、

時計の秒針の音のみが響く。

秒針がたつぷり3周回った後、子爵が口を開いた。

「……………いいだろう」

その返答で、竜斗が手を離すと、
子爵が立ち上がる。

「……私は……君達とともに生きる。
宰相の元へ行こう！」

「だが、あんた一人だけでは……」

「勿論。我が一族も、配下も引き連れてな」

「……………そうか。決断してくれたのか」

「そうだ。」

私は、貴族でいることをやめない!!」

座っている竜斗を見下ろし、子爵は力強く宣言した。

微笑を浮かべて立ち上がった竜斗が右手を差し出す。

「子爵さん。」

次は笑顔で会おう！」

「うむ！」

子爵は竜斗の右手をしっかりと握った。

応接室を出た子爵が声を張り上げる。

「馬車を回せ!!」

慌しい音が離れて行き、玄関の扉の閉まる音とともに消えた。

二人だけの応接室に、時計の音のみが浸透する。

立ち上がったセウが、竜斗の耳元に唇を寄せて囁いた。

「この大悪党」

「失礼な。」

こんなに小市民的な偽勇者、他にいないぞ」

＊

0661勇者のまえに　しかく　か、あらわれた。

窓の外を眺めていた青髪青瞳のシェラがくるっと振り返った。

「コウイチ様。今日は良い天気ですわね」

「そうだな」

「露天市も賑わっていると思いますわ」

「多分ね」

「露天商の果物市場が、大盛況らしいですわ」

「へへへ」

「……………コウイチ様」

「ん？」

「良い天気ですわね」

「ああ」

「露天市も賑わってますわ」

「えへっと」

「果物市場も大盛況ですわ！」

「……………はあ。……………だから？」

間の抜けた声を上げる光一に、

バックパックの荷物を整理していたフィーが口を挟む。

「それは、天気が良いから、露店市の果物市場に連れて行けと言っておるのじやろう」

ポンと手を打つ光一。

「おお、そうか。」

だったら、シェラも初めから、そう言えば良いのに。
でも、今日はダメだから、今度、皆で一緒に行こうか」

「皆で……一緒にですか……」

眉尻の下がるシェラに、

光一は爽やかな笑みを見せる。

「そうさ。」

俺の経験上、こういうのは皆で行った方が楽しいんだ」

「そうなのですか？」

「勿論さ」

不満そうに唇を尖らせるシェラを見、

光一は茶髪を掻いた。

———そういや、小学生の頃、竜斗も誘ったら断われたことあった
っけ。

「俺を『ハーレム・デート』に巻き込むな」とか何とか……まあ、
確かに女の子の子しかいなかったけどさ。

消沈していたシェラが気を取り直したように頬をペチペチと叩き、
光一を見上げる。

「コウイチ様は、どのような果物が好きですか？」

「ん〜。旬の物なら何でも。」

あ。アリアさんは、どんな果物が好きです？」

ソファに腰掛け、紅茶を飲みながら、本を読んでいたアリアが視線を光一に向けた。

「……そうですね。」

強いて言えば、苺でしょうか」

じっと見つめてくる光一に、アリアは小首を傾げる。
「なんです？」

「いや……なんか、可愛いなあと思って」

「し、知りません！」

本で顔を隠すアリア。

「コ、コウイチ様！！」

わたくしは、南国産の果物が好きですわ」

強引に割り込んだシェラを、

光一が見下ろした。

「へえ。どんなの？」

「とても貴重な果物ですわ。

蕩けるような甘みがあって、

滋養のある果物ですわ」

「ふっふん」

「ただ、腐りやすくて、この地方まで運べないため、とても貴重な
のですわ。

王族でも滅多に食べられない果物なのです。

わたくしでさえ、まだ食べたのは3回だけですわ」

「へえ。で、その果物の名前は？」

シェラは片目を瞑り、唇の前に人差し指を立てる。

「それは、ひ・み・つ ですわ。

いずれ、本物を前に、教えて差し上げますわ。

あ、でもヒントを一つ。

黄色ですわ」

「黄色？」

ミニチュア・ドラ人形で遊んでいたアリエルが顔を上げた。

「それですか。私も食べたことあります。」

細長い果物ですよ。

皮が手で剥けるから、食べやすくて私も好きです。」

「あゝ、それって――」

「一口食べたら、コウイチ様も絶対、虜とりこになりますわ。

このわたくしが、いつか、コウイチ様にも必ず食べさせてあげますわ!!」

「……………あ……………あ……………」

意気込むシェラから視線を逸らし、

光一はバックパックを整理しているフィーに尋ねる。

「それで、フィーはさっきから何をしてるんだ？」

バックパックから瓶詰めを取り出したフィーが細眉をひそめた。

「遠出をするのでな。」

その準備じゃ」

首を振ったフィーは瓶詰めをテーブルに置いた。

「遠出？」

「ルキア姫からの頼まれごとじゃよ。

2週間ほど、留守にするかもしれん」

「俺も一緒に行っていくか？」

「ダメじゃ。」

勇者が加わったと知られば、騒ぎはさらに拡大するじやろうかな

「騒ぎって？」

「西北の森で、^{一角獣}ユニコーンが見つかったのじゃ」

「まあ、^{一角獣}ユニコーンが」

眼を丸くするアリアに、フィーが溜息を吐く。

「じゃが、見つかった場所が悪くてのう。」

冒険者ギルドとハンターギルドの勢力の境目なのじゃ。

二つのギルドが、一触発状態なのじゃよ」

「ハンターギルド？」

「冒険者ギルドと同じようなものです。」

大きな違いは、成り立ちでしょうか。

冒険者ギルドの方は傭兵集団の相互扶助が組織化されたもので、

ハンターギルドの方は獵師の組合が発達したものです。

強いていうならば、ハンターギルドが地元密着型。

冒険者ギルドが旅団巡回型と云ったところでしょうか。

ただ、通常、ハンターギルドは冒険者ギルドに組み込まれているはずなのですが……」

輝くような金髪を揺らして、小首を傾げるアリアに、フィーが首を横に振った。

「あそこは昔から地元^元の力が強くてのお。」

ハンターギルドと冒険者ギルドの仲が悪いのじゃよ。

この一角獣騒動で、争う頻度が増しておるから、

あと数週間の内に、ギルド同士の全面抗争になるじやろうな」

「なら、俺も――」

「そこへ勇者が来れば、第三勢力の横槍じゃと思われ、さらに戦闘が激化するじゃろうが」

ムツと眉を顰める光一。

「なら、フィーだってヤバイんじゃないのか？」

「ふむ。冒険者やハンターの大半は武器を主体とし、魔術をサポートに使う戦士系じゃ。」

モンスター退治では、それが一番、バランスが取れておるからの。我みたいな専門魔術師は、冒険者からは一段、下のランクに見られておるのじゃよ」

「へえ」

気の抜けた声を出す光一に、
アリアが膝の上の本を閉じる。

「それは、あくまでも冒険者たちの中だけの話です。」

私たち騎士や軍、それに傭兵は戦場で、その有用性と恐ろしさは身を持って知っていますので」

「さらに、私の『術師』の名を虚偽威しじゃと思つとる冒険者も多くての。」

我が全ての魔術を使えることを知っておっても、

『魔術を使う前に倒せばいい』と考えている冒険者が大多数なのじゃよ。

故に、我、一人のみならば敵視されるものの、強い警戒はされんのじゃ」

「そうかあ。」

……俺も、ユニコーンを見てみたかったんだけどなあ」

光一が宙を見上げた時――、

コンコン!

扉がノックされた。

「お茶をお持ちいたしました」

オレンジの髪にピンクの瞳のメイドの少女が、しずしずと入室する。

「本日の御茶請けは、クラッカーと各種ジャム——ひゃああ!？」

「危ない!!」

柔らかい絨毯に足を取られ、転びかけた少女を、光一は咄嗟に抱き支えた。

だが、手に持ってた大皿は引っ繰り返り、絨毯に、クラッカーがばら蒔かれる。

「大丈夫か？」

「ご、ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

「あれ? 君。新しいメイドさん？」

「ひゃ、ひゃい。

え……な、なんで？」

「はは。女の子の顔と名前は覚えてるからね。昔からの特技なんだ。

ただ、その分、男の名前は、よく忘れちゃうんだよなあ」

光一の腕から逃げるように離れた橙髪桃瞳のメイドが、わたわたとワゴンに駆け寄った。

「そ、その……紅茶はいかがですか？」

「うん、貰おう」

「今、ご用意しますです！」

緊張でガチガチになりながら、紅茶を煎れ始める。

大きなミスも無くメイドがティーポットから、カップに紅茶を注ぎ――、

突然、立ち上がったアリアがその腕を掴んで止めた。

「ひ、ひうつ！

な、ななななんですかあ？

なんなんですかあ！？」

怯えるメイドを、アリアが鋭い目付きで見つめ、
無言で近づいたフィーが、メイドのポケットから小瓶を取り上げる。

「あっ！？ ……………あうう………」

小瓶に《解析》をかけたフィーが、眼を眇めた。

「ほう。……即効性の毒薬かの」

「ち、違います！ 惚れ薬ですっ！！
……………あっ！」

口許を両手で押さえるメイド。

「ふむ。事情を話すのじゃ
それとも、私の死霊術にかけられたいか？」

「……ご……ごめんなさい。ごめんなさい……」

フィーに凄まれ、

アリアに腕を掴まれたまま、腰を抜かすメイド。

「フィー。抑えて。抑えて。」

そんなに脅かしたら、話せるものも話せなくなるよ」

フィーを執り成した光一が、屈み込んでメイドと目線の高さを合
わせる。

「君の名前は？」

「………リュリュです」

「リュリュちゃんか。可愛い名前だね。」

それで、どうしてこんなことをしたんだい？」

「……ボ、ボクは………」

「大丈夫。勇者の名にかけて、

君を騙したり、酷い目に合わせたりしないから。

だから、話してごらん」

「……ボク。」

ご当主様に命じられて、

惚れ薬を飲ませようとして……」

「当主？」

「当主とは、誰じゃ？」

「………」

言い淀んだリユリュの腕を掴んでるアリアが力を込めた。

「あっ！」

アリアの静謐な緑瞳に、リユリュが唇を震わせる。

「……ロ……ロドリゲス卿……です……」

「ロドリゲス？」

「聞いたこと無い名前ですわね」

アリアが二本指で額を押さえた。

「……………コウイチ殿。シエラ。

大將軍の家名です」

「ああ、大將軍の！」

「ど、度忘れしてただけですわ」

「リユリュちゃん。

よく勇気を出して言ってくれたね」

ポロポロと泣き出すリユリュ。

「……………ううう。

また、ドジっちゃった。

怒られます。怒鳴られます。地下房に入れられてしまいます」

涙を流すリユリュに、

光一は己に誓うように宣言する。

「リユリュちゃん。大丈夫だ！

そんな当主の所に戻る必要は無い！！

俺の所にいれば良いんだ」

驚いて、顔を上げるリュリュの頭を撫でながら、光一が笑みを浮かべた。

「俺が護ってやる!!」

誰も、リュリュちゃんに危害を加えさせない!!」

その微笑みを見、リュリュが頬を紅く染める。

「……あ……ありがとうございます……ございます……」

眉間にギュッと皺を寄せたシェラが、割り込むように口を挟む。

「そんなもの、あなたが命令を聞かなければ良いだけですわ! もしくは、国王に申し立てれば済む話ですわ」

「無理じゃろ。」

ただのメイドが、主人の命令を拒否できるはずもなからう。

国王に申し立てなど、それこそ不可能じゃ」

「で、ですが、誰かに言うことぐらい出来たはずですわ!」

「……………ボク……二等養子だから」

「二等養子?」

「売買される養子ことですわ」

「そんな!!」

「三十年前、先々代宰相が奴隷制度を禁止したのですが、養子という形で実際の売買は続いています。

ただ、名目上は養子ですから、遺産相続権や、殺傷した場合、罪に問われるなど、

待遇は、奴隷より格段に良くなっています」

アリアは二本指で額を押さえた。

「ですが、それでも、幾つも問題が起きている制度なのは確かですけど」

「宰相に言って、そんな制度、すぐに撤廃してもらえるように進言しよう」

「それでこそ、コウイチ様ですわ!!」

「それは、後で話合おうとしまして……、
まずは大將軍をどうするかですね。

向こうは、こちらを殺しにかかってきているのですから」

唇に白い指を当てるアリアに、

光一が力強く断言する。

「決まってるじゃないか。

大將軍と直接、話をするだけさ!」

「でも、会ってくれますかね」

ソファに寝そべっているアリエルがドラ人形ミニチュア・ドラを風の精霊
魔術で浮かび上がらせた。

「わかってる。

だから——、殴り込みだ!!」

「いえ……それは、さすがに——」

「大丈夫さ! アリアさん。

正義は、こっちにある!!」

＊

067 偽勇者の ひっとほ。いんと か、かいふくした！

日の出始めた早朝、

ドラの厩舎に、竜斗の声が響く。

「ドラ。起きてつかう？」

「……ぎゃあううう」

「今日も、相変わらずの寝坊助さんだな。

その寝ぼけ目も可愛いぞ。ドラ」

クアアアと大口を開けて、欠伸をするドラ。

寝起きのため、いつもは丸い目も、今は半分瞼が落ちかけていた。

「ほら、ドラ。あうん」

大口を開けるドラの口の中を、
分厚い本を持った竜斗が覗く。

「虫歯は無し。

舌の色は問題なし。

あん？ 歯茎に白い斑点？」

菜だらけの薄汚れた分厚い本をパラパラと捲った竜斗は目的のページを開いた。

「おっ。あった、あった。

白い斑点は……放っておくと、体調を崩す可能性あり、だと。
で、果物を食べさせると治る。

………ん。ビタミン不足ってことか？

セラに言って、明日の餌には果物を付け加えるか」

「ガイア」

「あ、ドラ。もう、口を閉じて良いぞ」
「ギャウ」

本を置き、バケツとスコップを持った竜斗はドラのトイレに向かう。

「糞の色は問題なし……と」

糞をバケツに入れた竜斗は本を脇に挟んで、ドラへ振り返る。

「もう少ししたら、セラが餌を持ってくるからな。」

いい子にしてるんだぞ」

「ギャオ!!」

＊

「ドラ。起きてる？」

セラの声に、伏せていたドラが跳び起き、

「ギャウ!!」

目をキラキラさせて、セラを見下ろす。

「……その目、見てると、なんか私まで食べられそうになる気がするのよねえ」

セラが麻の籠から、鉄皿にパンや肉を出していくたびに、ドラの口から涎が零れた。

「まだダメよ」

「……ギユウ」

コホンと咳払いをしたセラは、

「お座り!」

ドラは背筋を伸ばし、尻尾を着けて座る。

「バサバサ!」

ドラは羽をワサワサと振った。

「ペシペシ！」

ドラは尻尾をビシビシと地面に打ち付ける。

「うん。良いわよ」

ゴーサインを貰ったドラはパンに齧り付いた。

「本当に、美味しそうに食べるわねえ」

「ギャウ？」

「あ、ゴメン。食べ続けてて良いわよ」

「ギャオ！」

ハグハグと餌を食べるドラ。

ものの数分で食べ終わったドラは、ペロリと口の周りを嘗め取る。

「ドラの食べっぷりを見てたら、私も、お腹空いてきちゃった。

じゃあね。ドラ」

「ギャオ！！！」

＊

「ドラー！。

ブラッシングの時間だよー」

「ギャウ」

食事をした後の二度寝をしていたドラが目を覚ましてクアアと欠伸をし、

ノソノソと厩舎から這い出る。

湯を張った2つのブリキのバケツを置いたウィズが、馬の毛で作ったブラシをぬるま湯に浸した。

ウィズはマッサージするようにブラシで、ドラの全身を擦り上げていく。

ドラは気持ち良さそうに目をトロンとさせていた。

「ねえ。ドラ。聞いてくださいよ。」

最近、僕の工房に、用も無いのに貴族が顔を出しては、嫌みを言っ
て去って行くんですよー」

「ギャアオ」

「結構、ストレス溜まるんですよー。」

僕の作ったライフルをバカにするんです。

そんな魔法杖の出来損ないで、魔族を斃せるはずがない。

それを鈍器として殴った方が、まだ倒せる可能性があるんじゃない
かって……」

「ギャウウ」

ブラッシングの手を止めることなく、顔を上げるウィズ。

「でも、僕の事は良いんです。」

それよりも、レイさんの方が酷いんですよ。

レイさんが開発した魔法陣や魔法武器を、

上司や同僚の一部が、さも当然のように自分の手柄にしてるんで
すよ。

文句を付けたら、あいつら、何て答えたと思います?」

「ギャウ?」

「「どうせ、『欠陥魔術師』は出世など出来ないんだから、私たちが
有効利用してやってるんだ」なんて、抜かしやがるんですよ。」

ム・カ・ツ・クローツ!!」

「ギャオーツ!!」

「部長のレンフェイさんに訴えに行ったら、今は泳がせて、証拠を固めてる時期だから、いずれ、一網打尽にして、給料泥棒は追放すると言ってたけど…」

——納得いかない!!」

「ギャウギャウ!!」

「分かってくれるのは、ドラだけですよー。

偽勇者さんとセラさんは、何やら忙しそうだし、レイさんは、あまり強く言い出せないみたいだし、アーサーさんは、『次元』が違うし……」

「ギャオ」

「ああ。ドラはいい子だなー。

僕の辛さを共感してくれるのは、ドラだけだよ」
「ギャウ」

ブラッシングする手を止めて、ウィズはドラの目を覗き込む。

「んー。僕もドラの言葉が解ったら良いのになー。
そしたら、僕もドラの愚痴を聞いあげられるんだけどな」
「ギャオン」

「ドラ。かけるよー」
「ギユ」

目を瞑ったドラへ、ウィズはもう片方のバケツのぬるま湯を全身にかけた。

ウィズが離れると、
ドラは身体を震わせて、水滴を弾き飛ばす。

「うん。綺麗、綺麗。

じゃあね、ドラ。また、明日」

「ギャオ！」

空のバケツ二つを持って、手を振るウィズに、
ドラも尻尾を振り返した。

＊

食事と入浴も終わり、

地面の蟻の行列をジッと眺めていたり、
間違って飛び込んできたウサギをトテトテと追い回したり、
自分の尻尾を追いかけてグルグル回ったり、
草地でゴロゴロ転がったりしていたドラは地面を踏み締めるよう
な足音に頭を上げた。

「ウヌ。ドラよ。

今日も良き、筋肉日和であるな」

「ギャオン」

「ムンッ！」

何の前触れもなく、アーサーは一右足を踏み出して、右半身になり、拳を鳩尾で合わせて胸と腕と脚に力を込める《サイド・チェスト》。

白い歯をキラメかせるアーサーに対抗するように、

「ギャウ！」

ドラは大きく息を吸い込んで、胸を精一杯膨らませた。

「ヌッ！」

真正面を向いたアーサーは一上げた両腕を曲げて、上腕^{力瘤}二頭筋を膨張させ、背中に力を入れる《ダブルバイセップス・フロント》。

「ギャウ！！」

ドラは今にも飛び立ちそうなほど、羽を大きく広げた。

「ムウ！」

後頭部に両手を組んだアーサーは一膝を僅かに前に出し、腹筋と脚の筋肉を見せつける《アドミナブル・アンド・サイ》。

「ギャオ！」

前傾姿勢になったドラは空をも貫く勢いで尻尾をピンッと垂直に立てた。

ぴたりと停止したアーサーとドラは互いの眼を見交わし、白い歯をキラメかし、鋭い牙を剥き出す。

「フッ！」

拳を鳩尾の位置でかち合わせたアーサーは一右足を踏みだし、僅かな前傾姿勢で全身の筋肉を爆発させた《モスト・マスキュラー》。

「ギャオン！」

限界まで息を吸い込んで胸を膨らましたドラは背筋を伸ばし、空

の王者のように大きく羽を広げ、存在を誇示するように尻尾を垂直に立てる。

一人と一匹は見つめ合ったまま、全ての動きを止める。

そこは、一人と一匹の世界だった。

その世界に存在するのは、ただ二つの同胞のみ。

この瞬間は永劫であり、この永遠は一瞬だった。

アーサーとドラは同時に長い息を吐き出し――、
ゆっくりとポーズングを解く。

アーサーが満足そうに頷いた。

「ウム！」

今日も、互いに良い筋肉であった。

明日も更なる筋肉であろう」

「ギャオ！」

「では、ドラよ。

さらばだ」

「ギャウ」

アーサーは来た時と同じく、地面を踏み締めるように去って行った。

＊

「ドラ〜」

手綱を振り回しながら、駆け寄ってくるレイフォンに、頭を上げたドラは喉を鳴らす。

「グギョルルル」

駆け寄ってきたレイフォンはそのまま、ドラの首元に抱きついた。

「うふふふ。」

ドラは今日も元気ですね〜。

さあ、散歩の時間ですよ〜」

「ギャオ!!」

手綱を付けたドラはレイフォンを乗せて、大空へと舞い上がる。

王宮が、あっという間に小さくなった。

地上の暑さから解放された上空は、涼風が吹いている。

街を囲う城壁が流れるように後方に飛び去って行った。

「速い速い!」

風圧に片目を瞑りながら、レイフォンは満面の笑みを浮かべる。

空は深い蒼あおに染まり、筋のような白雲が流線状に並び、描かれていた。

すでに牧草地帯に入り、丈の短い草が風にさざめき揺れている。

それは緑草の海の上を飛んでいるような光景だった。

所々で島のように、羊の群れの白い固まりが現れる。

懐かしい風景に、レイフォンは眼を細めた。

「ちっちゃい頃は、私も空を飛べただけだなあ」

レイフォンは小さく笑い声を零す。

「そうそう。」

レンちゃんを抱えて飛んだら、わんわん泣かれて、あの時は大変だったなあ」

過去を見つめるように遠くを見通し、

吐息を細く長く吐くレイフォン。

「魔術が暴走するようになってから、魔法陣の研究ばかりで、空を見上げることすら忘れてたっけ……。」

……あんなに好きだったのに、それすらも忘れて……」

牧草地帯を抜け、眼下に森林が続き、

前方には切り立った岩肌の山脈が泰然と広がっていた。

目の覚めるような眼下の深緑と、前方の山脈の墨色が、天空の群青を際立たせる。

レイフォンはフルフルと首を振った。

「やめやめ！」

お散歩中に、暗い考えはお仕舞い!!」

レイフォンは風音に負けないくらい、大きな声で呼びかける。

「ねえ。ドラ」

「ギャウ？」

「ドラって、偽勇者さんと、飛行訓練してるみたいだけど、いつもどんな訓練してるの？」

「ギャオ!!」

一吼えしたドラは唐突に急降下した。

「キャ~~~~~!!」

レイフォンの悲鳴を引き連れて、森に飛び込んだドラは大木の間を高速で潜り抜けて飛行する。

「はううううう~~~~!」

レイフォンの悲鳴を置き去りにし、

目の前に現れた崖の手前で直角に曲がり、岩肌ギリギリを天空へ飛翔した。

「ひゃ~~~~~!」

空へ駆け昇ったドラは大きく羽を広げる。

「ギャオツ!!」

どうだ!　と言わんばかりのドラと、眼をグルグル回しているレイフォン。

「……………うん。」

偽勇者さんとドラが訓練の後、

二人して、ぐったりしてる理由がわかりました」

日も傾き始め、山脈が大地に巨大な影を落としていた。

「そろそろ、帰ろっか。ドラ」

「ギャウ」

「ギャオ！」

帰途の途中、王都の上空を飛んでいたドラが突然、嬉しそうに吼えた。

「ドラ。どうしたの？」

旋回するドラの上から、地上を見下ろしたレイフオンは喜色の声を上げる。

「あ！ セラさんだ。」

よく気づいたねえ。ドラ」

「ギャウ！」

「ちょっと降りるよ」

「ギャオン」

「セラさ～～～ん！！」

広場を歩いてたセラが立ち止まり、辺りを見回した。

「上です。う～～え～～」

上を見上げたセラは眼を丸くし、靴音を鳴らしてトンツ！と、その場から飛び退く。

ズズン！！

広場の石畳に着地したドラの上からレイフオンが手を振った。

「セラさん。お買い物ですか？」

「……え、ええ。そうよ。」

レイは散歩？」

「はい。王宮に帰るところです」

「あら、もうそんな時間なのね」

鼻面を麻籠に押し当てて来るドラに、
セラが赤に近い金髪を掻き上げる。

「はいはい。そうよ。ドラ。」

あなたの明日のご飯よ。

リュウトに言われて、果物も買ってあるわよ」

「ギュギュ！」

丸い目をクリクリさせて見上げてくるドラに、
セラが片目を瞑った。

「んもう。甘えん坊ねえ。」

一個だけよ」

「ギャオ！！」

セラが夏蜜柑を放ると口でキャッチしたドラは皮ごと丸呑みする。
「ギャウ」

「セラさん。」

乗っていきますか？」

「んゝゝ、そうね。」

お願いするわ」

セラとレイフォンを乗せたドラが夕焼け空へ舞い上がり、
夕陽を受けて、赤く染まる王城へ向けて滑空して行った。

＊

夜空に半月が浮かんでいた。
雲一つなく天空に多数の星々が瞬いている。

「やっぱり、ここにいたわね。リュウト」

丸くなって寝ているドラに背中を預けた竜斗が、明かりの魔術を灯し、本を読んでいた。

カラッとした
湿気の少ない、夜の爽やかな風が厩舎を吹き抜けていく。

セラは竜斗の隣に座った。

「……………平和ね」

ペーじを捲った竜斗が首を捻る。

「だな。」

絶対に貴族連中が、何かをしかけてくると思ってたんだがなあ」

「諦めたのかしら？」

「それはないだろうよ。」

俺が気づかないくらい、ちゃっちい嫌がらせだったのか、
それとも、俺が気づけないくらい、巧妙で複雑な罠を組んでいる
のか」

「もし、後者だったら？」

セラを一瞥した竜斗が本に視線を落とした。

「お手上げだな。」

素直に称賛して、尻尾を巻いて逃げ出すさ。

逃げる手段は、すでに確保してあるしな」

「良いの？」

「俺の目的は魔王を斃すことじゃない。」

元の世界に帰ることだ。

あのチビ巫女から、『魔王を斃したら元の世界に戻す』と仕事を

請け負ったから、偽勇者をやってんだ。
駄目なら、別の方法を探すさ」

「その時は、私も連れて行きなさいよ」

パタンと本を閉じた竜斗がセラを見つめる。

「何、当たり前のことを言ってるんだ。

セラ。お前は、俺のものだ。

手を離すつもりはねえよ。絶対にな」

「……そう。

……なら……いいわ」

指を絡み合わせ、星空を見上げる二人の後ろで、
クアアアと、ドラが大欠伸をした。

*

0681勇者のまえに た、いしょうく、ん か、 あらわれた。

光一たちが案内された^{大將軍}レツツの屋敷の応接室は、贅沢を極めたような部屋だった。

天井の中央には豪華なシャンデリアが吊り下げられ、部屋の端に純銀の全身鎧が飾られていた。

大きな明かり取りの窓には、7種類の赤系の糸で編まれた豪華なカーテンが下がり、

床にはペルシャ絨毯のような複雑な模様の絨毯が敷かれている。

その中央に設置された、磨かれた黒檀のテーブルには、金箔で薔薇が描かれたティーカップが置かれていた。

白い壁には、暗い色調で描かれながらも中央の泉が浮かび上がってくるように見える絵画が掛けられている。

光一は硬い表情で、肌に吸い付くような革のソファに座り、左側にフィーが、右側にシェラが座っていた。

光一の後ろにアリアがガードするように立ち、シェラの後ろに、護衛のアリエルが立っている。

全員、出された紅茶には手を付けてなかった。

「これはこれは、勇者よ。

今日は如何なされた？」

ソファに座り、笑みを浮かべる^{大將軍}レツツに、

光一は硬い表情を崩さない。

「大將軍。何のことだかわかっているだろう」

顎を摩るレッツ。

「さて、とんと覚えがありませんな」
「そうか。」

なら、単刀直入に言おう。
毒薬のことだ」

突然、レッツが笑い出す。

「ははははは。」

それは、勇者の勘違いだ」

「勘違い？」

「その通り。」

騒ぎを大きくして、注目されたいだけなのだ。
放っとけばよい」

「……………そんなことは許さない」

「だいたい、何の証拠も無いではないか？」

「証拠？ 証拠ならある。」

「フィー」

フィーがテーブルの上に出した毒薬の小瓶に、
レッツは眼を見張った。

「これが、毒を飲ませようとした証拠だ！」

声を荒げる光一に、

レッツは眉を顰める。

「わざわざ、回収してきたのか」

「それでも、まだ白を切るつもりか！」

詰問する光一に、

レッツは大仰に首を横に振った。

「何故、アレに拘るか、理解できませんな。
下賤な盗賊上がりの平民が勇者に選ばれて、調子に乗っているだけだ。」

立てた手柄など偶然、その場に居合わせたからにすぎん。
末端の兵士でさえ、その場に居れば同じ働きをしたことだろう。
それを勇者勇者と煽て上げられて、何を勘違いしたのだから。
所詮、使い捨ての駒だと自覚してないのは実に哀れなものですな」

「なるほど……良くわかった……」

俯き肩を震わせる光一に、
レッツが満面の笑みで、喜色を上げる。

「おお、わかって頂けたか。」

では早速、偽勇し——」

怒り心頭に発した光一がソファアから立ち上がり、レッツに指を突きつけた。

「大將軍レッツ！！」

俺は、あなたを殺人未遂容疑で逮捕する！！」

「な、なんだとおおおおッ！？」

「大將軍。あなたには失望した！！」

俺を毒殺しようとした証拠もあるのに、白を切り通すとは」

「勇者を毒殺だと！？」

わしは知らん！！」

「もう言い逃れは聞き飽きた！！」

「申し開きは国王の前でもらいますわ」

首を僅かに傾けるシェラと、
バスタードソードの柄に手をかけるアリア。

「もつとも、神殿の代表のシェラと、聖騎士の私と、術師のフィーと、勇者のコウイチ殿が証人ですが」

「ふむ。大人しく捕縛につくことじゃな」

「ふざけるな！！」

わしを誰だと思っている！！」

「勇者殺害未遂の容疑者ですわ」

「者共、出合えい！！」

勇者一行が乱心したぞ！！」

怒りで顔を真っ赤に染めたレッツに、

アリアは額を二本指で押さえた。

「乱心はどちらですか」

レッツの叫び声に呼応して、4人の宮廷騎士たちが立ち並ぶ。

「こいつらを即刻、叩き出せ！！」

抜刀する宮廷騎士たちの間を擦り抜けたレッツは一人、逃げ出した。

立ち上がった光一が聖剣を抜き放つ。

「お前達に恨みはない。」

だが、俺は護るために戦うと決めたんだ。

俺は——勇者だからな！！」

発声と同時に、聖剣を切り上げ、

テーブルごと騎士を真っ二つに斬り裂いた。

袈裟に斬られた騎士の血飛沫がシャンデリアまで吹き上がり、

宙を飛んだティーカップが左右の壁に叩き付けられて粉々に割れる。

「チエエエエエ!!」

裂帛の気合いとともに、宮廷騎士が横薙ぎに振ったロングソードを、

バスタードソードで止めたアリアは、剣の根本に全体重を叩きつけて真正面から体当たりをした。

吹っ飛んだ宮廷騎士が豪華な赤いカーテンを破り裂き、

風止めの魔法陣が刻まれている窓の棧さんを突き破って、庭に転げ落ちる。

「《ライトニング・ボルト》!!」
雷撃

ソファアーに座ったままのフィーが魔術稲妻を放った。

稲妻は宮廷騎士と、その後ろにあった泉の油絵を焼き焦がす。

アリエルが人差し指を横に切ると、

風の刃が、シェラへ斬りかかってきた騎士を、部屋の隅の銀甲冑も巻き込んで切り刻んだ。

一瞬で、制圧した応接室を見回したシェラが、ソファアーから優雅に立ち上がる。

「では、コウイチ様。

——追いましょう」

＊

細かい彫刻を施された櫺の扉を、八等分に斬り裂いたアリアが通路に突進した。

通路にいた宮廷騎士へ、アリアがバスタードソードを横薙ぎ一閃。

宮廷騎士はアリアの一撃を防いだが、その威力に耐えきれず吹き飛ばされる。

装飾に飾られた棧と窓枠ごと突き抜けた騎士は噴水のグリフォン像に叩きつけられ、根本から折れたグリフォン像と共に池に落ちた。

「アリア。コーイチ。

伏せるのじゃ。

《爆炎フレイム・ボム》！！」

通路に飾られてた黄金の壺ごと、宮廷騎士を爆炎で吹き飛ばす。

客間からロビー玄関フロアに通じる、彫刻の彫られた大理石の壁が爆散し、大穴が開いた。

粉塵の舞い散るロビー玄関広間から、氷の矢が飛んでくる。

籠手で顔を庇った光一が粉塵の中に飛び込んだ。

氷の矢は、光一の着ている『聖なる鎧』で無効化され、虹色の粒子となって掻き消える。

「無駄だ！！」

俺に、魔術は利かない！！

光刃斬
フォース・ブレード!!」

光一の聖剣から発された光の斬撃が、天井のシャンデリアから柱と壁を斜めに斬り飛ばした。

ズズズン!

ロビー
玄関広間の天井が轟音とともに崩れ落ちた。

ロビー
瓦礫に埋まる玄関に、太陽光が差し込み、青空を覗かせる。

「ふむ。通路は2方向かの。
ここは、二手に分かれるとしようかのう」

「では、わたくしがコウイチ様と行きますわ」

《千里眼》で宙を見つめていたフィーが首を振った。

「いや。この2つの通路は奥で繋がっておるようじゃが、
外側の通路は、かなりの大回りじゃ。

コウイチ。アリア。おぬしらの足の速さなら、我らの直線距離と
変わらんじやろう」

「わかった。

アリアさん。征こう」

「了解です」

頷き合うと、後ろを振り返らず、光一とアリアは庭側へ続く通路
を走って行く。

「あっ!! ……もう!

フィーも、空気くらいを読んで欲しいものですわ!」

「戦の空気なら、十分に読んでおるわ。

ほれ、来たぞ」

精緻な染付けをされた陶磁器の壺が等間隔に並んでいる通路の奥から、

数人の宮廷騎士たちが現れた。

「折角、コウイチ様に、わたくしの力を見せて上げられましたのに。
ウインド・タイガー
風虎！！！！
ストーン・ベア
土石熊！！！！」

頬を膨らませて、むくれたシェラがウインド・タイガー純白の虎と、ストーン・ベア石の体を持つ熊を召喚する。

「吼えなさい！！」

風虎
ウインド・タイガー！！！！」

オオオオオオオオオオ！！！！

純白の虎
ウインド・タイガーの口から衝撃波が放たれた。

通路の両側に並んだ白磁の壺が衝撃波によって次々と弾け飛び、破裂四散する。

衝撃波は騎士たちを飲み込み、全てを後方に吹き飛ばした。

「水圧
ウォーター・プレス！！！！」
ウォーター・プレス
続く、フィーの魔術が突き当たりの扉を打ち破り、騎士もろとも奥の部屋に押し流す。

通路の突き当たりの部屋は周囲の壁にロドリゲス家代々の当主の

肖像画がずらりと並び飾られ、四つ角に甲冑が飾られていた。

部屋の中央で警備していた宮廷騎士たちが大量の水と共に飛び込んできた同僚たちに、呆然と口を開ける。

先頭を疾走したアリエルが部屋のの入口手前で銀剣ミスリル・ソードを抜刀した。
「そおおおれっ!!」

突然、部屋の中に巨大な竜巻が出現する。

「あははは。」

ぐくくぐるくく」

「ふむ。これで一網打尽じゃろ。」

《アイス・ロック》氷塊!!」

フィーが無数の氷の塊を竜巻の中に投げ入れた。

竜巻が血に染まり、絶叫が響き渡る。

竜巻が収まると、

周囲の肖像画は細切れに斬り裂かれ、

部屋の中央には、氷塊で凹んだ甲冑と血染めの騎士と木枠の破片が、

ゴミの山の如く積まれていた。

やっと追いついたシェラが膝に手を突き、呆れたように首を振る。

「まあ。」

派手にやりましたわね」

奥の通路から騎士たちが駆けて来るのが見えた。

「いい加減、しつこいですわ。」

土石熊
ストーン・ベア。やっておしまい!!」

前方に飛び出した石の熊へ、
宮廷騎士たちが多数の光の矢レイ・ボウを撃ち放つ。

光矢に石の身体の表面を削られるが、
石熊は突進速度を緩めず、突撃し――、

恐慌する騎士たちを構えた剣ごと、体当たりで吹き飛ばした。

＊

そよ風が草木を揺らす。

庭園には、夏の終わりのダリアの華が咲き乱れていた。

一流の庭師によって整えられた庭に迫り出した軒の天井にはステンドグラスが嵌まれ、極采の柔らかい光を透過している。

庭園を見通せる通路には、大理石の裸婦像とベンチが置かれていた。

その庭に面した通路で、光一たちはレッツの私兵である甲冑全身鎧の兵士と戦っていた。

宮廷騎士たちは、勇者光一たち一行が相手だと気づき、逃げ出したようである。

「シッ!!」

アリアの一撃で、構えた盾ごと吹き飛ばされた甲冑の兵士は裸婦像を巻き込んで倒れ、像の首と腰を押し折った。

アリアは振り向きざま、軒を支えてる翡翠のタイルを張られた柱ごと、後ろにいる私兵を叩き斬る。

「こんな雑魚に構ってられるか!!」

光一の振り上げた聖剣が目映い光を解き放った。

「光刃斬フォース・ブレード!!」

光の刃が、天井のステンドグラスから翡翠の柱を貫通し、甲冑の兵士たちを一気に斬り裂く。

ズルリと柱が傾き、軒先が庭へ倒れ――、

庭師が丹精込めて剪定したダリアの華群を叩き潰し、何色ものステンドグラスの破片と、ダリアの花びらが宙へ舞い散った。

華と色ガラスが空中に極彩色の模様を描き出す。

光一は見向きもせず、次の部屋に飛び込んだ。

部屋に飛び込んだ光一へ、四方から兵士が斬りかかる。

光一はスピードを落とさず前転し、甲冑兵たちの一撃を躲すと、立ち上がって、食器棚に手をかける。

「おおおおおおお!!」

アリアから教わった魔力を体内で循環させる身体向上法を使い、重さ100キロの食器棚を兵士たちに向けて放り投げた。

ズズンッ！

食器棚に飾られていた陶磁器の大皿や、薄地のティーカップ、金縁の白皿などが、全て宙に飛び出し、

壁や床に叩きつけられて木っ端微塵に碎け散り、

一人、逃げ遅れ、食器棚の下敷きになった甲冑兵に、破片が降り積もる。

下敷きになった仲間を無視し、兵士がロングソードを壁際の光一に叩きつけた。

上段からの一撃を聖剣で受け止めた光一の脇へ、別の兵士がブロードソードを刺突する。

「しまッ!？」

光一に当たる寸前――、

ギンッ！

アリアがその一撃をバスタードソードで弾き上げ、回し蹴りで、兵士の腹を蹴り飛ばした。

吹き飛んだ兵士は、100年以上も稼働している魔力式振り子型置き時計に突っ込み、

置き時計を真ん中から真っ二つに叩き折る。

アリアは高速で、もう一人の甲冑兵に接近すると、袈裟斬りに斬り下ろした。

斃れゆく兵士の血飛沫が、砂漠地方の町並みを刺繍したタペストリーを赤黒く染めていく。

「コウイチ殿。

あまり離れると危険です」

「わかってるよ」

少しムツとした口調で言った光一は聖剣を振って、斬殺した私兵の血糊を振り払った。

「ロドリゲス卿は、何処に逃げ込んだのでしょうか？」

「さあ？

それにしても、いい加減、少し飽きてきたよ。

と言うか、どんだけ大きいんだ。この屋敷」

「ロドリゲス家は、この国が建国された当初から、代々、貴族騎士のトップを務めていましたからね。

権力とともに、お金も沢山、集まってきたそうです。

この屋敷の歴史ある調度品も、今のロドリゲス卿が集めたのでなく、

先祖代々集めた物だと思います」

「ふゝゝん。

じゃあ、壊しても問題ないな。

先祖代々、あくどいことやってきたんだろうし」

「……………そうでしょうか？」

柳眉をひそめるアリアに、

光一は肩を竦めた。

「そうとも。

今の大将軍を見ればわかるだろう。

さ、アリアさん。征^いこう！！」

二人は彫刻の並んだ、大理石の通路を走る。

その時、前方の柱の陰から、ふらりと人影が現れた。

「待ちたまえ!!」

君たちのお遊びは、ここで終わりだ!!」

金髪銀瞳の男が、ふぁさつと金色の前髪を梳き上げた。

＊

069―勇者のまえに　きました、んちよう　か、　あらわれた。

光一たちの前方に立ち塞がった、
ブラチナ白金の鎧を纏った金髪銀瞳の男がふあさつと前髪を梳き上げる。

「待ちたまえ!!」

君たちのお遊びは、ここで終わりだ」

左足を一步前に出し、斜めに身体を向けた美貌の男は金髪に手を当てたまま、片目を瞑った。

「私かね？」

私は、宮廷騎士団長の『カス――』

「邪魔だああッ!!」

ズシュツツ!!

「アヒヤアアアアアアアアアアアアアアアアッツ!!」

擦れ違いざま、光一に斬り伏せられた宮廷騎士団長は血溜りに倒れる。

「……な……名乗りの……途中で……斬るなんて……エレガント……じゃ……な……」

宮廷騎士団長は事切れた。

「ん？」

何か喋ってたか？　今の人」

「さあ？

私は聞こえませんでした」

通路の突き当たりには、片側に幾つもの扉が並んでいた。

一つ目の扉を開けると、ベッドとテーブルとソファが置いてある。

「どうやら、客室のようですね」

「あの並んだ扉、全部が客室か」

「ロドリゲス卿が隠れてないか、一部屋ずつ見なければいけませんね」

「……………面倒だなあ。

ん〜。そうだ！

アリアさん。良いことを思いついた。

ちよつと、そこを退いて」

光一は聖剣を腰溜めに構え――、

「バスター・サイクロン！！」

壁に向かって、突き出した。

光の渦は連なった客室の壁を貫き、屋敷の石壁を突き破り、庭園の樹齢400年の大木の幹を抉り穿つ。

300年も前からロドリゲス家の歴史を見守り続けてきた大木は、幹を4分の3以上も抉り取られ、自重に耐えきれず、屋敷に向かって倒れ――、

ズズン！

屋根を押し崩し、煉瓦を飛び散らせながら、屋敷にめり込み、真下にあったレッツの寝室を完全に押し潰した。

＊

大木が倒れると同時に、
屋敷の反対側で、巨大な氷の山が屋根を突き破って、そびえ立った。

数十秒ほどしてから、頂点からサラサラと氷片となって風に流され、

虹色の光となって消えていく。

30秒ほどで氷山は、全て虹色の光となって消え去った。

「ふむ。火も完全に消えたようじゃな」

《氷の棺アイス・コフィン》を施術したフィーが太陽光の差し込む図書室の残骸を見回す。

「こんな所で火の魔術を使うなど、どうかしてますわ」

フィーの炎の魔術と、アリエルの風の精霊魔術で、

ロドリゲス家が先祖代々、収集してきた蔵書は全て焼き払われ、灰と化していた。

屋敷に延焼しそうになったところを、フィーがアイス・コフィン魔術で炎ごと氷に閉じこめ、鎮火させたのである。

「ふむ。わらわらと兵士がウザかったのじゃよ。」

全身甲冑には打撃系や斬撃系の魔術が効き難にくくてのう」

図書室の床には、炎に巻かれた甲冑の私兵の骸が折り重なるように倒れていた。

「じゃ、次の部屋にゴー！」

アリエルが腕を上げた時に、

奥の通路から甲冑兵がパイル檜と楯を構え、整列して早足で突進してくるのが見える。

「ふむ。なんで、こんなに兵士がおるのじゃ？」

「まるで、襲撃があることがわかってたみたいだね」

「じゃが、我らに襲撃されると想定してたならば、

レッツが我らに会う必要などなかったように思えるのじゃがな？」

「うんうん。その場で追い返せば良いもんね」

「そんなものは、大將軍を捕まえて、問い詰めれば良いだけですわ。

風虎 ウインド・タイガー！！」

ガウウウウツッ！！

純白の虎

風の ウインド・タイガーが上半身を低く身構えると、

刃 ターが吹き荒んだ。

甲冑兵たちは楯を掲げて防御する。

ズタズタ 通路の両側の壁に飾られていた200年前の有名画家の風景画が

細切れに斬り刻まれた。

風の刃を防御した甲冑兵は再び、前進を開始する。

「えいっ！」

アリエルが地面を、バンッ！と踏み付けると、地面がゆっくりと揺れ始めた。

その揺れに、兵士たちは壁に手を突き、不安げに周りを見回す。

「とりゃ！ とりゃ！ とりゃー！！！」

アリエルがその場でバンバンと跳び跳ねると、前方の通路のみ、大きく揺れ動き――、

ズズズン！！

石壁が崩れ、天井が崩落した。

瓦礫で埋まった通路にアリエルが拳を握る。

「よしっ！」

「良しじゃ、ありませんわ！！！」

「ええっ！？」

「これでは先に進めませんわ。

コウイチ様と合流できないではありませんか！」

両腰に手を当てたシェラに怒られ、

アリエルがシュンと肩を落とした。

「うう」

「ふむ。先に進めれば良いのじやろう。

ならば、こっちじゃ」

元来た道を引き返したフィーが食堂の扉を開ける。

「あの壁の向こうが通路になっておる。

あとは石壁を破るだけじゃが……」

「あの向こうにコウイチ様がいるのですね？」

土石熊
ストーン・ベア！！

やっとおしまいっ！！」

シエラが前方の壁に掛かっているファーレン王国初代国王の肖像画を指さした。

目の前の、銀細工のローソク立てが並べ置かれてる長テーブルを、腕の一振りで弾き飛ばした石熊は縦2メートル、横1メートルの全身像の油絵に突進する。

ファーレン王国を建国した国王の肖像画に、ストーン・ベア
肩から激突した石熊は絵画ごと石壁を破壊した。

シエラたちが石壁に開いた穴を通ると、

剣を構えたアリアと光一が、ストーン・ベア
石熊と対峙していた。

「コウイチ様？」

「シエラ？」

じゃあ、この石の熊は？」

「わたくしが召喚した精霊獣ですわ」

「……なんだ。」

敵かと思って焦ったよ」

吐息を吐いた光一が聖剣を下ろす。

「そちらも随分と派手にやったようですね」

アリアの視線に、

フィーが八重歯を覗かせて笑った。

「おぬしらもな」

「さっきの揺れは、フィーですか？」

「いや、エルじゃ。」

アリス・クエイク

私の《地震崩》だと屋敷全域が崩壊するのではな

「な、なんだってー！？？」

さっきの地震は、アリエルが起こしたのか？」

顎を落とす光一に、

アリエルが元気良く手を上げる。

「はいです」

「地震まで起こせるなんて、最強じゃないか！」

「ふふふ。」

このわたくしの専属護衛の精霊騎士ですもの。

これくらい出来て、当然ですわ！！」

「ふむ。レッツは、あの部屋に居るようじゃな」

前方にある扉を見つめるフィーに、

アリアが柳眉をひそめた。

「フィー。」

あなた。《千里眼》で、ロドリゲス卿の居場所を初めから知っていたのでは？」

「ふむ。アリアよ。」

あまりに聡いと、男にモテぬぞ。

少し隙を作っておく方が、よく釣れるのじゃ」

「お、大きなお世話です！！」

フィーに話を逸らされたアリアが怒鳴りながら、扉を蹴破る。

ベッドとイスとタンスしかない、石壁が剥き出しの質素な部屋に
レッツは逃げ隠れていた。

「追い詰めたぞ！！ 大將軍」

「コウイチ様を毒殺しようとした罪。

万死に値しますわ！」

「わしは、勇者を毒殺などしておらん！！」

「リュリュは、はっきりとお前の命令だと言った。
フィーの《ポリグラフ嘘鑑定》でも、『真実』と出た」

「リュリュだと……………あのドジめっ！！

それは、何かの間違いだ！！」

「往生際が悪いですわ。大將軍。
フィー術師の魔術が間違いだとも言うのですか。
それこそ、ありえませんわ」

「わ、わしは、偽勇者を殺せと言ったのだ！！」

「バカめ！

そんな言い訳が通用するか！！

大人しく、捕縛されるんだな。

まあ、痛い目に遭いたいというなら別だが」

勝ち誇った眼で見下す光一に、
レッツがギシリと歯を軋らせる。

「……………な……………嘗めるなよ。小僧ッ！！」

わしは、初代ファールレン国王と共にファールレン王国を建国したロドリゲス伯爵の末裔であり、

軍のトップの『大將軍』であり、

貴族連合のトップだ!!

貴様如きが、わしの目の前に立つことすら、烏^{わし}澁がましいわ!!」

壁に手を突いて立ち上がったレッツは魔力を体内に循環させた。

レッツは腰から^{片手剣}ロングソードを抜き放つ。

「聖剣の人柱ごときが、頭に乗るな!!」

左手を腰に据え、

右半身に構えたレッツが、ロングソードを持った右手を前に突き

出し、

右足を^{爪先のみを地に着けた}猫足にした。

レッツの突き出た肥満腹がプルプルと揺れる。

その滑稽な姿に、シェラが^{わらいを}プツと噴き出した。

魔力を体内で循環させた光一が対面で聖剣を構える。

「アリアさん。手を出さないでくれ。

一対一の勝負だ!!」

「チェイヤアアアア!!」

裂帛の気合いとともにレッツが袈裟斬りに振り下ろしたロングソードを、

光一が聖剣で受けた。

「お、重い!？」

止められた瞬間、ロングソードを切り返し、
下段から斬り上げる。

一歩下がって躲した光一へ、レッツは3連突。
2撃は弾いたものの、3撃目が胸鎧に当たり、
光一は後ろへ踉蹌めいた。

ロングソードの剣先が弧を描くように、レッツは上段から斬り下ろす。

「これが歴史の重さだ！

部下の重さだ！

貴族の重さだ！

わしが背負っている責任の重さだ!!」

光一が頭上に水平に掲げた聖剣と、
斬り下ろしたロングソードが火花を散らした。

「お……俺だって、使命と運命の重さなら誰にも負けない!!」

俺は、勇者だからな!!」

ロングソードを弾いた光一は聖剣を振り上げ、
一歩踏み込み、^{一閃}振り斬る。

「軽いわ!!」

ギャン!!

振り下ろされた聖剣の根本から剣先までを擦るようにして、ロングソードで弾いた。

「貴様の使命だど!!」

ロングソードを背負った構えから、横薙ぎに振る。

「貴様の運命だど!!」

止められると同時に、剣先をクルリと回して聖剣を逸らし、光一の喉元へ刺突。

「そんなもの所詮、貴様独りの重さだ!!」

他人の責任を負わない、貴様独りのものだ!!」

喉への刺突を、後方に跳んで躲した光一へ、

レッツは重心を前方に倒して、低い位置から滑るように突進し、

「護りたいものが出来た時、使命や運命に気づくのだ!!」

そして――」

半円を描くようにロングソードを斬り上げた。

「護りたいもの使命や運命など、誰にでもあるわっ!!」

足が宙に浮いた状態でロングソードを受け止めた光一は吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられる。

腰溜めに構えたロングソードの柄頭を左手で押さえ、刃を水平に寝かせたレッツが半身のまま、地を滑るように、光一へ突進する。

「覚悟おおおオオオオッ!!」

「風虎ウインド・タイガー!!」

シェラの声が響くと同時に、
ウインド・タイガー
純白の虎が弾丸のように飛び出し、レッツの足首に噛みついた。

「な、なんだとおおっ!？」

「隙あり!!」

背後の壁を蹴った光一は前方へ飛び出し、
聖剣を横薙ぎに紫電一閃。

すれ違いざま、レッツの首を刎ね跳ばす。

レッツの胴体は足首を噛まれながらも、勢いを失わず石壁に衝突し、

血糊を残しながら、ずるずると崩れ落ちた。

聖剣の血糊を振り払った光一はレッツの死体を、悲しげな表情で見下ろす。

「生かしたまま捕らえたかったのに………思ったよりも手強くて、手加減できなかったよ」

「コウイチ様は悪くありませんわ。

大人しく捕縛されなかった大將軍が悪いのです」

「そうかな？」

「そうですとも！」

「シェラ。さっきは、ありがとう。

シェラの機転で助かったよ」

「ふふふ。

コウイチ様のためですもの」

「ふむ、これで辻褄があつたのう」

銀髪を両手で掻き上げるフィーに、

納刀したバスタードソードの柄から手を離れたアリアが小首を傾げた。

「何がです？」

「レッツがコーイチを毒殺する動機を、どうしても思い付けなかったのじゃが――、

リュートを狙っておったのなら納得じゃな」

「……ですが、リュリユは何故、偽勇者殿の所じゃなくて、コウイチ殿の方に来たのでしょうか？」

「ふむ。大方、あのメイドが勘違いしたのじゃろう。

偽勇者と言われて、勇者が偽物だとも思うたのか、薬を飲ませることに集中し過ぎて、勇者か偽勇者かわからなくなつたか。

うむ。リュートは一般兵と同じ格好をしておるからの、存在を知らなかった可能性もあるのう。

ま、そんなところじゃろうて」

首を振ったアリアが二本指で額を押さえる。

「ふう。

リュリユのドジが良かったのでしょうか、悪かったのでしょうか」

＊

「以上の経緯で、5人全てを宰相派に組み入れることができた。戦時免責により、返済猶予期間の延長と、利子と元本を減額されたが、想定内の金額だ。これで、借金の請求を宰相派にできる」

竜斗はセラを連れだって、商人ギルド長のカルクに報告をしていた。

「確かに、宰相派は請求を拒むのは難しいでしょう」

「え？　なんで？」

小首を傾げるセラに、
竜斗が黒髪を掻く。

「宰相派のネックは、貴族派よりも人数が少ないことだ。

議会では、人数は力だからな。

今回の件で、有象無象の貴族が宰相派に異動した主な理由は、免責と借金を肩代わりしてもらったためだ。

この機会に手に入った人材を手放したくなければ、宰相派は補填するしかないだろう」

「でも、ギルドが損してるのは変わらないわよね」

セラの指摘に、

苦笑する竜斗。

「まあな。

だが、貴族の先祖代々受け継いだ屋敷を売っ払ったところで、古すぎて安く買い叩かれる。

貴族の爵位も、裏でしか扱えないから、借金の金額にはほど遠い。

コレクションは……高く売れるかもしれないが、今は戦時下だしな。
この国の情勢で、金を出せる奴がいるかどうか。
あとは、……二等養子にまで手を出すくらいだが……」

人身売買

「屋敷を売る程度なら、自業自得で済みますが、

そこまでしてしまえば、全ての貴族を敵に回してしまいます。
そうなれば、この国で商売ができなくなるでしょう」

「それは、元も子もないわね」

「赤字にはなりますが、当初の予定よりも減額しております。
宰相派に異動した貴族が、我々に借金を申し込んできた場合、
宰相に連絡を取るように、彼直々に言われております。」

カリウス宰相

「今回のことで無理に借金を重ねる貴族は少なくなるでしょう」

「だと、いいがな。」

あとは、早く魔王を斃せば返済も滞ることはなくなるだろうさ」

「結局は、そこに辿り着くわけね」

肘掛けに肘を突き、組んだ手に顎を乗せるセラと、

ソファアの背凭れに体重をかけ、後頭部で手を組む竜斗。

「そのために、一度、魔王城の城下町に行かないとな」

「城下町の反乱軍の受け入れ体制は整っております」

「行くとしたら、商人になりすましてか」

「そうなるでしょう」

「魔族相手に商売ってできるの？」

下唇に指を当てるセラへ、

カルクが頷いた。

「はい。一応、売買はできます。」

ただし、販売の傾向がさっぱり掴めないそうです。

とある壺が大量に売れたので、次も仕入れたら、今度はさっぱり
売れなかったりと、

当地の商人は、かなり苦勞しているようですよ」

「通貨は？」

「独自の通貨を扱っております」

厚さ1センチ、一辺10センチの角に穴が一つ開いている、青紫に光る正方形の板を取り出す。

「これに籠められている魔力量で金額が増減するそうです。

魔力量が高いと明るく光り、低いと暗くなるようです。

そして、金銭のやり取りは、この中の魔力を相手の通貨に渡すことで金額が移動する仕組みらしいですね」

「え？」

これを渡すんじゃないくて、魔力のみのやり取りなの？」

「その通りです」

「なら、これに魔力を込めれば金額増えまくるじゃない」

「いいえ。何故か、人間が魔力を込めても光りません。

人間と魔族の魔力の質が違うのか。

もしくは、魔力に見えて魔力ではないものなのか」

「ふゝゝん」

魔族の貨幣を矯めつ眇めつ眺めるセラを、竜斗が一瞥した。

「ま、チップも電磁情報だが、電気を流しこめば、増えるもんじゃねえからな」

呟いた竜斗がソファアールから上半身を起こす。

「ギルド長。

それよりも、城下町に武器は持ち込めるのか？」

「城下町の入り口で、武器の検査をしておりますが、ナイフとショートソードは問題ありません。

魔法杖は例外なく禁止です」

「あん？」

それ、魔族が検査してるのか」

「いえ、人間です」

「は？」

「あの地を納める貴族が魔族に寝返りまして、治安維持は人間が行っているのです」

「それはそれは」

苦笑を浮かべた竜斗が顎に手を当てた。

と、その時――、

ギルドの男が駆け込んで来る。

耳打ちされたギルド長が鋭い視線を竜斗へ向けた。

「カミシロ殿。」

大將軍が、勇者ヤナギに討ち取られたそうです」

「え？ 何で？」

眼を瞬くセラと、

ソファーから立ち上がった竜斗は鋭い声を発する。

「ギルド長。早急に、コウに金を融資しろ！！」

なんなら、援助でも寄付でも構わん！！」

「神殿から精霊石で儲けた時の臨時報酬として、

カミシロ殿へ渡そうと、取り分けて置いた分がありますが」

「それで良い。」

そいつを、貴族どもに見せつけるように、大^{だいだい}的に金を渡すんだ」

「理由をお聞きしても？」

「金蔓が居るとわかれば、

勇者であり、爵位を持つてるコウを、『派閥の長』に祭り上げよ

うと、

” 自称 ” 『先見があり、時流に乗るのが上手い』 貴族連中が動く」
「それ、ヤバイじゃない」

細眉をひそめるセラに、
竜斗は首を振った。

「いいや。」

コウが組織を纏め上げようとするれば、それは脅威になるかもしれない。
ない。

だが、コウに組織を纏め上げる気なんか、これっぽっちもない。

なにせ、コウは『勇者』——『孤高の存在』なんだからな。

リーダーシップの取る気のない御輿を祭り上げて集まったとしても、烏合の衆になるだけだ。

時間をかければ組織として安定するかもしれないが——、
政敵が『宰相』だぞ。

切り刻まれ、取り込まれ、擦り潰されて——、
消えて無くなるか、弱小組織に成り下がる。
間違いなくな」

眼を眇めたセラが曲げた人差し指を唇に当てる。

「でも、……折角、バラけそうな貴族派を態々、^{わざわざ}纏めるなんて——」

「あん？」

何だ。セラは気づいてなかったのか？

俺の一連の『防衛策』の相手は、『貴族派』じゃないぞ」

「……………はあ!？」

セラはポカンと口を開けた。

＊

0701 偽勇者は ふ、きを てにいれた!

「よう。」

カリウス宰相

片手を上げる竜斗を見、

黒髪をオールバックにしたカリウスが宰相モノクル越しに銀の眼を細

める。

「……偽勇者か」

「その節は、かなり御手を煩わせたようだな」

魔槍を肩に担ぐ竜斗に、

カリウスはモノクルを片眼鏡中指で押し上げた。

「礼には及ばん。」

貴様こそ、随分と貴重なものを贈り届けてきたな」

「いやいや。」

ただの御礼返しだよ。

到底、あんたの厚意には及ばんがね」

唇の右端を微かに上げる竜斗に、

無表情のカリウスが冷然とした視線を向ける。

「感謝はいらん。」

貴様には、礼をしたりないくらいなのだからな」

「それは、こっちの台詞だ。」

礼には礼を。

恩には恩を。

仇にはあだ仇を。

等価値交換が社会の基本ルールだからな」

「くだらん。」

価値など相対的に変わるものだ」

「かもな」

竜斗の黒瞳と、カリウスの銀瞳が交差した。

皮肉げな微笑を形作った竜斗が僅かに顎を上げ、冷たい無表情のカリウスが銀の双眸を細める。

言質を取られないよう、

竜斗とカリウスは声なく、音なく、唇のみを動かした。

” 次は、潰す ”

竜斗とカリウスは無言で、擦れ違う。

二人とも一切振り返らず、反対方向に歩いて行った。

護衛をしていたセラが、

宰相が見えなくなってから、竜斗に訊ねる。

「ええ……と、どういうことなの？」

話が見えなかったけど」

「ああ。

この前のデート中の暗殺から始まった策略の黒幕が、宰相だったってことだよ」

「ええっ!？」

で、でも、さっき御礼を言い合ってたじゃない」

「そりゃそうだ。」

証拠もないのに、お前が黒幕だろと言ってみろ。
牢にぶち込まれるぞ。

だから、互いに伝わる言葉で警告し合ったにすぎん」

「……………は、はあ。」

でも、なんで宰相が？」

「心当たりはあるしな」

「……………あるんだ」

「しつかりとな」

前に回り込んだセラが、竜斗の肩を掴んだ。

「リュウト！」

最初から説明して」

「んんん。」

どっから、説明するかな。

まず、この国において、貴族と神殿が手を組むことは、基本的にありえない。

貴族は神殿を、勇者召喚で恫喝して、金を徴収する脅迫者として見てないし、

神殿は貴族を、口の堅い財布程度のくせに、難癖を付けてくる厄介者として見てない。

第一、神殿はアンデッド城攻略ですら、俺たちが引っ張り出さなきゃ出て来なかったほど、

自分たちの権益しか見てない驕り高ぶった奴らなんだ。
偽勇者

俺如きのために、他と手を組むことはありえない。

ここまでは、いいな？」

「う、うん」

「だとすると、裏で互いの手を結ばせた奴がいる。

——黒幕の存在を推察できる」

「……そ、そうなの？」

「だからこそ——、

裏で動いている存在を意識させなくするために、

メンバー交代劇の直前で、暗殺者を差し向けて来たんだ。

暗殺者が襲って来た直後に、すぐメンバー交代命令。

なら、暗殺者を送って来たのは神殿か貴族のどちらかだと、意識付けられちまう」

竜斗は口角を吊り上げる。

「——」が、

さすがに、今回は『凝り過ぎ』だな。

自分の関与を意識外に置きたかったんだろうが、逆に不自然さが目立っちまった。

黒幕がしたことは、3流暗殺者をけしかけたこと。

俺を餌に、貴族と神殿の手を組ませ、俺たちのメンバー交代を唆したこと。

たった、これだけだ。

後は勝手に、俺と神殿と貴族が潰し合うさ。

そして、どれが潰れても宰相の得になる。

それを、横目で眺めてれば良いだけのことだ。

実に、効率が良い。

見習いたいもんだね。

勿論、暗殺の依頼元は、絶対に自分の所まで辿れないようにしてあるだろうな。

だからこそ、あんなチンピラ上りの3流だったんだ」

眉をひそめたセラが緑瞳の眼を細めた。

「なら、なんで、宰相だとわかったの？」

「不自然さに気づけば、神殿と貴族の手を結ばせることができる奴は限られてるさ。

それに――、

やられたら、やりかえすのは、何も俺たちだけじゃない。

一度、宰相の面子と信用を潰してるしな」

「え？」

「いつ？」

「あん？」

セラ。お前もあの時、居ただろうが。

ガイアレイズ討伐の前に、

神殿をアンデッド城戦に引っ張り出すために、俺と姫さんと宰相で会議をしただろう」

「あゝゝ、うん。

でも、あの時、宰相を怒らせたっけ？」

「あの時の会話を思い出せ。

俺は浄化魔法陣の説明を何てした？」

「んゝゝゝ……………」

……………覚えてない」

「あの時、こう言ったのさ。

魔力線

浄化魔法陣のレイ・ラインを引くだけなら精霊石は消耗しない。

だから、精霊石は神殿に用意させる。

神殿への説得は宰相に任せる……ってな。
で、実際はどうだった？」

「浄化魔法陣を起動させたから、精霊石は全部消えたわね……………」

悪い笑みを見せる竜斗。

「そう。」

神殿と交渉した宰相の面子と信用を、完全に潰してるんだ」

肩を落とすセラ。

「……………うん。」

それは絶対、命を狙われるわ。

たぶん、私でも報復すると思う」

「俺も同じ判断だ。」

報復しなかったら、次から付け上がるだろうしな。

やったら、やりかえされる。当然のことだ。

だからって、甘んじて、報復を受けるつもりはない。

こっちは報復されることも念頭において、行動してるんだ。
報復してきたら、きっちりと御礼返しするまでさ」

竜斗が喉の奥で嗤う。

「そうして、不毛な戦いが続くわけね」

「それが、楽しいんじゃないかねえか」

唇の片端を吊り上げる竜斗。

「でも、返したと言ったけど、

宰相って、損をしてないと思うんだけど？

自分の派閥の人数が増えただけでしょ」

「最終的にはな。」

貴族たちは免責と資金提供を当てにして、宰相派に異動したんだ。貴族を繋ぎ留めたければ、融資してやらなきゃならんだろうよ」

「でも、お金をかける価値が、借金してた貴族にあるとは思えないんだけど」

「当たり前だ。」

実質、魔王に領地を奪われちゃった領主は兎も角、あの5人に、そんな価値はない」

「じゃあ、なんで？」

「宰相派は貴族派よりも少人数で、人手不足なんだ。議会では数が力になる。」

だから、有象無象でも取り合えず頭数は重要だ。」

次に、上は腐ってるが、その部下や親戚の中に有能な人物がいる。そいつらを確保しておきたいのさ。」

人材は力だからな。」

これから数年かけて、有能な人材を登用し、いらん人材を切っていくだろうよ」

「でも、大丈夫なの？」

また、すぐに仕掛けてこないかしら？」

「それはない。」

俺に関わっている時間はない。」

そのための、今回の『防衛』策だ。」

まず一つ。蛇に、毒入り果実を喰わせた」

「蛇？ 毒入り？ 果実？」

「人は、ゲームのような各種パラメーターを持つ駒じゃない。」

自分の意志で動くんだよ。

今回の異動で、新たに入った大量の貴族たちと、前から居た者たちの間で、亀裂が入るだろうな。

新参者たちは既に、一族や部下たちで郎党を組み、しかも、そのトップが1000金貨（一億円）以上、借金してた浪費家だ。

さらに、プライドだけは無駄に高い厄介者。

これで、派閥内で問題が起らなかったら奇跡だよ。
宰相は、派閥が内紛や抗争で、分裂しないように手を尽くすことになるだろうさ」

「……う……うわぁ……」
頬を引きつらせるセラ。

「二つ目。無毒で美味しい果実を、蛇の目の前に置いた。
ただし、喰うのに時間がかかるがな」

眼で促すセラに、

眼を眇めた竜斗が底意地悪い笑みを浮かべた。

「形だけとはいえ、『勇者―貴族連合』という、決定的な綻びのある明確な敵対組織ができた。

『宰相』は間違いなく、そちらを先に潰すだろうな。

あいつは災いの芽は先に摘んでおくタイプだし、敵対組織が安定してしまえば、それだけ手間がかかる。だからこそ、バラけようとしてた『貴族派』を、光一を中心に纏め直したんだ。

この二つの理由から、

宰相が、俺たちの妨害にかけられる時間は極端に少なくなる。

単なる時間稼ぎだが、『自衛策』としちゃ、十分だ。

派閥が安定しない内に、俺の妨害をしようとすれば、内部から自分の足を引っ張られることになるさ」

「でも、乗ってくるかしら？」

「乗る。」

宰相は、この国の未来に明確なビジョンを持ち、それを実現できるだけの地位と手腕と才覚を持っている。

最短の道があるなら、

片眼鏡を反射させながら、
モノクル 光ら

あらゆる妨害や困難を蹴散らし、

その道を邁進するだろうさ」

竜斗はコキリと首を鳴らす。

「――しかしだ。いくら有能でも、

宰相の仕事をしながら、

借金返済からの資金不足で、活動を制限された状態で、

派閥内の統制を強化しつつ、

人材を選し、

さらに、コウを中心とした貴族派連合を安定化する前に叩き潰すには――、

宰相の力を持ってしても、今から3年。

どんなに早くても、2年にかかるはずだ。

そして――」

魔槍を一回転させた竜斗は肩に担いだ。

「俺は魔王討伐に、1年以上かけるつもりは無い」

鋭い眼差しの竜斗を見、

セラは眉尻を下げ、腹に手を当てる。

「……私。

お腹が痛くなってきたわ」

「そうか？」

「……あんたは楽しそうね」

上目遣いで、唇を尖らすセラに、

無邪気に笑う竜斗。

「俺、こういう戦い大好き。

力押しの魔王戦よりも、こっちの戦いの方が好きだな」

「……………あなた、絶対に勇者じゃないわ」

「勿論だ。

偽勇者だからな」

＊

「おゝ、ツツコミ。

何の呼び出しだ？

また新兵器でもできたか？
それが、面白兵器なら大歓迎だぞ」

王宮の中庭には、ウイズの他に、セラ、アーサー、レイフオンと、全員が集合していた。

「まあ、似たようなものです。

最近、ストレスが溜まることが多くって。

ストレス発散に、皆さんの武器を作製しましたので」

「そういや、貴族どもが嫌味を言いに来るとか言ってたな。
愚痴でも聞こうか？」

「それは、大丈夫です。

ドラが毎日、聞いてくれましたから」

「ウム。ドラとは、ワシも毎日、筋肉で会話をしていたぞ」

「……………そっか。

いい子だなあ、ドラ。

今度、目一杯、遊んでやるか」
遠くを見つめる竜斗。

「それで、武器って何？」

片手を腰に当てたセラに、

ウイズが含み笑いを洩らした。

「まず、セラさんには、この剣です」

「別に、私はこれがあるから、い——」

腰元の細剣を叩いたセラの声が途切れる。

差し出された2本の剣は、刃渡り50センチ、全長80センチの『テールブルナイフ』だった。

長方形の柄手持ち部分に、

柄より僅かに長い刃。

切先の部分のギザギザの刃が、太陽の光を乱反射させる。

思わず受け取ってしまったセラは理解が及ばないのか、ボケっとテーブルナイフ・ブレードを眺めた。

「おお。このシリーズか!!」

喝采を上げる竜斗と、

「ええ〜とお。」

剣なのは解りますが、何でテーブルナイフの形なんですか？」
小首を傾げるレイフォンに、
ウィズがキラメクような笑みを見せる。

「世界の理ことわりです!!」

「……は……はあ……」

気の抜けた返事を返すレイフォンの横で、
腕を組んだ竜斗が満足そうに頷いた。

「レイさんのは、自信作ですよ」

ウィズが1メートルほどもある『スプーン』を取り出す。

「スプーン型魔法杖です!!!」

「は……はあ……」

レイフォンは微妙な笑顔を浮かべたまま、スプーン型魔法杖を受け取った。

人の顔ほどもある先端部分と、握り易いような細目の柄^え。

後部の、幅広の手持ちの部分には蔦を啜えた小鳥が飛んでいる彫刻が彫られ、金箔で色付けされている。

ウィズがピツと人差し指を立てた。

「それはただの魔法杖ではないんですよ。」

レイさん。魔法杖に魔力を流してみてくださいー!!」

「……魔力……ですか」

レイフォンがスプーン型魔法杖に魔力を流すと、
ポンッ! と杖が10センチまで縮む。

「わっ!」

レイフォンの手の中の魔法杖は、どこから見ても普通のスプーン
のようだった。

「ほう。」

偽装用に丁度良いな」

覗き込む竜斗に、ウィズが茶髪を掻く。

「いやー、それが……」

レイフォンが魔力を止めると同時にポフッ! と、
スプーンが1メートルの大きさに戻った。

「と、このように、魔力が切れたり、
手を離すと元の大きさに戻ってしまうんですけどねー」

「意味ねええええ!!」

でも、そこが良い!!」

ビシッと親指を立てる竜斗に、

親指を立て返すウィズ。

セラが細眉をひそめる。

「どうせなら、小さく作っておいて、魔力を流すと大きくなるようにすれば良かったのに」

「それは、前に『ハンマー』で作ったことがあるので、

いくら有用でも改良もせず、ただ同じ機能の物を作るなど、僕の職人魂が許しません！！」

キリツと表情を改めるウィズに、
セラが半眼を向けた。

「……………面倒臭い職人魂ねえ」

「で、ツツコミ。」

こいつの魔法杖の性能は？」

「そうですねー。」

性能的には、一般的な指輪型魔法補助増幅器杖と同じくらいです。
でも、製作費は3倍もかかりました！！

で、
レイさんのスプーン型魔法杖に凝りすぎて、お金が無くなったの

他の人達の武器に魔法特性はありません！！」

ふっと笑みを零す竜斗。

「それでこそ、ツツコミだ！！」

イイ笑顔で親指を立てる竜斗に、
ウィズも満面の笑みで、親指を立てる。

「……………こいつらは……………」

「……………あ……………あはは……………」

頭垂れたセラが額を押さえ、
レイフォンが半笑いを浮かべた。

「そして、アーサーさんにはコレです!!」

ウィズはアーサーの前に、
全長1・5メートルもある巨大な『フライパン』を差し出した。

「ウム」

平然と受け取ったアーサーは、

ブーーン! ブーーン!!

素振りを繰り返す。

「ウス。」

重心、バランス。重量。

文句なしだ。

筋肉も喜び、ピクついているぞ。

さすがな。ウィズ」

「アホな武器を、全身全霊で作製する。

それが――、それこそが、僕の流儀です!」

歯を見せて誇らしげに笑うウィズに、

心底同意するように何度も頷く竜斗と、

半眼で、頬を指で掻くセラ。

「……………間違ってるように思うのは、私だけかしらね」

「何を言います。セラさん。」

『撲殺用フライパン』の機能は、撲殺だけではないんですよ!!」

ビシツと人差し指を天に掲げるウィズ。

「耐熱耐火性も、ばっちりです!!」

「フライパンだもんね」

「料理もできます!!!」

「フライパンだしねえ」

「でも、空を飛ぶ機能を付けられなかったのが、唯一の心残りです………」

「あんたは、フライパンに何を求めてるのよ!?!」

「白い歯をキラメかせたアーサーさんが巨大なフライパンに跨って、空を飛ぶ。」

「——って夢がありませんか?」

「悪夢しかないわよッ!!」

「……ムウ。」

「………残念だ」

「アーサーさん。飛びたかったんですか?」

巨大フライパンを眺めるアーサーに、
レイフォンが小首を傾げた。

「これで、以上です」

「あん?」

ツツコミ。お前の分は無いのか？」

「トング型雷発生器スタンガンを作ろうとしたんですが、

図面を引いた時点で、予算オーバーしてることに気づき、お倉逝
きです。」

ま、いつものことですけどね」

「ふーん。」

あら？　じゃあ、リュウトの分は？」

「偽勇者さんは、僕が作ったフォーク槍を、すでに持ってますから」

「……………フォーク槍？」

「はい。フォーク槍です」

「……竜斗？」

ギギギと首を巡らすセラに、
竜斗が軽い調子で肯定する。

「おお。持ってるぞ。」

それが、ツツコミとの出会いの切っ掛けだ。
人生、何が切っ掛けに縁が生まれるか、わからねえよなあ」

「わからなすぎよっ!!」

セラは手を両腰に当てた。

「銃使い。あんた、このパーティーをどうしたいのよ？
モンスター・グルメ旅団にでもするつもり!？」

「おおっ！　それ、良いですね」

「良くない!!」

「えええ〜」

「なんで、レイが残念そうなのよ」

「ウヌ。筋肉が付きそうなアイデアだな。

撲殺から料理まで、このフライパンに任せよ」

「神官は黙ってなさい」

「又ウツ!？」

「ははは。

ツツコミ役、大変だなあ。セラ」

「そう思うなら、リュウトも止めなさいよおおツ!!!!」

今日一番の、セラの怒声^{ツツコミ}が中庭に響き渡った。

*

0701偽勇者は ふ、きを てにいれた！（後書き）

あとがき&おわび

第61話を公開した後に、第46話の会議シーンの神殿への説得役を

姫と宰相の二人から、宰相一人へと 変更しております。
重要な伏線をミスリ、アンフェアになってしまいました。
申し訳ございません。

読んでいて混乱された方、誠に申し訳ございませんでした。

071 偽勇者は かしこさ か、あかゝった！

透き通るような蒼穹に、天高く白雲が流れている。

早秋の青空の下、一人の少女が広場で待っていた。

石畳の広場の中心には、青い精霊石が頂点に備え付けられた噴水から滾々と水が沸き出していた。

円形状の広場の周りは、グルリと食堂と軽食屋^{カフェ}が立ち並んでいる。各家々は、石壁の上に染料を混ぜた漆喰を塗り込み、様々なカラフルな色合いを成していた。

冬に積雪する気候のため、屋根は全て斜めに傾いているか、三角屋根である。

その広場の中心の噴水の前に、緑髪ストレートの銀瞳の少女が無表情で立っていた。

襟がレース状の、水色のワンピースに、青いリボンが胸の前で緩く結んである。

緑の翡翠石の連なった紐状のアクセサリーを腰周りに結んでいた。肩から、薄い赤のポシェットを下げ、

足下は、白のソックスに、ピンクのパンプス。

噴水の反対側では吟遊詩人が叙事詩や時事詩を吟詠しており、行

き交う人々が足を止めて聞き入っている。

他国や、他の地域の情報が入り難いこの世界では、各地を旅する吟遊詩人たちの時事詩がニュース番組の代わりだった。

無表情の少女は吟詠を聞き流しながら、視線だけで左右を見回している。

少女の姉ならば、彼女が浮き足立っていることがわかっただろう。

その少女が、黒い服を着た長身痩躯の男性を見つけ、彼女の銀の瞳が輝くように明るくなった。

「待ったか？」

長身痩躯の男の質問に、

緑髪銀瞳の少女は無言で首を横に振る。

「待たせたようだな。無口っ娘」

「レンです。」

今、来たところ」

「本当に？」

無表情のレン少女フェイは半眼で、竜斗男を見上げた。

「……今、来たところ」

「そっか。そいつは、重畳。
行ってみたい所はあるか」

ふるふると首を振るレンフェイ。

「了解。

約束していたデートだからな。

エスコートは任せろ。

行くか。無口っ娘」

手を引かれたレンフェイが足を突っ張った。
「ん？」

「今日は……名前で呼んで。

………デ、デートだから」

「そっか。そうだな。デートだもんな。

——レン。

これで良いか？」

竜斗を眼だけで見上げて——、
俯いたレンフェイの頬が僅かに紅く染まる。

「………ん………良い」

「今日は、デートを楽しむぞ」

繋がれた手を、じっと見つめたレンフェイは、

「………ん」

小さく頷いた。

手を繋いだ竜斗が、大通りから脇道に入った。

脇道は石畳で舗装されておらず、剥き出しの土の道だが、ヌカるんだ時でも騎士が素早く移動できるように、土の道の真ん中に石のブロックが埋め込まれている。

レンフェイが、横目で見上げた。

「リュート。何処に？」

「石屋だ」

「……………石？」

きょとんと小首を傾げるレンフェイ。

細い道は殺風景なだけに、道端にある精霊石の祠が眼につく。

祠は五角形形で、内部に六芒星の空洞があり、

その六芒星の空洞の中央に、精霊石が安置されていた。

祠ごとに、様々な色の精霊石が安置されており、

この精霊石を祀った祠は世界各国、都市や村々の至る所にある。

さらに、人の住んでいる場所だけではなく、

前人未踏の地以外、極寒の地や砂漠など、あらゆる場所に存在していた。

カラフルな家に挟まれた細い路地を抜けた先に、

『石』とだけ書かれている看板を掲げた一件の店に辿り着く。

焦げ茶色の壁には、この地方では珍しい木骨組みが見えていた。オレンジ色の三角屋根の下に出窓があり、

その出窓の木製の雨戸が、僅かに開いている。

扉を押し開けると、チリリンとドアベルが店内に鳴り響いた。

レンフェイが眼を丸くする。

窓の隙間から差し込む細い光を、大量のアクセサリーが乱反射させ、

店内がキラキラと光り輝いていた。

レンフェイが光に誘われるように、店内のアクセサリーに吸い寄せられる。

「レンも女の子だな。」

キラキラしたものに、自然に眼が行く」

窓から差し込む細い光を受けて、薄暗い店内を、数々の石が賑やかしていた。

帽子掛けのような台座に掛かっている、小さな精霊石を繋ぎ合わせたネックレスが細い光を拡散させる。

その隣の、歪んだ球状のガラス玉を繋げたブレスレットが光を屈折させた。

横の壁の、金のチェーンに、くすんだ赤いルビーのペンダントが揺れて、反射光を揺らしている。

台の上の、ピアスの青い宝石が静かな輝きを放っていた。

多彩な色の宝石の欠片^{かけら}をちりばめたバレッタ^{髪どめ}が七色の光を撒き散らす。

精霊石の破片や、底価格な宝石とは呼べない石や安いガラス玉で拵えたアクセサリーが店内に所狭しと並べられていた。

町中のお洒落に目覚めた女の子を対象にした店で、

少ない給金で買えるように、安い値段で売られている。

光を乱反射する輝きたちの中で、
レンフェイが、光を吸い込むような『深青』を見つけた。

レンフェイは引き込まれるように、その『ペンダント』を手に取り
る。

銀
シルバーのチェーンに、銀
星形の枠。
その中に、蒼い瑠璃石が詰め込まれているペンタントだった。

深海の如き、深い蒼の瑠璃ラピスラズリの石。

レンフェイは『星の瑠璃』を光に翳した。

「それで、良いか？」

「……………何が？」

「プレゼント」

「……………プレ……………」

言葉無くし、ぎゅっとペンダントを握るレンフェイ。

「気に入ったようだな」

「……………え……………ちが……………」

「俺は、周りの光を透過して輝く石より、
自分の青だけで存在してる瑠璃石の方が、レンに合ってると思う
けどな」

その言葉に、

手の中の石と竜斗の顔に数度、視線を行き来させ、ぽつりと呟く。

「……………そう」

レンフェイの手を引いて、竜斗はカウンターへ向かう。

「いくらだ？」

「銀貨1枚（一万円）だよ」

カウンターの老婆が無愛想に告げた。

「この場で着けて良いか？」

「野暮なことは言わんさ」

「サンキュー」

「ほれ」

「……………」

逡巡した後、

レンフェイは首に掛け易いように、緑の長髪の後ろ髪を組んだ両手で持ち上げる。

レンフェイの華奢な首筋と白いうなじが露わになった。

屈んだ竜斗が、眼を伏せているレンフェイの首にペンダントを掛ける。

胸元に、星の瑠璃が揺れた。

「うん。似合うぞ」

カウンターの上の、金属板に銀の膜を張った鏡を見たレンフェイは、細い指でペンダントをさわり、

「……………あ……………」

「ん？」

「……………ありがとう……」

「どういたしまして」

「さて、次に行くか」

「……………ん」

店を出たところで、レンフェイが竜斗を見上げる。

「なんで……？」

「あん？」

「なんで、この店を知ってたの？」

「んん。偽勇者だからな」

目線だけで見下ろす竜斗に、
小首を傾げるレンフェイ。

セラとのデートの時に目星を付けといったとは、口が裂けても言わない竜斗だった。

馴染んでいる道なのか、竜斗はするすると裏通りを通り、メインストリートに出た。

一気に騒音が飛び込んで来る。

王宮に続く大通りを、馬やヒポグリフィスや、ワイバーンの亜種のランドルトが馬車を引いていた。

大通りに並ぶ店先の空中には、幻影で作られた看板が浮かんでいる。

その様々な幻影は、元の看板の文字や絵を宙に映すだけなので、動くことはなかった。

大通りには、商人や、買い出しに来た村人、行商人、騎士、警備兵、旅人、冒険者。

様々な職種の人々が往来を歩いている。

色鮮やかな頭髪の中に、旅商人や冒険者の亜人たちが、ちらほらと見えた。

エルフ　森貴人。
ドワーフ　岩窟人。
ワーキャット　猫目人。
ハーフリング　草小人。
ウィングナー　有翼人。
タルミット　フォックステイル　ダークエルフ　ワーウルフ
兎小人。狐尾人。夜貴人。狼獣人。

このファールン王国は亜人の割合が極端に少なく、この国にいる亜人は冒険者や旅商人など定住してない者が多い。

差別こそないものの、この国では物珍しさから奇異な目で見られることと、

南東の商業国家には多種多様な亜人たちが住んでおり、そちらの国の方が生活しやすいため、

この国に、定住する亜人は少なかった。

昼時も回り、何処の食堂もすでに埋まっていた。

混んでいる定食屋を見向きもせず、

竜斗は大通りの高級レストランに、レンフェイを連れて入る。

「予約を取っていた竜斗・上白だ」

「カミシロ様でございますね。」

ただ今、ご案内いたします」

「予約……取ってたの？」

「昼時は、何処も込むからな」

「そう」

天井からは、魔法具のランプが白色の光を放っていた。

壁には模様の入った、清潔感のある白色の壁紙が張られ、

床は、白い大理石のタイルと黒い御影石のタイルが交互に嵌まり、
店内をシックな雰囲気纏めている。

この世界には、ガラス瓶やステンドグラスはあるものの、大きな
板ガラスが無いため、

窓には風雨止めの魔法陣が施された棧さくが詰め込まれていた。

窓の外には、店先から掲げられたファーレン王国の国旗が風に揺
れている。

木製の円卓には白いテーブル掛けが敷かれ、
テーブルに置かれているナイフとフォークは輝きから見ると、銀
製のようだった。

「お嬢様」

「……ん」

ウェ이터が引いた椅子に、自然な動作で座るレンフェイ。

竜斗の視線に、レンフェイが無表情に返す。

「……慣れてる」

「おっと」

「……で……でも……、」

……男の人と……二人きりは……初めて……」

無表情で、おどおどと視線を泳がせるレンフェイに、口許を緩める竜斗。

「そりゃ、光栄だ」

「お飲み物は？」

ウェイターの問いに、

「俺は白ワインで。」

レンはどうする？」

微かに眉を寄せるレンフェイ。

「……………お酒、嫌い」

「オッケー。」

何のジュースがある？」

「各種揃えておりますが、本日のメインが肉料理ですので、林檎ジュースなど、如何でしょう？」

「だ、そうだが？」

こくりと頷くレンフェイ。

「ん。いい」

「じゃあ、それで」

「かしこまりました」

二人が林檎ジュースと白ワインのグラスを軽く合わせると、チンッ！ と硬質な音を響かせた。

初めに、海草と燻製の鮭を薄切りにした前菜。
次に、黄褐色の澄んだスープが出される。

その2品の後に出された温野菜と、黒い液体の調味料をかけられた川魚の白身を、口に含んだ竜斗の眼が見開かれた。

「これは……醤油。」

「……いや、違うな。……魚醤か」

「このガラムのこと」

「ああ、そうだ」

レンフエイは白身魚を小さく切って、少しずつ口に運ぶ。

「ガラムは、もっと南の方の海で作られる。」

「遠くから輸入してるから高い」

「なるほど。」

道理で、市場で見かけないわけだ」

「今日のメインは、東方産の『アガルタ』の肩肉を使っております」
ウェイターが置いたメインの肉料理は、東方の地域に生息する水牛のロースだった。

「お、イケル」

「……………」

無表情で、むぐむぐと頬張るレンフエイ。

「なあ、レン」

「ん？」

「モンスターと動物の区別って、どうなってんだ？」

「厳密にはない。

皆がモンスターと言えばモンスター。

動物と言えば動物。

区分け表は、冒険者ギルドが毎年更新している」

「ほう」

「中には、お肉が美味しくて、モンスターから、動物に区分けされたものもある」

無表情で、もきゅもきゅ食べるレンフェイに、

竜斗が瞼を落とす。

「食欲優先てわけか。

生類憐みの令の時に、兎を鳥の仲間だとして、一羽二羽と数え始めたのと同じだな」

最後のデザートは、この地方で採れるオレンジのシャーベット。夏蜜柑

「これ、どうやってシャーベット状にしてんだ？」

冷凍庫なんて無いだろうし」

「魔術」

「あん？」

「冷却の魔術」

「もしかして、一個一個、冷却の魔術を施かけ術してるのか？」

「そう。」

料理人に、魔術は必須。

さっきのお肉も、中までムラなく焼くのに使ってるはず」

天井を見上げた竜斗はランプの白色の光に眼を細めた。

「……そりゃ、科学技術が発達しねえわけだよ。魔術

人力で、何でも解決できちまえば、必要ねえもんな」

食後の紅茶を飲んだ竜斗が渋い顔になる。

「うゝむ。

不味くはない。不味くはないが……。

メイドさんの煎れる紅茶と比べると……」

「ん。王宮の……それも、ルキア姫専属のメイドの煎れた紅茶と比べるのが間違い」

レンフェイが上品に紅茶に口を付けた。

「……………だよなあ」

レストランから出た竜斗は伸びをした。

「ちっと、堅苦しかったが、

評判になるだけの店だったな」

「……………」

「レンは、どうだった？」

見下ろしてくる竜斗を見上げたレンフェイは俯いて、眼を逸らす。

「……………」

「……………緊張してて……………味……………わからなかった」

「そっか」

「……………ん」

「腹ごなしに、ちょっと歩くか」
「ん」

人通りの多い大通りでは、行商人たちが道行く人に呼び込みをしていた。

王都のすぐ外で採れた野菜や薬草を入れた籠を天秤棒で担いで、売り歩く行商。

荷車に水を入れた樽を乗せ、客が来ると鉄の柄杓で汲み上げた水を魔術で冷却し、氷にして販売している氷屋。

バケツに長いパンを入れ、ナイフで切り売りしている少女。

道端には、過去を客に観^みせる過去視屋が暇^{おり}そうに折畳式机に頬杖を突いている。

大通りに面した帽子屋の前では、道化師が大道芸を見せていた。宙に浮く帽子屋の幻影の看板と同じ帽子を被^かっていることから、店の宣伝を兼ねているらしい。

足を止めて見物する通行人に交じって、竜斗とレンフェイも輪に加わった。

道化師が腕を開き、大きな手袋に包まれた両手を上に向けると、掌から虹色の光の噴水が噴き出す。

手をパンツと打ち合わせると、右手から火球、左手から水球が出るし、

火と水の玉が道化師の周りを飛び回った。

道化師の前で衝突した火球と水球は、一瞬で白い湯気になり、湯気が小さな道化師の姿を取って、一礼をして消える。

「魔術を使ってる」

「だろうな。」

でも、どうやって？」

「大きな手袋と大きな動きで、魔法陣の展開と発光を誤魔化してる」

「だが、唇は動いてないぜ」

「……………腹話術で、呪文を発している」

「そりゃ、器用だ」

レンフエイが僅かに眼を細めた。

「緊急時に有効かも。」

「うちの課員にも練習させる」

「それで、宮廷魔術師、皆で大道芸をするのか？」

「ん。人に見られた方が上達する」

宮廷魔術師たちが横並びに大道芸を披露している光景を想像した
竜斗が首を振る。

「いや。それは、止めといてやれ。」

さすがに可哀想だ」

「……………そう」

道化師の前に小さな竜巻が発生し、そこに氷の切片を流し込んだ。
竜巻によって、氷片は宙に吹き上がり、
はらはらと空から舞い降る。

人の肌や、道に落ちた氷の切片は、虹色の光となって掻き消えた。

歓声が上がる中、感心した様子の竜斗が、レンフエイを見下ろす。

「そういや。宮廷魔術師団って、戦場に出て来ないな。」

何か理由でもあるのか？」

「——ある」

「へえ。どんな？」

「体力不足」

「……………は？」

無表情で、じっと道化師を見つめているレンフェイ。

「体力不足で、戦場まで辿り着けない。」

宮廷魔術師は研究者で、基本的に引きこもり。

馬で戦場まで行っても、体力を消耗しきって足手纏いまたのお荷物。
だから……ますます、引き籠もる」

「あゝ、何か対策はないのか？」

毎朝、マラソンを義務づけるとか」

「……ん。」

体力を付けるために、皆で大道芸を練習？」

ちらりと見上げるレンフェイに、

苦笑を浮かべる竜斗。

「だから、それは止めてやれって」

「……そう」

レンフェイは残念そうに、僅かに項垂れた。

大道芸を見せ終わった道化師は観客に一礼する。

差し出された帽子の中に、観客が銅貨（100円）を投げ入れる
中、

竜斗は白い硬貨を入れた。

その白い輝きに、レンフェイが眼を瞬かせる。

「コバルト貨（1000円）？」

「マイナーな硬貨だから、店で使うと嫌がられるんでね。」

まあ、マイナーでも貨幣は貨幣さ」

「そう」

道化師がコバルト貨（1000円）を投げ入れた竜斗に向くと、

一本の白薔薇^{バラ}の造花を手の中に出現させ、放り投げた。

キヤッチした竜斗に、道化師は悪戯めいたウイंकをする。

苦笑を返した竜斗が、レンフェイの緑髪に白薔薇を差し込んだ。

「……………あ……………」

確認するように、ぽわぽわと白薔薇の造花を触るレンフェイ。

「行くか」

「……………ん」

手を繋ぎ、ゆっくりと歩く竜斗とレンフェイ。

道端で、子供たちが『石弾き』をしていた。

少年が、石畳の上の小さな精霊石を指で弾き、場に出ている精霊石に当てる。

石を弾いた少年が一つの精霊石に魔力を流すと、
場に出ていた幾つかの精霊石が魔力線^{レイ・ライン}を結び、小さな水の槍が発現した。

氷の槍は、一瞬で虹色の光に変わる。

「よしっ！ 氷の槍。20点だぜ」

魔力を流した少年がガッツポーズで歓声を上げ、
次の番の女の子がしかめっ面で、小袋から直系3センチほどの小さな平たい精霊石をジャラジャラと取り出した。

足を止めた竜斗が場に散らばる幾つもの精霊石を眺める。

『石弾き』とは、そこらで集めてきた小さな精霊石を指で弾き、

場に出てる幾つかの精霊石を特定の魔法陣の形にして、任意で魔力を流し、魔法陣を発動させる、この世界の、子供たちの定番の遊びだった。

魔法陣を発動できれば、その魔術に応じた点数が入り、魔力を流しても発動お手付きたしないと減点され、合計して一番得点の高い者が、場に残っている石の回収と、敗者から綺麗な精霊石や大きな精霊石をトレードできるのだ。

女の子が真剣な表情で石を弾いたところで、竜斗が再び歩き始める。

「小さい精霊石なら、そこらに落ちてるからな。ああいう、遊びも生まれるか」

「ん。」

小さいのなら、水瓶の底に青、かまじ竈の中に赤、土の中に黄色、日なたに無色透明、屋根の上に白い精霊石が見つかる。色が違っても、効力は同じ」

「ふ〜ん。」

「やっぱ、大きいのは無理なのか」

「無理。」

魔法武器や、本格的な魔法陣に使用する精霊石は、人手の入ってない泉や沢、火山口、標高の高い山脈、砂漠の真ん中、氷の大地、氷河の中、洞窟の奥底、海の底などでしか採取できない」

「アンデッド城の浄化魔法陣の精霊石に、金が掛かるわけだ」
「そう」

「あのゲーム。石弾き」

魔法陣を覚えるには、最適だよな」

「ん。ねえさんレイフオンは、あのゲーム最強。」

膨大な数の魔法陣を覚えていて、手先も器用だから。

私……一度も勝てたことない」
「ほう」

住宅地を抜け、広場に辿り着いた。

平時は、ただの空き地だが、

都市防衛戦時には糧食の置き場や、外からの増援部隊が野営する場所となる。

この王都にも、東西南北に数カ所確保してあった。

レンフェイは公園で走り回っている子供たちを眺める。

「アンデッド城の魔法陣」

「あん？」

竜斗を見上げるレンフェイ。

「アンデッド城の時の魔法陣は……役に立った？」

「ああ、勿論だ」

「そう……よかった……」

微かに微笑むレンフェイ。

竜斗が広場に設置されているベンチの上にハンカチを敷いた。

「座らないか？」

竜斗の顔とハンカチを交互に見比べたレンフェイは、

「……………ん」

ハンカチの上に、ちょこんと座る。

ポシエットを膝の上に置いたレンフェイが、隣に座った竜斗を見

上げた。

「前から聞きたかったことがある」

「あん？」

「ねえさんから聞いた。

リユートの世界には、魔術が無いって」

「ああ」

「どうやって、暮らしてたの？」

「普通に」

「魔術がなければ、酷く不便。

何もできない」

小さく眉尻を下げるレンフェイ。

「そうでもないさ。

変わりの物があつたからな」

「？」

「化石燃料だよ」

「化石燃料？」

レンフェイは竜斗を銀の瞳で見つめる。

「鉱物のようなものさ。

石油と石炭と天然ガス。

全ての基礎は、そいつの上に成り立ってる世界だ。

まあ、水力や原子力なんてのもあつたけど、根っここのところはそいつさ。

電力も、プラスチックも、溶鉄の為の火力も、運搬さえも、まさに万能の代物だ」

「……………万能」

「逆に言えば、それしかなかったから、万能にせざるえなかった世界さ」

絹糸のような緑の長髪をさらりと揺らすレンフェイ。

「鉱物だとしたら、いつか無くなる」

「だな」

「その万能が無くなったら大変」

「その通り」

レンフェイが赤い下唇に指先を当てた。

「なら、魔族が攻めてくるけど……、

魔術があつて、精霊が満ちている、この世界の方が『安定』して
る」

自嘲するように、ククツと喉で嗤う竜斗。

「そうさ。」

剣と魔法の世界より、遥かに厳しい世界だよ。

だからこそ、面白い」

横目で見上げて来るレンフェイを、竜斗が見下ろす。

「そうそう。」

俺も機会があつたら、聞こうと思つてたことがあつたんだ」

「なに？」

「元氣娘アリエルが精霊魔術を使つてのを見たんだが、
ありゃ、なんだ？」

「？」

竜斗の質問の意味がわからず、くいつと首を捻るレンフェイ。

「あゝゝ、つまりだ。」

呪文は無し。

魔法陣も無し。

特定の動作も必要ない。

ミスリル・ソード

銀剣が触媒のようだが、

それすらも使わずに行使する。

それでいて、威力が半端無い。

正直言って、精霊魔術があれば、通常の魔術なんて……それこそ、武器すら必要ないように思えるんだが」

レンフェイは考えを纏めるように、目線を上に向けて、唇に人差し指を当てた。

「精霊魔術は……特別。

あの術は、生まれつき精霊に感応できる者しか使えない。

精霊に感応できない人は、どんなに努力しても使えない」

「だが、使える奴らも多いんだろ」

こくりと頷くレンフェイ。

「多少、精霊に感応する者なら、数多くいる。

でも、その人たちにできるのは、微かな風を起こす。火花を散らせる。小さな火種を起こす。コップ一杯の水を作り出す。

——その程度。

魔術の方が威力、精度。ともに確実」

「ほう」

「リュートの見たのが神殿代表の専属精霊騎士なら、あれは格別。

あのレベルの精霊術師は人間、亜人合わせても、世界で10人程度」

術師

アリエル

「その内の二人が、フィーと元氣娘か」

「そう」

「わかつちやいたが、コウのパーティー。どんだけ、チートだよ」

小さく嘆息するレンフェイ。

「フィーがいる時点で、既に別格」

「だな」

と――、

クウゥ。

レンフェイがバツとお腹を押さえる。

顔は無表情だが、耳まで赤く染まっていた。

「何か食ってくか」

「……………」

立ち上がった竜斗が手を差し伸べる。

赤い顔で俯いたまま、レンフェイは竜斗の手を取った。

竜斗は、広場の屋台で買った、煮た果物をペースト状にし、寒天に混ぜて冷やし固めたものを、10センチ角の薄いクラッカーで挟んだ軽食をレンフェイに渡した。

受け取ったレンフェイは、戸惑ったように眼を泳がせる。

「どうした？」

「こういうの……初めて」

「そのまま、食べれば良い」

竜斗がクラッカーを噛むのを見、

「あゝ」

レンフェイも竜斗の真似をして、口を開けるも、端っこを噛るだけだった。

「……桃」

「こっちは別の味だ」

僅かに首を傾けて、見上げてくるレンフェイ。
その銀の瞳が甘える。

「ほれ」

差し出されたクラッカーに、
レンフェイが小さな口を開けた。

「あゝ」

噛ったレンフェイがもむもむと食べる。

「……葡萄」

「当たり前」

クラッカーのお菓子を食べながら、並んで歩いていたレンフェイが、ピタリと足を止めた。

「どうした？」

「鳴き声」

「あん？」

周りを見回したレンフェイは家と家の隙間から、子猫が顔を出しているのを見つける。

ミィ〜。

もう一度、子猫が鳴いた。

しゃがんだレンフェイがクラッカーを振ると、

子猫が辺りを警戒しながら、隙間から出てくる。

レンフェイが食べかけのクラッカーを地面に置くと、

子猫が飛びついて食べ始めた。

無表情で見守るレンフェイ。

あつと言う間に食べ終わった子猫が前足で顔を洗い始める。

眼を瞬かせたレンフェイが、子猫に向かって人差し指を振った。

指の動きに釣られて、子猫が顔を動かす。

ゆらゆらと左右に指を振ると、本能で捕まえようと子猫が前足を繰り出す。

ふいっと上に上がった指を、両前足で捕まえようとした子猫は、ころんと仰向けに引っ繰り返った。

お腹を触るレンフェイの指を、仰向けのまま子猫は猫パンチする。

ミィー、ミィー。

子猫の猫パンチに合わせて、

「ミュー♪ ミュー♪ ミュー♪」

鼻唄を唄うレンフェイは眼を細め、微かに微笑んでいた。

ミィアアアー。

猫の鳴き声に、子猫がパツと起き上がる。

隙間の向こう側に母猫が迎えに来ていた。

母猫の元へ駆け出そうとした子猫が一旦、止まって振り返った。

立ち上がったレンフェイがバイバイと小さく手を振る。

子猫は、一目散に家の隙間の影に飛び込んで行った。

「楽しそうだったな」

「ん」

「最後に、あそこに寄ってくか」

「ん」

竜斗が指さした店を見、レンフェイが大きく頷いた。

大通りの魔法武器・魔法具店へ入ったレンフェイの眼差しが鋭くなる。

最高級の魔法杖を手にとったレンフェイが無言で検分を始めた。

「かなりの値段だが、値段に見合った物なのか？
俺には、さっぱりわからんが」

「ん。」

魔法杖の性能は、その補助回路の組み方で変わってくる。

速さと増幅が本来の杖の役割なのに、

昨今は、定型術式回路が優先される。

少し、複雑」

「あゝ」。

何を言ってるのか、さっぱりわからん」

竜斗を見上げるレンフエイ。

「通常、魔術は、魔力を体内シヤント魔力回路を通して、外部に任意の魔法

陣を組み上げて、

外部に発現させた魔法陣魔術回路に魔力を通し、

キーワード呪文で発動する。

魔法杖は、外部魔法陣を組み上げるための外付け補助器」

「あん？

俺は魔法杖なんか持ってないが、魔術を使えるぞ」

「魔法陣の展開スピードが変わってくる。

武器を持つ前衛と違って、一瞬の発動速度が生死を分ける。

さらに、魔術の失敗が激減。威力の安定。

術者の負担軽減から、結果的に威力も増大する」

「ほうほう」

「でも、最近は魔力を流すと発動する、固定の魔術を組み込んだ魔法杖が主流」

「あゝ。内気の杖の《シールド》みたいのか」

「そう。

本来は危険時の緊急展開魔術用。

呪文も魔法陣も無く、発動するから」

「俺の魔槍もそうだが、魔法武器の魔術を使う時は呪文もいらねえし、魔法陣も展開しないもんな」

「原理は一緒。」

魔法武器自体に外部魔法陣が組み込まれていて、

キーワード呪文も、その魔法陣に組み込まれている。

レイフオンねえさんが魔術を施術する時、呪文を唱えないのも同じ理由」

魔法杖を抱えたまま、レンフエイは説明を続ける。

「冒険者用魔法杖は、その緊急展開術式が、今は通常装備。」

冒険者以外の魔術師も、強い定型術式が設定されている杖を求めたがる。

嘆かわしい」

レンフエイが竜斗を見上げ――、

「……………あ」

独り、饒舌に喋り過ぎたと気付き、無表情で、おろおろと戸惑い始める。

そんなレンフエイに、

竜斗は近くにあった炎のマークが刻印されている籠手を手に取った。

「じゃあ、レン。この籠手は？」

「……………その籠手は魔法防具の応用。」

魔法回路

元々、魔法防具は精霊石を中心に魔法陣が作製してあって、装着者の魔力を使用して、常時結界と、衝撃時に防護障壁を張る。サークレット型兜は、その典型的な例。

この籠手は魔力を防御ではなく、

炎の魔術と耐火耐熱魔術に使って——」

淡々とした口調で、

でも、眼を輝かせながら、熱心に説明するレンフェイに、
竜斗は口許を緩めた。

竜斗とレンフェイが魔法武器・魔法具店を出た時には、
空は赤く染まり、夜の帳を下ろし始めていた。

朝方に補充した幻影魔法具の魔力が切れて、
大通りの店先に浮かぶ幻影の看板が、
溶けるように、掠れて消えていく。

人々は早足に帰途に就き、往来から人の姿が消えていった。
代わりに警邏の数が増え始める。

数人の老人が、街灯に灯りを灯ともしていた。

魔力伝導体のミスリル銀の銀糸を巻き付けた、
先端の丸い、細長い鉄の棒を、
街灯のランプの魔法具の精霊石に当てて、魔力を補充し、
一本一本、街灯を灯ともしていく。

「帰るか」

「ん」

「寮まで送って行こう」

「ん」

レンフェイは竜斗の右手に、左手を滑り込ませる。
二人は手を繋いで、王宮へ歩いて行った。

王宮内の寮に続く、庭園に面した通路は、
2つの三日月の月明かりに照らされている。
大理石の壁に彫刻が彫られているが、この光量では暗い影を落と
しているだけであった。

大理石の床に、二人の足音が響く。

「……今日は……楽しかった」

「そりゃ、光栄だ」

レンフェイは足を止めた。

「……あ……あと……」

「ん？」

足を止めた竜斗を、銀の瞳で見上げるレンフェイ。
「あと……最後に……一つ……」

「なんだ？」

2つの三日月の青い光が、
薄暗い通路に立つレンフェイを浮かび上がらせる。

レンフェイが竜斗を見上げて口を開けては、力無く口を閉じて俯いた。

「私は――」

ぎゅっと眼を瞑るレンフェイ。

「……私は――」

大きく喘いだレンフェイは竜斗を見上げ、しっかりと見つめた。

「私は、あなたが好きです」

三日月の静かな月光が二人を映し出す。

秋風が、レンフェイの緑色の長髪を揺らした。

「おまえの想いには応^{こた}えられない。
俺には、愛してる女がいる」

竜斗の静かな声に、

レンフエイの銀瞳が揺れる。

「……………知ってる。

……………でも、私も——」

竜斗は首を横に振った。

「無理だよ。レン。

俺は、おまえを恋愛対象には見れない」

「……………そう……………」

竜斗を見上げたまま——、

レンフエイの双眸からボロボロと大粒の涙が零れる。

常に無表情だったレンフエイの表情が、くしゃりと崩れ——、

「う……………ああああああああああああああああああああ」

口を開けたレンフエイが泣き出した。

下がった目尻からボロボロと涙を流し、

開いた口から悲しみの感情のまま、泣き声を上げる。

レンフエイの泣き声が、高く低く波打つように響き渡った。

スカートの前を両手で、ぎゅっと握り締め、
感情の赴くまま、
涙を流しながら、大泣きする。

「~~~~~!」

三日月の夜空の下、
高く低く揺れるレンフェイの泣き声が響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4685i/>

へんじがない。ただの偽勇者のようだ。

2011年9月25日21時33分発行